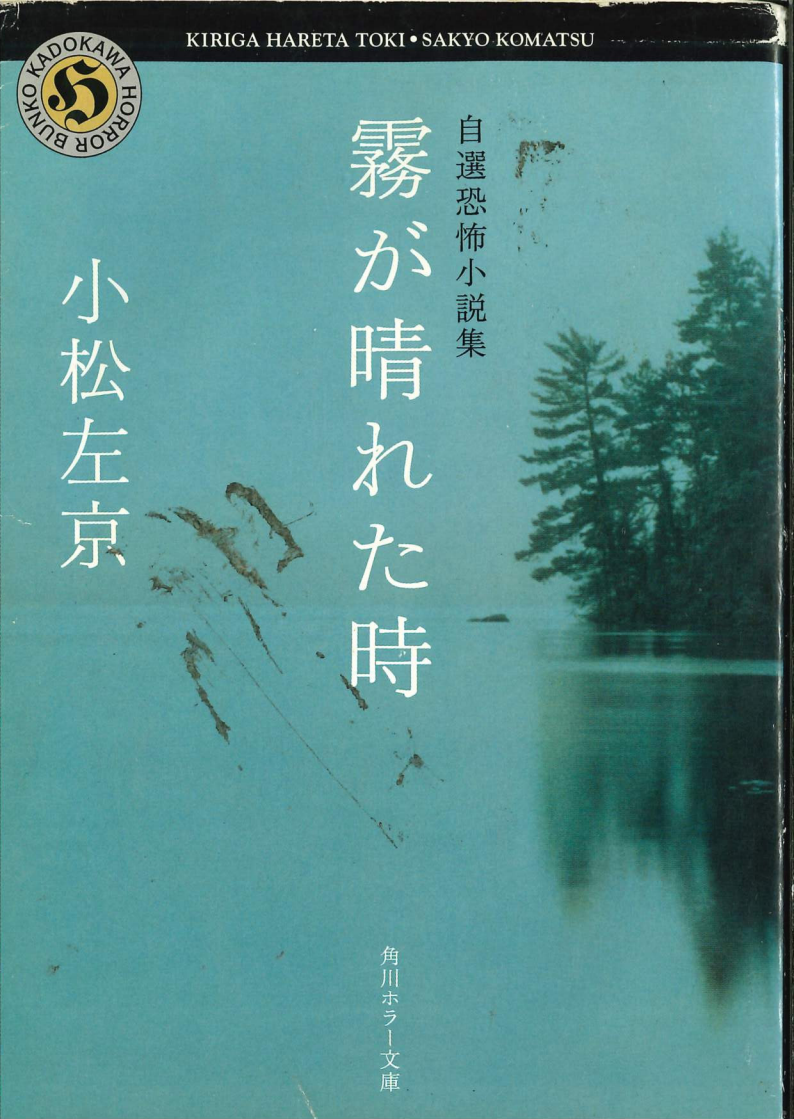
KIRIGA HARETA TOKI • SAKYO KOMATSU

KADOKAWA HORROR BUNKO

自選恐怖小説集

霧が晴れた時

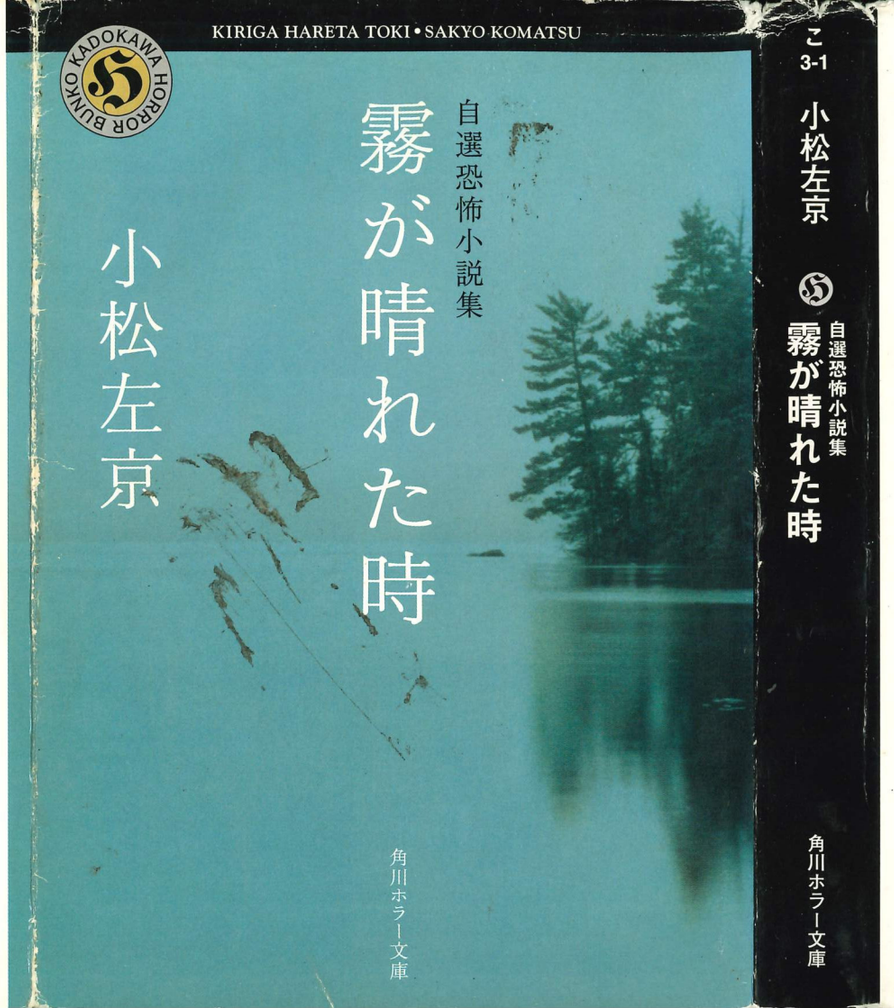
小松左京



角川ホラー文庫

小松左京
（こまつ さきょう）
1931年大阪生まれ。京都大学文学部卒。幾多の職を経て、62年作家デビュー。その後、日本SF界の創世期から現在に至るまで中心的役割を果たし、数々の秀作名作を発表。74年『日本沈没』で第27回日本推理作家協会賞、85年『首都消失』で第６回日本SF大賞を受賞。

カバーデザイン／大武尚貴（角川書店装丁室）
©Keith Schreiber／ゲッティ　イメージズ



こ 3-1
小松左京
自選恐怖小説集
霧が晴れた時
角川ホラー文庫

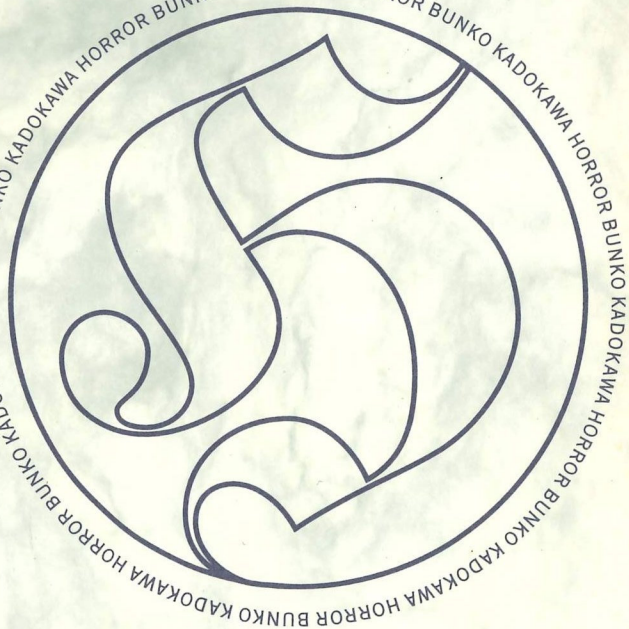
太平洋戦争末期、阪神間大空襲で焼け出された少年が、世話になったお邸（やしき）で見た恐怖の真相とは……!?　名作中の名作「くだんのはは」をはじめ、日本恐怖小説界に今なお絶大なる影響を与えつづけているホラー短編の金字塔。

1920193006674
ISBN978-4-04-130863-9
C0193 ¥667E
定価：本体667円（税別）

角川ホラー文庫
小松左京の本
自選恐怖小説集 霧が晴れた時

自選恐怖小説集 霧が晴れた時

小松左京



角川ホラー文庫
9063

自選恐怖小説集

霧が晴れた時

小松左京

角川ホラー文庫
9063

自選恐怖小説集

霧が晴れた時

小松左京

角川ホラー文庫
9063

目次

すぐそこ　五
まめつま　一九
くだんのはは　二七
秘密（タブ）　七三
影が重なる時　一〇五
召集令状　一三九
悪霊（あくりょう）　一七五
消された女　二〇五
黄色い泉　二三七
逃（ふ）ける　二五七
蟻（あり）の園　二八七

骨　三一
保護鳥　三五七
霧が晴れた時　三八九
さとるの化物　四〇五
あとがき　四一五
初出一覧

すぐそこ

「いなかの一里」という言葉がある。

最初の一、二回は、がっかりしたものの、その言葉を思い出して、にが笑いするくらいのゆとりはあった。

だが、三度めも、同じような事になると、さすがにげんなりしてきた。

「ああ、すぐそこですがな」と、いかにも朴訥(ぼくとつ)そうな、初老の男は教えてくれた。「もうほん、この先じゃ」

「どのくらいあるでしょうか?」

と、彼は汗をぬぐいながらきいた。

「そうじゃな、五、六丁かの」

と陽(ひ)やけした男は、ステッキがわりの木の枝をついて、まばらな梢の間からのぞいてるまっさおな空を、そりかえるようにして見上げながらいった。

「この道でいいんですね」

「はい。枝道も何もありません、まっすぐの一本道じゃ。ちょっと先でのぼりになるがの。今度くだりになったら、すぐ下に、県道が見えてきますで……」

彼は、ほっとして、ナップザックをゆすりあげた。——男の口調は、山の人特有の人なつこさにあふれていた。親切そうだし、今度はまちがいあるまい。

「バスは通ってますか？」

「はい。――一時間に一本じゃがのう。バスの停留所は、だいぶ先じゃが、くりゃあ、手をふればとまってくれます」

どうもありがとうございました、と、帽子をとって勢いよくいった。正直いって、うれしかったから、声にもつい張りが出た。男の方も、わざわざ帽子をとって、ていねいに頭をさげ、ゆるゆる行きなされ、といった。

一丁ほどで林が切れてきて、そこからゆるいのぼりになった。両側は丈なす笹やぶで、道はあいかわらず見とおしがきかない。見上げると、前方に森が見え、正面の空を横切って山の稜線がかなりたかくそびえている。どこかで、鞍部をこえるのだろうと思って、彼はまたうつむいて足を早めた。

山水でえぐられた小径の中央部をさけ、両側の岩根をふみしめるようにして、だいぶのぼった。汗が額からしたたり、眼にしみた。ナップザックが肩にくいこみ、息があらぐ。まわりがほのぐらくなり、空気が冷やりしてきたと思ったら、さっき見えた森の中にはいりこんでいた。

だが、道はまだくだりにならない。

森にはいって十分ほど行くと、のぼり勾配はすこしゆるやかになり、やがてほとんど平坦になった。

やれやれ、と、彼は息をついた。

――もうじきくだりにかかるだろう。

だが、道は森の深い下ばえの間をうねうねまがりながら、どこまでもつづいていた。――蜘蛛の巣に顔をつっこみ、笹の枯葉が頬にくっつき、木の根に足をひっかけながら、彼はなお十五分、二十分、足を早めて歩いた。歩きながら時計をみると、もう四十五分も歩きつづけている。

またか――と、彼はうんざりして、思わず足をとめた。五、六丁というと、七百メートル内外だ。いくらいなかの人の感覚でも、一キロそこそこのものだろう。平地を歩く速度が、一時間ざっと四キロメートル、やや疲労気味で、おまけにのぼりで歩度がおちたとい え、一キロの道を四十五分もかかるはずがない。

陽はまだ高いからいいものの、こうやたらに歩かされたんじゃたまらない。――よせばよかったのだが、地図であたりをつけて、地図にのっていない間道を歩いた経験はたびたびあったし、山歩きのカンのよさでは自信もあった。山峡部のハイキングコースを歩いているうちに、ふと林の中へはいって行く脇道を見つけ、草むらの中にたおれている、苔のいっぱいはえた、小さな古い石標をこすって、「ちか道」という字をやっと判読した時、ついふらふらとはいって行く気になった。

むろん、ふみこむ前に、地図であたりをつけ、磁石で方角もみた。山は、そんなに深い、というほどでもない。ハイキングコースは、まっすぐ山峡部をつっきり、そこからあと一時間ほどで県道に斜めに交叉する。その地点から町へ出るには、方角からいって県道を斜

めにひきかえす恰好になるのだから、途中から山の尾根をつっきれば、たしかに距離的には近い。——地図で目測して、距離にしてほんの五、六キロとふんだ。標高でみると尾根も高くない。時間がたっぷりある、というゆとりが、彼を間道にふみこませた。

細い道を一時間も歩くうち、谷間の、何もうわっていない小さな田や、軒のがっくりかたむいた廃屋の横を通った。眼も鼻もわからない石仏をまつった小さな祠も、もと住居あとだったらしい石垣もあった。——人が住む形跡もあり、道もふみかためてあって、別に不安もなかった。ただ、やたらにまがりくねり、すこし距離がありすぎるように感じはした。——これも廃屋かと思うほど、あれはてた農家の庭先へ、ふいに出てきた時、手拭いをかぶった老婆が、梅の木の根かたで紫蘇をつんでいるのを見つけ、そこで最初に道をきいた。

「はい、これをまっすぐですよう」と、老婆は歯のぬけた口をもぐもぐさせて、意外にかわいい声でいった。「そうです。こっちへ行けばええんです。そうじゃの、あと半道ほどですかいのう」

その半道は、とうにすぎ、なお彼は竹藪や、丈をこす、すすきの原や、小さな林を通りぬけて歩きつづけた。——途中で一本脇道があって、ちょっと彼はまよった。しかし、一応それまでの道をたどることをきめ、ものの二、三十メートルも行くと、道ばたの草の中から、ひょっこり負いかごをせおった、お河童頭の少女が出てきた。

「あ、県道なら、こっちきちゃだめです」と、裾の短い、色あせた着物を着た、栗色の頬の少女は、ハキハキした調子でいった。「さっき枝道がありましたでしょう。あれを行くんです。この道は、池で行きどまりです」

都会者とみて、一生懸命標準語をつかっているのがわかって、彼は思わずほほえんだ。

「おじさん、町の人ですか?」と少女は、好奇心をあらわす眼で、彼を見た。「町へ行ってみたいです。——六年生の修学旅行で、行くことになってたんですけど、私、行かなかった……」

さっきの脇道の所までひきかえすと、少女は、林の中へ消えて行く道をさしていった。

「あの林をつっきると、もうすぐそこです。——はい。二キロメートルぐらいかいの」

と、つやつやしいお河童頭をかしげて、メートル法でいった。わかれしなに、チョコレートをむりやり手ににぎらせると、

「ありがとうございます!」

頬をまっかにして、最敬礼した。枝道へふみこんで行くと、うしろから大きな明るい声がとんできた。

「さいならァ、ゆるゆる行かんせ」

ゆるゆる行きなされ——これが、このあたりのあいさつか……。彼は、こんな深い山の中で、少女はどんなくらしをしているのだろう、と、歩きながら思った。

その林が、おそろしく長くつづいた。二キロメートルどころではない。かれこれ四、五キロも歩いたと思うのに、とぎれてはまたつづく。あのはきはきした、聡明そうな少女が、

まちがった事を教えてくれたとは思いたくなかった。といって、道はもう枝道もない一本道で——そして、最後の林の中で、さっきの初老の男にあい、その男もいったのだ。

「ああ、すぐそこですがな」

時計をみると、もう正午をだいぶまわっていた。三時間以上歩きつづけた事になる。まだ食欲が出ないので、倒木に腰をおろして水をのみ、キャラメルをしゃぶった。森の中は、しずまりかえり、遠くで山鳩が、どろっぽっぽう、と鳴いている。倒木の上を、かみきり虫が長いだんだらの触角をふりまわしてゆっくりはい、数間先の道を、山かがしの赤いなめらかな胴体が音もなく横切って行く。——地図と磁石をとり出してみたが、森の中ではあまり役にたたない。しかし、とにかく道はたしかに県道の方角へむかってはいる。

立ち上って、また歩き出し、しばらく行くとふいに森が切れた。——しかし、そこから県道が見おろせるどころか、眼前には胸をつくような山の急斜面がそびえたち、道はその斜面を稲妻型にはるか上の方へのぼって行く。さすがに彼も、がっくりと力がぬけて、ひきかえそうかと迷った。

だがひょっとすると、さっきの男のいった「のぼり」とは、これの事かも知れない。山の中で住む人にとっては、さっきのだらだら坂など、のぼりのうちにはいらないのかも知れない。——そう思うと、彼は、まよいまよい急坂に足をかけた。だが、体は重く、相当疲労していて、はたしてあとどのくらいで、この山をこせるか、自信がなかった。そして、

この山をこしたむこうにはたして県道があるのかどうか……。

そんな不安に苛まれ出した時、上の方から、たっ、たっ、と、足ばやにおりてくる、山仕事支度の男にあった時は、まったく地獄で仏という感じだった。

「あんだァ？　県道？——ンなら、こんな山にはいってきちゃだめだ。ひっかえしなされ」と、髭面にほっかむりした壮漢は、大声でいった。「森の中に、右へ行く道があったろうが。道しるべがたっちょったろう？」

「いいえ、見ませんでした」彼は、いかにも山なれた人間らしい相手に、ほっと安心しながら汗をぬぐった。「枝道も気がつきませんでした」

「道しるべがなかった？　また熊か何かが押したおしたな。それともわるさしたやつがいるかな」

「熊がでるんですか？」彼はぎょっとした。

「もっと寒くなってからよくおりてくる。だけんど、今でも、気まぐれに出ることがある」

男の足は早かった。しかし、たのもしげな相手に、すっかり安心した彼は、何とかついて行くことができた。

森の中へふたたびはいっていった時、彼は何となく様子がちがうような気がした。さっきはたしかに、杉や檜の森だった。だが同じ道をひきかえしたのに、今度は、ぶなやくぬぎの森になっている。休んだはずの倒木もなく、途中でたしかに枝道があらわれた。——

男は草むらの中にたおれた木の道標をひろいあげ、別れ口につったてた。風化して、灰色になった木の上に、うすれてしまった墨で、かすかに「右、県道」と見える。

「まっつぐ行くだ」と男はほえるようにいった。「男の足なら、そうだのう、都会もんでも三十分とかかるめえ。山鼻をまがりゃ、ポンと県道に出る」

ほっとして、二、三歩行きかけて、ふりかえるともう男の姿はなかった。

——彼は何となくせきたてられるように、道を急いだ。

だが、行けども行けども、男のいう「山鼻」はあらわれなかった。——かわりに、トロンと青い水をたたえた池に出た。その傍にもたちどまらず、ただ彼は歩いた。途中で、ちょっと休んだだけで、それからもう二時間以上歩きつづけた。と、突然、森と山の斜面とにはさまれて、二、三軒の農家がかたまっている所へ出た。——鶏の姿もなく、痩せ猫が一匹、つくっていない田の畦にすわって、あくびをしていた。

それでも声をかけると、奥でごそごそ音がして、やつれた、主婦らしい女が出てきた。彼は、軒先の縁台をかりて、弁当をつかわせてもらった。——女は、渋茶をくんでもってきてくれた。

「まあまあ、道に迷いなさったですか」と女は気の毒そうにいった。「山が深いで、土地のものでも、へたすると迷います」

「すみませんが、県道まで案内してくれませんか?」と、彼はそっと札を女の膝もとにおきながらいった。

「案内ちうても、だいぶあるでのう」女は札には全然関心をしめさず、うつろな眼つきでつぶやいた。「じゃ、見える所まで、案内して進ぜます」

女に案内されて、彼はまた道をたどり出した。地図から判断して、あるはずはない、と思うような深い谷が、いきなり傍にあらわれたりした。ものの三、四十分も行くと、突然眼の前がひらけ、山の尾根が眼前に幾重にもかさなるのが見わたせる所へ出た。道はそこから急坂で谷へむかってさがっている。

「ほれ、あの眼の前の尾根の低うなった所に、ちょこっと白いもンが見えましょう」と女は指さした。

彼は眼をこらしたが、よく見えなかった。

「あれが県道です。一度、この道を谷へおりて、そのままっすぐむこうの尾根をこえると、出ます。——そうですの、私らの足で一時間半ぐらいですか」

女は小手をかざすと、ずっとむこうの尾根を見わたした。

「ほれ、あのむこうに、白いものが見えますの。——あれが町ですがな。もうここから見えとります」

彼はそちらの方へ眼をむけた。——しかし、彼には、白っぽいもやのようにしか見えなかった。

「わしも、一度は町へ行ってみたい……」と女はため息をつくようにいった。

「ではお気をつけなされ……ゆるゆると……」

彼は女とわかれて、爪先さがりの坂をおりはじめた。山の斜面のこちら側では、急に日がかげり、蜩がいっせいに鳴きはじめた。

——深夜、まっくらやみの谷間を、やみくもに歩きつづけていた彼は、突然、前方にポツンと明りのまたたくのを見つけて、欲も得もなく、はれあがった足をひきずって走った。一軒家の戸をホトホトとたたくと、若い女の声がして、戸があいた。——人の良さそうな老人夫婦が、奥にいて、戸をあけたのは若い娘だった。電気もなく、明りは古めかしいランプだった。

「まあ、こんな時間に、谷でまよいなさったですか?」と娘は眼をまるくした。

「それは御難儀な。今夜はここへとまって、明日おたちなされば、県道なら、もうすぐそこですから……」

「結局——」といって、彼はちょっと眼を伏せて考えた。「私は思うのだが、それはつまり……過疎地域の幽霊ではないかな」

「地域の幽霊ってのはおかしいな」と、若い、細っこい学生たちは笑った。「蜃気楼ならきいた事あるけど」

「いや——まあききなさい。中国の古い伝説に出てくる桃源郷というのがあるだろう? あれも、偶然この世のものとも思えぬ所へまよいこみ、次にたずねようとすると、どうしてもわからなかった、という話だ。いわば、これも一種の地域の幽霊みたいなもんじゃな

いか」

「狐にだまされて、野原を邸と思いこんだって話は、どっかで読んだ事がありますがね」とリーダーらしい学生はいった。「あなたも狐に化かされたんじゃありませんか?」

「〝耳なし芳一〟だって、平家のお墓を、幽霊どもに御所と思わせられたんだよ。おれ知ってらァ」と高校生らしいのがいった。

「でも、どうして〝過疎地域の幽霊〟とお思いになったんですの?」と女子学生がきいた。

「ただ何となくそう思っただけだが、——一つは、出あった人たちが、みんな、都会や、都会へ行く道を、すぐそこといいながら、どうしてもはっきり教えられなかった事だ。また、町へ行ってみたい、といいながら、彼らと都会との間には、深い、心理的生活的な断絶があって、遠くからのぞみながら、その深淵をこえられなかった。——そういった、心理的障壁のために今までの生活環境はどんどん荒れ果てて行きながら、とうとう最後まで、過疎地帯からぬけ出る決心がつかなかった人たちの、町に対する憧れと、どうしても思い切ってそこへ出かけて行く決心がつかなかった事への絶望とがつみかさなりこりかたまって……」

「それで、その〝幽霊空間〟ができたの? おかしな話ね」と女子学生は笑った。「町までほんの二、三十キロしかないのに」

「空間的にはすぐそこであっても、その人たちにとっては、心理的、生活的に、おそろしく——それこそ絶望的にかけはなれていたんだね。彼らも、すぐそこといいながら、自分

たち自身、町へ出て行く道を、ついに見つけられなかったんだろうね」
「一度はいりこんだらぬけられない〝魔の空間〟か」と高校生がいった。
「さあ、もう行こう」とリーダーがいった。
「町へかえって、生ビールでものもうや、——県道はこっちですか？」
「ああ……」と彼はあいまいにうなずいた。「もう、すぐそこだよ」
彼にはそうしかいいようがなかった。先住者たちがそれ以外の事を教えてくれなかったのだから……。学生たちが去って行くのを気づかわしそうに見送って、彼は白髪頭をふりふり、家の中にはいった。その谷間の一軒家の奥では、もうすっかり老婆になった彼の妻、——彼がずっと以前、道にまよってその家を深夜におとずれた時には、まだ若い娘だった老婆が、ひっそりとランプの火屋をみがいていた。

まめつま

赤ン坊が、突然キャーッ、というようなおそろしい声をあげた。
菊江は手をのばして、小さな布団の上をかるくたたいた。
「よしよし……」と、彼女はやさしくいった。「どうしたの?」
赤ン坊は、なお、顔をまっかにし、体をそっくりかえらせ、のどがさけそうに泣きつづけた。
「どうしたんだ?」夫が眠そうな、とがった声でいって、むこうをむいて布団をかぶった。
「おむつをかえてやれ!」
「ぬれてないわ……」菊江は布団の中に手をつっこんでつぶやいた。「おお、よしよし——どうしたのよ……」
「明日、医者につれてゆけ……」夫は布団をかぶったまま、くぐもった声でいう。
「この三日間、毎晩だ」
夜中の二時だった。
「こんな時があるのよ……」
手早く赤ン坊の着物の前をひろげ、針かなにかささっていないかしらべる。
なにもない。
赤ン坊は、なお、おそろしい声で泣きつづける。——小さな顔を赤黒く充血させ、声も

かれかけて……。乳房をふくませようとしたが、うけつけない。
「よしよし……」しかたなしに、立ち上って、ゆすってやる。「疳の虫がおこったのね。——ほら、いいのいいの……」
赤ン坊は、なおはげしく、ひきつけるように泣きつづけた。——夫に気がねして、菊江はとうとう廊下へ出た。
とたんに赤ン坊は、嘘のように泣きやんだ。——ひくっ、ひくっ、と小さなしゃっくりを二、三回くりかえすと、その涙にぬれた小さな顔は、急に赤らみがひいて行き、すやすやと寝息をたてはじめた。

「それは、まめつまだよ」と、祖母はいった。
「まめつま？」
と菊江は眉をひそめた。
「どんなもの？」
「子供や赤ン坊にだけ見える、小さな魔物だよ。——小さな小さな、豆粒のような侍の姿をしていて、夜中になると、それがたくさんでてきて、赤ン坊の枕もとで、小さな刀をぬいて、ちゃんちゃん斬りあいをやるんだよ。赤ン坊は、それを見て、おびえて泣くんだけど、おとなには見えないのさ」
「まあ！」と菊江は小さくさけんだ。

「今夜ねる時、枕もとに、お米を一つかみ用意しておおき——。赤ちゃんが泣いたら、そのお米を枕もとにむかって投げるんだよ。そうしたら、きっと泣きやむよ。あとで、投げたお米の粒をしらべてごらん。——小さな血のあとがついているよ」

その夜、菊江は、いわれた通り、枕もとに一つかみの米粒を皿にいれておいた。——夫の俊夫は、夜おそく、すこし酔ってかえってきた。
「おかえりなさい」
と菊江がコートをぬがしにかかると、酒の臭いのほかに、かすかに、ほんのかすかに、香水らしい香りがした。
「お風呂は？」と菊江はきいた。
「いらん。——すぐねる」と、夫は、わざとらしい乱暴な動作で、ネクタイをひきむしりながら、ぶっきらぼうにいった。「つかれた……。仕事が忙しすぎる」
菊江が、ちょっと顔をそむけるようにして、夫のぬぎすてたものをかたづけていると、夫は舌打ちをするようにいった。
「相かわらず、陰気な顔をしてるな」
「すみません……」と菊江はうつむいたままいった。「お化粧でもしておこうと思ったんですけど、坊やをねかしつけているうちに、ついねこんでしまって……」
「めそめそしなくたっていい！——そのめそめそが気にくわん。気がめいる」

そういいすてると、夫は足音高く廊下に出ていった。——古びた廊下がキュウキュウきしんだ。

「この家も陰気だな……」と、夫がわめくようにいうのがきこえた。「大きいばかりで、陰気で、じめじめして——まったく気がくさくさする！」

私の家だのに……と、菊江はそっと目頭をおさえながら思った。この住宅難の時に、こんなに広い、庭つきの家にすめる、といって、結婚する時あんなによろこんでいたのに……。

夜半、赤ン坊はまた、火がついたように泣き出した。

「うるさい！」と、夫は布団をかぶってどなった。「だまらせろ！」

菊江は枕もとの皿にいれた米をつかみ、赤ン坊の枕のあたりの、たたみへむけて投げた。

——ザッ！　という音がすると、赤ン坊はふしぎにぴたりと泣きやんだ。

「なんだ？」

米粒の鳴った音に、夫はおどろいたように、顔をふりむけた。

「まめつまよ」と、菊江はいった。

「なんだって？」

菊江はだまって、枕もとに散った米をひろいあつめた。

「ほら、あなた、見て！」と、枕もとのスタンドを明るくして、菊江は掌をさし出した。

「見てごらんなさい。米粒に、小さな小さな血のあとがあるでしょう」

「なにをいってるんだ……」夫は眼をこすりながら、米粒を見た。「血なんてついてるもんか！」

「ほら、ついてるじゃないの！——これが見えないの？　まめつまの血よ。これが子供をおびえさせていたのよ」

「お前……」夫は、呆れたように菊江の顔を見た。「どうかしてるんじゃないか？」

そういうと、夫はくるりと背をむけて、また布団をかぶってしまった。

「医者へつれていったのか？」と、夫はしばらくしてきいた。

「いいえ……」と菊江はつぶやいた。「でも、もう大丈夫よ」

一か月の間、赤ン坊は夜泣きしなかった。

だが、一か月あまりたったある夜半、赤ン坊はまたもやはげしく泣き出した。——菊江は、急いで台所から、米粒をつかんできて、枕もとにまいた。

だが、今度は赤ン坊は泣きやまなかった。

夫は、その夜出張中で、うるさがられないのだけがさいわいだった。

手足をつっぱらせ、針でつきさされでもしたようにはげしく泣く赤ン坊をかかえて、菊江は途方にくれた。

その時、彼女は廊下のずっとむこうの方で、なにかひきずるような足音をきいた。

夫の留守に、泥棒が——と、菊江は身内が凍りつくような思いを味わった。

足音は、長い廊下を、ゆっくりちかづいてくる。

「だれ?」

思いきって声をかけ、のどにこみあげる叫びをこらえて、寝間の障子をひきあけた。うすぐらい電灯に照らされた、長い廊下には誰の姿もない。

だが、障子をしめると、また足音がちかづいてくる。——ぶあつい部屋草履をひきずるような音が……ズウッ……ピタン!……ズウッ……ピタン! と。

泣きわめく赤ン坊をひしと胸にかかえて、菊江は凍りついたように寝床の上にすわっていた。あたりの空気が、急にしいんと冷える。

足音は、とうとう寝間の前までちかづいてきた。——突然、障子が、ざあっ……と鳴る。ざあっ……ざあっ——と、障子を箒ではいて行くような音が、部屋の前を横切って行く。髪の毛のふれるような、さらさらという音もまじり、そしてあの、ひきずるような足音も……。突然、障子の隅の所で、音がぴたりととまり、廊下の十燭光の電灯光の中に、髪をふりみだしたものの姿が朦朧とうかび上る。

はげしく泣いていた赤ン坊が、ヒッ、と一つしゃくりあげると、ぴたりと泣きやむ。——気がつくと、顔色が青黒くかわり、白目をむいて小さな四肢をつっぱらせ、ひきつけていた。

「祠をこわしたね」と祖母はいった。

「いいえ……知らないわ!」と菊江はいった。

「普請でもはじめなかったかい?」

「ええ、あの……」

「どこで?」

「乾の隅よ——あそこ、草ぼうぼうであいていたでしょう。邸があんまり古くて、陰気なんで、あそこへ俊夫さんが、自分の書斎をプレハブでたてるんだといって——おとついから、基礎工事の人がはいっているわ」

「やっぱり!」と祖母はつぶやいた。「で、祠があったろう?」

「ああ——何か小さい、古いのがあったみたいだけど、工事が終ったら、うつすつもりでしょう。隅にほうり出してあったようだわ。ばらばらになって……」

「えらい事をしたね……」祖母の声は暗くなった。「いっておくんだったよ」

「私がついていれば、お祖母ちゃんにきくんだったけど——でも、俊夫さんは、自分でどんどんやってしまって、私に何もいわせないんですもの」

「あそこには、昔、土蔵があったんだよ」と、祖母は気の滅入るような調子でつぶやいた。「でも、私が五つの時に、つぶして、あそこへ祠をたてたの。お坊さんをよんで、しっかり封じてもらってね」

「何を封じてもらったの?」

「巡礼のお婆さんだよ」祖母は溜息をつくようにいった。「そのお婆さんのために、私の

弟たち——私たちの兄弟の長男と次男が二人も死んでしまったの。この家を買って間なしだったけどね。夜、私のお母さんが、雨戸をあけて、その子におしっこさせようとすると、三つになったばかりのその子が、火のついたように泣くの。どうしたんだってきくと、植えこみのむこうの、灯籠の影に、白髪をふりみだした、白い着物のお婆さんがいて、おいでおいでするよっていうのよ。——私も弟がそういうのをきいたよ」

「で、お祖母さんは、見なかったの？」

「私は見なかったよ。——でも、夜中、お手洗いに行きたくて眼をさますと、廊下にひきずるような足音がきこえるの——それがだんだんちかづいてくると、障子にさらさら、さらさらと、髪のさわる音がきこえるんだよ」

「それよ……」菊江はごくりと唾をのみこんだ。「私もゆうべ……」

「私のお父さんは、蘭学もやって、豪気な人だったから、そんなもの全然信じないの。——それに、どういうわけだか、お父さんには、何も見えず、何もきこえないんだよ。でも、私は足音をきいたし、お母さんも、お手つだいさんもきいてるの。——植木屋さんには何もきこえないといっていたから、女子供にしか見えなかったらしいよ」

「それで……？」

「それから——私の弟は、理由のわからない熱を出して寝こんだんだけど、そうすると、夜中にまた、今度は寝床の中で、火のついたように泣くの。どうしたんだってきくと、今度は天井の隅の板をはずした所から、そのお婆さんが顔をのぞかせて、ものすごい顔で、

ニタッと笑うんだって——三つの子がいうのよ。でも、おとなが見ても、天井の板なんてはずれてないんだよ」

菊江は、声もなくうなずいた。

「そのうち——、その子の熱がちょっとさがった時、知らない間に寝床をぬけ出して……大さわぎしてさがしたら、あそこに昔たっていた土蔵の前で死んでたの。ころんで、頭を石でうって……」

「まあ！」と菊江はかすれた声でつぶやいた。「それで、もう一人は？」

「これも、この家へきてから、夜泣きするし、乳はのまないし——まだ四月ぐらいだったかねえ——それが、夕方、子守の女の子が庭で抱いておっことして、やっぱり石にあたって死んじまったんだよ。その子守娘も、土蔵前で、泡を吹いてたおれてたよ。土蔵の横を、母屋の方へまわろうとしたら、夕闇の中に、白い着物をきたお婆さんがぬうっと立っていて、いきなり顔をつき出して、ニタッと笑ったんだって——その子守娘も、熱を出して、おかしくなってしまったんで、せめられもせず……」

「そのお婆さんって、何だったの？」

「さすがのお父さんも、青くなって、この家を売った周旋屋をさがしたの。火事で焼け出されて、何でも大変辺鄙な所へひっこんでいたのを、やっとさがしだしてわけをきいたら、お婆さんの幽霊が出るのを知って売ったんですって——。だんだんしらべて行くとね。昔、この家をたててすんでいた、老人夫婦がいて、ある日、門の前に行きだおれている、年よ

りの巡礼を助けたんですって……。病気だったらしいの」
「年とった女の巡礼ね……」
「ええそう——。最初はとてもかいがいしく看病してあげたので、そのお婆さんが大変よろこんで、私はもう老い先短いし、この病では助かりそうもない。身よりはないし、長年ののぞみの巡礼もすませた、だから、私が死んだら、身につけているお金をお礼にさしあげます。私には、小さな卒塔婆でもたててくれたらけっこうですって、老人夫婦にいったの。その枕もとの胴巻を見たら、そのころのお金で百両から身につけていたんですって……。ところが、そのうち、看病の甲斐があってか、病人が回復しかけたの。そしたら……こんなりっぱな家をたてて、何不自由なくくらしていたのに、どう魔がさしたのか、その老人夫婦は、お金に眼がくらんで、巡礼のお婆さんを土蔵にとじこめて、ひぼしにして殺してしまったの。——その死体を、土蔵の傍にうめたのよ」
「じゃ……その巡礼の幽霊なのね」菊江はからからに乾いた口でいった。
「それで、私のお父さん——お前の曾祖父さんはね、土蔵をこわして、えらい坊さんをよんで、りっぱな供養をして、あの祠をつくってもらったんだよ。——祠をこわしてはいけないよ、菊江……。もう一度供養して……」

「祠だと?」と、夫は呆れたようにいった。「幽霊だと?——いいかげんにしてくれ。コンピューター時代だぞ」

「でも、おねがいだから……」菊江は必死になっていい争った。「工事をやめてちょうだい。そして祠をもとの所にもどして……供養をしてもらって……」
「おい!」と夫はつよい声でいった。「おれが、おがみ屋なんて、大きらいだって事を知らんわけじゃないだろう。いいかげんにしろ! 工事をやめろといったって、もう手金ははらっちまったんだぞ。お前、少し頭がどうかしてるんじゃないか? なぜ赤ン坊を医者に見せない?」
「見せたってだめなのよ……」菊江は絶望的な気分になりながらいった。「これは、見せたってだめなの……」
赤ン坊が、いい争っている二人の横で、また、しめころされそうにはげしく泣き出した。
「あなた!」菊江は、まっさおになってさけんだ。「ほら……あの足音!」
「足音?」夫は耳をすました。「何もきこえんじゃないか……」
「きこえるわよ。ほら、廊下に……」
夫は立ち上ると荒々しく障子をあけた。
「何もいないぞ!」と、夫は左右を見わたして、ピシャリと障子をしめた。「何もきこえるもんか!」
「あれがきこえないの? ほら、近づいてくる……」菊江は子供をだきしめてふるえた。
「いま、この部屋の前……ほら、障子が鳴ってる……」
ざっ……ざ、ざっ……と障子をする音が横切りはじめた。

「障子？　障子がどうした？」夫はふりかえりながらいった。「何の音もしないじゃないか……。どうしたというんだ？」

赤ン坊がヒッ！　という声をたてた。菊江の腕の中で、体がつっぱり、冷たくなった。——眼を見ひらいたままひきつけてしまった視線が、天井の一角を見上げているのに気づいて、思わずぞっとしてふりあおいだとたん……。

「あなた！」菊江は顔をふせ、夫にしがみついた。「あそこ……天井の隅！　板がはずれて、お婆さんが……」

「菊江、ごらん」夫は、妙にやさしい声でいった。「天井の板なんてはずれてやしないよ」

菊江はおそるおそる顔をあげた。——夫のいう通りだった。

「明日は、子供を医者につれて行くんだよ」と、夫はさとすようにいった。「そして、お前も見てもらうんだ。ぼくの知りあいの、神経科医にいっておくから……」

「今までいいたくなかったんだけど……」祖母は沈んだ声でいった。「俊夫さんには、女ができたんだよ……。お前の妊娠中に……」

脳天をガーンとどやされたような気持だった。——顔から血がひいて行き、眼の前に膜がかかったようになった。それで……。

「お前は——かわいそうに、棄てられるよ。むこうの女の人は、派手な、明るい人だし……でも、贅沢好きだから、俊夫さんはお金がたくさんいるんだよ。それで、この家と地所

がほしいんだよ……」

「私をどうするつもり？」菊江はこまかくふるえながらいった。「殺すのかしら？」

「殺さないまでも——精神病院にでもいれるつもりだよ、きっと……」祖母はいとおしそうにいった。「お前は——不運な子だね。そう……菊江……この家を出てお行き！　でないと、このままでは、子供があの幽霊に殺されるよ。そしてお前も俊夫さんに……出てお行き。お金と、権利書をもって、子供をつれて、自分の方から出て行った方がいいよ」

「いやよ！」と菊江は叫んだ。——「外」の世界に対する恐怖がこみあげてきた。「私、この家をはなれるの絶対いや！　お祖母さん一人おいて……お父さんお母さんが死んだあと、お祖母さんとずっと二人で、この家でくらしてきたんですもの……」

「私はいいんだよ——もう、お前も、私の手もとからはなれて、一人で生きて行かなくちゃ……子供のためにも……」

「いや！——だめよ！　できないわ。この家と、お祖母さんからはなれて、とても一人で生きて行く自信なんてないわ！」菊江は両手で顔をおおって叫んだ。まっくろな、恐怖と絶望がこみあげてきた。夫に女ができ、そしてこの家には……だが、この家と、祖母からはなれて——そんな事はできない！　そんな事は不可能だ！

「でも、このままでは……」と祖母はつぶやいた。

「どうしたらいいの？」菊江は顔をおおって叫んだ。「どうしたらいいのよ？」

「いっそ……」ふいに、祖母は、今までとはうってかわった、しわがれた、低い声でいっ

た。「殺っておしまい……」

菊江はハッとして、顔から手をはなした。——体全体が、氷の中につかったように冷たくなった。部屋の空気も、にわかに冷えてきた。

「お祖母ちゃん……」菊江は、かすれた声でささやいた。「いま、何といったの?」

凝結したような時間がながれ、家の中を、「菊江、菊江!」とよびながら近づいてくる夫の声も、まるで別世界の物音のように思えた。

「菊江!——どこにいるんだ? きのういった、ぼくの知合いの医者をつれてきたぞ」

と、夫は叫びながら近づいてきた。

「お祖母ちゃん……」と菊江はいった。「何といったの?」

返事はなかった。

「菊江……そこにいるのか?」夫の、いぶかるような声が部屋の前でとまり、障子があいた。「こんなまっ暗な部屋で、何をしているんだ?」

菊江は答えずに、夫の方をむいて立ち上った。

「おい!」夫は、部屋の中をすかしておどろいたような声でいった。「お前……いま、誰と話していたんだ?」

「お祖母ちゃんよ」と、菊江はうす笑いをうかべながらいった。

「お祖母ちゃんだって?」夫が、うす暗がりの中で、息をつまらせるのがわかった。「おい、しっかりしろ! お祖母ちゃんは、三年前……」

「いいえ、お祖母ちゃんは死んでなんかいないわよ」

菊江はうす笑いをうかべながら、畳の上をするように、夫にちかづいていった。爪先に位牌がひっかかって、ことんと音をたてた。

「ほら、あなたの後ろに立ってるじゃないの」

夫がぎょっとして、ふりかえった時、まるで自分の体ではないように、腕が勝手に動いて、スカートのエナメル革のベルトをするっとぬいていた。

菊江! およし!——と祖母が叫んでいるような気がした。

だが、腕は勝手に動いて、夫の首にベルトを巻きつけていた。——大きな夫の体は、弓なりにそって、猛烈にあばれた。だが、自分のものでない力が、大の男をしっかりくびり上げていた。明らかに、誰かが、彼女の細腕に、眼に見えないもう一対の腕をそえ、その眼に見えない力によって、ベルトをしぼっていた。

「お祖母ちゃん……」と菊江は朦朧とした頭の中でつぶやいた。「しっかり……あばれないようにおさえていて……」

そうだ——と、あのしわがれた声がいった。——殺っておしまい!

その時、彼女は、力の弱まり出した夫のむこうの暗がりに、ぼっと白くうき出すその声の主を見た。——祖母の亡霊を羽交いじめするようにもつれながら、ニタニタ笑っている、もう一人の老婆の姿を……。

くだんのはは

戦時中、僕の家は阪神間の芦屋で焼けた。昭和二十年の六月、暑い日の正午頃の空襲だった。

僕はその時中学三年だった。工場動員で毎日神戸の造船所に通って特殊潜航艇を造っていた。腹をへらし、栄養失調になりかけ、痩せこけてとげとげしい目付きをした、汚ならしい感じの少年だった。僕だけでなく、僕たちみんながそうだった。

阪神間大空襲の時、僕たちは神戸の西端にある工場から、平野の山の麓まで走って待避していた。給食はふいになるし、待避は無駄になったので、僕たちはぶつぶつ言った。芦屋がやられているらしいと聞いても、目前の疲労に腹を立てて、気にもかけなかった。またいつものように工場から芦屋まで歩いて帰るのだと思うと、情なくて泣きたくなった。神戸港から芦屋まで十三キロ、すき腹と疲労をかかえ、炎天をあえぎながら歩いて帰る辛さは、何回味わっても決して慣れる事はない。空襲があれば必ず阪神も阪急も国鉄もとまってしまい、翌日まで動かない事もあった。

その日も僕は工場が終ってから二、三人の友人と歩いて帰った。感覚のなくなった脚をひきずって枕木をわたって行くと、あちこちに茶色の煙が立ちのぼるのが見えた。沿線沿いの一軒は、まだ骨組みを残してパチパチと炎をあげていた。芦屋の近くまで来ると、僕

はひどくとまどった。景色はすっかりかわってしまい、まるきり見なれぬ土地へ来たみたいだったからだ。僕の町の一角は、きれいさっぱり焼け落ちてしまい、まだ熱くてそばにもよれない赤土の山になっていた。所々にコンクリートの塀や石灯籠が残っていたが、あとは立木が一本まる裸になって立っているだけだった。僕は自分の家のあった所を見つけるのに、十分もかかった。見おぼえのある石の溝橋でやっとそれとわかったのだ。——道の反対側には、国民服に鬚をはやした男が一人、薄馬鹿のように口をあけて立っていた。それが父だった。僕がそばに行っても、ふりむきもしなかった。「今夜どうする、父さん？」ときいても、「うん」と言ったきりだった。その家は父が建てたもので、父の僅かな財産の一つだった。芦屋に家を建てて住むと言う事は、戦前にはなかなか大した事だったのであり、父はサラリーマンとして、規模こそうんと小さかったが、その望みをなしとげたのである。今父は、ほんの一握りの広さしかない焼跡を見て、自分の希望、自分の財産のあまりの小ささに、呆然としているようだった。

その夜僕たちが野宿もせずにすみ、また父の会社の寮まで、夜道を歩いて行かずにすんだのは、お咲さんのおかげだった。僕たち親子が何をするにも疲れすぎ、一時間近くもそこに立ちすくんでいた時、もんぺに割烹着の女の人が、焼跡の道をキョロキョロしながら歩いて来た。その人は僕たちの方をすかすように見ると、急いでかけよって来た。

「まあ旦那様、坊ちゃま、えらい事になって！」

とお咲さんは泣くような声を出して言った。

お咲さんはそのころ五十ぐらい、僕の家にずいぶん前から通っていた家政婦さんだった。子供好きで家事の上手な、やさしい人だった。僕はもう大きかったから、それほどでもなかったが、幼い弟妹たちはよくなついていた。末の妹などは、病身の母よりもお咲さんに甘ったれてしまい、彼女はいつも妹がねつかなければ帰れない事になっていた。物を粗末にせず、下仕事もいやがらずにやり、全く骨惜しみしない——信じられないかも知れないが、昔はそういう家政婦さんもいたのだ。一つはお咲さんが何かを信心していたせいだろう。こうして三年以上も通ってもらったろうか。母が弟妹を連れて疎開する時、お咲さんもやめる事になった。女手がなくなってしまうし、父と僕だけだと、昼間は全く無人になるからというので、もう少し通ってくれないかとたのんだのだが、義理のある仕事なので、まことに申し訳ないが、という返事だった。

「そのかわり御近所の事ですから、暇がございましたら参りますし、まさかの時は、向う様さえ大事なければ、必ずかけつけます」

「一体どこらへんなの？」と母はきいた。

「この下の、浜近くのお邸でございます」

「あそこらのお邸だったら、お給金もいいんでしょうね」と母は言った。あれほどつくしてもらっていながら、思う通りにならないといや味を言う、僕はそんなお嬢様根性のある母がきらいだった。

「お給金のためで参るのではございません——そりゃずい分頂けるそうですが。その家は

体も楽だし、頂き物も多いのに何故だか家政婦が一週間といつかないんだそうでございます。それで会長から特に私がたのまれまして。——人のいやがる事、人が困っている時は、すすんでやれというのが、私共の御宗旨の教えでございましてね」

こうしてお咲さんは、お邸勤めにかわったが、その後も男世帯を時々見に来てくれ、たまった汚れ物を僅かの間に片づけたり、お邸からの貰い物らしい、その頃には珍しかった食物などを持って来てくれたりした。——その時も、駅前がやけたときいて、とるものもとりあえずかけつけてくれたらしい。お咲さんの顔を見ると、僕は気がゆるんで泣きたくなった。

「まあ、ほんとに何て御運の悪い。私、お邸の方も守らないといけないし、こちらさまも気がかりでやきもきしておりました」

「いいんだよ。お咲さん、これが戦争というものだ」と父はうつろな笑いを浮かべながら言った。

「でも、今夜おやすみになる所が無いんじゃございません？」

僕は父の顔を見た、父は困惑を通りこした無表情で、もう暮れなずんで来た焼跡を見つめていた。

「およろしかったらどうか私の所へお出で下さいな。私、今お邸へ住みこみでございます。——家政婦会の寮も焼けてしまいまして」

そう言ってお咲さんは笑った。

「お邸の奥さまに——おねがいしてみますわ。部屋数も沢山ありますし、何だったら今夜は私の部屋でお休み下さいまし」

芦屋のほんとうの大邸宅街は、阪急や国鉄の沿線よりも、川沿いにもっと浜に向って下った、阪神電車芦屋駅附近にある。山の手の方は新興階級のもので、由緒の古い大阪の実業家の邸宅は、このあたりと、西宮の香櫨園、夙川界隈に多かった。ほとんどの家が石垣をめぐらした上に立っており、塀は高くて忍び返しがつき、外からは深い植えこみの向うに二階の屋根をうかがえるにすぎない。その屋根に立つ避雷針の先端の金やプラチナの輝きが、こういった邸に住む階級の象徴の様に見えた。——そのお邸はこのひっそりとした一角の、はずれ近くにあった。一丁ほど先からはもう浜辺の松原が始まり、木の間をわたる風は潮気をふくんで、海鳴りの音も間近かだった。僕たちは薄汚れた姿で、がくがくする足をひきずりながら門の石段を上った。

お咲さんはとりあえず僕たちを玄関内に入れ、自分は奥へ行った。広い邸内のずっと奥へ、彼女の足音が遠のいて行くのをききながら、僕と父は敷石に腰かけて黙りこくっていた。ふと背後に人の気配を感じてふりむくと、そこには和服の姿があった。玄関奥の廊下に立ち、薄暗がりの向うからこちらをうかがうようにしていた。その顔は見えず、ただ真白い夏足袋の爪先だけが見えた。その人は声もかけず黙ってこちらを見て立っていた。丁度そこへお咲さんがもどって来て、「まあ奥さま」と声をかけた。——その人は初めて顔

を見せた。渋い夏物をきちんと着付け、すらりと背の高い四十位の女の人だった。上品な細面に、色がすき通るほど白く、眼が悪いのか、薄い紫色の、八角形の縁無し眼鏡をかけていた。白粉けがなくて、顔色は青白かったが、髪はきっちりとなでつけていた。お咲さんはその人に僕たちの事を話した。その人は能面の様に無表情な顔をやや伏せて、お咲さんの話をきいていたが、そのうちちょっと眉をひそめて呟いた。

「そう、それは困ったわね」

その人が僕たちをいやがってそう言っているのではない事は、すぐにわかった。何か僕たちを泊めるとほんとうに困った事が起るみたいだった。僕は父の袖をひこうとした。

「でも——お咲さんの知り合いの方なら……」

その言葉をきいて、父は露骨にほっとした顔をし、思い出したように帽子をとり、名刺などを出してあいさつした。

「こう言う時はお互いさまですから」とその人はしずかに言った。

「お咲さんのお部屋、女中部屋でせもうございますし、——お咲さん、裏の方の離れにお床をとってさし上げて。お食事もそちらで上っていただくといいわ」

僕たち親子は、その夜六畳ほどの離れで寝かせてもらった。お咲さんは渡り廊下を通って、黒塗りの膳をはこんで来てくれた。僕たちは恥ずかしいくらい食べた。

「たんとおあがりなさいまし」とお咲さんは、ゆらめく蠟燭の火の向うから、笑いながら

声をかけた。

「奥様がそうおっしゃいました。こんな御時世にもったいないんですけれど——この家ではお米に不自由しませんの」

それでも麦が二分ほどまじっていたが、虫食い大豆や玉蜀黍、はては豆粕や団栗まで食べさせられていた僕には、まるでユメのようなものだった。おかずには、薄くて固かったが、とにかく肉が一片れ、それに卵と野菜の煮たのがついた。どれも僕たちには、奇蹟のような食物だった。

僕たちはお咲さんに蚊帳をつってもらい、しめったかびの臭いのする、でも爽やかな肌ざわりの夏蒲団にもぐりこんだ。蠟燭を消した真の闇の中で、僕はぐたぐたに疲れていたにもかかわらず、いつまでも眠れずにいた。

「何も彼も焼けてしまったね」と僕は隣の父に話しかけた。「教科書も、着物もシャツも……」

「ああ」と父は答えた。

「これから一体どうするの？」

父は溜息をつくと、寝返りを打って背をむけた。——僕には父の困惑がよくわかった。戦争は生活と言うものの持つ、特殊なニュアンスを、その年頃の僕らにもよくわからせてくれた。僕は悪い事を聞いたと思って、口をつぐんだ。僕たちは戦争がどうなるかと言う事さえ、考えた事がなかった。毎日生きるのがせい一杯だった。

——大変だったね、お父さん、家がやけて僕よりも何倍か、辛く悲しいだろうね。——僕は父の背にそう言って慰めてやりたかった。それでも明日また足をひきずって工場へ行く事、明日はここを出て、どこか別の宿を探さなければならない事を思うと、いやでいやで身内が熱くなるのだった。——豊中だか箕面だかにある父の会社の寮へ行くのだろうか？　それとも戦災者を収容している小学校の講堂へ行くのかしら？　鍋釜さえないのに——。焼跡の防空壕をほり起して、友人の誰彼のようにあの中へすむのだろうか。僕は考えながら暗闇で目を見開いていた。その時、僕は何か細い声をきいた。ふと耳をすますと、蚊の鳴く声だった。僕はその甲高い、細い声をきくと身体がむず痒くなって目がさめてしまうのだった。闇の中でじっとしていると、遠くの潮騒や松風の音がかすかに聞えて来る。——そして、今度こそ、僕ははっきりとその声をきいた。

「父さん……」と僕は囁いた。「誰か泣いてるよ」

父は既に寝息をたてていた。しかしその細い、赤ン坊のようなすすり泣きは、しんと静まり返った邸内のどこかから、遠く、近く、婀々と絶えいるように聞えてくるのだった。

翌日、帰ったらもう一度そのお邸で落ちあう事にして、僕は工場へ、父は会社へ行った。その日、工場で僕は家が焼けた事をみんなに話した。みんな別に同情したような顔もしなかった。

その日、邸へ帰ると、父は先に帰っていて、お咲さんと話しこんでいた。

「弱ったよ」と父は僕の顔を見て言った。「今日突然うちの工場の疎開の指揮をする事になったんだ。——責任者が空襲で死によって……。一か月半ほど疎開先へ出張させられるんだ」

お前はどうする？　と父の目は言っていた。僕はお咲さんと父の顔を等分に見た。お咲さんは笑みを浮かべながら、膝でにじりよって来た。

「それで奥様におねがいしてね。お咲が坊ちゃんの御面倒を見させていただく事にしようと思うんですけど」

「お前だけなら、とこちらではおっしゃるんだ」と父は言った。

僕は黙っていた。父に行ってしまわれるとなると、今までどんなに自分が心の中で、父を頼りにしていたかわかった。たとえ一か月半でも、心細さに鼻頭が熱くなった。その気配を察してか、父は僕の顔をのぞきこむようにした。

「それとも、学校を休んで母さんたちの所へ行くか？——汽車が大変だけど」

「ここにいる」と僕はぶっきらぼうに言った。

「行儀よくするんだよ。——こちらには御病人がおられるらしいから」そう言うと父は立ち上った。

「今夜、行ってしまうの？」と僕はきいた。

「ああ——今夜たつ。帰ってきたら、住む所を何とかするよ」

そう言うと父はお咲さんに後を頼んで出て行った。僕は阪神電車の駅まで送らず、邸の門の所から、白い道を遠ざかって行く父の後姿を見ていた。痩せて、少し猫背で、防空頭

巾のはいった袋を腰の所にぶらぶらさせたまま歩いて行く父の姿は、何だか妙に悲しく見えた。

会社も無茶だ。戦時中かも知れないが、自宅がやけた翌日に出張させなくてもよさそうなものなのに。だけどこれが戦争なんだ。そのうち敵が本土上陸して来て、もし神風が吹かなければ、僕たちは竹槍で闘って、みんな死ぬんだ。今の中学生から思えば、呆れるほど物を知らなかった僕は、そんな事を考えて、幼い子供のように涙ぐんでいた。父が僕一人をおいて、二号の女事務員のアパートへ泊りに行ったのだなどとは、思いもよらなかった。

僕はお咲さんの部屋には泊らず、例の離れで一人で寝起きした。ひどくかわったのは、食生活だった。とにかく朝と晩には米の飯が食べられる。お咲さんは弁当を持って行けと言ったが、これぱかりは断わった。朝晩に米飯を食べていると言うだけでも、友人に対して後めたかったのである。——動員先の工場での、友人たちとの生活は、日ましに苛烈なものになって行った。空襲はいっそう激しくなり、B29の編隊は午前中一度、午後一度、そして夜中と、一日三回現われる事も珍しくなかった。三日に一度ぐらいは大編隊が現われて神戸、大阪、そして衛星都市を、丹念に焼き払って行った。その合間に艦載機の低空射撃がまじり出した。工場のつけっぱなしになっているラジオから流れる軍歌やニュースの合間をぬって、苛だたしいブザーがひっきりなしに鳴り、「中部軍情報……」という機

械的な声が敵機の侵入を告げる。遠くでサイレンが鳴り、非常待避の半鐘がなり、空がどんどんと鳴り出すと、あちらこちらの高射砲が、散発的に咳きこむような音をたて始める。まもなくおなじみの、ザァッという砂をぶちまけるような音だ。するとパンパンポンポンはじける音が四方で起り、僕らは火の海の中を、煙にむせながら山の方へ逃げなければならない。

——毎日暑い日だった。やたらに暑い上に、空気はいがらっぽく焦げた臭いがし、焼跡の熱気は夜の間も冷える事なくこの暑さを下からあぶりつづけた。いらだった教師や軍人は、僕らをやたらに殴りつけた。腹の中は、熱い湯のような下痢でもって、みぞおちから下半身まで、いつでも一本の焼け火箸をさしこまれているような感じだった。騒音と爆音と怒声、それと暑さの中で、僕たちは自分たちが炎天の蛙の死骸のように、黒くひからびて行くのを感ずるのだった。——だが邸の中はちがっていた。植えこみが外界の騒音も熱気も遮断してしまったように、部屋の中は静かで、いつもひんやりしていた。庭は手入れもうけずに夏草がおいしげってはいたが、泉水の暗く濁った水の底では、尺余りの緋鯉や斑鯉が、ゆっくりと尾を動かしていた。葉を一杯つけた梧桐や、枝ぶりの見事なくろ松には、蝉が来て鳴いた。その声は邸内の物憂い静寂をかえってきわだたせるみたいだった。——まるで山の中みたいだ。と僕は縁先に腰かけながらぼんやりと思うのだった。電車が通ぜずに工場を休んだ日など、僕は枝折戸から庭をまわって、泉水の傍の石に腰をおろし、何時間も水中をのぞきこんだ。

「あの鯉、知っていますか？」

といきなり声をかけられた事もあった。——後にいつもの通りきちんと帯をしめたおばさん——僕は自分の心の中でそうよんでいた——が立っていた。僕は指された白っぽい魚を知らなかった。

「ドイツ鯉よ、鱗がところどころしかないの——一種の奇形ね」

とおばさんは言った。

「でも奇形の方が値打ちのある事もあるのよ」

好奇心などというものを、持つだけの体力もなくなっていた僕だったが——そう言えば、いつか工場の帰路、焼跡の瓦礫の上に坐って、腹をむき出し、片手に抜き身の日本刀を持ってしきりにと見こう見している人物を見た事があった。僕たちは一瞥しただけで通りすぎた。その男が腹を切るつもりだったのか、あのあと本当に切ったのだろうか、と不思議に思ったのは、終戦後五年もたってからである——しかしおばさんと、この邸だけは、時折り不思議に思う事があった。この広い、間数の多い邸の中で、おばさんと、その病人とやらのたった二人だけで住んでいるのだろうか？　男というものはいないのだろうか？それにおばさんは、もんぺなどはいた事もなく、いつもきちんと和服姿だった。外に出ないからいいとは言え、あの意地の悪い防護団や隣保の連中が、何故ほうっておくのだろう？　この家には火たきも、防火砂もなかった。やけ出されて家のない連中が沢山いるのに、これだけ広い家にたった二人で住んでいて、どこからも何も言われないのだろう

か？　金持ちらしいけれど、食糧はどこから手に入れるのか？——この最後の疑問だけは、ちょっと手がかりがあった。ある夜——その夜も停電だったが、裏口から頬かむりをした男が、何かをかついでこっそりはいって来た。僕は離れの窓からその人の姿を見た。その翌日、僕は何日ぶりかで肉にありついた。——しかしこれらの疑問は、漠然と僕の胸に去来しただけで、それを追究するだけの気力はなかった。むしろ時折り、母屋の二階の方から聞える、あの泣き声の方が気がかりなくらいだった。

「病人って、女の子だね」と僕はお咲さんに言った。「とても痛そうに泣いている」

「坊ちゃん、おききになりまして？」とお咲さんは暗い目付きをして呟いた。それからこわいようなきっぱりした態度で言った。

「母屋の方へは、あまりいらっしゃらないようにして下さいね」

「病人って、いくつぐらいの人？」

「存じません」とお咲さんは沈むように顎を落して首をふった。「私もまだ、お目にかかった事がないんです」

それからもうひとつ——この邸の中にはラジオがなかった。そのころはタブロイド判になってしまっていた新聞さえとっていないようであった。ラジオがあってもどうせ停電続きで、電池式でなければきけなかったろうが、僕は戦局についてのニュースを知りたかった。工場ではいろんな噂が流れていた。大抵は新兵器の話とか、敵を一挙にせん滅する新型爆弾やロケットの話だったが、中にはアメリカで暴動が起るとか、戦争がもうじき終る

とかいう妙な噂も流れていた。

西宮大空襲の夜、僕は起き出して行って、東の空の赤黒い火炎と、パチパチとマグネシウムのようにはじける中空の火の玉を見つめた。僕はいつもの習慣でゲートルをまいたまま寝ていたが、その夜ばかりは阪神間も終りかと思って、いつでも逃げられる用意をした。

「こちらにも来ますでしょうか？」ともんぺ姿のお咲さんがきいた。

「近いよ。今やられてるのは東口のへんだ」と僕は言った。「この次の奴が芦屋をねらうかも知れない」

「だんだん近くなりますね」とお咲さんは呟いた。「あれは香櫨園あたりじゃありませんか？」

ふと横に白い物が立った。見ると浴衣姿に茶羽織をはおったおばさんが、胸の所で袂を重ねあわせて、西宮の空を見上げていた。

「逃げませんか？」と僕は言った。「山の手へ行った方が安全ですよ」

「いいえ、大丈夫」とおばさんは静かな声で答えた。

「もう一回来て、それでおしまいです。ここは焼けません」

僕はその声をきくと、何だかうろたえた。おばさんは頭が変なのじゃないかと思ったからだ。だがおばさんの顔は能面の様に静かだった。ふち無し眼鏡の上には、赤い遠い炎がチラチラ映っていた。

「この空襲よりも、もっとひどい事になるわ」とおばさんは呟いた。「とてもひどい……」

「どこが？」と僕はききかえした。

「西の方です」

「神戸ですか？」

「いいえ、もっと西……」

そう言うとおばさんは、突然顔をおおって家の中へはいってしまった——僕は明け方近くなって、離れへ帰った。途中、庭先からふと母屋の方をのぞくと、戸をあけはなした灯のない部屋の真ん中に、白い姿が見えた。おばさんは十畳の部屋の真ん中に、きちんと坐っていた。三キロ西では、空を蔽いつくすほどの黒煙と火炎が立ちこめ、火の起す熱い風が灰燼をまき上げていた。その風の底に、火の手にまかれた人々の阿鼻叫喚が聞えて来るようだった。おばさんは端座したままその遠い叫びに耳をかたむけているみたいだった。——しかし庭をはなれる時そうでない事がわかった。鉤の手に折れた母屋の、向う側の二階から、ぴったりとざされた窓を通して今夜もあのすすり泣きが聞えて来るのだった。

翌日から僕は下痢で工場を休んだ。離れには便所がなかったので、僕は何度も母屋への渡り廊下を往復した。下便所があったが僕は母屋の庭ぞいの長い廊下を突っきって、階段の横手にある客用の便所へ行った。——それは僕の我儘でもあり、この邸の豪勢さに対する反抗でもあった。母方の祖父の家は埼玉の豪家だった。僕は幼い時にそこを訪れて数多くの小作人の下男たちにちやほやされ、その十の蔵まである広い邸囲いや、二百年も経た

古い棰に漠然とした誇りを感じた。今この大きな邸の中にいて、妙に気圧される感じをうけるのが癪にさわったのだ。それに好奇心もあったのは確かだ。これだけ広い邸、廊下の向うがせばまって見えるほどの邸の中に、あれだけの人数というのはどうも納得できない。——便所へ行くのはちょっとした冒険気分だった。黒光りする廊下を僕はお咲さんも拭き掃除が大変だろうなと思いながら、歩いて行った。途中で両側の部屋に耳をそばだててみたが、どの部屋の障子もぴったりととざされて人の気配はどこにもなく、黒ずんだ障子の桟には薄い埃りがたまっていた。曲り角で、不意に何かに出くわしてびっくりすると、そこには古い木彫りの仏像がひっそりと立っていたり、くわっと口を開いて声の無い笑いをたてている、青銅製の伎楽面が壁にかかっていたりした。便所の向いの壁には、古木を使った扁額がかかっていて、はげた胡粉の文字で、鬼神莫二と読めた。——一体どういう意味だか、未だにわからない。

奥便所は男便所の反対側にあり、総畳の四畳半だった。砂摺りの壁に三方に櫺子窓があり、青畳が明るく冴えていた。天井は杉柾目の舟形造り、便器は部屋の中央にあり、黒漆塗りで同じ黒漆塗りの蓋には、金泥で青海波が描かれてある。籐編みの紙置きには水晶製の唐獅子をかたどった紙鎮がおかれ、便器の正面には赤漆塗りで高さ一尺ばかりの猫足の台があり、その上の青磁の水盤には、時に河骨が、時に睡蓮が活けられてあった。丁度東北にあたる隅には、二尺ほどの高さの黒柿の八足があり、銀製の香炉がのっていて、そこからはいつも、馥郁たる香が立ちこめていた。客便所の掃除は、お咲さんの重要な日課の

一つらしかった。僕はお咲さんがちりとり一杯の杉の青葉をもって歩いているのを見た事がある。そして奥便所の便器の蓋をとると、底も知れぬ暗闇の中から、いつもぷんとま新しい杉の葉の香がした。この豪勢な、広い便所の真ん中で、一人坐って、豆腹の下痢をぶちまけるのは、ちょっと痛快な気分だった。しかし僕が一番驚いたのは、客便所の外で二階からおりてくるお咲さんにばったり出会った時だった。何故だか知らないが、お咲さんは腰のぬけるほど驚いて、手にもった洗面器を半分とりおとしかけながら叫んだ。

「まあ、坊ちゃま！——坊ちゃまでしたの！」

彼女はまっさおになり、はあはあ息をはずませていた。

「こんな所へいらっしゃるなんて……」

「来ちゃいけないのかい？」と僕は反抗的に言った。

「そんな事はございませんけど……」

そう言ってお咲さんは、ようやく手にした洗面器を持ちなおした。その中からは、ぷうんと腐ったような臭いがした。僕がのぞきこもうとすると、お咲さんはあわててそれを横に隠した。

「ごらんになっちゃいけません」と彼女は呟いて、足早に立ち去ろうとした。僕はお咲さんがひきずっているものを見て声をかけた。

「繃帯、ひきずってるよ」

お咲さんはふりむいた。その拍子に洗面器の中身がまる見えになった。それは洗面器一

杯の、血と膿に汚れた、ひどい悪臭をはなつ繃帯だった！　お咲さんはすっかり狼狽して、台所の方へ走り去った。

僕は何か異様な感じにつきまとわれ出した。あの女の子の病気は何だろう？　ひょっとすると、——あの業病かも知れない。そう思うと、僕は身うちがむずがゆくなった。あのおばさんの、蚕が上る時のような透き通る肌も、その業病を暗示するみたいだった。僕は我慢できなくなって、その日の午後台所へ行って見た。大きな、暗い台所をこっそりのぞくと、お咲さんは大釜に湯を沸かして繃帯を煮ていた。そして傍には、先刻繃帯のはいっていた、さしわたし六十センチもありそうな大きな洗面器がおいてあり、その中には胸のむかつくような臭いのする、どろどろしたものが、なみなみとはいって、湯気をたてていた。そのげろのような汚ならしいものは、たしかに食物だった。——僕が声をかけると、お咲さんはまたびっくりして、今度は少しきつい目で僕をにらんだ。

「男のお子さんが、台所などのぞくものじゃありません」とお咲さんは言った。

「お咲さん、あの女の子の病気、何なの？」と僕は負けずに言いかえした。「伝染病だったらどうするんだ？」

「坊ちゃま！」とお咲さんは真顔でたしなめて、手をふきふきこちらへやって来た。僕たちは上り框に腰をおろした。

「ねえ、坊ちゃま、人様の内輪の事をいろいろと詮索するのは、よくないですよ」

「でも、もし伝染病だったら？」と僕は言った。「おばさん、病人をかくしてるし、お咲さん以外の人は居付かないじゃないか。きっとそうだよ。伝染病がうつったらどうする？」

「お咲には伝染病はうつりません。うつったって平気でございます」とお咲さんは祈るような声で言った。「お咲には神様がついております。——光明皇后様のお話、御存知ですか？」

「だって、あれは伝説だよ。癩だったら隔離しなきゃいけないんだ」と僕は言いはった。

「でも、坊ちゃま、——これだけは申せます。あの御病人は伝染病じゃございません」

「じゃ、何なの」

「わかりません——。でも、奥様はお気の毒な方です」

「こんな大きな邸に住んで、あんな贅沢して、何が気の毒なもんか！」僕はとうとう叫んだ。それは嫉妬が、例の「聖戦遂行意識」とないあわされた——戦時中誰もが抱いていたあのいまわしい、卑劣で底意地の悪い憤懣の爆発だった。「あの人、非国民だ！　闇をやってる。もんぺもはかない。働きもしない！　憲兵に言ってやるぞ」

「坊ちゃま！」とお咲さんはおろおろした声でたしなめた。

「じゃ大きな声出さない。憲兵にも言わない」僕は卑劣なおどしをかけた。憲兵なぞ、僕らにとってもよりつきも出来ない恐ろしい存在だった。だが僕はお咲さんの無知にやまをはった。

「そのかわり、あの洗面器の中、あれ何だか教えてよ」

お咲さんは青ざめて口をつぐんだ。僕はなおもおどしたり、懇願したりした。——僕は何といういやな少年だったか！　あれだけ上の連中にいためつけられながら、或いはかえっていためつけられていたが故に、ちゃんと権力をかさに着て、その幻影でもっておどしをかけ、我意を通す事を知っていたのだ。お咲さんは動揺し、ついにそれが、いろいろの物をまぜた食物だと言う事を白状した。

「私、ほんとうに何も知らないのです」とお咲さんは言った。「私が行けるのは、お二階の、あの鉤の手の所までです。そこへ一日三度、あの洗面器一ぱいの食物をおいておきますと、一時間ほどで綺麗にからっぽになって、かわりにあの、汚れた繃帯がはいっているのです」

そう語ったお咲さんの顔は、苦痛に歪んでいた。脅迫でもって、お咲さんを裏切らせてしまった事に対し、僕の心は鋭くいたんだ。しかしそのために、僕はかえって意地悪くなった。

「お咲さん、あの子の病気、知ってるんだね」と僕はかまをかけた。

「うすうす存じております——だけど、これだけは坊ちゃまにだって申し上げられません、坊ちゃまにお話しただけで、私、こちらの奥様に申し訳ない事をしたんでございますから」

お咲さんの毅然とした態度に、今度は僕が鼻白む番だった。おとなの反抗に出あえば、生意気な少年の我儘など、あえないものだ。

「よろしゅうございますか、坊ちゃま」いつの間にかきちんと正座したお咲さんは、背をまっすぐにして、正面切って僕を見つめた。僕は少し小さくなった。

「どんな事があっても、お二階をおのぞきになろうなどと言う気を、お起しになってはいけません。もし、そんな事をなさって、将来坊ちゃまが御不幸にでもなられたら……」

お咲さんの訓戒が身にしみてか、僕はしばらくその「秘密」に近づきたいと言う気を起さなかった。だが今度は秘密の方から近づいて来るようだった。——一日二日たったある日、奥の間からピアノの音がきこえてきた。僕はひさしぶりにきく楽器の音にさそわれて、庭から母屋の奥へとまわって行った。ひいているのはおばさんだった。一番奥の一つ手前の十畳に、アプライト型のピアノがおかれ、おばさんは細いきれいな声で歌っていた。その歌の文句は、うろおぼえだが、こんなものだった。

時代のゆうべは　ややに迫りぬ
見ずや地の上を　あまねく覆いし
黒雲はついに　雨と降りしきて
いなづまひらめき　いかずち轟く
たのしめる人　おののき恐れよ
たかぶれる者よ　かしこみ平伏せ……

おばさんは僕の姿を見ると、にっこり笑って、
「良夫さん？」と声をかけた。「こちらへいらっしゃいな」僕はこの前の事にちょっと後めたさを感じたが、それでもおばさんと二人きりになる事に、くすぐったい好奇心が湧いた。十畳の間にあがると、おばさんは魔法瓶に入れた冷たい紅茶をコップについでくれた。
「毎日大変ね」とおばさんは畳みかけの着物をわきにどけながら言った。「私は毎日退屈してるの。——申し訳ないみたいだけど」僕はお咲さんがあの事を喋ったのかな、と思ってびくびくしていた。——目をそらして畳みかけの着物に目をやると、それは赤い絣子模様の、十三、四の女の子の着るような、着物だった。
「あなたのような若い方たちが——本当にお気の毒だわ」
「気の毒なんて事じゃありません」と僕は気負いこんで言った。「僕らの義務です。上級生なんか、予科練へ行って、もう特攻で死んだ人だっているんです。僕らだって今に玉砕するんです」
おばさんはその時謎めいた微笑を浮かべた。だがその微笑の暗さと寂しさとに、僕は背筋が寒くなるような気がした。
「そんな事にはならないのよ。良夫さん」とおばさんは言った。「決してそんな事にはならないの。もうじき何も彼も終ります」
「そんな事、何故わかるんです」僕はむきになって言った。「敵は沖縄を占領しています。機動部隊は小笠原からもフィリッピンからも来ています。——きっと上陸して来ますよ。そしたら、ここらへんも戦場になりますよ」そして僕は少し息をつぎ、おばさんにあたえる効果について、意地悪くおしはかって言った。
「そうなったら、この家だって焼けちまうにきまってます」
突然おばさんはきれいな声をたてて短く笑った。
「この家は焼けないわ」とおばさんは、手の甲でそっと口もとを押えて言った。「焼けない事になっているの。——空襲の度に、私が逃げ出さないので、不思議に思っているでしょ。でもあたりが全部焼野原になっても、この家だけは大丈夫なのよ。守り神がいるんですもの」
「でも、神戸の湊川神社だって焼けてましたよ」と僕は言った。
「神社だって、空襲なら焼けるわ。でも、この一画は空襲されないんです。——それはこの邸があるからです」
その時、恐ろしい考えが僕の頭に閃いて全身がカッと熱くなったのに、心臓は氷で突き刺されたように、冷たくちぢみ上がった。その考えは全く辻褄があうように思えた。——何故この邸が空襲されないのか？　何故おばさんは、何もせずに、こんな邸に一人で生活できるのか？　二階に誰をかくしているのか？　僕は硬くなりながら、思い切って言った。
「おばさん——おばさんはスパイじゃないの？」
だが今度はおばさんは笑わなかった。消え入りそうなわびしい影が、その顔をかげらす

と、美しい横顔を見せてスラリと立ち上った。柱によると、青く灼けただれた空を見上げながら、ポツリと言った。

「そんなのだったら、まだいいけど……」

とけたガラスの様な夏空に、空襲警報のサイレンがまた断続してなりわたり始めた。積乱雲をゆるがすようなそのひびきと共に、それを真似るような遠吠えが、邸のどこからかきこえたように思った。——だがそれは空耳らしかった。どこかで牛か犬が鳴いたのかも知れない、と僕は思った。

「この家には守り神がいるのです。それはこの家の劫なの。——良夫さん、劫って知ってる？」

おばさんは柱にもたれたまま、うつろな声で語り出した。

「おばさんの家はね、田舎のとっても古い家なの。古くって大きいのよ。九州の山の中にあって、大きな、大きなお城みたいなお邸なんです。山も畑もうんとあって、小作人も沢山いました。だけど、その大変な財産には、いろんな人たち、いろんなお百姓たちの怨みがこもっているんです。その怨みが、何代も何代もつみ重なったもの——それが劫なのよ」

僕はいつかきちんと坐って唾をのんでいた。おばさんは静かに経文を誦すように語り続けた。

「おばさんの御先祖はね——もと切支丹だったんです。だけどしまいにはほかの切支丹たちの財産をとり上げるために、次から次へと役所に密告しました。お役人と結託して、切支丹でない人まで、切支丹にしたてて牢屋へ入れては、その人たちの田畑や邸をとり上げました。——そう言った人たちの怨みがこもって、私の家では、女は代々石女になったんです。たまに生まれても、赤ちゃんは三日とたたないうちに死んでしまうの」

でもおばさんは——と僕は言いかけて、口をつぐんだ。

「おばさんの夫のお家も、やっぱり東北の方の旧家なの。代々長者と言われる家なんだけど、どの代の人も、とてもひどく小作人や百姓たちをいじめたんですって。年貢をおさめない村があると、その村の女や子供たちを、狼の出る山へ追いこんで、柴や薪をとらせたり、村の主だった者を逆さに吊して、飢えた犬をけしかけたりした事もあると言ってたわ。でも殿様の遠い血筋をひいてるし、お役人とも結んでいたので、やっぱりどうにも出来なかったんです。——そのかわり、その家でも代々長男は、跡をとってまもなく、気が変になったり、おかしな死に方をするんです。

「そのおじさん——おばさんの夫の家にも、やっぱり守り神がいるの。気が変になった当主にだけ、その守り神が見えるのよ。だけど、守り神なのに、その姿は獣の格好をしていて、とても恐ろしいんですって。その守り神の姿を見ると気がふれたようになって、お百姓を殺したり、無茶をしたりするようになるんです。私は夫の国もとの邸へ行って、夫の父が座敷牢へ入れられてるのを見たわ。その齢をとった人は血走った、真赤な目をして、口から涎をたらしながら、四つん這いになって、けものが来る、べこが来るって、叫んで

いたわ」

「だけどそれがやっぱり守り神なの。一度御先祖の一人が、あまりひどい事をしたので、とうとう怨んだお百姓たちにおそわれて、もうちょっとで殺されそうになったの。するとその守り神が、黒い大きな獣の形をして、百姓たちをけちらして、その御先祖を救ったんですって。それから近郷が全部やけた火事の時も、その守り神が、夫の家邸だけを焼かないように守ってくれたという事なの。——だけどその時は、守り神が主人にむかって言ったんですって。俺はお前たちの一族に苛めぬかれて死んだ百姓たちの一人だ。怨みがつもってお前の家にとりついたが、そのかわり、お前の家や財産は守ってやるって……」

僕は息をつめて、おばさんの話をきいていた。晴れわたった空に待避信号の半鐘が鋭くひびき始め、遠い雲の彼方から、地鳴りの様な爆音が聞え始めた。

「私の夫は、早くから家を出たので、気もちがわずにすみましたし、まだ外地で生きています。——そのかわり、夫は支那や外地でやっぱり沢山の人を殺したらしいわ。そういう夫と結婚したので、この家にも守り神が来たんです。その守り神が、この邸を守ってくれるの。——あの子が、その守り神なのよ。……守り神っていうのは、この家につもりつもった劫なの。その劫がこの家をいろんな災難から守ってくれるのよ。考えてみたら妙な話ね。私たち、幾代にもわたった、幾百万もの人たちの怨みでもって守られているの」

その時、最初の爆弾が、どこか遠い地軸をゆり動かした。おばさんは、つと柱を離れると、再びピアノに向って、静かに弾き始めた。その歌は、何故だか僕もよく知っていた、

マーラーの「死せる我が子にささげる悲歌」だった。——外の激しい空襲も忘れて、僕はペダルをふむおばさんの美しい白足袋の爪先に見とれていた。おばさんがその歌を、誰かに向って聞かせるために歌っているのだという事をさとったのは、暫く後だった。庭先を見上げると、鉤の手になった斜め向いの二階の窓が、——いつもぴたりと閉ざされている窓障子が、わずかに開き、その向うに黒い影がじっと聞き耳をたてているのが見えたのだ。

戦争は、その頃から何だか異様な様相をおびて来た。戦争自体が不吉な旋じ風となって、火と灰燼をまき上げながら、夜となく昼となく、ただ一面にびょうびょうと吹きすさんでいるみたいだった。その激しい風音の向うから、とらえがたいかすかな叫びが聞えて来るような気がしたが、それが何であるかは、わかっているようで、言いあらわせなかった。その声の一つは、こう言った。伊勢の方にあるならずの梅という木が、今年は実を結んだ。だから戦争はもうじき終るのだ。日露戦争の時もそうだった、と。それからこうも言った。どこどこの神社の榎の大木が、風もないのにまっ二つに折れた。有名なお告げ婆さんが、戦争は敵味方どちらも勝ち負けなしに終る、と言った。あるいは、山陰かどこかで、二つの赤ン坊が突然口をきき始め、日本は負けると言った、とか。

僕らはそんな話を信じはしなかった。

しかし同時にその風の叫びの様な叫びの底にあるものは、僕らの胸にひびいて来た。大本営が信州に出来る、天皇はもうそこへうつられたか、近々うつられるはずだ、という事

を僕らに教えたのは誰だったか。銀行は既に敗戦を予期して、財産を逃避させ始めていると教えてくれたのは、たしか銀行家の息子だった。僕らはそいつの話を固唾をのんできき、きき終ると非国民だと言って、よってたかって殴った。それから眉唾ものの秘密情報好きの工員が、例のもっともらしいひそひそ声で、日本が用意している恐るべき新兵器の事を教えてくれた。それは大変な破壊力を持っていて、敵の機動部隊や上陸部隊、また飛行機がどれだけやって来ようとも、そんなものは一挙に破壊させる事が出来る。大本営はそれを最後の決戦兵器としてかくしているのだが、その破壊力があまりに大きく、味方の方にまで恐るべき損害がおよぶので、最後の最後まで使用するのをためらうと同時にそれを使用する機会をはかっているのだ、という事だった。

一方本土決戦についての話も、華が咲いた。九州に最初に上陸するか、九十九里浜かで、僕らはいつも議論した。——その議論を、横できいていた、朝鮮人の徴用工が、あとで僕をわきに呼んで、まじめな顔できいた。

「もし、アメリカが上陸して来たら、あんたら、どうするか？」

「勿論竹槍もって特攻さ」と僕は言下に答えた。それからその馬面の四十男にきき返した。

「朝鮮人はどうする？」

彼は、ちょっと考えてから、うなずくように言った。

「朝鮮人も同じだ」

時折りB29が、単機で侵入して来て小馬鹿にしたように、かなり低空をとびながら、ビラをまいて行った。僕らの仲間でそのビラを拾ったものはなかったが、他校の生徒で、それを拾ったために憲兵にひっぱられたという話をきいた。そのビラにはポツダム宣言とかいう事が書いてあるという話だったが、誰もその名に注意を払わなかった。

「坊ちゃま、本当にこの戦争はどうなるんでしょうね？」とお咲さんも時折り溜息まじりに言った。僕だけでなく、女中部屋に飾ってある戦死した息子にも問いかけていた。——海軍下士官の軍服を着た、子供子供した青年だった。

そんなある日、おばさんが僕を廊下でよびとめた。

「良夫さん、あなたの御家族、どちらに疎開なさったかしら？」

「父の郷里です」と僕は言った。「広島です」

「広島？」と言っておばさんは眉をひそめた。「広島市内？」

「いいえ郡部の、山奥の方です」

「そう、それじゃよかったわ」とおばさんはほっとしたように言った。——いつかの空襲の夜に、おばさんの言った、もっとひどい事、八月六日の原爆投下の起ったのは、その翌日の事である。

その六日の夜、僕は便所に行く道すがら、おばさんがいつも開けていない部屋にはいって、仏壇に灯明をあげ、数珠を手に合掌しているのを見かけた。

「夫が死にました」とおばさんは、いつもの静かな声で言った。

「満洲で——」

ソ連の対日参戦は翌日、八月の七日だった。そしてその日はまた、お咲さんがどうしたはずみか廊下にとり落して行った、汚れたガーゼを見つけ、それに血と膿と一緒に、太い、茶色の、獣の毛のような毛がいっぱいついているのを発見した日としておぼえている。

そして十三日の夜がやって来た。その夜、珍しくおばさんの方から、茶の間に僕とお咲さんを呼んだ。一本の蠟燭の火のゆらめく中で、おばさんは何故だか目を泣きはらしていた。

「お咲さん、良夫さん……」とおばさんは、少しくぐもった声で言った。「戦争は終ったのよ、日本は負けました」

僕は何かがぐっとこみ上げて来て、おばさんをにらみつけた。

「お咲さん、長々御苦労さまでした。まだお邸にいてもらって結構ですけど、もうあの子の世話はいりません、良夫さんもここにいていいのよ、だけどもうじきお父さんがおむかえにいらっしゃるわ」

そう言うと、おばさんは暗い方をむいて呟いた。

「あの子の生命も、日本が負けたら長くないわ……」

「どうして負けたなんて事がわかるんです」と僕は叫んだ。「そんな事ウソだ！　政府は何も言ってやしないじゃありませんか。軍は一億玉砕って言ってるじゃありませんか！　日本は負けやしない。負けたなんて言う奴は非国民だ！　国賊だ！」

「あの子が言ったのです——明日は、もう空襲がありません」とおばさんは向うをむいたまま、静かに言った。「負けたからです。——でもその事を陛下がお告げになるのは明後日になります」

僕は部屋をとび出した。おばさんの畜生！　日本が負けるもんか、負けてたまるか！と心に叫びながら。——だが、感情に激した僕の足を、いきなり金縛りにしたのは、あの暗い二階から聞えてくる泣き声だった。それは今夜はひときわ高く、まるで身をよじってもだえるように、告別の悲哀と苦痛に堪えかねるように、長く長く尾を引くのだった。

そして、誰でも知っているように、すべてはおばさんの言った通りになった。僕らは当日、玉音をきいても何のショックも感じなかった。ただ初めてきくその人の声が、妙に甲高く、ききとりにくいのが気になっただけだった。事態をのみこむのに随分かかり、放送をきいた後でも、みんなはいつもの通り作業にかかった。だが砂地に水がしみこむように、日本が負けたと言う声がみんなの中にしみとおって行き、工場は次第次第に鳴りをひそめて行った。——午後の三時には一切の物音が絶え、みんな薄馬鹿のように天を仰ぎ、あちこちに固まって腰をおろし、手持ち無沙汰に欠伸したり、頭をごしごしかいたりした。僕もまた、ボケたようになって邸へ帰って来た。だが、離れに坐ると、突然わけのわからない憤懣がおこって来て、教練教科書をひきさき、帽子をなげつけた。何も彼もぶちこわしたかった。誰かをつかまえて、この何とも形容のしがたいやるせなさをぶちまけたかった。僕は離れをとび出し、台所へ行ってお咲さんを呼んだ。——返事はなかった。それから、

あの癪にさわる予言をしたおばさんをつかまえようと、長い廊下をどすどすと走りまわった。いつも閉ざされている障子襖を、音をたてて開けるという乱暴までした。だがおばさんの姿もなかった。無人の邸は森閑と静まりかえっていた。——いや完全に無人ではなかった。「あの子」がいた。その日もまた、あの二階の部屋から、細い、悲しげな泣き声がもれていたのだ。咄嗟の間に、僕はおばさんが守り神と言った、あの子の顔を見てやろうと思った。既に僕の中には、その後何年も続いた冒瀆の衝動の兆が芽生えていたのだ。あんな予言をしたから、日本が負けたんだ、という考えが。

僕は二階への階段をかけ上った。おばさんがあれほど秘密にしていた、あの娘の、業病にくずれた顔を見てやる、と僕は思った。ためらい続けた好奇心が、復讐めかした冒瀆の衝動によって爆発した。僕は鉤の手の廊下を走り、二階の一番端、今も泣き声のもれる部屋の障子を一気にあけたのだ。

その時、僕の見たもの、それは、——赤い京鹿子の振袖を着て、綸子の座蒲団に坐り、眼をまっかになきはらしている——牛だった！　体付きは十三、四の女の子、そしてその顔だけが牛だった。額からは二本の角がはえ、鼻がとび出し、顔には茶色の剛毛が生え、目は草食獣のやさしい悲しみをたたえ——、そしてその口からもれるものは、人間の女の子の、悲しい、身も消えいらんばかりの泣き声だった。片方の角の根もとには、血のにじんだ繃帯がまかれ、顔を蔽ったその手にも、五本の指をのぞいて、血と膿のにじんだ繃帯が、二の腕深くまかれてあった。ぷん、と血膿の臭いがした。そして家畜の臭いも。——

僕は息をのみ、目をむいたまま、その怪物を前にして立ちすくんでいた。

「見たのね」その時後で冷たい声がした。障子をピンと後手にしめて、おばさんが立っていた。能面のような顔の影に、かすかに憂悶の表情をたたえながら。

「とうとう見てしまったのね。その子は——くだんなのです」

それがくだんだったのだ。くだんは件と書く。人牛を一つにしてくだんと読ませるのだ。くだんは時々生まれる事がある。が大抵親たちがかくしてしまう。しかしくだんには、予言の能力があるのだった——おばさんはその事を話してくれた。石女と思われたおばさんが、たった一人孕った女の子が、この件だったのだ、と。生まれた時から角があり、それが段々のびるとともに、顔が、牛そっくりになって来た。角の生えた人間が生まれる事があるという事は、ちゃんとした医学の文献にも出ている。皮膚の角質が変形したり、骨が変形したりするのだそうだ。昔はこんな人間を、鬼として恐れたのだろう、と。——だがくだんはちがう。くだんは根っからの怪物で、超自然の力があるのだ。これに該当するのはギリシャ神話のクレタ島のミノタウルスぐらいではあるまいか。くだんは歴史上の大凶事が始まる前兆として生まれ、凶事が終ると死ぬと言う。そしてその間、異変についての一切を予言するというのだ。この事は、おばさんから黙っていてくれとたのまれた。おばさんの家で、件を見たという事も、この話一切を黙っていてくれ、と強く念を押された。でないと、僕の一家にも不幸が起るというのだ。だから僕はずっと黙って来た。お咲さん

にさえ、一言も喋らず、口を閉ざして来たのだ。だがあれから二十二年たった今、僕はあえてこの話を公けにする。そうする事によって、僕はこれを読んだ人々から件についての知識を、少しでもいいから、得たいのだ。誰か件についてくわしい事を知らないだろうか？　あのドロドロした食物は一体何だか知っている人はいないだろうか？　件を見たものは件をうむようになると言うのは本当だろうか？——僕は切羽つまってこの話を発表する。今度初めて生まれた僕の長女に、角があったのだ！——これもやはり、大異変の前兆だろうか？

秘密（タプ）

1

あたたかい日曜日だった。

おだやかな麦藁色の秋の陽が縁側いっぱいにさしこみ、その陽をぬくぬくと浴びた飼い猫は、大きな伸びをしたり、ひっくりかえって板の間に背をこすりつけたりして、ひとりできげんよく、のどをごろごろ鳴らしている。

おそい朝食をすましたあと、夫は縁側のデッキ・チェアにねそべり、煙草をふかしながら、新聞の囲碁欄に眼を通していた。

妻は居間から応接間へ掃除機をかけており、同居している夫の妹は、鼻歌をうたいながら、台所で朝食のあとかたづけをしている。

応接間のカーペットに掃除機をかけおわった妻は、掃除機の吸いこみ口をさしかえ、椅子や飾り棚の上のほこりをとりはじめた。——飾り棚の上や、ガラスケースの中には、古い皿や、花瓶や、夫が仕事でアフリカ、南太平洋へ行って来た時に買いあつめて来た、いろんながらくたがおいてある。真鍮製の壺、原住民のつくった稚拙な楽器、木彫り、石彫りの人形や動物、不思議な彩色と筋彫りのある瓢箪製の容器……そういったものにまじって、妻が日ごろから気味悪がっている、まっ黒なかたい木に彫られた、ごつごつした神像があった。高さ三十センチほどの、大きな瞳のない眼をむき、べろりと舌を吐き出したその神像を見る度に、妻は動悸の早まるような気がするのだった。

夫の持ちかえってきたさまざまなグロテスクな未開種族の神像、人形の中で、それは最初に見た時から、とりわけ不気味な迫力を持っているように見えた。——あらっぽい、稚拙な彫線にかかわらず、見るものを、何か暗い、深い得体の知れない所へひきずりこむような雰囲気がただよっている。どこで買って来たのか、夫が包みをといた時から、ふつうの土産物店で売っているものではないような、異様な感じがつきまとっていた。下の方に、泥がついて乾燥している。枯れた苔のようなものもついており、くぼみには、小さな蜘蛛の巣ものこっていた。何度か外国旅行をした事もある妻は、こういったこびりついている土や苔が、本当は検疫でうるさく言われる事を知っていた。そして、夫がまたいつもの手で、スーツケースにいれて、税関の「申告なし」の方を通りぬけて来たのだろう、と思った。

包みをあけてから、夫は泥や枯葉や蜘蛛の巣をきれいにふきとって、その神像を飾り棚の上に、ほかの像とならべておいた。

ならべてしまえば、あとは一向に無関心な夫をよく知っている妻は、その気味の悪い感じのする神像を、一番すみの目立たない所に押しやり、前の方に自分の好きな、アフリカの木彫り類をおいた。——しかし、夫は何も言わなかった。

飾り棚の上のほこりを吸いとり、あと、乾いた布で、棚の上や、彫像類をざっとからぶきしているうち、いつも一番隅にあるその神像だけ、さわるのもいやで、ほこりを拭きとらず、ほったらかしにしておいた事が、ふと気の毒なような気がした。——象の彫り物を

からぶきしながら、彼女はちょっと横眼ですみの像を見た。

その時、台所をすませた夫の妹が歌を歌いながら応接間にはいって来た。

「洗い物、すんだわよ」と妹は、エプロンで手をふきながらいった。「お掃除の方、手つだいましょうか？」

「そうね……」妻はちょっと考えるような調子でいった。

「あと一つだけれど、その木彫り、拭いてくれる？——あたし、紅茶かコーヒー入れてくるわ」

「いいわよ」妹は気軽にいって、義姉から布をうけとった。「わあ、なによ、この人形。ほこりだらけじゃない？」

「うん……」嫂はあいまいな笑いをうかべた。

「あんまり好きじゃないものだから、今まで、冷や飯くわしてやったの……」

「かわいそうに……」

妹は神像を縁先にもち出して、布でほこりをはたいた。——もう午ちかい日ざしの中で、小さなほこりが、銀色に光ってとびちり、おどった。

「あなた、お紅茶がいい？　コーヒーがいい？」

妻は、妹のやっている事を横眼で見ながら夫にきいた。

「うう……」夫は、囲碁欄に指をおきながら答えた。

「うう、じゃわからないわ。どっち？」

「コーヒー……」

と夫はやっといった。

「やだわ。このごみ、こびりついちゃってとれない……」

妹は、直射日光に神像をすかし、ぷっ、と神像の頭部に唾を吐きかけ、ごしごしこすった。

妻は何となく胸をつかれたような思いで妹のしぐさを見つめた。

嫂に見つめられている事に気づいた妹は、くるくるした眼で、義理の姉の方を見て、肩をすくめ、ぺろりと舌を出した。

妻は苦笑したが、何だかその時、舌を出した妹の顔が、グロテスクな神像の顔と、ふとうつりあうような気がした。

嫂がコーヒーを入れに台所へ去ると、妹は、神像を飾り棚の正面にかざった。——みがかれた神像は、日ざしの照りかえしをうけて、急にいきかえったような、なまなましさをおび、その瞳のない眼で、あたりをにらみまわした。

2

コーヒーをのんでしまうと、三人はぼんやりして庭をながめた。——夫はまた新聞をとりあげ、囲碁欄に眼をおとす。

「あなた、今日はゴルフはいらっしゃらないの?」

「うう……」と夫はまた口の中で答えた。

「一日家にいらっしゃるのだったら、芝生を刈ってくださらない?」

「芝生?」夫は庭を見た。「そんなにのびてない。それにもう秋だ。もうじき……」

「もうじき枯れるから刈って欲しいのよ。——のびたまま枯れたら、みっともないでしょう?」

夫はだまって、新聞を投げ出すと、立ち上って大きく伸びをした。

妹は居間の方で、テレビのショー番組を見ている。

肩を二、三度、こりをほぐすように上げ下げすると、夫は縁先からサンダルをつっかけて庭へおりて行き、裏の方へまわって行った。——物置きの方で音がし、間もなくごろごろと芝刈り機を押してあらわれた。妻は奥からいくつも箱を縁側に持ち出し、中のものの整理をはじめた。

麦藁色の太陽は、新築間もない家にも、さほどひろくない庭にもさんさんと降りそそぎ、どこかで鋭く百舌鳥の鳴く声がした。——ガラガラと芝刈り機を押して、夫は庭の端から端へと何度も往復し、妻は時々整理の手をやすめて、芝刈り機の赤く塗られた鋳物の車輪の間から、鋼鉄の刃がにぶくきらめくのを見、その刃の回転につれて、こまかい、しめった緑色の葉が宙に舞い上るのを見た。グレイフラノのズボンに、カッターシャツの上から、薄茶色のカーディガンを羽織った夫の顔は汗ばんでおり、時折り押す手を休めて、澄んでひいやりした秋の空気を吸いこんだり、庭先の植えこみをながめたりした。

植えこみのむこうの垣根の上から、隣家の主婦が、愛嬌のある顔をのぞかせ、夫にむかって一言二言いった。夫はちょっと手を休めて何か答え、二人はおかしそうに空にむかって笑い、夫はまた芝刈り機を押しつづけた。

そんな光景を、顔の横に感じながら、妻は整理をつづけた。——いつの間にか、妹もテレビを消して義姉の傍に来てすわり、二人はとりとめないおしゃべりをしながら、箱の中を一つまた一つと整理していった。その横で、猫があきもせず背中を廊下にこすりつけ、ごろり、ごろりと寝がえりをうっていた。気がつくと、夫は芝刈りをすっかりすませてしまい、きりきざまれた青い葉をいっぱいくっつけた芝刈り機にもたれて、汗をふいた。

「あなた、ごくろうさま」と妻は声をかけた。「こちらへはいって、一服なさったら?——冷たいものでもあげましょうか?」

「ああ……」と夫は、汗をぬぐい、青空にむかって大きく胸を開いて深呼吸しながら、気持ちよさそうに言った。

「……が食べたいな」

「いやな兄さん」妹はくすくす笑った。

「さっき朝御飯食べたのに、芝刈りぐらいでもうおなかがすいたの?」

「お午飯に鰻でもとりましょうか?」と妻はきいた。「何が食べたいの?」

「お前が食べたい……」

と夫は、太陽をあおぎながら、まぶしそうに眼を細めていった。

「え?」と妻はききかえした。「何ですって?」

「お前が食べたいんだよ」と夫は細めた眼を妻の方にむけていった。「お前の頭を食いたい……」

「まあ、兄さんったら……」

冗談だと思って、ぷっと吹き出しかけた妹は、突然胸の底が凍るような感じにおそわれた。

嫂の顔が、紙のようにまっ白になり、眼の色が、ひきずりこまれるように暗く、沈んでいるのに気がついたからだった。

妹は兄の顔を見た。——兄の顔は笑っていなかった。その眼は光沢を失ってざらざらした感じで、何の表情もなく、嫂にむけられており、その唇は、両端が吊り上り、一種猥らな感じをたたえて、ピンクの舌先が、右から左へ、また逆へと、ゆっくりなめずっていた。

「本当に……」妻は、かすれた、気の滅入るような低い声で夫にむかっていった。「私を食べたいの?」

「ああ……」夫は、大きく見開いた眼を、ぴったり妻にむけて、しわがれた、気味の悪い声でいった。「本当だとも。本当にお前を食べたいよ……」

妹は、兄の眼が異様にいやらしい輝きをおびはじめ、その肩があえぐようにゆっくり上下しはじめるのを見た。——はっ……はっ……という獣のような息づかいが、そのひんまがって、なかば開かれた唇からもれていた。

「そうなの……」土気色の顔色になった妻は、がっくり肩をおとし、ふちにくろずんだ隈のできた眼を力なく伏せ、蚊のなくような声でいった。「じゃ、いいわ……」

それをきくなり、夫は芝刈り機をほうり出し、物置きへとんで行ってシャベルをとってくると、今きれいに刈り上げたばかりの芝生につきたて、狂ったようなスピードで穴を掘りはじめた。

妻の方は、死人のように青ざめた顔で、力なくうなだれたまま、箱をかたづけはじめた。

「いったい二人ともどうしたのよ?」

妹は上ずった声で、悲鳴をあげるように叫んだ。

「気でも狂ったの?——義姉さん、兄さんどうかしちゃったみたいよ。早く、お医者か警察をよばなくちゃ……」

嫂は、顔をあげて義妹を見ると、さびしげな微笑をうかべて、ゆっくり首をふった。

「いったいどういう事なの?」

妹は金切り声をたてた。「義姉さん——あなた本当に……本当に、兄さんに食べられるつもり?」

「だって、あの人が私を食べたい、というんだからしようがないでしょう……」妻は、低い、あきらめたような声でいった。「あの人が食べたいなら、食べさせてあげるしかないわ。だって——私、あの人を愛しているんですもの……」

「そんな……」妹は、のどがつまって、かすれたような声でいった。——唇がからからに乾き、全身は恐怖のためにこまかくふるえ出した。「いくら夫婦だって……そんな……」

「おい!」汗をかいて、土を掘りかえしながら、兄は妹に声をかけた。「ちょっと行って、バナナの葉を四枚ほどもらってこい」

「バナナの葉?」妹はおどろいてきいた。「そんなもの、どこにあるのよ」

「公園の植物園にあるだろう。自転車で行ってもらってこい」

「バナナの葉なんて……いったい何にするの?」

「うるさい!」兄は、もうずいぶん大きくなった穴の中から、シャベルで土をどさっとほうり出しながらどなった。「料理につかうんだ。さあ、早く行かないと、お前も食ってしまうぞ!」

妹は、しばらくショックと恐怖のため、まっさおになってぶるぶるふるえていたが、やがて顔をおおってワッと泣き出すと、応接間からとび出して行った。

間もなく、玄関の方で、自転車をひき出す音がした。

3

妹が出て行ったあとも、夫はなにかに憑かれたように、一心不乱に穴をほりつづけた。

——どさッ!……どさッ!……としめった黒い土が芝生の上に、正確な間隔で投げ出されるのを、妻は縁側に肩をおとしてすわり、暗い眼つきでじっと見つめていた。

「おや、まあ……」

さっきのぞいた隣家の主婦が、また垣根ごしに顔をのぞかせて、おどろいたように声をあげた。

「せっかくきれいに手入れなさったのに、掘りかえしてしまうんですか?——ごみでもお埋めになるの?」

「いいや……」夫は泥まみれの顔で、歯をむき出して笑った。「これは〝地炉〟といいましてね。——ポリネシア語で〝ウム〟というんです。この中で、いろんな食物を蒸し焼きにするんですよ」

「ああ……」隣家の主婦は、あいまいな顔でうなずいた。

「つまり……バーベキューの……」

「バーベキューじゃありません。蒸し焼きです……」夫は陽気な声で言って、縁側でしょんぼりうなだれてすわっている妻の方を、泥のついたシャベルでさした。「これから女房を蒸し焼きにして食ってやろうと思うんです。——一口、お裾わけしましょうか?」

「まあ……」隣家の主婦は、ぽかんと口をあけて夫と妻を見くらべたが、やがてあわてたように首をふった。

「いえ……いいえ、私はけっこうですわ……」

主婦がおそろしそうな顔をして、家の中にひっこんでしまうと、夫は歯をむき出してニヤリと笑い、シャベルを大きくふりまわして、穴の底に、ぐさっとつきさした。

妹は泣きながら、公園の中を自転車で走って行った。——日曜で、公園には家族連れやアベックなど、人出が多かったが、人々は、眼を泣きはらし、涙を流し、泣きじゃくりながら自転車を走らせて行く若い娘を見て、びっくりしたようにふりかえった。

植物園の入口で自転車をとめると、妹はハンカチで顔をおおって、おんおん泣きながら、園丁のいる事務所にはいって行った。

「どうした?」園丁たちはびっくりして、椅子から立ち上った。「なにがあったんだね」

「あの……」妹ははげしくしゃくり上げながらいった。

「バナナの葉を……四枚ほどほしいんですけど……」

「バナナの葉だって?」園丁たちは異口同音にいった。

「枯れたやつでいいのかい?」

「青いので……なけりゃだめだって言っています……」

「秋だから、青い葉をあまりとるわけには行かないが……」園丁の一人はいった。

「いったい何にするんだ?」

「兄が……嫂を料理するのにつかうんです……」妹は一層はげしく泣きながらいった。

「兄は……これから嫂を殺して……食べるんです……」

園丁たちは顔を見あわせた。——中には頭がおかしい、というそぶりをするものもいた。

「よしよし……」と一人が、事務所のドアをあけながらいった。「何枚いるんだね? 四枚?」

「そうです……」妹はハンカチで眼をおさえ、わんわん泣きながらやっといった。

青い、大きなバナナの葉を四枚かついで、今度は手ばなしで泣きながら、妹が自転車を走らせて行くと、公園にいた人たちは、一層おどろいたような顔であとを見送った。

穴はもう長さ二メートル、幅七十センチ、深さ五十センチ以上になっていた。——夫は穴の中からはい出すと、シャベルをほうり出し、手をはらって満足そうに汗をぬぐった。

「掘れたわね……」妻は縁側にすわって、力のない声でいった。「あなた……どうしても、私を食べるつもり！」

夫は答えずに、いそがしそうに物置きに行った。——物置きから、大きな斧（おの）をとり出すと、彼は、物置きをたたきこわしはじめた。

妻は縁側にきちんと膝（ひざ）をそろえてすわったまま、顔を伏せ、じっとその音をきいていた。——膝の上にかさねた手の甲の上に、ぽとりと一滴、涙がおちた。

夫はたたきこわした物置きの破片を、腕一ぱいにかかえて来て、庭の隅の大きな焼却炉のそばにつみあげた。

「私たち……」妻は涙をたたえた眼でせわしなげに立ちはたらく夫を見ながらつぶやいた。「……とても……愛しあっていたでしょう？」

夫はふと手をとめて、うつろな眼つきで宙を見つめた。——おれはいったい、何をやっているんだろう……といいたげな、混乱した表情が、その顔にうかんだ。

「……そう……愛しあっていた……」と夫はしわがれた声でつぶやいた。「お前だって……ぼくを愛しているから……食べさせてくれるんだろう？」

「どうしても……」妻は指先でそっと眼をおさえていった。「食べるつもりなのね？」

夫は答えずに、もう一山の薪をはこんできて焼却炉の傍に投げ出すと、炉の口をあけ、新聞紙をまるめてつっこんで火をつけた。

「あなたは……とっても男らしかったわ……」

妻はうつむいたまま、うすい肩をふるわせていった。

「私の父が困っていた時……あなたはあんなに親身になって助けてくださったわね……」

焼却炉の中で、薪がごうごうと勢いよく燃え上ると、夫はせかせかと庭の反対の隅につんであった丸石をはこんで来て、焼却炉の中にほうりこんだ。——それは妻が、花壇をつくるために、植木屋にたのんで持って来てもらったものだった。

石をいくつもほうりこみ、火の具合をたしかめて、また薪をたした。

「ああ、あなた……私を食べるのをやめてよ……」妻は肩をふるわせながら、涙にくぐもった声でいった。「二人で、これまで通り……仲よくくらしましょうよ。……こうやって新しい家もできた事だし……、私、今度こそ、赤ちゃんも欲しいわ……」

夫は焼却炉の前から立ち上ると、大きな息をついた。——それから、縁側にきちんとすわって、うつむいた顔から、涙をぽたぽた膝におとしている妻の方をふりかえった。

妹が、眼を泣き腫らしてかえってくると、兄は焼却炉から、赤くやけた石をとり出して

やけ具合をしらべている所だった。

「持って来たか？」兄は妹のさし出すバナナの葉を横眼で見ながらいった。「ふん、貧弱な葉だな。——まあいい、そこへおけ」

妹はバナナの葉を穴の横へおくと、縁側から中へはいろうとした。その時、彼女は、裸にむかれた嫂の死体が、廊下の板の上にじかにおかれているのを見て、思わず足がすくんだ。

嫂は、さびしそうな、青白い顔をして死んでいた。首をしめられており、色のさめた唇から、一筋の血が、赤い糸のように、片頬からこめかみへかけて流れていた。——子供をうんでいないため、形のくずれていないまるい乳房が青ざめ、こわばっており、うすいもやのような恥毛がいたいたしかった。

義姉さん……とさけびかけた妹は、嫂の髪が、乱暴に刈りとられ、坊主にされているのを見て、うっ、と口をおさえ、玄関の方へ走り去った。

夫はまっかにやけた石を、焼却炉から火かき棒でかき出し、穴の中におとしこんだ。——穴の底が焼け石でいっぱいになると、バケツに汲んであった水をその上にふりかけ、もうもうとたちのぼる湯気の上に、ぬらしたバナナの葉をおいた。

それから彼は、うす暗くなった家の奥へむかってどなった。

「おい！——手つだえ！」

妹が口をおさえながら出てくると、兄は妻の死体の脚をもたせ、焼け石の上のバナナの葉の上においた。——それから死体の上にまたバナナの葉をおき、水をふりまき、のこっていた焼石をその上において、土をかけた。

かけ終ると、兄は満足そうに手をはたき、居間から上って風呂場へ行った。

妹は、縁側の、さっきまで嫂のすわっていた所にすわって、恐怖と嫌悪とショックのため、声もなく泣きつづけた。——湯殿の方でざあざあ水音がし、兄が奇妙な言葉で、きいた事もない歌をうたうのがきこえた。

長い風呂が終ると、兄は浴衣に着かえ、ビールとコップを手に持って縁側へ出てくると、妹からはなれて縁先に腰かけ、暮れて行く秋の空をながめながらビールを飲み、うなるような気味の悪い声で、意味のさっぱりわからない歌を歌いつづけた。

日がとっぷり暮れて、あたりで虫が鳴き出し、東の空に高くのぼった満月が、庭先にさしこむと、兄は立ち上った。

「もういいだろう……」

とつぶやくと、彼は台所へ行き、長い庖丁を持って来て、庭におりたった。

妹は、電灯もつけていない応接間の縁先にすわって、こまかくふるえながら、浴衣の裾をはしょった兄の黒い影が庭先の黒い土をほりかえすのを見ていた。——とりのけられた土の下から、まだ湯気が濛々とたちのぼっていた。それにまじって、バナナの葉の焼けた甘い臭いと肉のやけた臭いがした。

土と石と、ぐにゃりとしたバナナの葉をとりのけると、兄の手にした庖丁が、月の光に

にぶく閃めくのが見えた。——ずぶっ、というような音がして、妹は思わずかたく眼をつぶった。

眼をつぶっても、むっとするような、甘ったるい、胸のむかむかする臭気は、容赦なく妹の鼻腔からしのびこんだ。肉を裂くかすかな音、ボキッ、と関節のはずれる音、そしてくしゃくしゃと、兄の歯が、何かをかむ音がきこえてきた。

「兄さん……」妹は眼をふさいだままきいた。

「本当に……義姉さんを、食べているの?」

「ああ……」と、兄は答えた。「うまいぞ。お前も食べないか?——一しょに食べろよ」

「いえ……」妹は身をふるわせていった。「私はたくさん……」

「ばかだな……」兄はかすかに笑った。

「いつか、一緒にハワイへ行った時、ルアウという料理を食べたろう。……あれと同じだよ。あれは豚でやったが、昔のポリネシアじゃ、人間を使ってやった事も、よくあったそうだ」

「なぜそんなひどい事をするの……」妹はまたこみあげてきた吐き気をおさえながらきいた。「義姉さんは、何にも悪い事しなかったのに……。あんなにいい奥さんで……あなたたち、あんなに仲のいい夫婦だったのに……」

「なぜってことはない。——ただ食べたくなったからさ……」兄は答えた。「——なぜだかわからない……。ただ、突然食べたくなったんだ。そう言ったら、彼女は食べてもいいって言った。——おれを愛していたからさ」

しばらく沈黙があった。

それから、

「さあ、そろそろ頭にかかるか……」

とつぶやく声がきこえ、ばさっ、と刃物が何かにぶつかる音がした。

兄の唇が、ぴちゃぴちゃ鳴り出すのをきいて、妹はとうとう耳をおおった。

4

翌日十時ごろ、その家の表で車がとまる音がした。

縁先で、昨夜の姿勢のままじっとすわっている妹の耳に、玄関の方で訪う声がきこえた。——返事をしないでいると、どやどや足音がして、嫂の三人の兄たちが上って来た。

「なんだ、いたのか……」と一番下の兄が、縁先にすわっている妹を見ていった。

「あんたの兄さんは、もう出かけたかね?——良子はどこにいる?」と二番目の兄がきいた。

「いきなり三人でおしかけてびっくりしたろう……」と一番上の、もう五十をすぎた兄がいった。「実は、私たち三人、ゆうべおかしな夢を見たのだ。——丸坊主で裸の妹が、泣きながら、私たちにわかれをいいに来た夢だ。三人が三人とも、同じ夢を見た事が、今朝お互いに電話しあってわかったので、心配になってとんできた。——良子はどうした?

別にかわりないか？」

「義姉さんは……死にました」妹は、もう一滴ものこっていない、と思った涙が、またどっとあふれ出すのを、手でおさえながら、かすれた声でいった。「兄が……きのう義姉さんを殺し、あそこで、蒸し焼きにして食べてしまったんです」

一番下の兄は、庭へとびおりて、穴をのぞきこんだ。——穴のまわりの、とりのけられた土の上に、冷えた丸石や、色のかわったバナナの葉、それに骨がちらばっていた。

「……一部しかのこっていないぞ」と一番下の兄はさけんだ。「のこりはみんな食ってしまったのか？」

「さあ話しなさい……」二番目の兄は、義理の妹の肩に手をかけて、きびしい声でいった。「いったいどういうことがあったのか……」

妹は泣きながら、一部始終を物語った。下の二人の兄は、食い入るように話をきいていたが、長兄だけは、途中から、異様な眼つきで応接間の中を見わたしていた。

妹の話が終ると、長兄は飾り棚の正面におかれた、あの不気味な、舌を出した神像を指さしてきいた。

「あの神様は、いつもあそこにおかれているのかね？」

「いいえ……」妹は涙をふきながらいった。「ずっと隅にあったのですが、きのう、私が拭いたあと……」

「あれは、南太平洋のテイキ（ポリネシアにひろくつたわっている伝統的な神）の神像だ……」

と長兄はいった。

「それも、見た所、とりわけ強い呪力を持ち、原住民がタブー（禁忌）にしているものだ。——どうやって手に入れたか知らないが、あんなものは、決して売るものでもなければ、外来者に、祭ってある所を教えたり、ちかづけたりするものでもない。あの男は、また悪いくせを出して、こっそり盗んで来たな。前々から、そういう事はするものではない、といいきかせていたのに……。きのう起った事も、ラロトンガ島というポリネシアの島に、古くから伝わる〝妻を食った男〟の伝説とまったく同じ経過だ。——ツバという男が、その妻のラオを、殺して、蒸し焼きにして食った、という伝説だ。おそらくあの神像は、その無惨な事件そのものの怨念を、封じこめるために、大昔につくられ、祭られたものだろう。——きのう、あんたはあの神像を、ただ拭いて、あそこへおいただけか？」

「いえ……」妹は身をふるわせていった。「日に当てました。それから——唾を吐きかけてこすりました。よごれが乾いた布でこすっただけではとれなかったものですから……」

「ばかな事を！」長兄は小さく叫んだ。「あんたは、これもポリネシアに古くから言われている〝唾の魔力〟を知らんのか……いまの日本の若い人が知らんのもむりはないが……。ああいう神像を、おろそかにあつかうものではない。それに、あんなものに、むやみに唾を吐きかけるものではない。——そのため——おそらく、ラロトンガのツバの呪いはよみがえった。私たちもみんな、今、その呪いの中にとらえられている……」

「兄さんはどこへ行った?」と二番目の兄は、けわしい声でいった。「かくさない方がいいぞ」

「兄は、今朝、義姉さんの残りの体を持って、裏山へ逃げました……」妹はふるえ、泣きながらいった。「きっと、あなたたちがくる事を予感したんです」

「行こう——」と一番下の兄がいった。「裏山なら、そんなに深くない。すぐ見つかる」

「警察へ知らせなさい」長兄は神像をとり上げながらいった。「あんたもあとからくるのだ」

三人の男たちが、またどやどやと出て行くと、妹はよろよろと立ち上り、電話機にすがりつくようにしてダイヤルをまわした。

三人の男たちが、車をとばして裏山にはいって行くと、低い灌木がまばらにはえた草原の斜面に、ちらと人影が動くのが見えた。男たちは、車をおり、斜面をのぼって行った。——二番目の兄は、途中で長いまっすぐな木の枝をナイフで切りとって、手に持った。

妻を食った男は逃げもせず、岩かげにじっとうずくまっていた。——岩かげには、哀れな女の死体の一部……食いのこした腕や脚の一部が、一箇所にまとめてあった。

「ああ……兄さんたち……」男は不精ひげの伸びた顔をあげて、まぶしそうに男たちを見た。

「おひさしぶりです。おかわりありませんか?」

「私たちは元気だ……」と一番下の兄はぶすっといった。

「なぜ、妹を殺した?——なぜ、殺して食った?」

「なぜだかわかりません……」男は憮然とした表情で、腰をおろした所の傍にある草をむしり、口にくわえた。

「なぜか——きのう芝を刈り終えると……急に食べたくなったのです。特に妻の頭が……妻にそういうと、彼女はびっくりし、それから悲しそうな顔をしましたが、こう答えました。〝いいわ——愛しているから……〟」

澄んだ秋空の下で、百舌鳥がけたたましく鳴いた。山というより、小高い丘のようなその斜面にいると、下から吹き上げるひいやりした風にのって、下の街の物音がよくきこえてくるのだった。——駅を出て、速度をあげて行く電車の音、国道を走る自動車のエンジンの音、たったばかりの団地の中の小学校からきこえてくる、元気な子供たちの歌声……。

「私も……なぜ、あんなかわいそうな事をしたのか、わかりません。妻も……逃げようと思えば逃げられたのに……なぜ逃げなかったのか……妹がなぜ警察へ知らせなかったのか……さっぱりわかりません。何だか、今でもまだ夢を見つづけているようです……」

「お前は馬鹿な男だ——」長兄はあの神像を示しながらいった。「馬鹿というよりは——お前の中には、この世のさまざまのものに対する心の底の敬虔さ、畏れというものが、根本的に欠けている。それが今度の悲劇のもとになったのだ。——それがお前にわかっているのか?」

それから長兄は、先をとがらせた、長い木の枝を持った次兄をふりかえって言った。
「殺せ」

5

男の妹が、パトカーに乗って裏山へかけつけると、草におおわれた斜面の一箇所から、煙がたちのぼるのが見え、その下に、三人の男の姿が動いているのが見えた。一同はパトカーをおりた。パトカーの後には、新聞社の車も二台ついており、その一台には隣家の主婦ものっていた。

一行が斜面をのぼって行くと、風に吹きよせられ、異様な臭気が鼻をうった。

岩かげまで行くと、三人の男はならんで一行をむかえた。——岩の上には、あの不気味な神像が、一行の方をにらんで眼をむき、舌を吐き出していた。

「どうしました?」警官が息をはずませながら男たちにきいた。「犯人はつかまえましたか?」

「ええ……」長兄は、あいまいな調子で答えた。「話はきかれましたか?」

「ききました——」警官はすっぱい顔をしてうなずいた。

「ひどい話ですな——だが、どうもすぐには信じられん。いずれにしても、よくしらべて見なければ……で、犯人はどこにいます」

三人の男の視線はそろって岩かげにむいた。——その視線のあとを追った一行は、一瞬、

凍りついたような表情になった。

岩かげの土が浅くほりかえされ、その中に、焼け石をまわりにつめこまれた男の死体があった。——地炉の上の方に、まだもうもうと煙をたてている大きな焚火があり、いくつもの石が、中でやけていた。——焦げて顔もわからなくなった男の体は、あちこちの肉が切りとられていた。

男の妹は、ここへついた時、三人の男の口が、眼に見えないほどゆっくり動いていた事を思い出し、小さな叫び声をあげた。

「この男は、自分の妻である、私たちの妹——何の罪もない、やさしい妻を、殺して蒸し焼きにして食べました……」と長兄はしずかにいった。

「だから、兄である私たち三人は、妹の復讐のため、この男をとらえ、同じように殺し、蒸し焼きにして食べました……」

「なぜそんな……」警官は口をぱくぱくさせて、かすれた声でいった。「あなたたちまでが……」

「なぜ?——それが、この伝説……つまりはこの呪いの結末だからです……」長兄は、岩の上から、あの神像をとり上げた。「なぜ——自分一人で、世界中ととりひきしていたやり手の貿易商が、突然妻を食べたい、などと異様な事をいいだしたか、なぜ、そういわれた妻が逃げもせず、おとなしく食べられてしまったか、なぜ、妹が警察にも知らせず、だまって兄の手伝いをしたか——なぜそれをきいた私たちが、同じようにこんな異様なやり

方で、復讐をしたか……なぜ？――理由はありません。誰も、そうする事に抵抗できなかったからです。なぜなら、これは、無知な現代人によってよみがえらされてしまった呪いだからです。……太古は、〝話そのもの〟が、一つの〝呪い〟だったのです。呪いは元来、〝不条理な意志〟です。その呪縛の中にとらえられた私たちは、めいめい理性や、日常的な常識にささえられた意志に関係なく、その筋書き通りに動かされるのです。――今ここにこられたあなたたちも、やはり、呪いの中にいます……」

焚火の中から、やけた石が一つ、斜面をころげて穴の中におち、死体はぶすぶすと焦げる臭いをたてた。

「私は――こういった方面の研究を長年つづけてきました。名前を申し上げれば、御存知だと思います。だから、どういう事がおこったか、よくわかっています。しかし、その私にしてからが、どうする事もできず、〝呪いであるような話〟の筋にしたがって、こういう風に行動せざるを得なかったのです」

長兄は、弟に眼配せした。――二番目の兄は、穴の傍にしゃがみこむと、ナイフをふるって、蒸し焼きにされた死体から、いくつもの肉片を切りとり出した。半焼けの肉片をうけとると、長兄はそれをまわりをとりかこむ一同に一つ一つさし出した。

「さあみなさんも、これを食べてください。――別に、さほど食べにくいものでもありません。これが、この〝呪い〟の結末であり、この呪いの筋書きを終らせ、封じる最後の儀式です……」

警官は肉片をうけとると、しばらく蠟のような顔色で見つめていたが、やがておずおずと口に持っていった。――その次の警官もそうした。兄に嫂の肉をすすめられた時には拒んだ妹も、さし出された兄の肉は口に入れた。新聞記者も、カメラマンも、隣家の主婦も……みんな「妻を殺して食った男」の肉を食べた。肉は何片も何片もさし出され、あたりにはみんなが肉をかむ、くちゃ、くちゃ、という音がたちこめた。――その合間をぬって、遠く下の街の方から、駅前スーパーのアナウンスがかすかにきこえて来た。……みなさま、本日当スーパーでは、豪華冬物スウェーター、オーバー、スキーウエアの特価サービス大売り出しをいたしております……。

「さて……」と長兄はいった。「私たちはみんな、この男の肉を食った。私たちは共通のタブ――秘密をもったわけです……」

長兄は手にした神像を見おろした。

「食人の話は、ポリネシア地域には特にたくさんのこっています。――また、一部の島では、十九世紀の終りまで、実際にその習慣がのこっていた、といいます。何もポリネシアだけではありますまい。ほかの地域にもあったでしょう。〝脳みそ食い〟の痕跡は、五十万年前の北京原人の遺跡にも見られ、二十世紀にはいってからも、ニューギニアの奥地で、実際におこなわれていました。――私たちの先祖もそれをやり、日本の中にも、ある時期まで、そういった伝説と同時に、習慣ものこっていたでしょう。だから、この〝呪い〟のストーリーとわれわれの心の深部との間に、何かひびきあう所があり、それによって、古

い〝呪い〟が私たちの上におちてきたのでしょう。しかし、私たちの先祖は、ずっと古い時期に、こういった呪わしい話を、意識して、後代につたえる歴史伝承の中から消しはじめたのでしょう。だから今日私たちの知る、われわれの伝承民話の中には、〝鬼〟や〝怪物〟の姿をかりる以外に、こういった話が見あたらず、私たちもまた、人間は——すくなくとも私たちは、そんな事は絶対にしないものだ、という確信を抱きはじめた。〝話〟は——歴史記憶である〝伝承〟を消す事によって、そういった〝習慣〟も消す事ができたのです」

長兄は手にした神像を、まだ煙をあげている焚火の中に投げた。——硬い木はなかなか燃えにくかったが、それでも、やがてまわりから、小さい焔がその神像を包んだ。——三人兄弟の一番末の男が、焚火の上にまわり、棒と靴で、火のついた薪と神像を、穴の中につきおとしはじめた。大勢に食われて、半分骨になった男の上に、燃える薪と一しょにおちこんだ神像は、自分にささげられた供物の上に満足そうに横たわり、自分の体からふきだす焔の舌で、その無惨な供物をなめまわすように見えた。

「〝呪い〟はこれで終りです……」焔をながめていた長兄は、一同の方をふりかえった。

「そして、私たちは、この男の肉を一緒に食うことにより共通の秘密(タブ)をもちました。私たちは、このタブを、タブとして保持する事によって、この〝呪い〟そのものを終らせ、封じこめなければなりません。——このむごたらしい、きちがいじみた事件を、一切なかった事にするのです。そうする事によって、私たちの歴史——心をまもるのです。この狂気の呪われた事件を世界に知らせ、かきたてて、安らかにくらしている人たちに、人間の深奥にひそむおそろしい、不条理な狂気をのぞきこませてはならない。そんな事をすれば、また誰かが、〝呪い〟におちこむでしょう」

一同は操り人形のように、こっくりうなずいた。

「もちろん、この哀れな夫婦が、変死した——すくなくとも、消え失せた、という事を、世間の眼からかくすわけには行かないでしょう。しかし、実際に起った惨劇は、絶対に外に知れてはなりません。——なんとかやっていただけますか？」

「むずかしい——が、何とかやって見ましょう……」

警官は、腕組みしながらうなずいた。

「ええ……」と新聞記者も、面のように白っぽい顔でうなずいた。「こっちも何とか……」

秋晴れの空に、もう陽が高くのぼっていた。風のない丘の上から、白っぽい煙が空へ高く立ちのぼり、さっきから鳴いていた百舌鳥のかわりに鳶(とび)が一羽、丘の上で輪をかきながら、ぴーとろろ、と澄んだ声で鳴いた。

その声が合図のように、一同は急にそわそわしはじめた。

「私、子供が今日運動会なんです」と、割烹着姿のままの、隣家の主婦はいった。「お弁当を持ってってやらなけりゃならないんです。つくりかけのまま、とび出して来たんだけれど——もう行っていいですか？」

「またお送りしますよ、奥さん」と新聞記者の一人が言った。

「火のあと始末だけ、ちゃんとしておいてください」警官は斜面をおりかけながら、もう焔のたたなくなった穴に、土をかけている三人兄弟の方をふりかえっていた。

「山火事などになると、あとがうるさいですから……」

「庭の穴は、埋めてしまいなさい。骨なんかまわりにのこさないように……」足で、穴に土をおとしながら、長兄は、一同のあとについて降りようとしている妹にいった。「あと、また芝生をうえるのだ。——あとから私たちも行って手つだうから……」

妹はうなずいて、斜面をみんなと一緒におりはじめた。——ぬけるような秋の空に、刷いたような絹雲がうかび、麦藁色の日ざしは、丘の斜面に、そして眼下にひろがる平和な街や、白い、新築の団地、造成宅地の上に、あたたかく、ぬくぬくと降りそそいでおり、蚊のような音をたてて遠くの飛行場へ舞いおりて行く旅客機の翼を、キラリと光らせた。

警官たちは、この事件について、いったいどういう「報告書」を書いたらいいのか、といささか屈託顔だった。——屈託顔は記者たちも同じだったし、隣家の主婦も、悪夢からさめたばかりのような、何か考えこむような顔をしていた。

わりと呑気そうにしゃべりあっているのはカメラマンたちだった。——その一人が、こうつぶやくのをきいた時、死んだ男の妹は、かすかに、襟元のうぶ毛を、さかなでにされたような気がした。

「腹がふくれちまった。——この分じゃ、昼飯はぬきでいいな」

〈おことわり〉

この話の原型となったポリネシアの民話は、早津敏彦氏著『南太平洋のロマン』（白馬出版社刊）の中の、クック諸島の章、ラロトンガ島の伝説「妻を食った男」（同書129ページ）から、著者の承諾を得てとらせていただきました。原話についてお知りになりたい方は、同書をご参照ください。ご承諾くださった早津氏に感謝いたします。

——筆者——

影が重なる時

電話が鳴っていた。

それは最初どこか脳髄の暗闇の遠い彼方で、チクチクする銀色の痛みとしてあらわれ、急に近づくとベッドのそばで身をふるわしている大きな醜い甲虫になった。彼は嫌悪をこめて、その黒いピカピカする虫につかみかかった。

「もしもし……」と声がいった。

「どうかおねがいだから……」彼は眠さのあまり泣きそうな声で送話器にむかって哀訴した。

「どうかおねがいだから……」やっぱり泣きそうな声が受話器からかえって来た。「俺の話をきいてくれ。たのむよ、津田……」

彼はあきらめて、眉をしかめると、枕もとの時計を見た。

——四時前だ。

「わかったよ」と津田はいった。「今どこだ?」

「自分の部屋だよ」と野村はいった。

「誰か後でピストルでもつきつけてるのかい?」

「ちがう。俺一人だ……」といいかけて野村はちょっとのどにひっかかったような声を出した。「ええと——厳密にいうと、俺だけじゃない」

「ほかに誰がいるんだい」
「俺だよ……」野村はかすれた声でいった。「この部屋に、もう一人の俺がいるんだ」
「じゃそいつを電話に出してくれ」津田はとがった声でいった。「そいつの方が、朝の四時から電話で友人をたたき起さないだけの分別がありそうだ」
「奴は電話になんか出られない」野村の声は本当にすすり泣きそうだった。「じっとつったって、動かないんだ。——気が狂いそうだ」
「お前でも、そのもう一人のお前でも、どっちでもいいから洗面所で頭から冷い水をあびろ」と津田はむかっ腹をたててどなった。「それから便所へいって、温いミルクをのんで、ベッドの中で百数えるんだ。おやすみ」
「もう、そんなことは全部やったよ」野村はいった。
「そいつを見つけてから、一時間もたつんだ、——たのむから、俺の部屋へ来て、お前の眼で見てくれないか？」

野村の部屋は、近所のアパートの三階で、歩いても三分とかからなかった。津田は眼がさめてしまったので、中ッ腹ながら出かけて行くことにきめた。——野村にだいぶ金を借りているというひけ目もある。何とかズボンだけはいて、Tシャツの上にダスター・コートをひっかけた時、また電話がなった。
「うるさいな、今行くよ！」彼は受話器をとってどなりつけた。

「だけどなあ、おい……」としわがれた声がいった。——野村の声ではなく、ひどく酔っぱらった声だった。「お前ン所は何ともないかい？」
一階上の、顔見知りの男の声らしいと思ってるうちに、むこうは、何かぶつぶついいながら電話を切ってしまった。
「ああ、そうさ。——あしたになったら消えちまうさ。……これからは絶対禁酒だ……」と、つぶやく声が最後にきこえた。
津田は何だか寒む気がして、部屋の中を見まわした。——スタンドのなげかけるほの暗い明りの輪の外に、隅のうす暗がりに、何かがひそんでいるような気がした。だが、何も見えなかった。天井燈のスイッチをいれて見る。——何もない。一人者の乱雑な部屋、投げ出された週刊誌、あふれかえった灰皿、四つ重ねられたラーメンの鉢、だらしなくひんまがって、ハンガーからだらんとぶらさがっている背広……。
「畜生め！」津田はうめいて、部屋をとび出した。
明け方近くの冷えこんだ夜の空気が、津田の鼻をくすぐって、くしゃみがたてつづけに三つ出た。——変な気候だ。六月だというのに、やけに冷える。今年は凶作らしい。気候が変なので、人間の頭までおかしくなる。
野村のアパートへつくと、彼は足音を殺して三階までかけ上った。この時間なのに、何となくアパート全体にざわついた雰囲気があるような気がして、階段の途中で、ふりかえってみたが、どの部屋もみんなドアはしまっていた。野村の部屋をノックすると、野村は

すぐドアをあけた。土気色の顔に、紫色の唇をして、眼がひきつっている。
「こっちだ……」と野村は恐ろしい勢いで、彼の腕をつかんでひっぱりこんだ。「まあ見てくれ……奥の部屋だ」
はいった所のダイニングキッチンのテーブルの上には、吸いがらを林のようにつきさした灰皿がおかれ、五、六本の煙がたちのぼっていた。テーブルの下におっこちたカップ、流しに小山のようにもり上ったコーヒーの出しがら。
「どこだって？」津田は奥の部屋をのぞきながらいった。
「窓際だ」そういうと野村はギュッと爪をかんで、背をそむけてしまった。「俺はもうたくさんだ。見たくない」
津田は部屋の中を一べつした。ベッドのしきりのカーテンがひきあけられ、椅子と紙屑籠がひっくりかえっている。部屋の中には煌々と明りが輝いている。
「何もないじゃないか」と津田は少しほっとして、背後に声をかけた。「お化けはいっちまったよ」
野村はギョッとしたようにふりむいた。
「行ってしまったって？」
そういうと彼は一足とびに津田の背後にとんできた。
「冗談じゃない、まだいるよ」
「どこに？」

「窓際だ、窓から外を見るような恰好をして……」
津田はもう一度目をこらした。——窓際には何もなく、窓にはブラインドがおりていた。彼は何もいないことを証明してやるためにつかつかと窓際へ歩いていった。
「あぶない！」と野村は後から叫んだ。「そこだ、眼の前だ、ぶつかるぞ！」
津田は窓際によって、ブラインドをあけた。——東の空が、もう白みかけている。後を見ると、野村はみっともない恰好で、口をあんぐりひらいて立っていた。
「お前は、おれをつきぬけた……」と野村はいった。「おれはそこにいるのに……」
「ここにはいないんだ」津田はさとすようにいった。「お前の脳みその中に、小さな小さなおできがあってな。もう一人のお前はその中にいるんだよ」
野村は眼をこすり、信じられないという風に頭をふった。顎をだらりと下げたまま、頭をふりまわしたので、下顎だけが顔からはなれて肩の後にとんで行きそうになった。それから急に口をひきむすび、眼をすえると、津田の方にむかってかけ出した。おどろいて身をかわす間もないうち、野村は津田の眼の前、約一メートルほど手前の空間で、どしんと何かにぶつかって床にひっくりかえった。津田はあっけにとられて、こぶをつくって起き上った友人を見た。
「しっかりしろよ」と津田は手を貸してやりながらいった。
「よっぱらいでも、そんな器用なまねはしないぜ」
「ここにいるんだ！」野村は金切り声をあげた。「今、お前がその俺の体を、半分つきぬ

けてる」

「何もないよ、ほら」津田は手で空間をさぐって見せた。

「別に空気がかたまりかけている気配もない」

「じゃ、俺の手をお前の方へひっぱってみろ」と野村はいった。

津田は、友人のやせた腕をつかんで、ぐいとひいた。——とたんに、何かにつきあたったような衝撃があって、腕は動かなくなった。津田は両腕をつかんで、もっと力をこめてひいた。

「やめてくれ！」と野村は悲鳴をあげた。「腕がぬけちまうよ」

津田はさすがに手をゆるめた。つい眼と鼻の先で、友人はガラスの壁にでもギュウギュウ押しつけられたように、横顔がペチャンコになっていた。手をゆるめたとたんに、野村はとびはなれて床の上にペタリとすわりこみ、はあはあ息をつき、唾を吐いた。

「お前には同情心ってものがないのか？」と野村はうらめしそうにいった。「自分自身と抱擁させられて見ろ、どんな気がするか……」

「わかったよ」津田はいって頭をかいた。「妙ちきりんなことになっちまったな」

「おかしいなあ、ここにいるのに……」そういうと野村は立ち上って、彼の眼前の空間をなでまわして見せた。なでまわす手つきの下に、津田の眼にはまったく見えない、一つの立像が描き出された。

「これ、この通り……」と野村は、何もない空間をどんどんたたいて見せた。「ここに、

ちゃんとあるのに——お前には見えないし、さわれもしないなんて……」

「しっかり立ってるようだな」と津田はつぶやいた。「死んでいるように見えるか？　生きているように見えるか？」

「そうだな」野村は眉をしかめた。「半分死んで、半分生きてるみたいに見える——毛穴から、眼の上の傷痕まで俺とそっくりだが——こちこちの石像みたいだ」

「コーヒーをくれ……」津田はいった。「頭がいたくなってきた」

二人は椅子を起して、生ぬるいコーヒーをのんだ。

「いったいどういうわけだ」と津田はつぶやいた。「お前にとって、あれは存在する。だのに、俺にとっては存在しない」

「一体あれは——」野村は胸わるそうに唾をのんだ。「どこから来たんだ？　いつかまたふいと消えちまうのかな？」

その時、野村の部屋の電話が鳴った。津田は、足にコードをひっかけてたぐりよせ、ぼんやりと頭に浮んだことをつぶやいた。

「精神病院に一台大至急まわしてくれ。今すぐ救急車で入院させないと……」

「誰か来て！」と受話器のむこうで、女の悲鳴がきこえた。

「誰でもいいから早く来て！　私こわいの」

「ユリちゃんかい？」ようやく声をききわけて、津田はききかえした。「君の所も、その——君の幽霊が出たのか？」

「わかってるなら、早く来てちょうだい」ユリ子の声は上ずっていた。「でないと、私、自殺しちゃうわ」

「お仲間ができたぜ」津田は電話を切りながらいった。「誰でもいいから来てくれとさ。ここにいるか？」

「行くとも」野村は雄々しく立ち上りながらパジャマの上衣をぬいで床の上になげすてた。それを見た時、ハッとして、津田は野村の腕をつかんだ。

「見たか？」と彼は床におちたパジャマの位置を指さしていった。

「パジャマは、お前をつきぬけたようだぜ……」

「本当だ……」と野村は眼を細めてつぶやいた。「彼の着ていたパジャマはこいつをつきぬける——俺はつきぬけられない」

「今、あのお前はどんな服装をしている？」

津田は何か頭にひらめくのを感じながらきいた。

「そうだな——ポロシャツにフラノのズボンだ。不精ひげをはやして、やつれた顔でびっくりしたように窓を見上げている」

「腕時計は？」

「はめてる。どうして？」

「なげてみろ」

野村はショックプルーフの腕時計を、手首からはずして、パジャマの落ちた空間へむかって投げた。それは丁度パジャマの手前の空間で、何かにあたってはねかえり、パタリと床におちた——二人は顔を見あわせた。野村はフラノのズボンをタンスからひっぱり出すと、そいつをほうりなげてみた。ズボンは津田の眼には何もないように見える空間にひっかかって、だらりとぶらさがった。

「わかったぞ！」野村はつぶやいた。「つまり……」

「そうだ！」と津田も叫んだ。「つまり……」

二人の視線があった。——だが、結局何もわかっていなかった。そこにあるその空間——それはもう一人の野村が占めている。そこにはこの野村がはいりこめない。その野村がつけている衣服類も、はいりこめない、——だがそれ以外のものにとっては、それはないにひとしいのだ。その空間は、野村にとってのみ存在し、野村だけを選択的に排除する。だがなぜそんなことになったのかということは、まるきりわからない。

「ユリさんの所へ行ってみよう」と津田はいった。

ユリ子のアパートまで十分——二人の住居よりはるかにぜいたくな四間の部屋で、ユリ子はまっさおな顔をして、椅子の上にちぢこまっていた。二人がとびこむと、いきなり顔をおおってワッと泣き出した。

「こわい……」とユリ子は泣きむせびながらいった。「あの幽霊、早くおっぱらって」

「どこにいる？」二人はあたりを見まわした。

「寝室よ、――でも、行かないで！　私……私はずかしい……」

二人は奥の間へとびこんだ。女一人の寝室のなまめかしさを感ずる余裕もなく、ただ床にひっくりかえったスタンドに照らし出された、ピンクの室内をキョロキョロ見まわした。

「見えるか？」津田は野村にささやいた、野村は首をふった。

「見ないでちょうだいったら！」

背後からユリ子が寝室にとびこんで来て、二人の前に立ちふさがった。

「見えないんだよ」と二人は説明した。野村の場合とおなじで、それがユリ子本人にとってしか、存在しないことを……。ユリ子はそれでも信じないようだった。

「でも、あそこに、ちゃんとああして……」

二人はその場所にむかって突進した。

「私にさわらないで！」ユリ子は金切り声をあげた。「いやらしい！　そばによらないで！」

だが、彼等はまっすぐすすみ、ユリ子はキーッと声をあげた。寝室の壁につきあたった時、後でドサリと人のたおれる音がした。二人は気絶しかけたユリ子にかけよった。――二人の説明をきおわっても、ユリ子はまだあえいでいた。

「うそだと思うなら――」といって津田はきいた。「そこにいる君は、今、どんなかっこうをしている？」

「寝台の横で、首をねじむけて窓の方を見てるわ」ユリ子は顔を赤らめてつぶやいた。

「頭はクリップだらけよ……」

「服装は？」野村はいった。「つまり、その君が着ているものは、通りぬけられないんだよ。今、何を着ているの？」

「あの――あの――、スリップだけなの」

二人は同時にふりかえって、その空間を眼を皿のようにして見つめ、思わず手をのばして、彼女をさぐった。

「さわらないで！」ユリ子は叫んだ。

夜が明けわたるまでに、あちらこちらで騒動がおこりだした。津田のアパートでは約半数の住人の所へ、幽霊が出現した――らしかった。らしかったというのは、この幽霊あるいはドッペルゲンガーは、その本人にとってしか存在せず、第三者には、ないも同然だったからである。客観的な確認の方法といえば、横から見ていて、その人間だけがどうしてもはいりこめない空間があるということだけだった。だから騒ぎといっても、奇妙に内向する性格をもっていた。おまけに、津田のように、現われないものもいたから、騒ぎの起り方も何だかひどく中途はんぱだった。――津田は、今さら眠る気にもならず、ぐるぐるまわる頭をかかえて、とにかく社にかけつけてみることにした。今のところ、幽霊は石像のようにつったっているだけだ――と野村は説明した――どうやら、別に何の事もないようだぜ。

それにしたって、こんな奇妙な話はない。本当に、幽霊はあらわれているのか？　津田は、まだ半信半疑だった。——彼には、ほかの人間のもとにあらわれているという幽霊が、見えないし、さわれもしないからだった。野村やユリのところへ、その幽霊があらわれて、彼の所へあらわれないのはなぜだ？　彼はぼんやりしながら、お粗末なガレージへ、愛用のミニカーをひっぱり出しにいった。——ところが、車には妙なことがおこっていた。タイアが三つまでパンクしている……。しばらく呆然として、へしゃげたタイアを見つめ、それから妙に重いドアをあけて、スターターを押してみた。——エンジンは不きげんそうに、のろのろ動き、あっというまにセルモーターが焼けてしまった。

「待てよ……」

彼は何となく宙を見つめてつぶやいた。

「待てよ……」

しかし、いくら考えても何もわからなかった。

結局電車で、社まで行くことにした。人々は妙におびえたような、人の視線をさけるような顔つきをしていた。大多数の人は、急に恐怖と孤独の中にとじこもったように見えた。駅のプラットフォームで、びっくりしたような顔で、宙を見つめている人を、五、六人みつけた。——だが、ほかの連中はまるで無関心のようだった。

電車は故障して、やたらにのろのろ運転だった。どこかでつづけさまに交通事故が起ったという話を、駅で小耳にはさんだ。しかし、津田は延着に腹もたてずに、ひたすら考えつづけた。電車をおりてからも、彼は考えながら道を急いだ。そして社の前まで来た時、彼はいきなり誰かにドシンとぶつかった。あわててあやまろうとして、顔をあげた時、彼は思わず息をのんだ。

そこにいたのだ！

社の玄関のま正面に、彼の幽霊が立っていた！

さすがに津田は、口の中がしゅっと音をたてて乾いてしまうような思いを味わった。——彼の前を歩いていた男は、何にも気がつかないように、その彼を通りぬけていった。

（こんな所にいたのか……）と彼は後ずさりしながら、唇をなめまわした。（アパートじゃなくて、こんな所に出ていたんだな）

額にねっとりうかんでくる脂汗をぬぐって、彼は深呼吸した。動悸が早まり、何ともいえぬ胸の悪さがおそって来た。恐怖感が冷たい手をのばして、胸もとへはい上ろうともがいていた。——スクルージはきっと、こんな思いを味わったことだろう。

だが、ディッケンズの想像した幽霊より、もっとぶきみなのは、それが石像のように動かないということだった。その彼は、大股で社の玄関にかけこもうとするように、左手で帽子をおさえ、体を前かがみにしていた。体の後に、上衣の裾が風にあおられたようにひるがえり、口はあえぐように大きくひらかれ、眼は恐怖のために、白眼が虹彩の周囲に完全にひき出されていた。——その表情ははげしい驚愕と恐怖の混淆だった。そしてそのまま——突然時がとまったように、高速立体写真の一齣のように、はげしい動きの一瞬の

まま、石のようにかたまっているのだ。津田は一たん眼をつぶって深く息を吸い、もう一度眼をひらいて見た。

しかし、それはやっぱりそこにいた。

よく見ると、それには何だかひどくあいまいな所があった。視覚像としては、奇妙に新鮮さを欠いており、何だか記憶像や、幻覚のように、心理的な彫像みたいに見えた。輪郭もぼんやりした所があり、時々むこうの風景が、すけて見えた。にもかかわらず——彼のはいることのできない空間としては、厳然と存在していた。彼はおずおずと手をのばして、服地のざらついた感触を手に感じた。野村がやったように、拳をかためて、たたいてみることもできた。それは、ほんものの彼そっくりの手ざわりの、堅固な、侵入不能の『空間』だった。彼は指をいためて、ちょっと眉をしかめ、それから磁石のようにそれに吸いついてはなれない視線を、むりやりもぎはなして、そろそろと社の玄関の方へ歩みをうつした。数歩を行かないうちに、胸のうちに何とも言えないいやらしい感情がこみあげてきて、また振り返らざるを得なかった。

それはやっぱりそこにいた。

凍りついた恐怖の表情をうかべ、馬鹿みたいに口を大きくひらき、しまりかけた電車のドアにとびこもうとするように、珍妙な、不安定な恰好をしたまま……。

新聞社の編集部はひどくごったがえしていた。大部分の人間が、やっぱり同じような経験をしたらしかったし、問いあわせの電話がひっきりなしになっていた。その上社会部の蜂の巣をつついたようにしているのは、いたる所でまき起った鉄道事故だった。——幹線鉄道では、十数ヵ所で事故がおきていた。それも全部、この都市の近郊でのできごとだったので、鉄道輸送は事実上麻痺していた。しかもそのどれもが——原因不明の脱線事故だった。

「えらいさわぎですな」津田は編集局長の所へいって声をかけた。「どうします？　例の幽霊事件のあつかいは……」

局長の横には、社会部長と学芸部長が、青い顔をして立っていた。

「今それを話していた所だが……」局長は顔をこすってつぶやいた。

「僕は……」津田はちょっと唾をのみこんだ。「大きくあつかうべきだと思いますね」

「交通事故だけで、社会面はうずまる」と社会部長はいった。

「その交通事故と、今度の幽霊事件はきっと関連があると思いますがね——」

「幽霊事件というのは、どうも客観性がなさすぎる」局長はこめかみをもみながらいった。「その——つまりだな……。その人間にとってのみ存在するんだろ。第三者は決してそれをたしかめることができんわけだ」

「めいめいの幽霊はめいめいのみに属しているわけですね」津田はちょっとばつが悪そうに部長たちの方を振り返った。

「あなた方の所にも出ましたか？」

「出た……」にがい物でもかみしめるように、社会部長は眼をふせた。「おかげで、今朝、俺は家の便所にはいれなかったんだ――」

「わしの方は……」学芸部長は少しおどおどしながらいった。「いつも朝散歩する公園で見つけた。――家族もみんな見つけた」

「だが、わしにはあらわれなかったぞ！」局長はいらいらしたようにどなった。「みんながさわいどるが、わしの分はどこにも現われとらん。妙な気がするが、わしはどうにも信ずる気になれん」

「きっとどこかに……」と津田はつぶやきかけた。

「いいから幽霊事件の方は、もう少ししらべろ」といって局長は立ち上った。「ぎりぎりまでしらべるんだ。他社はどう出るか知らんが、何なら一版はおとしてもいい」

「局長はどこかへ行くんですか？」と津田はスーツケースをぶらさげて出て行く、局長の後姿を眼で追いながら、学芸部長にたずねた。

「今日の飛行機で九州へたつ」

「ははあ……」津田はうつろな眼つきをしてつぶやいた。

「ははあ、なるほど」

それから彼は、熱に浮かされたように地方部へとんで行った。

「幽霊現象は全国で起ってるのか？」彼は地方部の男の腕をつかんできいた。

「そうでもないらしい」相手は顔をしかめていった。「ここらへん一帯だけのようだな――隣の県の支局では、えらく面白がって、腹をかかえて笑っていた」

歯車が少しずつかみあわさりかけて来た。今度は火事場のようなさわぎの社会部へ行って、鉄道事故の状況をきいてみた。

「原因なんて、まだわかるもんか」社会部の男は、ペラ（原稿用紙）をわしづかみにして、かみつくようにどなった。

「いっぺんに十何カ所で起って、ＪＲも私鉄も頭に来てるんだ。俺たちゃもっと頭に来ている」

「状況をくわしく話せよ」津田は強引にくいさがった。「そしたら俺が原因を教えてやれるかも知れんぜ」

「うるせえな！」と社会部の男はいった。「まあいいや――どの事故もだいたい同じようなもんだ。この頃の列車にゃみんなＡＴＣ装置（自動交通管制装置）がついているからいいようなもんの、こんなに事故がかさなると……」

「ＡＴＣ装置は一応働いたんだな？」

「そうだ。信号は青で運転手は前方にゃ何も見えなかった。ところがＡＴＣ装置が何かを見つけて自動的に非常制動をかけた。それで、列車はずるずるっとすべって、脱線した」

「その何かにぶつかって……」と津田はいった。社会部の男は妙な顔をした。

「何にもぶつからなかった」

「それじゃＡＴＣのレーダービームは、いったい何を見つけて、制動回路を開いたん

だ？」

「わからんな。現場からはまだ……」

「レーダービームは、その列車にとって、〝眼〟に相当するもんだろ」

「それがどうした？」

「その列車にとってだけ、存在するものを見つけたんだと思わんかね？」

「まさか！」社会部の男は眼をむいた。「まさか、汽車の幽霊が……」

「現場へきいてみろよ」津田はいった。「その汽車だけが絶対はいりこめない空間があるはずだ」

「そうすると……」社会部の男はチラと横目をつかいながらいった。「汽車や自動車の幽霊も出ているわけか？」

「そう考えていいだろうな。――無生物にも、ドッペルゲンガーがあらわれているが、それはやはりその汽車なり、自動車なりにとってのみ存在する」

「じゃあ、そこいらじゅうに、他人には見えないが、めいめい幽霊がいっぱいいるわけだな」社会部の男は、ぞっとしたようにあたりを見まわした。「人間だけじゃなくて、犬や猫や、家や乗物の幽霊も、あらわれているわけだな。――ほかの連中には見えないだけで……」

「たぶんそうだろうな」

そういって津田は、電話器をのせた回転式の腕（アーム）を、いきおいつけてまわして見せた。――電話器は、空間のある点にくると、ガチンとはねかえった。

「ほら……」そういって津田はもう一度電話器をまわして見せた。「ここに、この電話の幽霊がいるぜ」

「固定されているものは、どうなってるんだ？」

「おそらく、重なりあって出現しているんだろう。そういうものはきっと――質量が倍になってるんじゃないかな」

そういうと津田は電話を印刷工場へかけてみた。

「輪転機は何ともない？　故障？――モーターがやけたって？――あのね、何とかして倍の馬力のモーターをつかうか、負荷を半分にしてやらなきゃ、使えないぜ」

電話を切ると、津田は社会部の男をふりかえった。

「というわけだ」

「だが、なぜこんなことになったんだろう？」社会部の男は溜息（ためいき）をついていった。「一体全体どういうわけだい？」

「わからんよ」津田はつぶやいた。「学者ならわかるかもしれん。――だが、もっとしらべて見なけりゃ」

しらべるといったところで、何をどうしらべていいかわからなかった。たのみにする学者たちは、ひどく慎重な態度をとっていた。――早くいえば説明のつかない事態に対して、

しりごみしたのだ。十全の意味での客観性を欠くということが、一つの逃げ口上となった。一種の錯覚だと思います、とある学者は強弁した。ええ、そりゃあ——、私も自分の幽霊を見ています。しかしですね、要するに私にだけ見えるんだから、これは主観的、心理的な現象だと思いますね。自分だけが、その幽霊にさわれるということも、これは精神障害の一種でして……。だが、物体にも幽霊が出現しているという理由がわからない。物に心があるのか？

翌日になっても幽霊は消えず、奇妙な影が、その都市をおおいはじめた。——そのうち、ほぼこの奇妙な現象の起った範囲がつかめてきた。T市を中心に半径約三十キロの円の内部でしか、『幽霊』は出現していないらしい。ニュースをききつけたほかの地域の連中が、物珍らしさにはいりこんできた。

「幽霊が出たんだそうですな」社の玄関前で津田をつかまえた、通りすがりの弥次馬が、キョロキョロしながらきいた。

「ずっと出っぱなしで、消えないんだそうですな。一体どこにいるんです？」

「そこですよ」と津田は自分の「影」を指さした。

「え？　どこに？」通行人は、気味わるそうに後ずさりしながら、あたりを見まわした。

「どこにもいないじゃないですか」

「あんたには、見えないんですよ」津田は理由もなく、カッとなってどなった。これは俺の幽霊なんだ。あんたや他の人には、見ることもさわることもできないんだ。ほっといてくれ！」

——幽霊の出現が、限られた地域内での出来事であること、そしてその地域内では、少数の例外を除いて、ほとんど全部の人々が、自分自身の幽霊を持っていることが、T市の人々に理解されてくるにつれ、二重の閉塞状況が、人々の心の中に芽生え出した。津田には自分の幽霊を見た人は、一目で確認できるように思えた。一度自分自身の幽霊に出あった人は、孤独なつきつめた表情をしていた。その眼は自己自身の内面を通して、めいめい幽霊をたえず見つめつづけているようであり、何だかすでに半分死んでいるようにも見えた。——津田には、彼等が内心に抱きつづけている感情がよく理解できた。それは——恐怖だ！　いや、単なる恐怖ではない。自分がほかの一切の人々から隔絶されているということを、絶えず内心にささやかれている冷たい恐怖感。それをささやきつづけているのが自分にだけしか見えない——さわれない幽霊だった。その日以来T市の人々はみな同じような奇妙な表情をうかべるようになった。『よそ者』は一目で見わけることができた。その表情を見ながら、津田は突然それをどこかで見たことがあると思った。どこで？　結核の療養所で？　いやちがう——ハンセン氏病の療養所で？　そうだ、それにちかい——だが少しちがう。俺はむかし、どこかで、たしかに一つの地域全体の人々が、こういう微妙な影のある表情をしていたのを、見たことがある。よそ者は決して彼等の中へとけこめない。しかも彼等自身は、めいめいがお互いに切りはなされていて、決して同じ境遇に投げ

こまれているということによる連帯性をうみ出し得ない。たしかに、見たことがあるぞ！と津田は唇をかんで思った。だが、どこで？

彼は自分の感じたことをデスクに話してみた。

「幽霊の話なら、もうやめてくれ」と学芸のデスクは腹立たしそうにいった。「俺たち——この地域の人は、いいかげんよその連中に笑い者にされているんだ。幽霊はまだいる。だがそれだけで別に何の変化もない。だからいたって、かまわんじゃないか。原因をしらべたきゃ、勝手にやってくれ」

「だが、どこかに……」と津田は一人でぶつぶつつぶやいた。

「この現象の原因があるはずだ」

彼は、世界のほかの地域で、同じような現象が起っている所はないかと、外国通信をさがしてみた。しかし収穫はなかった。

科学関係の短信にも、何のコメントもない。

——原子力ロケット、大気圏外テスト成功、

——制禦（せいぎょ）核融合装置ＣＮＦＲ—ＩＩによる初の発電実験、

——某国、宇宙空間における超大型核兵器の実験を示唆、

——原子力タンカー〈ハーキュリーズ〉の原子炉暴走事故、ＰＷＲ系動力炉近く全面廃止か？

Ｔ市の異常現象についての海外での反響は、まだ今のところ空とぶ円盤なみだった。——津田は腹だたしくなって外国通信のファイルをとじた。よその連中は面白がってやがる！　あいつらに、俺たちの気持がわかるもんか！

すでにあの現象が起ってから三日たっていた。社の玄関の階段の上から見おろす街の光景は、一見何の変りもないように見えた。しかし津田の眼には、街全体がひっそりと死の影によりそわれているのがわかった。いたる所に『幽霊』があった。建物の、車の、人々の——一つの都市の生活全体が、それ自身の巨大な幽霊におおわれている。そのため、このせわしない活気にあふれた街が、そのまま半分死にかけているような生気を失ったグロテスクなものに見える……

死！——そうだ、この『幽霊』は、人おのおのの死とそっくりではないか？　他の人間にとっては存在せず、自分自身に対してのみ存在する。それを前にして味わう直接的な恐怖は、決して他人とわかちあうことができない。ただ自分の体験から他人の恐怖を類推するにすぎない……。待てよ——と津田はまたもや考えた。俺はかつて、こういう街を見たことがある。街全体が死の影につきまとわれ、生きながら死んでいるような街を、たしかずっとまえに訪れたことがあるはずだ。

突然彼はぞっとするような気分におそわれた。知らず知らずのうちに足を運び、社の玄関前の、自分の幽霊の傍に来ていたのだった。——それはまだそこに立っていた。あの玄関に走りこもうとする姿勢のままで……。彼は、他の人と同じように、その不気味な魅力

にとりつかれ、何度も何度もその傍に立って、あきるほどその姿を見つめたはずだ。

にもかかわらず——その時は今までとまたちがったショックを、その『幽霊』からうけたのだ。彼は眼をこらしてもう一度自分自身の影を見た。すると、そこにある変化が起こり出していることに気がついた。それは微妙な変化で——一口にいえば、その姿がぐっと現実性をおびて来たのだ！　もう最初のように、むこうの景色がすけて見えるようなことはない。あいまいな所が、ほとんどなくなり、石のように、現実的な物体のように、確固とした様相をとりはじめていた。それはほとんど実在の物——社の建物や、走りまわる車、せかせかと歩いている人たちと同じもののように見えた。にもかかわらず、津田がこころみに、木切れをとってそれにふれてみると、やはり何もないのと同然に、ズブズブとその空間につきささるのだった。津田は思わず、自分の『幽霊』が、他の人間にも見えるようになったのではないかと思って、あたりを見まわした。

「あなたも、何か気がつきましたか？」

横で陰気な声がした。——痩せた男が、彼と背中あわせの方角を見つめながら、立っていた。

「私の幽霊はここにいるんですよ」そういって男は、ちょっと恥ずかしそうな笑いをうかべた。「一日一度は、ここに来て、眺めずにはいられないんです」

「あなたの方にも何か変化が起っていますか？」津田は自分の影を横眼で見ながらきいた。

「ええ、何かこう——距離的に近くなったような……ずいぶんはっきりして来ましたね、毎日毎日、少しずつ……」

「毎日？」津田は眉をひそめてきいた。

「そうです。毎日、少しずつ、はっきりして来ます。距離といいましたが、問題は時間ですよ、あなた……」

「時間——といいますと？」

「メネ、メネ、テケ、ウパルシン……」男はぶつぶつつぶやいた。「ヘロデ王のもとに、一本の腕があらわれたのです。——これはつまり告知ですな」

「何のです？」

「ああ、それがわかれば！」男はうめいた。「人はこの異常現象が起ったといっています。しかし、それはまちがいで、これは、これから起ることの予告にすぎない。時空連続体の中で——ええと、つまりですな。三次元の存在を時間軸の方向に積分すると世界線というものができる、逆に四次元の切断面は、三次元立体になるということを御存知ですかな？」

「あなた、科学者ですか？」

「そのはしくれですがね。どうも空想力が強すぎて、まともな仕事はあまりやりません。——ところで空間の属性というものを考えたことがありますか？」

「ありませんね」

「事象研究の初めに出てくる、ごくつまらん形式論理的な概念ですよ。一定の容積をもつ

特定の物体は、同時に二カ所のはなれた空間に存在することはできない。逆に同一空間に、同時に同容積をもった二つの物体がはいりこむことはできない——これを演繹すると、ある物質が占めている空間というものは、その物質自身に属する——つまり個性みたいなものを持っているわけです」

「ははあ！」津田は叫んだ。「つまり——その特定の物体しかはいりこめない空間……」

「時間軸を考えてください」男は警告を発するような口調でいった。「時間軸を考えないと、まちがいをおこしますよ。あなたはあなたの幽霊がしめている空間に、はいりこめないのでなくて、時間的にへだたっているから、その幽霊とかさなりあうことができないのです。わかりますか？　つまり同時に二カ所に存在し得ないからです」

「同じことじゃないですか？」

「いや、少しちがう——その空間が、現在のあなたにははいりこめないのに、ほかの人間にははいりこめるというのは、とりもなおさず、その空間が、時間軸上のおそらく未来のどの点かにおいて、あなた自身が占めるべき空間だからです」

「とおっしゃると……」彼は軽い頭痛を感じながらいった。

「つまりこういうことですね。これは未来のある時期において、僕が存在している場所だと……」

「表現が不正確ですね」と男はいった。「なぜだか知らないが、未来のある時期において何事かが起り、その時時空連続体が切断されて、その時の三次元空間だけが時間軸上をある長さだけ押しもどされてきた——つまりこの時空点に、それだけ余分な空間があらわれて、その分だけ、めいめいのはいりこめる空間がなくなっているわけです」

「だが、なぜそんな……」津田は呆然とつぶやいた。「あなたが物理学者ならわかるでしょう？　一体そんなことが起り得る可能性があるのですか？」

「日の下に新しきものなし、とは誰がいいましたかな」男は悲しげに首を振った。「人の世こそ、くりかえしでしょうが、物の世界には、無限の謎があります。——絶対零度付近で起る超伝導や超流動の現象を、誰が予測し得ましたかな？　反宇宙の仮説は？——われわれは非常にせまい日常性の中に住んでいます、たとえば、太陽の十億倍といわれるエネルギー密度をもつ、超新星の爆発の瞬間に、時間系がどんな形をとるか、予測のしようもない」

「それにしても、なぜ本人にだけしか見えないんです？」

「それはわからんが——」と男は首をふった。「あなたにだけ見えて、ほかの者には絶対見えないものは何ですかな？——夢の中の自分の姿のようなものは？」

その時、白衣の女が近づいて来て、男の腕をとった。

「先生、一人で歩きまわれては、いけませんわ」と女はいった。

「でも、いったろう。わしの〝影〟はここにいるんだよ」と男は指さした。「いつか、わしは、自分の〝影〟と重なるんだよ」

「さあ、まいりましょう——とても上手に私をまいてしまわれるんで、汗をかきますわ」

男は、急にうつろな表情になると、女に手をとられて歩き出した。道路のむこうに、赤十字のマークをつけたワゴンがまっていた。

（病人か――）と彼は思った。（いや――きちがいかな）

だが、男の言ったことはある程度筋が通っているような気がした。これが、未来のある時期における彼自身の姿だとすれば――その未来のある時期というのは、いつか？　そしてその時、いったい何が起るのか？

ふと――津田は、自分の〝影〟がはめている腕時計に注目した。大きくふった恰好で前へのばした左腕の袖が、少し肩の方にたくし上って、腕時計が一部のぞいていた。その分針は4の数字をさし、時針は袖にかくれて見えない。思わず津田は手をのばして、その袖をまくろうとした。――だが無論それはできなかった。彼は注意ぶかくその立像を観察した。立像は現在の時刻とは無関係に、その時の影を形づくっていた、光は西に当る方角の、やや斜め上からさし、左半分が影になっている。

（すると、午後だ）と彼は思った。

ある思いつきにとらわれて、彼は大急ぎで社に電話をかけにもどった。

「もしもし、野村？――例の〝幽霊〟は？」

「いるよ――いつもと同じ所に……。何だかいやにはっきりして来やがった」

「君の幽霊は、たしか、腕時計をはめていたね？　時刻は？」

「七時だよ、七時二十分……」

「光はどちらからあたっている？　午前か午後か？」

「ええと――午前だな、窓の真正面から朝日を浴びている」

朝日を？――彼の像は西日をあびている。この食いちがいはどういうわけか？

彼は社の誰彼にもあたってみた、一、二分の誤差で、七時二十分ということが確認された。そして――社の連中は、みんな西日をあびているといった。だが、そんなことはどうでもいい。ある日の、午前か午後かの七時二十分――そのある日とはいつだ？　その日に何が起るのだ？

彼はいらいらした気持で、外報部からおくられてくる外国通信を整理して、朝刊一版のわりつけにかかった。その時ふと一つの短信が眼についた。

「ロイター発、消息筋によれば、某国の宇宙空間核実験はここ一週間以内に行われる模様。超大型爆弾を積載したロケットは、今明日中に衛星軌道にのせられる予定である。別の消息筋によれば、この極秘超大型兵器の名は、俗称スーパー・ノヴァと呼ばれている」

その最後の言葉が、彼にはげしい衝撃をあたえた。

スーパー・ノヴァ――超新星！

『太陽の十億倍といわれるエネルギー密度をもつ、超新星の爆発の瞬間に――』とあの男は言っていた。『時間系がどんな様相をとるか、予測のしようもない』

彼には、明確な形で事態が理解できたわけではなかった。その超大型爆弾が、『幽霊』

の原因になるにちがいないとはっきり予測できたわけでもなかった。ただ、スーパー・ノヴァという『俗称』と、超新星と、あの男の言葉が瞬時にむすびつき、彼は思わず腰をあげさせた。——まるきり関係のない他国の核実験によって、さんざんいためつけられてきた日本の国民としての、根深い被害意識が、反射的に恐怖を眼ざまさせた。そしてその瞬間——まさに、その瞬間、彼は今まで何度も抱いた疑問の解答に思いあたったのだ。この死の影におおわれた街とそっくりの街、そっくりの住民を彼はたしかに前にも見たことがあった。その街とは——

被爆直後のヒロシマだった！

彼は無意識に仕事を投げ出して、ロッカーへ走った。恐怖が彼をかりたてた。同僚のいぶかる声も耳にはいらず、彼は無我夢中で帽子をかぶり、コートをはおって、社の階段をかけおりた。

逃げるのだ！　この町には災厄がふりかかってくる！

早や宵闇にとざされかけた街へかけ出した時、彼の社の前で、どんと何かにぶつかった。——それは彼の幽霊ではなく、昼間のあの男だった。男はちょっとよろけると、彼の腕につかまった。

「やあ……」とその男はいった。「またおあいしましたな」

「逃げましょう」彼は息をはずませていった。「逃げるんですよ、この街の上には恐らく……」

「むだだと思いますね」男は静かにいった。「私は始めからむだだと思っていました。いずれにせよ、それが起るのは、今日なんです」

「今日ですって？」彼は全身に悪寒の走るのを感じながら叫んだ。

「なぜ、今日だとわかるんです」

「私の幽霊は……」とその男はいって、手にもった新聞をあげてみせた。「今日の日付けの夕刊をもっています。——ほら、私のようにね」

彼はおもわず、玄関からもれる明りに腕時計をすかして見た。

七時十九分三十秒！

その時、突然、天の一角に騒音がまきおこった。——遠い空襲の悪夢をよびさます。ザアッという空気をつんざく音が……反射的に彼は男につかまれた腕をふりはらって、もと来た方にかけ出した。ふりはなされた男は、彼がさっきまで眺めていた空間へよろけこんでいった。

彼もまた、いつも眺めていた、あの『像』のことを忘れ、建物の中なら助かる見こみがあるかも知れないという、判断ではなく、幼い頃さんざんたたきこまれた知識への反射——もとより兵器の進歩に盲目な、半分動物的本能と化したあの反射によって、社の玄関にむかって突進した。あっと思った瞬間、よける間もなく、鼻先にあの幽霊の背中があった。当然どしんとぶつかる衝撃を予期して、口をあけたとたんに、彼は何の抵抗もなく、あの幽霊の体の中にすっぽりとはまりこんだ。

アパートでは、物音に驚いた野村が、思わず窓際にかけよった。
ユリ子は宵寝しようとしていた姿勢から思わず一歩わきへよって、ふりかえった。
すべての人々が、すべての街の物体が、一瞬その影と重なった時——
いくつもの偶然の事故の累積の結果、のせられるべき軌道をそれて、地上へむけて落下しつつあった某国の『スーパー・ノヴァ』弾頭は、大気圏再突入の際の過熱によって最後の事故をおこした。T市の上で、その宇宙的な閃光をひらめかし、爆心地より半径三十キロの地域と、何の罪もない人々をはるか時空の外へと吹きとばした。

召集令状

1

社のひけたあと父を病院に見まいに行き、いつもより少しおくれてかえってくると、団地の入口で、これから夜あそびに出かけるらしい武井にあった。——同じ課の新入社員で、私と同じ団地の独身アパートにすんでいる。軽くあいさつをかわして、すれちがおうとすると、

「ああ、そうだ。小野さん……」武井が呼びとめた。「この間からきこうきこうと思って忘れてたんですが——四、五ン日前に、こんなものが来たんです。……これ、なんだか知りませんか？」

たちどまった私に、彼はポケットからペラペラのハトロン封筒を出してつきつけた。封は切ってあり、うす赤い中みがのぞいている。

「なんだ、こりゃア……」うけとって、中の粗末な紙をひろげた私は思わずつぶやいた。

「——召集令状じゃないか」

「そりゃわかってますよ」と武井は笑った。

「そのくらいの字は読めますよ。だけど——召集令状って、いったい何です？」

私はちょっと呆れて武井の顔を見つめ、それからふき出した。なるほど、今年大学を出たばかりのこの青年はせいぜい二十三か四で、終戦の時はまだ頑是ない幼児だった勘定になる。この年頃の人たちが、召集令状の何たるかを知らないのは、あたり前かも知れない。

「つまり――むかしの軍隊の呼び出し状だよ。民間人が戦争にひっぱられる時は、これが来たんだ」

「へえ――なるほど……」武井はキョトンとした顔つきでつぶやいた。「だけど、それが今ごろどうしてぼくの所へなんか来たんでしょう?」

「きっとまた、宣伝か何かだろ」私は、チラシみたいに見えるその紙を、ひっくりかえしながらいった。――数年前、これと同じ手を、どこかの軍隊酒場がつかったという話をきいたことがある。

「でも……」武井は口をとがらせていった。「宣伝文句なんか、どこにもありませんよ」

そういえば――広告文らしい文句は、どこにも見あたらなかった。色のさめたような、赤い菊版ほどの大きさのザラ紙に、古めかしく、暗い感じの旧号活字で、こう刷ってある。

充員召集令状

××府　郡
縣　×市××警察署管内
武井昭太郎

右充員（臨時）召集ヲ命セラレル依テ左記日時到着參着スヘシ　令状ヲ以テ當該召集事務所ニ届出ッヘシ

但シ〇月〇日×時×分××驛（　港）發ノ　汽車（汽船）ニ乘ルヘシ

到着日時	日×第	〇月〇日午後×時
召集部隊	到着地	××市×區×町隊集會所
×　×　隊		

廣島聯隊區司令部

××第府號		
乘車（船）	自××驛　至〇〇驛	
乘車（船）等級	參　等	
運賃急行料金	圓	

後拂證ニ關シテハ證書裏面注意書ヲ參照スヘシ

それだけなのだ。――いくらさがしても、店の名や宣伝文句らしいものは見つからない。武井の名前と、日時、その他の文字は、悪い墨をつかい、ちびた毛筆で書きこんである。

「こりゃアたちの悪いいたずらだな」私はそうつぶやくよりしかたがなかった。――私自身も、戦時中はまだ中学生で、父に召集が来たものの、令状――らしきものを手にとって

ながめたのは、それがはじめてだった。

それにしても、ちゃんと団地のある土地の警察の名が書いてあるところや、乗車駅や日時まで、いかにもうがったように指定してあるのが、妙に、なまなましく、陰惨な感じだ。——戦前、内務省や陸軍省が幅をきかせていた時代の、暗い、冷たい風が、そこからフッと吹きつけてくるような気がする。

「君は広島と関係あるの？」何となくうそ寒くなって、紙片をかえしながら私はきいた。

「ええ、本籍がむこうですが……」武井は無造作に紙をポケットにつっこみながらつぶやいた。

「だけど——だれがこんなことしたのかな？」

考えてみれば、意味のないいたずらだった。——赤紙におびえたことのある戦前派をおどかすのならいざ知らず、召集令状が何だか知らないような当世風の若者に、こんなものを送りつけて、どうしようというのか？

「じゃ、どうも……」武井はペコンと頭をさげた。「すいませんでした。おひきとめして」

さっさと背をむけて、口笛を吹き吹き遠ざかって行く武井の姿を、私はしばらくぼんやりと見送っていた。その姿が常夜燈の下を通りすぎる時、ポケットからひっぱり出した、あの紙片らしいものを、まるめてポンとごみ箱にほうりこむのが見えた。——私は一瞬、意味もなくヒヤリとした。

2

翌日は朝から、むちゃくちゃにいそがしくて、そんな事はすっかり忘れていた。——やっと昼休み前に一段落ついて、ホッとひと息いれていると、

「小野くん……」と課長に手まねきされた。

「君、武井くんと同じ団地だったな」

「ええ」

「だったら、帰りによって見てくれ。入社早々無届欠席なんて、困るよ」

いわれてみれば、武井の姿は席に見えなかった。ふと胸をつかれたような気がしたが、その時はまだ、ごく軽い気持ちできながしていた。——しかし、昼休みになって、傍の書類をかたづけた時、その下に又もやそれを見つけた時は、心の底からギクッとした。

「ああ、そうそう……」思わずそれに手をのばそうとすると、隣席の佐久間という、これも今年入社の青年が顔をあげた。「それ、ゆうべ下宿に来てたんです。誰かにきいてみようと思って持って来たんだけど……」

「君の所にも……」とつぶやいた私の声は、ちょっとのどにひっかかった。

「それ、何です？」佐久間は関心のなさそうな声でいった。

「D・M（ダイレクト・メール）かなんかですか？」

私は答えず、ちょうど席をたった課長に声をかけた。

「課長は、兵歴はおありですか？」
「あるよ」課長は妙な顔をしてふりかえった。
「応召ですか？」
「そうだよ――それがどうかしたか？」
私はだまって紙片をさし出した。
「へえ！　これはこれは……」と課長はおもしろそうにいった。「また、こんないたずらが、はやり出したのかい？」
「召集令状って、こんなものですか？」
「ああ……」課長はすっぱいものでもなめたような顔つきで、その紙の裏表をかえした。
「そうだ。こいつだよ――本物そっくりだ。俺もこいつでひっぱられて……」ふと、課長は遠い所を見るような目つきをした。
「まったく、思い出してもぞっとするよ……」
「君、これに何か心あたりは？」私は席を立とうとする青年に声をかけた。
「ありませんよ」佐久間はふりむきもせず、首をふった。
「汚ならしい紙ですね」
「その汚ならしい紙一枚で、昔は誰彼の区別なく、戦争にひっぱられたんだからな」課長は苦笑しながら、その〝赤紙〟をかえしてよこした。「まったくああもすうもなかったよ。――徴兵のチの字も知らん今の若い人は、想像もつかんだろうが……」

「なんだ、ほかにも来た奴がいるんですか？」
ちょうど通りかかった、隣の課の後藤という青年が、私たちの肩ごしにのぞきこんだ。
「君もか？」私は思わず声が高くなった。
「今、それもってる？」
「いいや、――破いてすてちゃいましたよ」
「昔なら銃殺ものだな」と課長は笑った。
「ほかにも、もらったものはいるかい」
「ああ、社内で、七、八人いるらしいですよ」後藤は事もなげにいった。「なんでも、十日ぐらい前から、あっちこっちで来てるらしいですよ。――ほら、新聞にものってます」
後藤はひょいとそこにあった新聞をひろげて見せた。彼の指さしたトピック欄に、小さなかこみ記事でこう書いてあった。
〝最近全国各地の若い人たちの所へ『召集令状』と印刷された赤い紙が送られてきて、話題になっている。うけとったのは、二十歳から二十五歳ぐらいまでの独身男性、印刷物は戦中派なら誰でも知っている『赤紙』そっくりで、本人の名前が書きこまれ、入隊地、入隊日から乗る列車まで指定してあるという念のいったもの。戦争を知らない若い人たちは別になんとも思っていないようだが、父兄の中には、悪質のいたずらとして神経をとがらせている人もいるとか。――『赤紙』をうけとった青年は、すでに全国でかなりな数にのぼるとみられ一部では、警察に、調査を要望する声もあがっている……〟

「なんだ、それじゃ貰った奴はたくさんいるんだな」と、佐久間はつまらなそうにいった。
「いったい誰がやったんでしょうね？」
「国粋団体が、危機意識でもあおろうとしているんじゃないか？」と課長はいった。
「召集令状」のことは、その日の昼休み、社員食堂の面白おかしい話題になった。ただ私だけが、その日無断欠席した武井のことを思って、胸さわぎを感じていた。
あの武井に来た〝令状〟には——たしかその日が入隊日と指定してあったのだ……。
武井の方も気になったが、その日も前日約束した院長の返事をききに、父のいる病院へまわらねばならなかった。
「手術はやっぱり無理だね」と院長はいった。「死期をのばす意味でも、このままそっとしておいた方がいい」
やみおとろえた父は、寝台の上で身をよじりながら、ブツブツいっていた。
「つっこめ！……うて！　うて！——右翼に敵襲！——戦車！——おれを……おれをおいて行かないでくれ！」
「一カ月前から、もうすっかり頭がだめだ」と院長は説明した。「まだ戦争してるつもりなんだよ」
戦時中は軍国調の教育で、私や母をふるえ上らせた父ではあったが、六十こえてなお、その狂った頭の中で戦場の幻を見つづけている老人を見ると、子としてさすがに暗澹たる気持ちになった。あの頑固だった父も戦争ではずいぶんつらい目をしたにちがいない。

父の寝台に背をむけた時、ふと、なにか心のすみにひっかかるものがあった。病室の外で、私はちょっとたちどまって、それがなんであるか考えようとした。——だが、結局なんだかわからなかった。

3

その晩たずねた武井の部屋は、鍵がかかっており、彼はまだ帰っていなかった。——その晩はとうとう帰ってこず、翌日も無断欠席だった。その翌々日も……
若い社員が、次々に無断欠席しだして、それが社内で問題になりだしたのは、ちょうどそのころからだった。彼らが、単に若気の気まぐれから、二、三日ちょいと行方をくらましたのではなく、はっきり「家出」あるいは「失踪」したのだと確認されるまで、もう少し時間がかかった。——失踪そのものは、それほど珍しい事件ではない。一九六三年中に、東京だけで五千五百人の男たちが、その住居から姿をくらましている。そのうちの千五百人は、「蒸発」としか考えられないような、理由もなく、「痕跡」ものこさない不思議な消え方をしているのだ。——しかし、独身男性の失踪が、全国各地で急にふえだし、それと例の〝赤紙〟との関係が、はっきりうかび上るにおよんで、事件はようやく社会的問題になり出した……。「こりゃひどい！」片隅の短信欄から、一躍社会面のトップにおどり出たこの問題の記事を読んで、私は思わずうなった。「この二週間に、全国で七千五百人の若者が姿を消したって書いてあるぜ。——それもみんな例の召集令状をうけとった奴ばか

り——消えたのは指定された入隊日の前日……」

「その数字は、まだまだふえそうだって話だぜ」会計課の中崎という偏屈な男がいった。「新聞に書きたてたので、はじめて、肉親の家出と〝赤紙〟の関係に気がついた連中も多いらしい」

私は思わず空席の目だつ室内を見まわした。——武井の席はもちろん、今は隣の佐久間や、後藤の椅子も、からっぽになっていた。そのほかにも、二、三の席があいている。

「警察は何をもたついてるんだ！」私は仕事も手につかないままに、新聞をたたいてぼやいた。「いまごろになって、やっと本格的調査にふみきったというじゃないか」

「なにしろ最初は、各所轄署別に、単純な家出人として届け出があっただけだからな」中崎は神経質そうに髪をかきあげた。「だから今まではふつうの家出人捜査の形でしらべてたんだ。——これをはっきり、大規模で計画的な誘拐事件として、全国総合捜査にふみきるのには、まだ時間がかかりそうだぜ」

「だけど、いったいなぜ……」私は爪をかみながらつぶやいた。「国粋団体の、政治的陰謀かなにかかな？」

「秘密軍事組織という噂もあるな」若手課員につぎつぎに消えられて、いいかげん頭に来ているらしい課長は、いらいらした口調で口をはさんだ。「おぼえてるか？　何年か前に、どこかの地下団体が、日本の青年を秘密義勇軍にしたてて、こっそり東南アジアかどこかへ送り出していたとか——議会で問題になったろ？」

「だけど、それとこれとは様子がちがいますよ」と私は反論した。「消えた連中は、どう考えたって、義勇軍に行きそうな柄じゃない。世界無銭旅行にゃよろこんで行きそうですがね——それに、ちょっと大規模すぎるし……」

「それじゃ国際的人身売買団の誘拐か」課長はやけっぱちな口調でいった。「日本の青年は優秀だから、どこか新興国の官吏か何かに売りとばされるのかな——それともタネ馬かも知れんぜ」

「それにしたって、誘拐をわざわざ赤紙で予告するってのは変ですよ」中崎はボソボソつぶやいた。「もっと事態を直視すべきじゃないですかね？——話にきくと、失踪した連中は大てい身体強健な二十二歳から五、六歳の独身者で、ほとんどが次男だってことです」

「それがどうだというんだい？」

「つまり……」中崎はうつろな眼つきで宙を見つめながらいった。「ひょっとしたら、これは——ほんものの召集かも知れないぜ……」

課長と私は思わず顔を見あわせた。——とりわけ私は、胸をつかれたような気がした。ずっと前——いや、ごく最近——二、三カ月前……誰かがそのことをいっていたような気がしたのだ。そいつは誰だったか？　どこできいたのか？——私は必死になって思い出そうとした。だが、あせればあせるほど、その記憶はあいまいになっていった。

不気味に古めかしい「召集令状」は、その後も適齢期の男子のいる家庭の戸口に次から

次へとあらわれた。あらわれたというのがこの際もっとも正確な表現であろう——。というのは、警察の調査によって、この紙片が正規の郵便ルートによって、配達されたのではないということがはっきりしたからである。とすると、誰かが投げこむのか？

——しかし、北海道から九州のはてにいたるこの大規模な「投函」に対して、誰一人、それらしい人物の姿を見かけたものはいなかった。

大事な息子に、不吉な「召集」をうけた親たちや、召集をうけそうな年齢の息子をもった親たちは、目の色をかえて警察へかけこんだ。警察はいったい何をしているのか？　なぜ、全警察力をあげて、この奇怪な誘拐団体をつきとめないのか？　せめて誘拐そのものぐらいはくいとめろ——警察もいまは「令状」の出所をしらべるより、誘拐の予告をうけた若ものたちの保護に、必死にならざるを得なかった。最初のうちは、とぼしい人員をさいて、令状の来た家には、「入隊日」に二十四時間見張りをつけていたが、「令状」の来かたがはげしくなると、とてもそこまで手がまわらなくなって来た。——だが、結局見張りをつけようがつけまいが、おなじことだった。いったん令状をうけとった若ものは、どんなに厳重に監視され、護衛されていても、入隊の前日、令状に指定された汽車に乗る時間の少し前になると衆人環視の中で煙のように消えうせたのである。

この奇妙な召集が、いわば「不可抗力」だということが知れわたった時、一部ではほとんどパニックにちかい状態がおこりかけた。——親たちは、連日デモを組んで国会におしかけた。政府は何らかの手をうたないのか？　誘拐防止に自衛隊を出動させろ、戒厳令を

しけ——だが、その自衛隊や警察の人員にも赤紙が来はじめていた。全国で「召集」された若者の数が、数万のオーダーに達した時、政府もむろん、閣議や議会で、この「赤紙事件」を問題にしだしたが、——しかし、いくら論議したところで、こういう原因不明の超自然現象に対して、打つ手があるとも思えなかった。召集は社会的な差別をつけないみたいだった。——著名な政治家や財界人の御曹子たちも、「赤紙」一枚で次々とどこかへひっぱられていった。その人の社会的地位や財力は、この情け容赦ない力に対しては、まったく無力だった。俳優や、歌手や、作家や評論家やスポーツマン——若い有名人たちも、かたっぱしからひっぱられはじめた。ある人気歌手にそれが来た時、ファンは文字通りきちがいじみた「親衛隊」をつくった。しかし、その歌手は、ちょっと強がって見せるために、「入隊」当日にステージで歌い、歌のなかばで短い悲鳴をあげて消えうせた——。

最初のうちこの事件にもっとも強烈な反応を見せたのは、もらった当人たちよりも、むしろ周囲の連中だった。——初期の段階で「赤紙」をもらったのは、ほとんどが純然たる戦後派ばかりで、細いズボンのにあうかっこいい若者たちは、恐れるよりもむしろ面くらい、ウロウロするばかりだったのである。召集ときいて古疵にさわられたようにとび上ったのは、あの時代を知っている中年以上の連中だった。混乱の当初、怒りくるった群衆におそわれたのは、右翼団体の事務所と今はもうだいぶ数のへっていた軍国酒場だった。楽器店もおそわれて、リバイバルものの軍歌レコードが、かたっぱしから歩道にたたきつけられた。軍隊ものや戦争ものを放映しているテレビ局もおそわれ、子供むけの戦争ものを

掲載している少年雑誌の発行所や、ついには戦争中の軍用機や戦車、軍艦のプラモデルを売っているオモチャ屋までがおそわれた。「きさまたちがいけないんだぞ！」いつもは平凡な市民であり、親たちである人々は、いまは理性を失った暴徒になり口々に叫んだ。「きさまたち――何百万人の同胞を殺した戦争を、のどもとすぎれば熱さを忘れるからといって、下劣な食い物にしてきたきさまたちが、またおそろしいものをよびおこしちまったんだ！」

映画会社も出版社も、戦争ものの企画を全部やめた。――現実の中に「軍隊」と「戦争」の影がしのびよってきた時、あれほどマスコミで隆盛だった戦争もの、軍隊ものが、まったく影をひそめたのである。――酔えば酒場の片隅で、きまって誰かが歌い出した、あの昔なつかしい軍歌も、バッタリきこえなくなった。かわってあらわれたのは、陰惨でひたむきな、そしてどう考えてもまとはずれな反戦ムードだった。

「私たちの愛する子供や夫や恋人を、おそろしい軍隊の手からまもりましょう！」

母親や主婦の団体が、連日大会をひらいてこう叫んだ。――たしかにこの召集に対しては、男たちよりも、女たちの方がはげしくたたかう姿勢をしめした。――だが、たたかうといっても、いったいどうやって？　何に対して？

「君たちも、今度はいっしょにたたかってくれ」左翼関係の男が、私たちをアジリに来た。「前の戦争の時は、みんな戦争はいやだという気はありながら、何もせずにズルズルと戦争にまきこまれていった。――今度こそあの悲惨の二の舞いをしないように、われわれは結束してたたかわねばならん」

「何に対して？」と私たちはきいた。

「むろん、戦争勢力に対してだ！」男は手をふりまわした。

「これはどこか、世界の裏側にかくれている戦争勢力の陰謀にちがいない」

「で、どうやって？」

「国民みんなが団結して否（ノン）といおう！」男は絶叫した。「たとえ君たちがついてこなくとも、おれはただ一人でたたかうぞ。召集をあくまで拒否し、地下にもぐって抵抗をつづける！」

4

「戦争反対」「召集拒否」のプラカードをもった婦人団体のデモが、毎日街に見られるようになった。――しかし、その叫びは、まとはずれなままに、いたずらにヒステリックな調子をおびてゆくばかりだった。

一方当の男たちの間には、早くもものがなしいあきらめの空気がただよいだした。――いったん令状が来たら、どうあがいても、どんなに逃げまわってもむだだ、ということが次第にわかってきたのだ。――海外逃亡をこころみたものも、むろん大ぜいいた。しかしこの事件の開始以来、適齢期の男で海外脱出に成功したものはほとんどいなかった。――妙なことで渡航手続きがだめになったり、逃げ出そうとしたとたんに消えうせたりするの

だ。この奇怪な「召集」システムは、当時世界一といわれた戦前の警察力までそなえているらしかった。——事実、入隊日が来て、恐怖にふるえている人々の耳に、ガチャリ、ガチャリというサーベルの音が——戦前の巡査がつっていた佩剣の音がきこえてきたこともあるという。

「すこしわかりかけたような気がする」

会計の中崎が、おもやつれした顔をのぞかせていった。——この事件がはじまって以来、彼はろくすっぽ仕事もせず、毎日ぼんやりと、何かを考えているようだった。

「わかりかけたって、——何が？」

「この事件の起った理由さ」

「理由だって？」私はあきれて叫んだ。「こんなばかばかしい事に理由なんて考えられるかい？　世の中が、気がくるったとしか思えないじゃないか」

「ばかばかしい現象には、それにあてはまるばかばかしい理屈があるはずだ」

「だって、——衆人環視の中で人間が消えるなんて現象に、どんな理屈がつけられる？」

「人間がふいに、消えるなんて、そう珍しい現象じゃないよ」中崎は眉をしかめていった。「十九世紀末に、テネシー州のデヴィッド・ラングという男が、まっぴるま、見とおしのきいた牧場で、家族や知人の見ている前で、あっという間に消えうせたことがある。垣根からとびおりようとした子供が、地面に足のつく前に、空中で消えた、という例もある。雪の夜に水汲みにいって、井戸の手前で突然消えた男の話もある——家族のものは、雪の中でふっつりとぎれている足あとの上空で、男が助けをよんでいるのをきいた。しかし男の姿は見えず、助けを呼ぶ声は次第に空中を遠ざかっていって、消えた……」

「だけど……」私は不気味な思いにとらわれながらいった。

「今度のは、個人じゃなくて集団だぜ」

「集団で消えた例もごまんとあるぜ——十八世紀にはフィリピンの軍隊が突然消えうせ、同じ時間にメキシコにあらわれたこともある。つい最近、エスキモー集落の全員が、食事の準備をしたまま、影も形もなくなった事がある……チャールズ・フォート（アメリカの超自然現象研究蒐集家）は、こんな記録をやまほど集めてるよ」

「つまり……」私はうろおぼえの知識をふりしぼっていった。「そういった連中は、異次元空間にでものみこまれたんだ、とこういいたいんだろう」

「ところがそれでは説明できない。空間のもつ、未知の性質によっておこる特殊な物理現象だとしたら——いったいあの時代がかった召集令状はどうなるんだい？」

そういえば——これは単なる消失現象ではなかった。私は返答に窮した。

「もう一つ、〝パラレル・ワールド〟という考え方がある」中崎はふだんからSFなどというきちがいじみた小説を読んでいるので、妙なことをたくさん知っていた。「つまり、この世界のすぐそばに、われわれの眼から見えないが、構造から、そこに住んでいる人間まで、何から何までこの世界とそっくり同じで、しかも歴史が異なった展開の仕方をしている世界が存在する、という考え方だ」

「そいつだ！」私は思わず叫んだ。「きっとそれにちがいない。この世界のすぐ隣りに、あの戦争がまだおわっていない世界があって……」

「ところが、それでもまだ説明しきれないんだよ」中崎はうつろな眼つきでいった。「二つの世界が偶然、接触したのなら、その接触は双方から同じように観測されるはずだ。こっちからむこうへばかり、人間が行くというのは、おかしいよ」

「どうでもいいじゃないか——どうせ架空の理屈だろ！」

「架空の論理だって、論理は論理だ」中崎はボソボソつぶやいた。「消えるなら消えるで、そこになんとか辻つまのあった理屈を見つけたい。理由もなしに、ただ消えるんじゃ——人間として、ねざめがわるいよ」

5

「召集令状」は、今やペストのように、手のつけられない勢いで、日本中をあれくるいはじめた。もはや人々は、この世界のどこか裏側で、目に見えない戦争が起っているということを、うたがわなくなっていた。そしてこのころになると——単に召集令状ばかりでなく、息子をうばい去られた家族のもとへ、「戦死公報」がまいこみ出したのである！　親たちの悲痛な慟哭が、巷のあちこちからあがり出した。それをきくと、まだ召集をうけていない男たちは、まるでそれが自分たちのせいであるかのように、後めたい気持ちにおそわれるのだった。

「だんだんひどくなってくる」私は妻にいった。「いまは二十の連中ばかりだが、いずれ三十代もひっぱられるかも知れない。もし、ぼくが——」

「いやよ！」妻は二人の子供がびっくりするほどはげしい声でいった。「そんなのいや！　どこかへ逃げましょうよ！」

「逃げたってだめなことはわかってるだろう」私は胸のあたりに冷たい恐怖がゆれるのを感じながら、わざと投げやりな調子でいった。

「戦前の特高、知ってるだろう？——どんなにあがいても、内務省と憲兵の手からはのがれられやしないよ」

「でも、そんなの昔の話でしょう」妻は眼をギラつかせながらいった。「何もかも売りはらって、今のうち海外へ逃げましょうよ。着のみ着のままで……、あれがこないうちなら、逃げ出せるかも知れないわ」

「しかし……」私は気弱くいった。「噂によると、適齢の男たちで海外へ逃げ出そうとしたやつは、みんな妙な具合に失敗しているらしいよ。それに——」

「それに、何よ」

「ずっと病院にいる親父を——あの年よりをほったらかして逃げるのは……」

「だって、お義父さんは年も年だし、それにあんな、き……」

「おい！」私はどなった。「子供の前でそれをいうな！」

二人の子供をかかえた妻の不安は、私にもいたいほどわかった。——といって、彼女に

できることといえば、私の保険の額を倍にするくらいのことだった。

失踪した人々の家族に対する補償について、政府はしばらくもめていたが、結局当面の臨時措置として、雀の涙ほどの金額を出すことにきめた。むろん、一家の働き手をいやおうなしにうばいさられた、農家やサラリーマン家庭の痛手は、これくらいのことでは焼石に水だった。——「召集」されたものの給料支給のことで、どこでも労組と会社側が長い間もめた。しかし結局は〝遺族〟と会社との確執が、最後までのこった……。

季節は初夏にむかっており、毎日晴れた日がつづいた。さわやかな風が街路樹の若葉をそよがし、明るい日ざしはさんさんと街の上にふりそそいだ。巷には人があふれ、商店には相かわらず華やかな品物があふれていた。一見それは、例年と何のかわりもない、春先の世間のように見えた。——しかし、その明るい風景の上に、目に見えない〝戦争〟の呪わしい影が、かげろうのようにゆらめいていた。

この世でないどこかで、いまもなおあれくるっている戦争は、どうやら日増しにはげしさをくわえてゆくようすだった。——巷の中に、あの「かっこいい」若ものたちの姿は次第にまばらになってゆき、そして……

すでに六人の若手課員が「召集」され、急な補充もつかないままに、日夜ひどい超過労働においまわされている私たちの前に、ある朝突然、課長が丸刈り姿であらわれたのだ。

「とうとう俺ン所にも来たよ」課長は赤く血走った眼をギラギラさせながらいった。「俺は通信関係の、いわば、技術将校だったからな。その特技を買われて、一足先にお召しにあずかったらしい」

課長はよっぱらっているらしかった。——しかし、そのいい方には、半分本気みたいな所もあった。

「のがれられんと知ったら、いさぎよくお受けすることにしたよ。じたばたするのは見苦しいからな」課長は青々とした坊主頭をなでてわざとらしい豪傑笑いをした。「考えてみりゃ、おれは前にいっぺんこういう時代を経験してるんだ、その時とちっとも変らん——それが始まっちまえば、もう個人の力ではどうにもならんのさ。誰の力でもどうにもならん。こういう時代にうまれあわせたのが、不運ってもんだ」

課長はそれから一週間、毎日よっぱらって会社へ来た。それでも事務ひきつぎはきちんとやってのけた。——休み時間には、から元気をつけるように、大声で古くさい軍歌をうたったり、

「お前たちもあとからこいよ。戦後派のヘナヘナ野郎どもに、ヤキをいれてやる」などといやがらせをいったりした。

いよいよ明日入隊という日、課長は赤いタスキをかけて、上役のあいさつにまわった。——せめて課長を、それらしく見送ってやろうという声があがって、その夜、令状に指定された汽車の時刻の少しまえに、有志が紙の小旗をもって、課長の家に集った。——近所の人も、気の毒そうな表情で、顔を出していた。

子供は親類にあずけたとかで姿が見えず、夫人一人が顔をおおって泣いていた。ベロベロによって、青い顔をしている課長は、手に緑色の布でつくった奉公袋をさげ、あやしげな敬礼をしながら呂律のまわらぬ舌であいさつした。

「みなさん、かくも盛大なお見送り、ありがとうございます。不肖田村浩三、いったんお召しをうけたからは、滅私奉公、死して護国の鬼となる覚悟であります。ではみなさん、行きます！」

私たちは意気あがらぬ声で万歳を叫んだ。

駅に課長を送って行く途中、課長がどうしてもうたえというので、私たちはうろおぼえの文句をたどりながら、やけっぱちの声をはりあげてうたった。

〽わが大君に、召されたる
　命栄えある、朝ぼらけ！

夜の街路で行きかう人たちは、びっくりしたようにふりかえり、それから顔をそむけて立ちさった。——私はふと、中学生のころ、こうやって出征する父を送って行ったことを思い出した。父も戦争末期に召集をうけた時はすでに四十すぎだった。熱烈な市井の国粋主義者だったので、しきりに肩肱はって勇ましく見せようとしていたが、そのやせて貧相な姿は、どこかさむざむとあわれであり、戦地でまた、持病の痙攣の発作を起したりしないかと、思わず胸がいたんだものだった。——奇妙な行列は、日の丸の小旗をふりながら、パチンコ屋やジャズ喫茶のならぶ駅前通りを進んでいった。駅につく少し手前で、課長の姿は消えた。私たちは気のぬけた万歳を叫び、それからちりぢりになった。

すでに人々は、目に見えない戦争を一つの〝事実〟としてうけいれ出していた。古めかしい「歩兵操典」が、目先のきいた本屋によって再刻され、とぶように売れた——どうせ「召集」されるのが避けられないのなら、せめてあちらへ行っていたい目にあわないように、忘れた知識をとりもどしておこうというのである。同じような理由で「親心」から、民間人や学生の軍事教練の復活がとなえられたりした。

かと思うと、その昔の〝検査のがれ〟の手が使えないものかと、入隊日前に、むりをしてドンブリいっぱいの醤油をのんだり、鉄棒に片手でぶらさがったり、あわれにも滑稽な努力を必死にやるものもいた。——だが、いったん召集されたものが、かえって来たという噂は、一度もきかなかった。親たちも、きき目もわからぬ昔の知恵を思い出して、次男を他家の養子にやって、戸籍上の長男になおしたり、急に僧籍にいれたり無駄な努力をつづけた。——また戦時中、理科系の学生が召集されなかったことを思い出して、文科系から理科系へかわろうとする学生が殺到した。

——あいかわらず外見ばかりはなやかな、消費ムードにあふれた街角に、つきつめた表情の婦人たちが、千人針の布を道行く人にさし出すのが見られるようになった。戦争反対のデモの姿が消えたかわりに、日の丸の旗をもって、「天にかわりて」や「出征兵士を送る唄」をうたって行く行列が見られるようになった。もっとも、人々がそれをうけいれた

といっても、抗うことをやめただけで、結局それをどうしていいのかわからなかったのだ。政府もまた、補償金の増額を行う以外、何の手もなかった。——ゴールデン・ウィークは、やっぱり大変な人出だった。だが、今はレジャーをたのしむというより、「召集」されないうちに、できるだけたのしんでおこうという人々が行楽に殺到したのだった。

今では、もはやおおいがたい荒廃が、この明るい、消費的な時代をむしばみはじめていた。——「召集」されたものは数十万のオーダーか百万のオーダーに達し、街頭から二十代、三十代の健康なホワイトカラーの姿は、ほとんど消えた。それは社会の中にポッカリあいた、暗い空洞のように見え、しかもその空洞は、年齢の上下へむかってなおもじりじりと拡大しつづけていた。

ついに——学生たちにも召集令状が来だした。つづいて令状の黒い爪は、十代の若者たちにまでのびた——あちら側ではいよいよ戦局急を告げ、あのいまわしい学徒動員時代のように、「勅令をもって」学生たちの徴兵猶予をとり消し、次いで徴兵年齢を満十九歳にひきさげ、さらに満十七歳にまでひきさげたらしいのである！

学生たち、ティーンエイジャーたちは、兇暴な目つきで街をうろつきまわり、酒をのんであばれたり、刹那的な乱交にふけったりした。自暴自棄的な車の運転や、自殺的登山もふえた。——やっていることは、それまでとあまりかわらなかったが、そこにははっきりと、一抹の悲哀が彼等の行為をささえだしていた。「理由なき反抗」が、いまや「理由ある反抗」にかわったのだ……。

そして——「学徒動員」に前後して、あの空洞は上の方にもひろがって来た。四十以上の世帯持ちや、昔なら兵役免除の「丙種」に相当する虚弱な連中にまで……とうとう中崎にそれが来た。——つづいて私にも！

もはやあちらには紙もなくなってきたらしく、通知は電報できた。赤いテープを隅にはりつけた、粗末な電報用紙をにぎりしめて、まっさおになっている私を見て、妻は二人の子供を力いっぱい抱きしめると、ワッと泣き出した。——強度の近視で、虚弱体質の私には、ひょっとしたらという期待もあったのだが、戦局はそんな人間まで、かり出さねばならないところに来ているらしかった。当初にくらべて、通知から入隊までの余裕がだんだんなくなり、私に指定された入隊日は、翌日の晩だった……

6

翌日は朝から会社であとかたづけをしたり、給与関係の交渉をしたり、あわただしい一日だった。できれば父にもわかれをつげたかった。——すでに若い連中や中年の連中が、ほとんど出征してしまった会社は、ガランとして活気がなく、人影もまばらな室内に、定年退職後またかり出された老人たちがポツン、ポツンと坐って、老眼鏡の奥の眼をしょぼつかせているのも、うそ寒い光景だった。

悪夢の中でもがいているような一日が、あっという間にすぎさり、クタクタになってかえってくると、妻はむこうをむいて、すすり泣きながら、新しい腹巻をぬっていた。——

二人の子供は、すでにいいきかされたのか、おびえたような顔つきで部屋の片隅に膝をそろえてすわり、よってこようとしなかった。私もまた、父の所へ行かなくてはと思いながら、彼らから少しはなれ、顔をそむけて坐った。——肩でしゃくり上げながら、一針一針ぬっていく妻のあれた手を、眼の片隅に見つめているうちに、私の中には次第にやり場のない怒りがこみ上げて来た。下の女の子が、その場の空気にこらえ切れなくなったように、突然ワーッと泣いてとびついて来た。

「お父ちゃん、どこへも行っちゃいやだ！　どこへも行かないで！」と泣き叫ぶ声をきいた時、私は思わず娘をギュッと抱きしめてたち上った。

いったいなぜ、こんなバカなことになっちまったんだ！——私はせいいっぱいどなりたかった。——こんなバカげたことをひき起したのは、どこのどいつだ？

逃げるんだ！——私は妻に声をかけようとした。むだなことはわかっていても、ここでこうしてじっと待っているよりは、親子四人手をとって、とにかく逃げられるだけ逃げてみよう！

その時——ふいにドアがはげしくノックされた。親子四人は、一瞬石のようになって抱きあった。——だが、来たのはあれではなく、病院からのチチキトクの電報と中崎からの速達が、いっしょに配達されたのだった。

「入隊まで、あと一時間ある」私は時計を見ながらいった。

「車をよんで来てくれ。——死水はとれないかも知れないが、とにかく行ってみる」

妻が顔をおおってとび出して行くと、私はいらいらしながら中崎の手紙の封を切った。

「可能性はただ一つだ……」中崎はいきなりこう書いていた。「入隊が、あと数時間にせまったいまになって、やっと思いついた。——可能性といっても、われわれがまだ立証し得ないような力、しかし、そんなものがあるかも知れないとおぼろげながら推察し得るような力が、実際あると仮定してだが——しかし、そう仮定することによって、この現象に、一応辻つまがあう説明ができるなら——僕はそれで充分満足だ。

「この現象は、前にもいったように、並行するもう一つの世界——パラレル・ワールドとの接触という概念では説明できない。二つの世界の偶発的な接触や交錯にしては、あまりに長期にわたるし、しかも計画的——むしろ人為的すぎはしないかい？　そこには、単なる超物理的な原因じゃなく、人間の意志が働いてるみたいだと思わないか？

「そうだ——可能的な説明はそれだけだ。この現象は、誰かの意志によって、起ってるんだ。そう考えると筋が通ってくる。

「超能力というのをきいたことがあるだろう。——他人の心を読みとるテレパシイや、遠方のもの、壁のむこうのものを見通す透視（クレアヴォヤンス）、ものごとを事前に察知する予知（プレコグニション）——どれもこれもはっきりあるとは、科学的に証明できないが、古くからあると思われて来たし、あるかも知れないという兆候はたくさんある。——真剣に研究している科学者は世界中にいるし、アメリカでは国防関係が大金をつぎこんでるってことだ。たしか一九五九年には、原子力潜水艦まで使って実験をやってる。

「この超能力の一種に、念力（サイコキネシス）というのがある。——意志の力で、思った通りの現象を起す力だ。サイコロをふって、自分の思った通りの目を出す。もっと強い力になると、サイコロに手をふれずに、意志の力で、サイコロを動かすこともできる、というんだ。

「かりに、——ここに単にサイコロのみならず、自分の念じた通りの、社会的現象を起すことのできる男がいたと仮定しよう。ずいぶんムチャな仮定だと思うだろうが、サイコロを意志の力で動かせる力が実在するとすれば、同じ能力を社会的次元にまで拡大して考えることもできるじゃないか。

「結論はもういってしまったようなものだ。——そういう超常識的な力をもった人間がどこかにいて、そいつが、こんなことが起ればいいと念じたんだ。人間の心なら、どんな恣意的なことでも思い描けるから、そいつの心に描いた通りの、まったくムチャクチャな、非合理的なことが起ったんだ。——ずいぶんムチャな仮説だと思うだろう。だけど何度もいったように、これだけが唯一（ゆいいつ）の可能な説明だ。それに——人類を破滅させる大戦争だって、はじめはたった一人の人間の心の中に芽生えてくるって、よくいうじゃないか。

「そいつが誰かは知らない。しかし、どんな男かは、大体想像できる。——むろん日本人で、おそらくもう、相当年配の男だ。戦争にひっぱられたこともある。召集のいろんな段階を知ってることを思うと、戦争も、もう大分末期にひっぱられたんじゃないかな。すでに彼自身が、その時相当の年配だったかも知れない——おそらく、彼の心の奥では、まだあの戦争が終ってないんだ。一方、戦後の風潮に対して、特に今の若い連中に対しては、日頃から、頑迷で時代錯誤の、はげしい憎悪を抱いていたんだ。今の世のそういう連中の上にこんなことが起ったらいいと、一種の復讐心（ふくしゅうしん）をこめて考えていたにちがいない。——それやこれや合わせて見ると、その男はもうすでに……」

私は最後の文字を読まなかった。夢中で外へとび出すと、妻がやっと見つけて来たタクシーにとび乗り、上ずった声で叫んだ。

「K——精神病院へ！」

そうだ、それにちがいない！

——どうして、今まで思い出さなかったのか？　この事件のはじまる前に、こんなことが起ればいいと口走っていたのは——ここ数年間精神病院にはいっている、私の父だったのだ！　あれは——たしか事件のはじまる二カ月前だった。病院に父を見舞った時、ちょうど発作を起しかけていた父は、体をぶるぶるふるわせながら、はげしい憎悪をこめてつぶやいた。

「いまの……若いものは——まったくなっとらん！　あんな連中は……召集でひっぱって……戦争できたえなおしてやればいいんじゃ……」

発作の時は、いつも正視にたえない気持ちになるので、私は窓際に立って外を見ていた。そのブックサいう言葉も、とぎれとぎれに背中ごしにきいただけだった。——年老いた狂人のいうことは、いつもとりとめないことばかりだったので、私は気にもとめず、すっか

り忘れていたのだ。しかし、今その記憶は、意識の底からはっきりよみがえって来た。もし中崎のいう通りだとすると……。

実をいうと、父は、時々未来のことをいいあてたことがあった。発作の前に、神がかりみたいになって、予言の能力を発揮することがあったのだ——いや、「予言の能力」だと、周囲のものも私も思いこんでいたのだが——予言が的中したと思われていたことが、実は念力（サイコキネシス）によって、実現されたことだとしたら……

たとえば——こんなことがある。まだ、私が子供のころ、家のむかいにモボモガのたむろする洋館があった。父は連中がダンスに興じたり、ギターをかきならすのがすっかり頭に来て、ある日体をぶるぶるふるわせながら、その家をにらんでどなったものだ。

「あんな家、今に焼けちまうぞ！」

——それから二カ月後、その家は失火を起して焼けた。

そのほかにも、思い出せば数かぎりなくある。近所のくせの悪い犬の死も、父が二カ月前に予言した。遠方の親戚（しんせき）の奇禍も、内閣の更迭（こうてつ）も、蘆溝橋（ろこうきょう）事件も、みんな二カ月前に……一時はあまりあたるので、素人占いをはじめようとした事もあったが、これはみじめな失敗におわった。

予言は、父が持病の癲癇様発作を起す直前でないと、あたらなかったのだ。

いや——それが一見予言のように見えていたが、自分でもそれと知らず巨大な念力（サイコキネシス）の能力をもっていたのだとしたら——はたからは二カ月前に予言したようにみえた事が、事実父の念力によって、二カ月後にひきおこされたのだとしたら……

私は思わずぞっとした。大東亜戦争の起るちょうど二カ月前、父が何に興奮したのか、新聞をたたいて、ブルブルふるえながら、こうどなっているのをきいていたからである。

「米英は何としてでもやっつけなきゃいかん！　ぜひ一ぱつガンとくらわす必要がある！」

まさかそんなことが！——私は眼の前が暗くなるような気がした。ひょっとしたら——あの大東亜戦争をひき起したのは、父だったのかも知れないのだ！

すべてが彼の思い通りになるとはかぎらなかったのは、父自身が、自分の能力に全然気がついていなかったのと、意志の実現が発作の前に念じられた場合にかぎられていたからだろう。後期の戦局は、父の切歯扼腕（せっしやくわん）にかかわらず悪化し、彼の実現し得たのは、ただ一つの思いだけだった。

「わしも戦争に行くぞ！」連日の悲報に、父は興奮しきって叫んだ。「老いたりとはいえ、わしだってまだお役にたてる！」

二カ月後にあの召集令状が来た。

もし本当に、あのいまわしい戦争が、実際は父の力によってひきおこされたにしても——だれも父を責めるわけにはゆくまい。父は平凡な、心のせまい安月給とりにすぎなかった。郷里の先輩にあおられて、国粋思想にかぶれたものの、政治運動に参加できるような柄ではなく、国士づらしたお寒い下っぱ連中に時おり家におしかけられて、さんざん飲み

食いされては、その豪放ぶった笑い声や大言壮語に、自分も何とか肩肱はって仲間にくわわろうと、一生懸命になるのが関の山だった。——かわいそうな父！——思うにまかせぬ身辺の鬱憤に、ききかじりの神がかり思想の衣をつけ、生活が苦しいのは、彼が世にみとめられぬのは、日本がくさっているからだと本気に信じていた。もしあの、一億の人間を塗炭の苦しみにたたきこんだ大戦争が、本当に市井の片隅の、心貧しい男によってひきおこされたにしても——その平凡な心せまい男に、あれほどの憎悪を吹きこんだのは誰だ？米英をやっつけねばならぬと思いつめさせたのは——一体誰なのだ？

父は、戦闘中発作を起して捕虜になり、戦後病みおとろえて復員してきた時は、もう廃人同様になっていた。家族のものは、戦時中父に抱いていた恐怖を、戦後は憎悪と侮蔑にかえてぶつけた。父の心はすでに幾重にも傷ついていたにもかかわらず、肩肱はって威厳を保とうとする姿勢は、まだほぐされていなかった。そんな父を、一層憎み、完膚なきまでにたたきのめした子供たち——父の発作ははげしくなり、その体は家族の厄介者になった。母が逝くころには、彼は終日一室にとじこもり、ブツブツ時代はずれの呪詛をつぶやく半狂人になっていた。昔の知己の経営する精神病院に、別格あつかいにあずかってもらってから、もう十年ちかくたつ。——そして——この事件のはじまる二ヵ月前に、何年ぶりかで、くるった老人の心にやどる呪詛とあの発作とが、また一致したのだ。

——今の若い奴らに、召集令状がくればいい！

ラッシュ時の交通麻痺をぬって、やっと病院にかけつけた時は、あと十分しかなかった。

「早く！」顔なじみの院長がせきたてた。「今度発作が起ったら、心臓がもたん」陰惨な感じのする廊下をぬけて、病室にとびこむと、骸骨のようにやせほそった父は、うすい唇をひきむすび、膜のような眼蓋をとじていた。尖った喉仏が上下するたびに、ヒューヒューという音がそそけだった鼻からもれた。

「お父さん！」と私は叫んだ。「教えて下さい。今度のことは——お父さんがやったんですか……」

眼蓋の下で、眼球がふるえた。喉もとからゴロゴロという音が起った。

「お父さん！　きいてください」私は思わず父のシーツをつかんでのしかかるようになった。「どうか——とめてください。発作の起る前に、こんなことはもうこれ以上続くなとねがってください。おねがいです！」

突然父の眼がカッと見開かれ、私は思わずたじろいだ。すでに視力を失ったらしい。うすい膜のはったような瞳孔には狂者に特有の、あの自足の色があらわれていたのだ。

——そのとき、痙攣の前ぶれが全身を走った。

「今です！」私は父の耳に口をつけ、必死になって叫んだ。

「念じて下さい！　戦争は終った。もうみんな復員してくるんだ、と……」

言葉がきこえたのか、父はうすい唇をふるわせて何かいおうとした。その唇の動きに気をとられていた私は、その時やっと父のやみおとろえた顔にうかんでいる、異様なうす笑

いに気がついて、ゾッとして身をひいた。とたんにはげしい痙攣が——最後の発作が、父の全身をおそった。みるみる死相にいろどられて行く老人の顔を凝視しながら、その最後の唇の動きをやっと判じた私は、凍りついたようにその場を動けなかった。

臨終の際に、この老人は——「天皇陛下万歳」といったのだ！

背後でガチャリと佩剣の音がした。

後から、私の腕をつかんだのは、附添いのものの手ではなかった。

悪霊

1

「〽伊予の松山兄妹心中……って歌、全部おぼえているか？」

滝田からだしぬけに、そんな電話がかかってきた。

「なんだって？」

私はめんくらって、ききかえした。

「ほら、高等学校の時、よく君たちがうたってたろう」滝田はいらだたしそうにいった。

「〽伊予の松山、夜はふけわたる……とかなんとかいうやつだ」

「ああ……」滝田がおかしな節をつけてうたってみせたので、私はやっと思い出した。

「あの歌か……」

「そうだ。――知ってたら教えてくれ」

「忘れちまったよ。大体、おれは歌はあんまり……」

「おぼえているだけでいい」滝田は、受話器のむこうで、苦しそうに咳をしながら、執拗にくいさがった。「歌ってくれ」

「だめだよ……」

相も変らぬ滝田の粘っこさにおされて、遠いかすかな記憶――二十数年前、まだ十代後半の頃の記憶をよみがえらせようと、ちょっと努力してみたが、まるきりだめだった。

「おれはあの歌を知らないんだ。〽急ぎかけより天蓋とれば、あやし虚無僧は妹じゃない

か……という箇所しかおぼえていない」

「じゃ、誰か全部知っている奴の名前を教えてくれ」滝田は腹立たしそうにいった。「鴨居はどうだ？　結城ならおぼえているだろう。――電話番号を知ってるか？」

「結城はずっとハンブルグだよ。鴨居は――いま、どこにいるかわからん」私はいささか辟易しながら答えた。「それにしても、いったい、そんな歌をきいてどうするんだ？」

滝田は、ふきげんそうにしばらくだまっていたが、やがてぼそっといった。

「いま木梨軽皇子と軽大郎皇女の近親相姦事件をしらべている。――ひょっとしたら、あの歌が、関係があるんじゃないか、と思ったんだ」

いい終ると、滝田は一方的にがちゃりと電話を切ってしまった。

私は、しばらく呆然として、通話の切れた受話器の、穴のあいたエボナイト板を見つめていた。

――相も変らぬ、滝田の突飛な連想に、毒気をぬかれた思いだった。

木梨軽皇子と軽大郎皇女――古事記には、軽大郎女は、その美しさが衣服を通してかがやいたので、「衣通郎女」の別名があったとあり、日本書紀では軽大郎皇女と衣通郎姫は別人で、後者は允恭帝皇后の妹という事になっているが――この皇統の同母兄妹の近親相姦事件は、記紀どちらにも允恭帝の項に記載されている、古代史の有名な事件だ。

第十九代允恭帝、男浅津間若子宿禰天皇は、仁徳帝の皇子で、二人の皇兄が履中、反正両帝になったあとをついで、いわゆる「摂津・河内王朝」の四代目にあたる五世紀半ばごろの天皇で、中国側史料に見える「倭の五王」のうち、「倭王済」に比定されている天皇である。木梨軽皇子も軽大郎皇女も、帝と皇后忍坂大中姫との間にうまれた兄妹で、とりわけ木梨軽皇子は、皇太子という立場にあった。――その皇太子が同父母の皇妹に恋し、奸け、その事が世に露われた。当時、同父であっても異母妹なら問題はなかったが、同母だと兄妹相姦で禁忌に触れる。このスキャンダルのため、允恭帝崩じたのち、世論は皇太子をはなれ、弟妹中五番目の弟、穴穂皇子との間に闘争があって、木梨軽皇太子は皇位を逸し、穴穂皇子が即位して安康帝となる。

日本書紀では、醜聞が公になった時、軽大郎女を伊予の湯、つまり道後温泉に流し、兄木梨軽皇子は、その後の穴穂皇子との紛争により、大前小前宿禰邸で自殺する事になっているが、古事記ではこの事件のあと皇子の方が伊予に流され、そのあとをしたって軽大郎女が伊予へ行き、そこで二人は「共に自ら死にたまひき」という事になっている。――記紀をひもとけば、うんざりするほど見られる、皇位継承や、女性にからんだ皇子たちの相殺、豪族の皇族暗殺の諸事件の中で、この事件は、とりわけ皇太子とその実妹の近親相姦と、二人の最後の絶唱によって、特異な印象をのこすのだが――。

しかし滝田が、この事件と、むかし私たちが旧制高校の古びた寮の部屋できいた、祭文か絡繰り歌か知らない、あの陰気な歌とをむすびつけて考えようとしているのには、正直いっておどろいた。

「伊予の兄妹心中」の歌は、昔の地方の旧制高校できかれた方もたくさんいるだろう。私

の旧制高校時代――といっても、もうそれは旧学制末期、終戦直後の事で、明治以来のおぐらい青春をつづってきた高校寮生活の伝統もあと一年か二年で近代教育史の中にその終焉をむかえようとしていた頃だったが――にも、はいってしばらくたってから、誰という事なく、先輩に教わってきて、私の部屋でもうたい出した。むずかしい漢語をつらねて、伝統的な「型」にはまった昂揚感傷の中でうたわねばならなかった寮歌、逍遥歌、応援歌のたぐいとちがって、あのひやりとした、暗い寮の廊下の陰から陰をつたって流れてくるような、暗く、じめじめしたムードをもった「流行り歌」のたぐいだった。陰惨で、古めかしく、どこか因果絵めかしたおどろしさがあり、しかし、それもあの時期、どこか明治、いや、江戸にまでさかのぼれそうな、「地方の青春」の、陰の部分のにおいがした。

文句は忘れたが、メロディーと、内容はおぼえている。伊予の松山に親のない兄妹がいて、兄は二十歳、妹は十七――だったか。二人は仲がよかったが、兄がやがて気鬱の病いになって日に日に衰えて行く。心配した妹が、兄に、何か悩み事があるのだったら、どうぞうちあけてくれ、兄一人妹一人ではないか、とたずねると、兄は実はお前に惚れたのだ、お前と寝たら病気はなおる、と告白する――妹はおどろきをおさえて、実は、自分に惚れてつきまとっている虚無僧がいる。明日の晩、その虚無僧がこれこれの辻へあらわれるが、その虚無僧を殺してくれたら、兄さんと寝ましょう、という。

翌晩、夜のふけわたる松山の街の、人気のない辻に、妹の言った通りに虚無僧があらわれる。――妹への道ならぬ恋にくるった兄はものかげにかくれて近よるのを待ってとびかかり、もった刀で一撃のもとに虚無僧をきり殺す。そして――

〈急ぎかけより天蓋とれば
あやし虚無僧は妹じゃないか
〈かえす刀でのどかき切って
伊予の松山　兄妹心中

と歌はむすぶのである。――いかにも大道芸の「語り物」らしい、猥褻な暗示と、因果めかした野卑な描写をところどころにはさみながら、しかし全体として、一切の心理描写をすっとばし、あの野口男三郎の「臀肉切りとり」の歌の調子に似ていながら、眼鏡絵のような暗く透明な遠近をもった、冷え冷えとした世界が描き出されている。

とりわけ私は、虚無僧があらわれる前の、

〈伊予の松山夜はふけわたる……

というくだりが妙に印象にのこっている。――ものかげに刀をもって息をひそめる、理性を失った兄と、そこへ辻から辻へもの哀しい尺八の音をひびかせながら、次第に近よってくる虚無僧姿の妹と……次の数節で、糸繰りの人形がぶつかって、手足がばらばらになってこわれるように、あっけない終り方をする歌の、そのくだりで、なにか暗く、わびしい、「宿命」のひえびえとした肌ざわりのようなものを、いつも感ずるのだった。

――体が弱くて、もうかなり前から定職を持たない滝田が、このところまた持ち前の凝り性を発揮して、古代史の素人研究にのめりこんでいるのは大学につとめる友人からきい

て知っていた。そして、高校、大学時代から、異様に鋭敏な感覚と、途方もない想像力を——時には想像力というよりも妄想力とよびたい気もするのだが——もっていた彼が時おり突拍子もない連想で人を驚かす事もよく知っていた。きいた時は呆気にとられたが、考えなおしてみると、木梨軽皇子、軽大郎皇女の事件と、旧制高校のころに寮ではやった「松山兄妹心中」の歌とをむすびつける程度の事は、滝田にしてみれば、まともすぎるぐらいだった。

だが、私は、何カ月ぶりかで突然かかって来た滝田の電話に、なぜか変に不吉なものを感じてしまった。——時として、現実から遊離し、異様に昂進して行く妄想に、自分が狂気にちかいところまでのめりこんで行く彼の性癖が、ふと気がかりになったのである。

ちかいうち、一度たずねて、様子を見てやらなくてはなるまい——予定を書きこんだカレンダーを見上げながら、私はそう思った。

2

ちかいうちにと思いながら、結局雑用にまぎれて、滝田の家をたずねたのは、あの突然の電話から三カ月以上たってからだった。

私の住む街から、電車で一時間半ほどの距離にある地方小都市の郊外に、滝田の家を訪れた時、彼はまだ旅行先からかえって来ていなかった。二日前、留守をしている細君に電話した時、その日の午後にはかえってくるときいたのだが、細君の話では、旅先から連絡があって、すこしおそくなるという事だった。

玄関で応対をうけているうちに滝田から新幹線の駅にいまついて、これからかえる、という電話がはいった。私が来ている事をきいて、待っていてほしい、という伝言だった。——近くの大都市にある新幹線の駅からだと、車で三、四十分はかかるが、その間待たしてもらう事にした。

この春先におそった豆台風で、客間がひどく雨もりして修理中とかで、細君は私を滝田の書斎へ案内した。

八畳ほどの和室の一隅に、はげちょろけの一閑張りの文机をおき、床の間も敷物の上も、帙から出された和漢の書籍や歴史事典、体系のたぐいが、所せましとつみあげてある。どこから集めて来たのか、変色したり、焦げたり、虫が食ったりした古文書、反古や、その複写のたぐいが、まとめられたり、ちらばったりしている。

書籍文書類の堆積から少しはなれた所におかれた、脚に継ぎ板のあたった黒檀の円卓の前にすわると、障子をあけはなった縁先から、草がぼうぼうとおいしげった、庭が見えた。紫陽花、青木、南天、つつじ、槙、松、梧桐、呉竹と、庭木はいずれものび放題にのび、生いしげりすぎた青葉が、曇り空の下で、鬱陶しいばかりに視界をうめつくす。

陰気な家の中を、すこしも音をたてずに動きまわる細君がはこんで来た新茶を前にして、一人つくねんと天井や襖のしみを見まわし、床の間の、ひびのはいった砂壁にかかる「不レ雨花猶落、無レ風絮自飛」の、槐安国語からしい禅語の軸などをながめていると、雨が

くるのか、しめった風が、荒れ果てた庭にどっと吹きこんで来て繁みや草の葉をゆすった。

滝田の家は、もともとこの地方の素封家で、戦後農地解放と財産税で痛手をうけたが、骨董と山林を豊富に持っていたため何とかしのぎ、父親の代は、母方の実家の造り酒屋の経営をひきうけて、一時羽ぶりもよく、父は村会から市町村統合後の市会、県会に出て、国会へうって出ようとした矢先に死んだ。——病身で偏屈な当代になってから、酒屋の経営からも、父の関係していた会社、団体からも一切手をひき、もともと彼の祖父がたてた別宅で、結婚以来住んでいたこの家をのこして、市内のはずれにあったかなり大きな本宅も手ばなし、その金と、あとは父ののこした株券と山林の管理を銀行にまかせ、売り食いとはいえ、子供の代まではなんとか食って行けそうな状態だった。旧家にもかかわらず、この地方にのこる縁戚がほとんどなく、遠縁はあっても、遠方で、それなりに裕福にくらしているため、これといったトラブルもないのだが、——そのかわり、滝田の家の血統は、もし彼の一人息子に子供ができなければ、絶えてしまう事になりかねない。

滝田も学校時代からいわゆる蒲柳の質で病気がちだったが、しとやかだが変に影のうすい細君も顔色と肩のうすさから見てあまり丈夫ではなく、中学二年になる一人息子も、ひょろひょろと背は高いが、小さい時から腺病質で、いまどきの少年に珍しく、のどに白い包帯を巻いていやな咳をしている事がある。——この時代だから、親子とも結核ではなく、ただ遺伝的に呼吸器、循環器、内臓関係が弱くなっている、と、これは開業医になった友人が教えてくれた。遺伝的に弱くても、きたえればいいのだが、両親、子供とも、その意

志や気力がないのが問題だろうなと、その友人は苦酸っぱい顔をしていった。

荒れ果てた庭の草木を、右に、左にとゆすって吹きぬける風にまじって、ついにばらばらと軒をうつ雨の音がした。——が、それきり雨は降りそびれ、小さな水滴をまじえた、重くしめった風が、時おりどうっ、と縁先に吹きおろし、座敷の端に吹きこむだけだった。

そんな風の一吹きが、もろに縁側から座敷を吹きぬけ、床の掛軸をゆすり、つまれた和綴じの本の頁をひるがえした。——古文書、反古のあれこれが、風にとんで座敷に吹きちらされたのを、私は立ってひろいあつめ、文机の上にかさねて、水晶製唐獅子の文鎮でおさえた。

その時、文机の上につみ上げられ、一部乱雑にちらばっている何冊もの大学ノートの題字の一部が眼についた。

縁側のガラス戸をしめてから、私はもう一度文机の前にもどって、気になったノートの題字を見た。

机の上にちらばったノートの一番上のものには、表紙に「大草香皇子——？　八釣白彦皇子、坂合黒彦皇子、眉輪王、坂合連贄宿禰——奈良県吉野郡大淀町今木。又云。高市郡（旧名今来郡）？　市辺押磐皇子——滋賀県愛知郡秦荘町上蚊野・北蚊野？」と書いてあり、その下のノートには「泊瀬部天皇——奈良県桜井市倉橋字金福寺跡？」とあった。

最初のノートの表紙に書いてあった大草香、八釣白彦、坂合黒彦、市辺押磐などの諸皇子、皇族、貴族は、いずれも、五世紀末の第二十代天皇安康帝末から、二十一代雄略帝初

めにかけて、謀反、讒言、皇位継承争いにからんで惨殺された人たちだ。地名は陵墓のある場所であろう。もう一冊の表紙に書かれた泊瀬部天皇とは――在位中に、蘇我馬子の指図により、東漢直（坂上氏祖）駒の手によって殺された第三十二代崇峻天皇の事で、歴代天皇中ただ一方、高御座に在位中、臣下に殺されてその下手人もはっきりしている悲劇の天皇である。

その下から、例の近親相姦問題をおこした、木梨軽皇子、軽大郎皇女の名を書いたノートも出て来た。――さらに、蘇我赤兄にだまされて、第三十七代斉明女帝の時に謀反をおこそうとしてとらえられ、紀の国の藤白坂で絞り殺された有間皇子や、英邁勇武で詩才と王者の風がありながら、それゆえに、実子に皇位をつがせたい持統女帝に、先王天武帝崩じたのち、すぐ罪を押しつけられて殺された大津皇子の名を書いたノートもあらわれた。

いや、それだけではなかった。――つみ上げられた厖大なノートの表紙をつぎつぎに見て行くと、そこには、日本史の中で、皇位継承の紛争や、豪族、貴族一門内外の権力争いによって、謀反、讒言、犯罪捏造などにより、罪を得て惨殺されたり、暗殺されたりした悲劇の皇族、貴族の名と、その陵所、墓所、祭所の地名が延々とくりひろげられた。――曰く、聖徳太子の山背大兄、曰く、天智系光仁帝の御代に突然廃位廃太子された井上皇后、他部親王。桓武帝の皇弟にして皇太子で、長岡京時代、藤原種継暗殺事件に連座したとされ、幽閉中自ら絶食して命をたち、のち宮廷に祟って、本朝の「怨霊第一号」として平安京に祀られた崇道天皇こと早良親王。曰く、物部守屋、曰く、橘諸兄、曰く、道祖王、

曰く、藤原広嗣、曰く、恵美押勝、曰く、塩焼王、氷上川継、曰く、大伴家持、さらに淳仁天皇、平城天皇、藤原薬子、仲成、伊予親王、伴善男、菅原道真から、清和帝、崇徳上皇、鳥羽帝、安徳帝、醍醐帝、護良親王、尊秀王、崇光院、さらにくだっては後水尾帝や孝明帝まで――その長い長い人名の列は、ことごとく悲運の中に横死、変死したり、奸計に貶されて、配所幽閉中に、はげしく時の権力者を呪い、世の中にはげしい怨みを抱いて憤死した上層階級の人たちばかりだった。

ノートの内容は、いちいち見る気もしなかった。――私の大雑把な日本史の知識を背景としても、その長い名前の列は、一瞥しただけで、頭の痛くなるような、不吉な、毒気のようなものをふくんでいた。――その一つ一つの名前の背後にあった、暗く陰惨な歴史的事件の一齣一齣にふくまれている毒々しい怨恨の泥沼から、濛々と瘴気がたちのぼるような気がして、思わず眼をそむけたくなった。――顔をそむけると、床の間につまれた書籍の一番上に、蒲生君平の「山陵志」があるのが眼にはいった。

反射的に、それをとり上げながら、私はなにやらおぞましい気分におそわれて、ぼんやりと庭に眼をやった。

――日本史、特に古代史に、最近のめりこんでいるとはきいたが……いったい滝田は、この不吉な名の網羅のむこうに、何を追い求めようとしているのか？

今の世の中の、奇妙な流行――それも大方はまことに不用意な――になっている、怨念やら怨霊といったものの発掘に、彼もまたかぶれ、浮かされているのだろうか？

——そう思いながら、風の荒れくるう庭をながめていると、突然背中がぞうっとそそけだった。——思わずふりかえると、襖がいつの間にかあいて、和服に着かえた滝田の痩身が、影のように立っていた。

ノートの中を見たわけではないが、他人の文机の前にすわって、ノートの表紙をのぞいていた所を見られたばつの悪さに、私はちょっとうろたえて、手にした「山陵志」を床の間にもどした。

滝田はしかし、そんな私に頓着せず、部屋の隅から古めかしい銘仙の座布団をとって円卓の傍に投げ、すわると懐ろから煙草を出して火をつけた。

「この前の歌、わかったか？」

と、青黒い顔をしかめて煙を吐き出すと、滝田はぼそりといった。

「いや……」

「今度の旅行で、ちょっと面白い買物をしてね……」滝田は、肩をゆすって咳きこむと、つけたばかりの煙草を、いまいましそうにもみ消した。「あんたには興味はないだろうが——N市からずっと山奥にはいった所にあるちょっとした岡だ。麓に小さな神社があるが、もうだいぶ前から無住の廃社になっている。過疎地だから、もう地元では、誰も関心を持つものもいないが、とにかく手付けはうってきた。——おれの見た所では、どうやら古代の墳墓だ。陵墓の可能性はないが、相当の力をもったものの塚だな。無住の社務所の中をちょっと見て来たが、反古の中からだいぶ面白いものが見つかりそうだ。——天井裏からも何か見つかるような予感がする……」

「いったいどういうつもりだ？」私は呆れかえって、思わず声をうわずらせた。「何をはじめたか知らんが——そんなものは、単なる興味本位で、やたらに手をつけるものじゃない……」

滝田は頬にうすい笑いをうかべただけで、返事をしなかった。

廊下に影がさして、細君が音もなく、敷居際に膝をついた。

「いやにじけじけするな……」滝田は腕を組みながら、背後をふりかえりもせずにいった。「こういう時は、熱燗がいい。——いつも言ってあるだろう？」

細君は、頭をさげるでもなく、ひっそりと卓の上にビールとコップとゆがいたそら豆をならべ、またすうっとひきさがった。

「相かわらず、体はよくないんだろう？」滝田のつきつけるビール瓶を、コップでむかえながら、私は文机の上のノートをふりかえった。「それなのに、歴史の中で、よりによってこんなものばかりほじくりかえして、どうする気だ？——素人が、単なる興味にかられて、不用意にこういった事をはじめると、いい事はないぞ……」

滝田が、ふっ、と鼻で笑ったような気がして、私はちょっと熱くなった。

「いいか、滝田……」私は一杯目のビールをあおるように飲みほし、二杯目を手酌でつぐと、すわりなおした。「おれは洒落や冗談で言ってるんじゃないぞ。——おれだって、もっと若僧だったら、こんなもの、屁とも思わなかったろう。むしろ〝歴史の偽善の皮をひ

んめくる〟ぐらいの、いい気な気分で、かっこうよく、当るを幸いなぎたおしてみせただろう。若い時は向う気ばかりつよくて、何もわかっていないからな。無知というものほど恐ろしいものはない。――だがな、今でもおれは、神秘主義者じゃないつもりだが、少しは〝眼に見えないもの〟のかたちや意味を、感じたり、読みとったり、おそれたりする事ができるようになってきた、と思う。これはどうしようもない〝年齢の知恵〟というものだ……」

この家の、妙に陰気な空気、外の天気の鬱陶しさ、そしてまわりに山とつまれた書籍古文書の吐き出す瘴気と、それを身に凝らしたように黙然とすわっている滝田のやせた姿から発散される、なにか不吉なもの――そういったもろもろの重苦しさを、はねかえしたいという衝動から、私はたてつづけにビールをあおった。二本の瓶がたちまちからになり、はこばれてきた熱燗を、これまた手酌でぐいぐいあおるうち、当然の事ながら酔いが急速にまわって来て、自分が何を言っているのだか、次第にわからなくなってきた。

だが、とにかくこんな事を、くどくどとくりかえしている事はわかっていた。――歴史の中で、悲憤のうちに死んだものは、何も君がノートにとった人物だけではない事は自明である。記録にのこっているのは、まだましな方で、万斛の怨みをのんで、曠野に白骨をさらした名もない人々は、全世界で何十億を数えるだろう。それを思えば、世界史などは鬼哭啾々として、かの文人が言ったごとく、「人類の歴史は巨大な怨みに似ている」という事になろう。が、それもまた実は誠に偏頗、かつ感傷的な見方であって、およそ生物の

歴史は、地球はじまって以来の厖大な地層をなす先行者の死骸の上に、いきいきと生成し流転し、今日あるを思えば、「死」もまた生きる事の一つの「相」であって、それをしも怨みというのはあたるまい。

が、とりわけ無惨な記録にとどめられているものは、また話が別であって、それは往々、その無惨な死を記録する者が同時代に生き、時には敗死したものに対する加害者側の一人であり、時には被害者と同じ側にいて、その怨みを代弁する立場に立つが、死者のはげしい怨みに対する恐怖にせよ、同情共感にせよ、そこに死者の心に対する生者の側の「協同作業」がくわわって、そこに一つの「形」が記録としてとどめられる。

この「怨恨の形」の持つ意味は二様であって、一つはそれを記録にとどめる事によって、その形を後代にうったえる事であり、もう一つは、形をあたえる事によって後代まで一つのいましめとしつつ、同時に後代にいたるまで、あつくそれをしずめ、「祀る」事である。――だが、その上にも歴史の塵は厚くつもり、その上に変動、変形がくわわり、次第に「祀るもの」と「祀られるもの」の関係や意味がわからなくなってくる。

現代は、現代と大きく異なった過去の時代の「政治」の中で重要な意味をもっていた「祀り・祀られる」関係が、まことにわかりにくくなっている時代である。そして、それはそれだけ、世が「開明」されたというべきであろう。しかしこんな時代の、迂闊な心でもって――まして当世風の興味本位な探偵趣味でもって、社会面をにぎわす今様の「犯罪」でもあばくようなつもりで、不用意に「怨恨の歴史」をつつきまわせば、「祀る」準

備なしに地下より悪霊をよびだせば、それはたちまちあばいたものにとりつき、まわりにさらに禍いの猛威をふるうであろう。重い石と厚い封土、さらにその上にふりつんだ歴史の塵の中に埋もれた怨霊の墓を開くには、それなりに「法」がある……。

「という事はつまり、例の〝高松塚の祟り〟というのもそいつかね？」滝田はちっとも酔った様子はなく、相かわらず冷笑ともみえる薄笑いをうかべながら盃を口にはこんだ。

「戦前、大阪府高槻市阿武山の、阿威古墳を開いて、藤原一族らしい貴人の棺をあばいた時も、関係者は奇妙な死をとげたというが――例の、有名な〝ツタンカーメンの墓の祟り〟も、そのたぐいかい？」

まあ、待て！――そんな興味本位の事じゃない、とどなって、酔った私は卓をたたいた。歴史の中に、とりわけはげしい怨恨を抱いて死んだものとして、記録にとどめられ、葬られた霊には、強い「毒」がある。

「毒」とはなにか？――文化にもそれぞれ「毒」があり、宗教、思想、芸術、文学などにも、一種の「毒」がふくまれており、それに対する免疫性を持たないものが不用意に接すれば、たちまち精神にはげしい急性中毒症状をおこし、あるいははげしく酩酊し、精神の弱い、免疫性の低いものは死にいたるほどの猛烈な瀉痢を呈したり、慢性中毒におちいったりするものだ。

怨霊の「毒」とは――怨みをのんで死んだ人々の、巨細な記録には、人に強い情緒反応を起させ、それを通じて、その人物に感情移入させる力がある。とりわけ、その時代において、現実の中で食うか食われるかの「力の対立」を生きていたそれぞれの当事者でない、現代の人間は、記録の中から、一方的に「敗者の無惨さ」にのみ、強い同情を抱き勝ちである。――この時、「怨霊の記録」は、不用意にその記録を読むもののナイーヴな魂に、強烈な「情緒反応の型」を刻印する。この「型」は、いったんそれと知らずにはまりこんでしまえば、なかなかぬけ出せない。この「型」がすなわち怨霊の持つ「毒」であり、その毒に中ったものは、すべての現実に対する思考・判断が、自分できづかぬうちにこの「型」「枠組」に影響され、それはまた、まわりの事象に対する思考・判断を通じて、自己の中に新たな「毒」を再生産して行き、一切を「毒の眼」を通して見るようになり、不幸な場合には、自家中毒症状の傾斜を奈落にまですべりおちて、自己破産、破滅にまでいたるであろう。またその人間の中で再生産される「毒」は、まわりのものにも感染し、自分でもよくわからぬものに対する恐れや興奮をまきおこし、はては狂気、パニックといったものにまでひろがり高まって行くかも知れない。――この時、不用意によみがえらせられた怨霊は、人々に「とりついた」のであり、たとえ一人でやるにしても、よみがえった怨霊を「祀り」、ふたたび「しずめる」事を――すなわち、それを制御する方法を知らず、その準備もないままに、みだりにあばくべきではない。

「先輩のOを知っているだろう」と、私は著名な学者の名をいった。「彼も、君と同じような事を試みた。――しかし、彼には、長年の学究生活できたえ上げ、蓄積した学識と……なによりも、君とちがって学生時代にスポーツできたえ上げた頑健な体力と、それにさ

さえられたはげしい気力があった。まわりにも、彼をささえるものがいた。——そのOにして、一時期は歴史の〝魔〟のはげしい毒気にあたって、精神的、肉体的に危なかった時があった。——まして、君は体も強くないし、神経も……」

「わかっている。そのくらいの事……」と、滝田はめんどうくさそうに言った。「だがな——一度、歴史のむこうの〝魔〟の世界をのぞきはじめると、その面白さは、ちょっとやそっとでやめられんよ。おれにはほかに、生きてたって何の楽しみもないからな——〝魔〟だろうが、〝霊〟だろうが、とことんつきあってみるつもりだ。——特に、今度の買物は面白そうだ。あの塚には、今までの陵墓やそんじょそこらの豪族の古墳と、まったくちがった、おれの知らない何かがかくされている。そいつの正体を、どうしてもつきつめてやりたいんだ……」

そういった時の滝田の眼には、異様なまでに常人ばなれした、妖しい輝きが宿っていた。——それはすでに、みずからの呼び出した魔物に「憑かれた」ものの眼だった。

それを見たとたんに、再び背筋にどうしようもない戦慄と悪寒が走り、それまでの酔いが、いっぺんにさめるような気がした。

3

N市できいても、そんな山奥の「古い神社のある岡」がわからなかったのは、まず当然だったろうが、車で二時間ちかくも山脈をわけいって、たしかにその村内にあるときいた寒村できいても、知る人がほとんどないのには弱った。かつては、山にかこまれてはいるがそこそこのたたずまいのあった人口数百の村だったらしいが、おさだまりの過疎現象に見まわれて、山中の字、小字はもちろん、ややひらけた村内にまで、遺棄された廃屋がそこかしこに見られ、風の動かないむしあつい曇り空の下に、びっしり埃をかむり、藁屋根には草がおいしげり、柱や軒はかたむいて、しずかに朽ちかけている。山間の田畑はほとんど放棄され、名も知らぬ夏草の花が乱れ咲き、ある田では老いさらばえた捨て猫が一匹、あきらめたような風情で、山の方をむいてすわっていた。——村道に人影はまったく見えず、子供の声もきこえず、鶏の餌をついばむ姿も見られない。

山一つこえたむこうにも、捨てられかけた村があり、そこはしかし、おさだまりのゴルフ場建設の工事で、ブルやダンプが走りまわり、道路舗装もはじまって、一応の活気を呈しているのを見て来たが、その喧騒も活気も、この村まではひびいてこないようだった。

山腹の村社の高い石段を、汗まみれ、ほこりまみれになって二度目にのぼりかけた時、さっき留守だった神主が、やっとバイクでかえって来た。——初老の、農家の人としか見えない神主は、私の質問をきくと、すぐ場所を教えてくれた。人口百を割りかけているこの小村で、最近塚ともつたえられる岡を買い、無住の社務所を修理して住んでいるかわった外来者といえば、誰でも知っていそうなものだが、村民の大部分は、もはやそういった事に対する関心も、ほとんど失っているらしい。——そんな中で、唯一人、まだ活発な知力をのこしているらしい神主と、しばらく立ち話をし、その岡によりそう廃社の名を「真

淵神社」ときいて、意外な気がした。

「はじめから、加茂真淵をまつったわけじゃありません」と神主は苦笑していった。「戦前、二千六百年式典のころ、全国の神社の調査、整理がありましたでしょう。そのころはここも景気がよくて、村内から支那事変で大功たてた軍人も出、その人が県でもちょっとした名士になって、親父と組んで、そういう事にしてしまって、この社で面倒見る事にしたんです。ええ、親父はあれで国学院へ行きかけましたから……。といっても戦中戦後しばらくの間でしたが。もとはあの岡の名と同じで、真槌神社といったんです。江戸中期の記録に、新真槌推雲をまつるとありますが、どんな祭神だか知りません。土地神でしょうが、古いは古いらしいです……」

今でこそ見るかげもないが、土地柄は古いらしく、その神社も、町へむかって十五キロほど行った古村にある式内社の末社ときいて、ちょっとびっくりした。——中世、すでに勧請されており、当時一村を潰滅させた山津波のあと再建されて、そのころからの記録の断片がのこるが、その中にすでに真槌岡、または真槌塚の名が、潰滅以前から伝わる事を記してあるという。下の田から石器まじりに弥生土器が出たり、ずいぶん昔から、人が住んでは放棄される事をくりかえしてきたらしい。——神社経営が苦しくなった戦後も、神主の父は、三年前に死ぬまで、社務所の手入れをしては、時々泊っていた。篤学の人で、村内をちょっとはなれたその社を、この一帯の古伝・地誌の研究室がわりに使っていたらしい。篤胤派の影響をうけた神秘主義的国粋主義者だったらしく、戦後は米軍や都市の学

者を極度におそれたという。——岡は古伝にふれれば祟りがあるとされ、往時は六十年に一度、村内でも、もと猟師の筋のものが祭る事になっていたらしいが、神主が生れてから行われた事はない。

「あまり健康にいい所じゃありません。地名を栃窪といって谷間の、暗い所でね……」暗に、滝田に注意しろというように神主はつぶやいた。「親父も、あの社にこもっている時に死にました。高齢でしたが……」

教えられた道を二キロほど、さらに山へむかってたどると、道は細くなり、草にかくれ、繁くなって行く木立に蔽われ、ついに行きどまりになった。

その行きどまりの崖下に、朽ちかけた鳥居と、草のおいしげった、杉皮葺きの屋根が見え、その正面がまるくもり上った岡になっていた。岡の高さは三、四メートル、左右は十五、六メートルほど、形は半球形らしいが、黒ずんだ灌木喬木におおわれてさだかでない。——そこは三方から、山肌が断崖といっていいほどの急峻さでせまり、頭上は昼なお暗い樹葉でおおわれ、なんとも言えずどす黒い、鬼気とも妖気とも悪気ともつかぬものが、その小丘からただよってくるあたりだった。

「酒を持って来たか？」

朽ちかけて、やっと雨露をしのぐ程度の小屋の中で、無精鬚をぼうぼうのばし、垢じみた和服をだらしなく着た滝田は、自炊用の鍋釜や、汚れた食器の間にすわって、赤茶けた反古や古文書をひっくりかえしながら、ふりむきもせずにいった。

「君をむかえに来た」と私はいった。「奥さんにたのまれたんだ。子供さんの病気が悪いらしい……」

「この文章の出典はわからんか？」

滝田は私のいう事をきいていないように、まわりのやけこげた紙のきれはしをつき出した。その眼は血走ってきちがいじみていた。——その迫力におされて、私は思わず紙きれの字に眼をおとした。

……崩塚覆石者雖自塚内放火焔出水、大勢崩也自古塚怪岩間之陰……

「なんだ、これは……」しばらく見ているうちにふと気づいて、私は顔をあげた。「漢文で書いてあるから何かと思ったら、謡曲〝土蜘蛛〟の一節じゃないか……このあと、〝鬼神の形は現われたり……〟ときて、後シテになり〝汝知らずや我昔、葛城山に年を経し、土蜘蛛の精魂なり……〟とつづく」

「なるほど、そうか……」滝田は膝をうった。「それでわかった。——〝土蜘蛛〟とすれば、この字は〝茅〟と読めばいいんだな。あとの二字は〝久〟に〝毛〟だろう」

滝田は机の上においたしみだらけ、虫くいだらけの古文書をのぞきこみ、ノートに何か書きこんだ。——背後からのぞきこむと、古文書の一節がこうひきうつしてあった。

……荒禍津次茅囚毛ハ本邦土産ニアラズ。康居粟弋之鬼ナリト……

「真偽はともかく、江戸時代の碩学慈雲尊者飲光が、わざわざ訪れてこの社の祭神新真槌推雲を考証した、と、この古文書に書いてある……」滝田はぼそぼそした声でいった。「飲光は大坂の人で、一名葛城山人ともいい、僧侶だが、大和葛城派の古神道を復興した人だ。塙保己一が〝群書類従〟からはずした断簡をもとに研究し、新真槌推雲は、もともと荒禍津次茅久毛とよばれ、古伝に〝康居粟弋の鬼〟とされている、と考証した事が書いてある。誰か、飛鳥時代の皇子が退治してここに封じた、という伝えもあるが、そこにはっきりしない、と……」

「康居、粟弋といえば……」私は首をひねった。「たしか、三、四世紀ごろ、中央アジアの方にあった国だな」

「そうだ。——土蜘蛛は、中世の伝記にあらわれるような妖怪じゃなくて、〝土神〟のことだろう、といわれ記紀や風土記の中では、はっきり穴居生活をしていた先住民の姿に書かれている。〝昔国栖〟とか〝八束脛〟とかよばれてな。——しかし、その中に、はるかキルギス、トルキスタンから来たと伝えられる連中がいたとすると面白いじゃないか……。おれは、どうしても、あの塚をひらいてみる。見た所、横穴式古墳だ。ちょっとのぞいたが奥に石棺らしいものもある。〝土蜘蛛の墓〟というのもめずらしいが、ましてそれが中央アジア産となれば……」

「馬鹿なまねはよせ！」と私は力をこめていった。「体が弱っているのに、一人でめったな事をするもんじゃない。そんな事はおれがさせんぞ」

その日のうちに連れてかえろうにも、もう日が暮れかかっていた。村からの唯一の交通機関であるバスも、もう終りだった。

古ぼけたランプをたよりに、蚊やりをたきながら、私たちは、ほとんど言葉をかわさずに滝田の持ちこんでいる缶詰を食べ、私がいつも旅に持ち歩いているウイスキイを飲んだ。——夜が更けるにつけ、周囲の闇から、おそろしいばかりの山気がせまってきて、朽ちかけた小屋をしめつけた。

酔いがまわって、ついうとうとした。——と、半睡の頭に、滝田の話の中で、ただ一カ所、ひっかかっていた点がはっきりうかんできた。

荒禍津次茅久毛……滝田は反古の中に謡曲〝土蜘蛛〟の断章があった事から、そう読んだが——しかし「次」を「つ」と読んだ例が古書にあるだろうか？　慈雲尊者→葛城神道→葛城の土蜘蛛のつよい連想も働いていたろうが……そして、後代——たとえば延喜式にあったように——不吉で恐ろしい感じのするもとの字をおきかえ、ついには真淵になってしまったとはいえ、どうして、荒禍津が新真槌にかわったのだろう？　……次は、音は「じ」、訓は「つぎ」のほかに……たしか書紀に「すい」の訓があった。大阪府の吹田は、もと「次田」と書かれたのではなかったか？……次→「推雲」の推……アラマガツスイチグモ……アラマヅチスイクモ……

ふいにぞっとして、私は体を起した。——なにかが、わかりかけたような気がした。

「滝田！」

と私は友人に声をかけた。

屋内はまっ暗で、蚊取線香の火だけが、赤い、小さな眼のように燃えていた。——あわててライターをすると、滝田の姿はなく、天井から吊ってあったランプもなかった。

机の上にあった蠟燭に火をつけて、私は外へ出た。眼の前にくろぐろともり上る墳丘が、闇の奥の、さらに濃い闇のように、こちらにのしかかってくるように感じられた。

「滝田！」

蠟燭をかざして、私はまわりの闇にむかってどなった。

とたんに、それまで風もなかった谷間に、どうっ、と三方の崖の上から突風が吹きおろしてきて、まわりに渦をまき蠟燭の焔をひきちぎるように吹き消した。風は、何度も、ごっ、ごっ、と左右にゆりかえした。苦労してやっと蠟燭の火をつけると、私は一散に、眼の前の墳丘にむかって走った。——風の音にまじって、かすかな滝田の悲鳴をきいたように思ったからだ。そして、その悲鳴は、明らかに墳丘の方からきこえてきた。

墳丘の正面の小さな拝殿の後ろにまわると、草木におおわれた斜面に、ぽっかり黒い口があいていた。口に蓋をしていたらしい、外から見ると自然石と見まがう、苔むした巨大な石扉がころがり、梃子につかったらしい丸太がころがっている。石扉の内側には、梵字らしいものがきざまれている。

石できずかれた羨道にとびこもうとして、私は、内部からふきつける、なんともいえぬ悪気、あるいは、妖気ともいうべきものに、おもわず顔をそむけ、たじろいだ。——息を吸いこみ、自分をはげまして中につきすすんで行くと、十メートルほどで、奥の玄室がぼんやりうかび上った。——玄室の中央に、異様な顔と唐草模様を彫った石棺が見え、蓋が

ずれていた。

そして、玄室の入口に、何かにおそわれ、恐怖のあまり逃げ出そうとしてつまずいた、という恰好で、滝田がたおれていた。

「滝田！」

私は思わずかけよって、滝田の体の上にかがみこんだ。——幽鬼のようにやせた彼の顔は、なにか名状しがたい恐怖に出あったように、歯をむき出し、眼をかっと見ひらいていた。傷口はどことわからぬが、わずかばかり血が流れて、しめった地面におち、体は氷のように冷え、完全にこと切れているようだった。

その時私は、なんともいえぬ異様な気配を感じて、全身がそそけだち、思わず顔をあげた。——滝田のたおれていたすぐ奥の、五メートル四方ぐらいの玄室いっぱいに、姿はわからぬが、なにか途方もなく邪悪なものの気配が渦まいていた。闇の奥の奈落の闇よりまだまっ黒なもの——千年以上、この墳丘の下、玄室の奥の棺の中に閉じこめられ、眠っていて、いま目ざめたもの……そして、それは、この土地に昔からあった地生えの怪異——伝説や、古い儀礼習慣や、山川の気配に、いつしか心の底でなじみ、見知り、意識の底に一種の〝同胞〟としてあつかっているさまざまな地霊、妖怪と、どこかちがう、見知らぬはげしさをもった「邪悪なもの」が、いま滝田を殺して玄室いっぱいにふくれ上り、声のない哄笑をひびかせながら、こちらにおそいかかってこようとしていた。

何かわけのわからぬ事を叫びながら、私は羨道からとび出した。——だが、入口を出て、数メートル走った所で、滝田をつれ出さなければ、と気がついた。すぐ手当てをすれば、まだ助かるかも知れない。

ふりかえると、暗い羨道の入口の様子は、ついさっきと、変っているように見えた。——なにがどう変ったかわからないが、私をおびやかした、あの「気配」が消えているように感じられたのである。

おそるおそるひきかえすと、もう奥の玄室にうずまいていた、あの「邪悪なもの」の気配は感じられなかった。——滝田はさっきと同じ所に同じ恰好でたおれていた。しかし、今度は強い好奇心にかられて、私は滝田の体をこえて、玄室に足をふみいれた。

四方に巨石をつみ上げた玄室の中に、巨大な石棺は、ほこりと蜘蛛の巣にまみれて横たわっていた。——今まで写真で見た、日本の古代石棺と、まるでちがった様式の石棺だった。葡萄の唐草が側面と蓋にほられ、上から見た形は、長方形ではなく、縦に細長い五角形だった。ずれた蓋の間からのぞくと、中はからっぽだった。しかし——なにか、強烈な力をもったものが、たった今、その中から出ていった、という気配は、かすかにのこっていた。

ふいに後ろで、なにか動く音がして、私はぎょっとしてふりかえった。

死んだとばかり思っていた滝田が、地面から、のろのろと体を起していた。

「滝田！——生きていたのか？」私は蠟燭をかかげて叫んだ。「死んだと思った。——いったいどうしたんだ？」

「いや、なに――石棺のあたりに、大きな蜘蛛がいて……びっくりして、ころんで、気を失っただけだ……」

滝田は、まっさおな、死人の様な顔をほころばせて、にやりと笑った。

――ゆらめく蠟燭の光の中で、昼間の光の中ではそうも見えなかった二本の犬歯が、いやに大きく、鋭く光って見えた。

消された女

フロントに、電話がかかってきた。五階の、ボーイズステーションからだ。
「マネージャー……」と、若いポーターの声がいった。「五三三号は、ふさがってるんですか？」
マネージャーは、ちょっと、背後の鍵棚を見た。
「ああ……」とマネージャーは答えた。「たった今、おつきになったよ」
「そりゃ知ってます。――今、私が、そのお客を案内してきたんですから……」ポーターは、口ごもった。「五三三号室に、ゆうべ、お泊りはありましたか？」
「いらっしゃいませ――お泊りでございますか？――サインをどうぞ……」
マネージャーは、受話器を耳にあてたまま、新しい客に応対した。――客がサインをしている間に、カードをパラパラとめくる。「ないよ。――五三三号は、きのうも、おとついもあいている」しゃべりながら、背後の棚から鍵をとり、ポーターをよぶベルを鳴らす。
「ありがとうございます、どうぞ、ごゆっくり……五三三号がいったいどうしたというんだ……」
「女の人が、部屋にいるんです」ポーターの声は、よわりきっていた。
「そりゃおかしいな……」マネージャーは、首をひねった。
「鍵は、かかってたのか？」

「むろん、かかってました。今、フロントであずかったキイで、ドアをあけたら、中にいたんです」

枕さがしにしては、おかしいな、とマネージャーは思う。

「どうしましょう？　私のお客は、カンカンですよ」

「なんかの、まちがいだろう。ていちょうにお話しして、フロントの方へ、来ていただいてくれ」

「あ、いま出てきました」と電話の声がいった。

とたんにガチャッとひどい音が、受話器の底でした。——マネージャーは、思わず、顔をしかめて、受話器を耳からはなした。

「どうしたんだ？」とマネージャーは、中っ腹で、電話にどなった。「なにか、あったのか！」

「マネージャー……」ひどく、まのびのした声がいった。

「今、その女が……消えました。私の眼の前で……」

それから、受話器の底で、ドタリと、なにかのたおれる音がした。——叫びや、人の走りまわる音などが、かすかにきこえてきた。

マネージャーは、受話器を耳からはなして、しばらく見つめていた。——やっかいごとらしい。警備員をよぼうか？

ちょっと、ためらいながら、電話を切ると、眼は反射的に、エレベーターの方へむかっていた。五階から、おりてくる客があるか、と、階数指示のランプを見つめたが、動いているのは、一台もなかった。

にもかかわらず、その女は、エレベーターの、ドアの前に、あらわれた！

まるで、影のように、スウッと——といって、あらわれる所を、はっきり目撃したわけではない。あっと思って、思わず眼をこすると、女が、いつのまにか、そこにいた。

中年少し前くらいの、スラリとした、美しい女だった。——仕立てのいい、スーツを着て、髪をアップにしている。額が広く、眼と眼の間が、ややはなれ気味で、顎のキッと張った、意志の強そうな顔をしている。

妙なことに、その女性は、足をふんばり、手を胸のあたりで、ギュッとにぎりしめて、顎をつき出し、歯をくいしばって、ハアハアあえいでいた。眼がもえるようにかがやき、青ざめた額に、汗の粒が、かがやいている。

「負けるもんですか！」と、女は、空中を見つめながら、しわがれ声で叫んだ。「ほら！——もう、私のものよ。今度こそ、私の勝ちだわ！」

ロビイにいた客も、ポーターも、むろん、マネージャーも、あっけにとられて、その女性を見ていた。——キ印にしても、すこし風がわりだ。

そのうち、女は、ホッとしたように、体の力をぬいた。——額の汗を、手で横なぐりして、しばらくふらつきながら立っていたが、やがて、シャンと顔をあげて、あたりを見まわすと、ツカツカと、玄関の方へ、歩き出した。マネージャーは、カウンターの後から走

り出て、身がるくその女の、進路を扼した。

「失礼ですが……」と、いつでも腕をおさえられるように、スッと脇によりながら、それでも言葉だけは、いんぎんに、マネージャーはいった。「五三三号におとまりでございましたか？」

女は、たちどまって居丈高な眼つきで、ジロジロ、マネージャーを見た。

「あんた、だれ？」と、女は、傲慢な口調でいった。

「当ホテルのマネージャーで……」

「へえ！」女は、馬鹿にしたように、鼻を鳴らして、あたりを見まわした。「なるほど！——これは、ホテルなの……」

「どこだとお思いになったんですか」

マネージャーは、少し、むかっ腹をたてていった。——なんだ。この女は。どこの誰さまみたいな口をききやがる。

女は突然、かわいた声で、ヒステリックに笑いはじめた。

「なるほど、そういうわけ！」と女は、肩を痙攣させながら、毒々しくいった。「そういえば、おぼえがあるわ。五三三号といえば——あそこで、私を罠にかけたのね」

「その五三三号室へは、どうやって、おはいりになりましたか？」と、マネージャーは、すかさず、おさえこむようにいった。「鍵は、フロントにございました。宿帳には、空室になっております。——ゆうべは、あの部屋で、おとまりでございましたか？」

「どうやって？」女はキッとふりかえった。その眼は怒りで、ギラギラもえていた。「どうやって、ですって？——そんなこと、あなたに、いう必要はないわ。気になるなら、おしえてあげましょう。さっきまで、私は、あの部屋の中に、いなかったわ。うそだと思うなら、掃除婦にでも、ルームメイドにでも、きいてごらんなさい」

「それでしたら……」

「そこ、どいてちょうだい！」

女は、はげしい声でいった。その勢いにおされて、思わずたじろぐと、女は足音たかく、玄関を出ていった。——とりおさえようにも、なんだか、足がすくんだみたいになって、体が動かなかった。

その時、また電話がなった。

女の出て行ったあとを、呆然と見おくりながら、のろのろと、カウンターの所へかえってきて、電話をとりあげると、あわてたような男の声がした。

「いま、そちらへ、女が、あらわれなかったかい？」男はすっかり動顛しているようだった。「二十七、八歳、グリーンのスーツを着て、美人だ。背が高い。——顎が少し張って、えらく気の強そうな顔をしている」

「たしかに……」と、マネージャーはいった。「たしかに、たった今、その方が……」

「すぐ、そちらへ行くよ」と男はいった。

「もしもし！」とマネージャーがどなったが、電話は切れた。

男は、五分たらずで来た。——豪勢な、金メッキのスポーツカーにのってきた。年は三十前後、長身で、ガッチリしていて、彫りが深く、ハンサムだ。スポーツ服の下に絹のシャツを着こみ、アスコットタイを、ダイヤのブローチでとめている。おそろしく贅沢で、気障な感じだ。——マネージャーは、職業柄ひと目で、前に一度来たことがある客だ、とわかった。そういえばあの時、たしか女をつれていたようだったが、ひょっとすると、あれが……。

「出て行ったって？」と男は、汗をかきながらいった。「どっちへ行った？」

「存じません」

「怒ってたかい？——怒ってたろ？」

「なんだかわかりませんが、ひどく……」

「よわったな。——なんとか、見つけて、話しあいをつけないと、困ったことになる」男は、髪の毛をむしりながら、考えていたが、また玄関の方へ、行きかけた。

「あの……」マネージャーは、あわてていった。「もし、あの御婦人が、お知り合いで、ゆうべ、おとまりだとすると……」

「料金か？」といって、男はふりかえった。ポケットをひっくりかえしたが、からっぽだった。——男は、宙を見つめて、妙な手つきをしかけたが、あたりを見まわして、急に思いとどまったようだった。

「急いだんで、財布をおいてきた。家にとりにきたまえ」と男はいった。「なんだったら、今すぐでもいい。ぼくの車にのってくかい？」

男の家は、想像通り、街一番の景勝をしめる、最高級住宅街の、その中でも、一番豪勢な邸だった。プールが三つに、自家用軽飛行機の滑走路まである、という有様だ。——贅をつくした室内で、バトラーやら、メイドやらがゾロゾロ出むかえ、ほかに若い、めっぽう素敵な、グラマーの姿も、チラと見えた。

「すごいですな！」

マネージャーは、日ごろのいんぎんさも忘れて、溜息をついた。

「彼女は、ここへくると、いっていなかったかい？」男は、そわそわとおちつかない様子でいった。額に脂汗がういている。

「いえ、なんにも……」とマネージャーはいった。「失礼ですが——奥さまで？」

男は、ギョッとしたように、マネージャーの顔を見た。——あたかも、〝奥さま〟という言葉が、タブーでもあるかのように……。

「まあ、そんなものだ」と男は、爪をかみながらいった。

「ですが——」マネージャーは、好奇心をあらわにうかべて、顔をよせた。「実に、ふしぎな事で……どうして、奥さまは、鍵のかかった部屋に、あらわれたり、消えたりなさるんですか？」

「それか？」男はちょっとためらうような表情を見せた。
「あまり、人にいってもらっては困るんだが」
「客商売です。口はかたい方ですがね」
「実は、――ぼくは妙な力をもっている」男は、掌を上にむけて、さし出した。「まあ、見ててごらん」
男は、思いをこらすように、掌の上を、じっと見つめた。マネージャーも、つりこまれて、男の掌を見つめた。――信じられないことが、ものの十秒とたたないうちにおこった。男の掌の上に、うすい、影のようなものが、朦朧とあらわれ、やがてそれが次第に、はっきりした像をむすび、ついに一枚の紙幣になった。
「こりゃ、たまげた！」とマネージャーはつぶやいた。「えらい手品をご存じですな。――私も趣味で、少しはやりますが。こう鮮かなのは、はじめてですよ。それとも催眠術かなにかで？」
「手品じゃないよ」と男はいった。
マネージャーは、その紙幣を手にとって、ながめた。――どうみても本ものにまちがいない。幻でも、贋物でもなかった。
「ぼくは――観念を実体化する力を持っている」男は、紙幣を、マネージャーの手から、とり上げながらいった。「別に、大したことじゃない。そういう風に、つくられているんだ」

「信じられませんな」マネージャーは、溜息をついて、ソファーに腰をおろした。「そんな力のことは、はじめてききました」
「霊媒は、ちょいちょい、霊魂の実体化、物質化というのをやるだろう」男は、金口の煙草に火をつけながら。「あれとは、ちょっとちがうがね。――まあ、いってみれば……幻覚症の、精神病患者がいるだろう？　彼にとっては、彼自身のつくりあげた幻覚は、あくまでも実在だ。ところで、ぼくの場合、ぼく自身がつくり上げた、想像の産物は、他人にとっても実在する。――ただ、それだけのちがいさ」
「よくわかりませんが……」マネージャーは、頭痛がするようにこめかみをもんだ。「なんだか、うらやましいような話ですな」
「まあね――」男は、うなずいた。「便利には、ちがいないね」
「すると、この家も……」
マネージャーは天井の高い、王宮のような室内を見まわした。
「ある部分は、そうだけど……」男は、また爪をかんだ。
「土地は、そう行かないからね」
「なるほど――」マネージャーは、心からの羨望をこめていった。「あとは、いまみたいに、金をいくらでも、想像で、つくり出して、手にいれたわけですな」
「現金は作らないよ。――第一、それでは、ニセ札づくりになりかねない」
男は、さっき実体化させた紙幣を、またじっと見つめた。――紙幣は、空中にとけこむ

ように、次第に影がうすくなり、やがて消えた。

「心配しなくていい。——ホテルの料金は、ちゃんとした札ではらうよ」男はいった。

「つくったのは、金やダイヤさ。——これなら、いくらつくっても、純粋のものなら、文句をいわれる筋合いはないからね」

かすかに、香水のにおいがした。——廊下を、さっきちらと見た、すごいグラマーが、すき通る部屋着を着て、横ぎっていった。

(すごい!) マネージャーはうなった。(すごいもンだ!)

だが、恍惚と、その後姿に見とれているうちに、彼は、突然あることに気づいた。

「まさか、あの……」彼は、口の中が、すこし乾いてくるのを意識しながら、男の方をふりかえった。「あの女性も……」

「まあね……」男は、うなずいた。「それに、バトラーも、メイドもだよ。——今どき、金をいくらつんでも格式のあるバトラーや、理想的なメイドなぞ、いるもんじゃないよ」

「あの人たち……年はとるんですか?」

「とるとも——、一度、この世界の中に実体化したものは、ちゃんと、その世界の法則にしたがうのさ。なぜって、それは、いつまでも年をとらない、幻とちがって、ちゃんと実在するものなんだからね」

マネージャーは、ハンカチを出して汗をぬぐった。——エア・コンディショニングされているのに、際限なく、汗が出るような感じだった。

「じゃ、あの——」マネージャーは、ネクタイをゆるめながら、つぶやいた。「そういうものは、あなたが死んでも、存在しつづけるんですか?」

「そこが、よくわからない」男は首をふった。「他のもの同様、たしかに実在はしてるけど——その実在を、背後からささえているのは、ぼくの思念の中にふくまれてる、ある力じゃないか、と思うけどね。——もし、そうだったら、ぼくのつくり出したものは、ぼくの死んだあとは、消えるわけだ」

(ちくしょう!——もったいない話だ) と、マネージャーは思った。(もし、そうでなかったら——あの……ブルルッ!……グラマーを手にいれるためなら、こいつをしめ殺してだって……)

「彼女は、ぼくのことを、なにもいってなかったかね?」

男は、身も世もない、といった風情で、体をもんだ。——困惑と恐怖が、男の陽焼けした顔を、土気色に染めあげていた。

「なにも……」といいかけて、マネージャーは、ようやく気がついて、男の顔を、穴があくほどみつめた。「じゃ——あの奥様も、やっぱりあなたが、想像によって……」

「ま、まあ、そんなもんだ……」男は口ごもった。唇がわなわなとふるえていた。「だけど、殺人じゃないよ。——文字通り、消しただけだから……」

そりゃまあ、「殺人」といえまい——とマネージャーは思った。——要するに、この男の、想像の産物を、また消しただけなんだからな。

「ぼくたち、最初は、とても、仲がよかったんだ……」男は顔をこすりながらいった。
「だけど、姉さん女房で……」
「そうは見えませんでしたがね」とマネージャーはさえぎった。「あなたより、二つ三つ若く……」
「そりゃ君、消した時のままの、年齢だからさ」と男はいった。「その時から、年をとってないんで、むこうの方が、若くなっちまったんだよ。——とにかく、消した時は、ぼくより二つ上だった」
「なるほど。——で？」
「ぼくは、しっかりものの姉さん女房は、きらいじゃなかったけど——しっかりものの女には、もう一つの側面があってね。とにかく、気がつよい上に、何かといえば、ぼくのやることに干渉するんだ」マネージャーの、おぼえがある、といいたげな、うなずき方に力を得たように、男はさらにつづけた。「最初はよかったんだけど、すぐに、こっちが、ハナについてきた。嫉妬ぶかいし、趣味がうるさくて、こちらのやることに、いちいち文句をつける」
「想像によってつくり出す、というのに、ままにならないものですな」
「理想的なもの、というものは、なかなか簡単に想像できないもんだよ——君もやってみたまえ」
「たしかに——」マネージャーはいった。「女というものは、結婚前と、結婚後では、ひどくちがってみえるものです。結婚前には、美点と裏腹になった欠点ってものが見えませんからね。——あばたもえくぼ、ってやつですよ。私も経験があります」
「自分の趣味を、あれほどガミガミいわれちゃ、ぼくだって頭にくるさ」
男は壁際にいって、かかっている、トミー・ガンをはずして、なでまわした。——いい趣味じゃないことは、たしかだな、とマネージャーは思った。——それにしたって、女がくちばしをいれる、筋合いはない。
「なにしろ、うるさいんだ。箸のあげおろしまで、ギャアギャアいってね。——ぼくのプライドはふみにじられた」
「なぜ、すぐに消しちまわなかったんです？」マネージャーはいった。「あなたが、つくったんでしょうが……」
「いったん、つくられてしまった女、——まして、自分の女房となった女を、そう簡単に消せるものかね」男は、おびえたように肩をすくめた。「もともと、アダムの肋骨の一本からつくられたくせに、つくられたとたんに、すぐアダムの鼻面をとって、ひきまわすんだものな。アダムは、自分の体の一部でつくられたイヴによって、堕落させられたんだろ？」
それも、よくわかるな——と、苦労人のマネージャーは思った。——女ってやつは、いったん、かアちゃんになっちまうと、どうしてああ、男に恐怖心をおこさせるんだろう？
「いわゆる——」とマネージャーはいった。「位負けてえやつですな」

「そう、そいつだ……」男はトミー・ガンをもどし、古めかしい、ラッパ銃をとって、肩にあててみた。「正面からむかうと、どうしても体がすくんじまうんだよ、入り婿みたいに……。それで、こっちも、消すためにはよほど覚悟をきめ、相手のすきをねらわなければならなかった。で、ぼくらは、仲むつまじく旅行に出て、ぼくは、とあるホテルの一室で……」

「あなた、まさか……」マネージャーは、眼をむいた。

「そう、それが君のホテルの——あの五三三号室だったよ」男はいった。「別に、迷惑はかけなかったろう?」

「私どもは由緒のあるホテルでして……」マネージャーは、こわもてになった。「そんなことに使われては困りますな」

「しかし、さっきいったように、殺人じゃないんだし、それに、君ン所のホテルは、ぼくの……」

そういいかけて、男は、考えなおしたように口をつぐんだ。——深追いしない方が、いいかな、マネージャーは思った。これだけの金持ちなら、ひょっとすると、株主かも知れん。

「それで……」とマネージャーは、話を先へすすめた。「きょう、奥さまが、またあのお部屋にあらわれたのは……」

「うまく消すことができてから、ぼくは、つとめて、彼女のことを思い出すまい、とした」

男は手のふるえを、ぼんやりながめながらいった。「君も知ってるだろうが、恐怖という感情は、意外に強力な思念を吸いよせる作用をもっているものだ。——ぼくは、しばらく精神安定剤やら、催眠術やら、いろんな手段を使って、彼女のことを思い出さないように注意した。思い出しかけると、あわてて意識をそらして、別のことを考えるようにしてね」

男は、ガックリ肩をおとして、溜息をついた。——青ざめて、木の葉のように、うちふるえ、みるもあわれな表情だった。

「最初のうちは、注意してたよ。——だけど、時がたつにつれて、だんだん記憶もうすらぎ、警戒もおこたるようになった。そのうちすっかり彼女のことは、忘れちまったような気になっていた。それが——」

「きょう……」マネージャーはうなずいた。

「そうなんだ。——今日、新聞を見てたら、何かの記事に、533、という数字が出てたんだ。そいつが妙に、心にひっかかった。——それが、何に関係のある数字か、思い出せなかったんで、つい、いっしょうけんめいに思い出そうとした。それがふいに、あの部屋の番号だと、わかったとたん……」

「封じられたる扉開きて、いまわしきメデュサのよみがえりぬ……」マネージャーはつぶやいた。「思いだしたはずみに、恐怖の念が集中して、彼女が、実体化したんですな」

「彼女は、きっと、ここへくるよ」男は、死人のような顔色で眼をすえた。「なんとか……話しあって、許しを乞い……」

「そんなに、こわがる必要ありますか?」とマネージャーはいった。「あなたの想像の産物でしょう?」

その時、玄関の方で、さわがしく、ののしりあう声がきこえた。——バトラーや、召使いの声にまじって、ひときわ高く、たけだけしい、女の声がした。

「ほうっといてちょうだい! ここは、私の家よ!——なぜ、はいっちゃいけないの?」

入りみだれた足音がきこえると、居間のドアが、バタンとあいて、あの女が、立っていた。——顎をひき、眼はらんらんと、怒りにもえて、男をにらみすえていた。

「き、き、きみ……」男は、歯の根もあわぬほど、ふるえながら、立ち上った。「ぼ、ぼ、ぼくは……」

「よくも、私を、罠にかけたわね」女は、ぞっとするような声でいった。「二度目のハニムーンとか、うまいことをいって、油断させておいて——よくも、私を消したわね。だけど、私は、こうして、また出てきたわよ」

「きいてくれよ」男は、あとじさりしながら、いった。「ぼ、ぼくだって……自分の生活がもちたかった。自分の趣味にあった、自由な生活が……」

「あはァ!」女は、腕組みして、室内を見まわした。「このゴテゴテの、胸の悪くなるような、成金趣味が、あなたの望みだったのね!——あなたに、そういう所があるとは、わ

かってたけど……」

「ほっといてくれ!」男は、ふるえながら、それでも必死の面持ちでいった。「ぼくは、何も——君の趣味上のペットじゃない……」

「このオバちゃん、なにさ……」居間にはいってきたグラマーが、顎をしゃくった。「なぜ、あんたの家の中で、大口たたかせとくの?——ほうり出しちゃいなさいよ」

「ふーん!」女は、一歩もひかぬ威厳を見せて、自分より四、五センチも高い、グラマーを見かえした。「わかったわ!——こういう、肉袋みたいな、下司女と、破廉恥なくらしをしたいために、私を消したのね」

「ぼくは……」男は、ひざまずかんばかりだった。

「きいてくれ——まだ、話しあいの……」

「だめよ」女は、歯の間から、おし出すようにしていった。

「あなたは、私を裏切って、消したんですものね。——今度は私が、あんたを消してやるわ!」

「奥さん……」おそらく、銃をつかうと思って、壁と、女の間にわってはいりながら、マネージャーは、声をかけた。

「なにも、そんなに、たけりたたなくても、いいじゃありませんか。——第一、あなたは、この方のおかげでつくり出され、存在できたんでしょう?」

「なんですって!」

女は、ゾッとするような金切り声で叫んだ。

「だって、そうでしょう?——あなたは、この方の思念の、実体化したもので……」

ふいに、女が、毒々しい声で、笑い出した。——おそろしい、魔女のような声だった。

「この男が、そんなことといったの?」と女は、乾いた笑い声をたてながら、眼ばかりは、ギラギラ燃えて、男を見すえていった。「とんでもない!——事実は、そのまったく逆よ! この男こそ——私の思念の実体化したものよ!」

「しかし、そんなバカな」マネージャーは混乱しながらいった。「じゃ、なぜ彼は——あなたを消すことができたんです?」

「この男の力は——」女は、グイとつき刺すように、指さしながらいった。「私の力とパターンがちがっていて、実在物も、消す力をもっているのよ。——私が、そういう風に、消す力の方をつよくつくったんですもの」

「じゃ、この人は、あなたの想像上の産物で……」マネージャーは、二人をみくらべながら、舌をもつれさせた。「あなたは、その——彼が、そういう力をもつように、想像でつくり上げたんですか?」

「ええ、そうよ。——私の前の夫を消すために、そういう力をあたえたの。私自身には、実在物を消す力はなかったけど、そういう力をもった、想像上の人物を、実体化させる力はあったわ」

「とすると——」マネージャーは、唖然としていった。「あなた方は、共犯で……」

「共犯者を、ついでにペットにしようとしたのが、よくばりすぎたわね」と女はいった。

「さあ、かくごしなさい。あんたなんか、眼にするのも汚らわしいわ」

「君!……」男は、哀願するように手をのばした。「君……おねがいだから……」

その姿勢のまま、女の思念の実体化したものである男の姿は次第に、影がうすれ、やがて消え去った。——同時に、男の思念の実体化したものだった、家も、グラマーも、バトラーも、そして、マネージャーも、彼のつとめ先である、ホテルも消えた。高級住宅街も消えた。——同時に、女も消えた。

かつては、実在した存在であったが、今出現していた彼女は、男の恐怖の実体化したものであったからである。

黄色い泉

1

三次市を出た時、山間に三つの川の出あう盆地は、名物の深い霧に閉ざされていたが、庄原市にさしかかると、あたりは嘘のように晴れ上った。

たたけばカンと音のしそうな、透明な大気の底に、冬枯れの中国山脈の、黄ばんだなだらかな起伏が、どこまでもつづいている。

「雪が全然ないのね」

前の日広島で買った西条柿の乾したのを食べながら奈美子はいった。

「案内書には、県下有数の豪雪地帯って書いてあったのに……」

「今年は新潟や富山の方だって、全然雪がないそうだよ」と、彼はいった。「スキー場は軒なみあがったりだそうだ」

「蔵王の方はどうかしら?」奈美子は掌に種を吐き出しながらいった。「あっちの方はあるでしょ?」

「さあ……」彼は、むこうからやってきたダンプとすれちがうのに気をとられながら、気のない返事をした。「今年もスキーに行くつもりかい?」

「あら、行くわよ。当然じゃない」奈美子は次の乾し柿の包み紙をひらきながらいった。「春までには、雪だってつもるでしょ?」

「医者は何ていっていた?」

「まだわからないって……」

奈美子はちょっと自分の下腹に眼をおとした。

「かえったら、結果が出ていると思うわ。——また、ちょっと不順になっただけかも知れない……」

「とにかく、今度は大事にしなきゃ……」

と、彼はつぶやいた。——前に二度もしくじっているから、とは、さすがに言わなかった。

「でも、三カ月や四カ月だったら大丈夫でしょう」奈美子は、白い美しい歯を、茶色の果肉につきたてながらくぐもった声でいった。「……さん、……カ月で、とびこみやってたわよ」

「お前、柿をあまり食べるなよ」彼は横目でちょっと妻を見ながらいった。「柿は冷えるぞ」

「うん……」

と奈美子は口をもごもごさせながらいった。

ゆるやかな起伏の間に、民家の数がふえはじめた。——藁葺き屋根はもうすくなく、ほとんどが赤い石見瓦か、青い化粧瓦で屋根をふいており、それがかえって赤茶けた老年期の山々と、中国路の青い空にぴったりする感じだった。

広島県三次市から鳥取県の日野町まで、南西から東北に脊梁山脈を斜めに横切って走る国道一八三号線は、三次を出てからずっと、国鉄芸備線と、建設中の中国縦貫道の盛土と平行していた。——正月明けのこの時期、観光客のマイカーの波はひき去ってしまい、仕事の方はまだ本格的にはじまっていないと見えて、山また山の間を縫って行く国道の往来は閑散として、高速道路建設用らしいダンプや、材木をつんだトラックなど、数台とすれちがっただけだった。

山内の町を出はずれたあたりで、ジープらしい車がとまっていて、防寒具に身をかためた男が手をふって、二人の車をとめた。

髭をはやして、陽やけした、若い、学生とも見える青年が、軍手をはめた手で登山帽をとって中をのぞきこんだ。

「すみません……」と、青年はていねいな口調でいった。「バッテリーがあがっちまったんですが——電源を貸してくださいませんか？」

いいですよ、といって彼はエンジンを切り、ボンネットをあけた。

連れの青年が、ジープのボンネットをあけ、コードでこちらの車のバッテリーと、ジープのエンジンのセルモーターとをつなぎにかかった。

車をおりると、あたたかい午前の陽ざしがぬくぬくと降りそそいで、背をあたためた。風もない、物音一つしない、山間のおだやかな風景は、思わず、うん、と大きな伸びをしたくなるようなのどやかさに満ちていた。

「いい天気ですね……」彼は煙草をくわえながら眼を細めていった。「それにずいぶんし

ずかだ」

「今年は雪が全然ありませんからね」髭の青年は、自分もくしゃくしゃになった煙草をくわえながらいった。「いつもなら、もうちょっと、比婆山の方へスキー客の車やバスがおしかけてくるんですが……。おかげでわれわれの方は仕事がはかどって大助かりです。大体ここらへんは、県下でも有数の豪雪地帯で、去年あたりは三月まで雪に埋まっていましたから……」

「なにか——調査ですか？」

青年の煙草に火をつけてやりながら、彼はジープの荷台をのぞいた。——シャベルが何十か、それに小さな移植ごてのようなものや、測量器械らしいものが、箱にいれてたたんだテントの横においてある。

「考古学ですよ」青年は煙を吐き出しながらほほえんだ。「ここらへんは、何千という古墳がちらばっていましてね——。隣の三次の市域だけで二千以上、庄原から比婆郡をふくめたら五千ちかくあるんじゃないですか」

「そんなに！」

彼は少しおどろいて、まわりの山々を見まわした。

「すると昔は、こんな所に人が大勢住んでいたんですか？」

「そうでしょうね。——古墳といっても、あまり大きいものじゃありませんが、ここらへんは、吉備品遅という国造がおかれた地域ですからね。それに帝釈峡の方からは、縄文早期から、前期、中期とずっとかさなっている遺跡が出ていますし……最近では、洪積期の〝帝釈原人〟の骨がみつかったり、なかなか面白い地域ですよ。高速道路ができちまうと、また列島改造なんかであらされちまうから、今のうち何とか、できるだけまとまった調査をやりたいと思っているんですが……」

「ここらへんも、その〝原人〟ってのは出るんですか？」ふいに奈美子がたずねた。「今でも？」

「なにをばかな事を言っているんだ」彼は苦笑した。「原人というのは、何万年から十万年以上前に住んでいた人間だよ」

「でも、二、三年前の新聞で見たわよ。——たしかここらへんに、原人だか猿人だかが出るって……」

「〝比婆山の雪男〟の事ですか？」髭の青年も苦笑しながらいった。「あれは、もっと北の比婆郡の方です。——西城町の方だったかな？」

髭の青年がジープの方をふりかえると、エンジンをかけて、コードをかたづけていた無口な青年がうなずいた。

「今でも出るんですか？」と奈美子はかさねてきいた。

「さあ——山仕事をしている人たちの中で、姿を見たとか、足あとが残っていたという人が、ちょいちょいいたようですが、今じゃその噂も、すっかり観光資源らしいですよ。——このごろはどうなんだろう？」

ボンネットをしめながら、もう一人の青年は、ききとりにくい声でぼそぼそいった。——髭の青年は、仲間の方にちょっと体を傾けて、おどろいたような顔をしたが、すぐ声をたてて笑い出した。

「彼が二、三日前に、それらしいものの姿を見たそうですよ」と髭の青年はいった。「もちろんはっきり怪物と確認したわけじゃありませんがね……」

「まあ——どこで？」と奈美子は体をのり出した。

「ここからまっすぐ北の、比和町って所から少し山奥にはいった所です。——ぼくたち、きのうまでそこにいたんです」

「どんな恰好をしているのかしら？　その……雪男って……」

「写真があるわけじゃありませんがね——まあ、これまでの目撃者の話だと、全身赤っぽい毛でおおわれて、大目玉で……足あとは人間よりずっと大きいそうです」

「こわいわね……」奈美子はおそろしそうに肩をすくめた。「でも、見たいわ」

「ばかばかしい……」と彼はつぶやいた。「こわがりのくせに、そういう話になるとすぐのっちまうんだから……」

「何かを見まちがえたんでしょうね……」髭の青年は、また破顔した。「調査隊も、何回か出ましたけど、見つかりませんしね。——中国山脈に、熊でものこっているなら、それを見まちがえたという事もあるでしょうが……」

「さあ、行くぞ」と、彼は運転台にのりこみながらいった。「じゃ、さよなら」

「どうもありがとうございました」

髭の青年は頭をさげた。無口な方の青年も、ジープの運転台で帽子をとった。

「これから帝釈峡へ行くんですか？——もう少し行って、庄原の駅前に出ると、右手にまがる道があります。標識が出てるからすぐわかりますよ。それじゃ……」

2

「比婆道後帝釈国定公園」は、北の鳥取、島根、広島三県にまたがる、千二百メートル級の、道後、三国、船通、比婆の諸峰をつなぐ尾根の部分と、南の帝釈峡の部分との二つにわかれている。

中国山地に多い石灰台地を帝釈川が浸蝕してできあがった帝釈峡の奇観は、河水が石灰岩にトンネルをうがってできあがった、雄橋、雌橋などの天然橋や、五十メートルの岩壁に二階建の洞門が並ぶ唐門鬼の窓や、白雲鍾乳洞といった地形的なもののほかに、ダムによる人工湖、神竜湖にうつる秋の紅葉の絶景がよびもので、真冬の、それも松がとれたばかりともなれば、さすがの名勝も、観光客の姿はまばらで、人気のない冷えこむ断崖が、かえって観光地らしからぬすごみを吐いているようだった。

帝釈峡に車をとめて、断崖ぞいに下流の雌橋までくだり、そうめん滝や白雲洞をのぞきながら、二人はまた町までかえってきた。——八世紀初め、行基開基とつたえられる永明寺を見て、バス停前の食堂で早めの昼食をとった時は、二人ともかなり疲れていた。

そのせいか、一本ぐらいならと思って飲んだビールの酔いが、どうしようもなく重く、全身にまわった。宮崎へフェリーではいり、そこから九州、中国路と、ずっと運転をつづけた疲れが、突然どっとおそいかかってくるようだった。

「どうする?」奈美子は、まっかになって、頭を机につけてしまった彼を見て、心配そうにいった。「ゆうべあんなにおそくまで、本なんか読んでるからよ。——ここで一時間ばかり休んで行く?」

「いや……もう出発しなきゃ……」彼は鉛のように重い目蓋を、ひきずりあげようと努力しながら、もつれた舌でいった。「予定が、すこしおくれちゃってる……」

「比婆山の熊野神社なんて、別に寄らなくてもいいじゃないの。——伯母さんには、都合があって寄れなかったといっておけば……」

「いや……あの伯母は、うるさいんだ。それにすぐ嘘がばれちまう……」彼はよろよろと立ち上りながらいった。「どうしても、お札をもらって来てくれって、くれぐれもたのまれたんだ。——紀州と同じように、熊野神社があって、那智の滝まであるのは、比婆山だけだからって……」

「じゃ、私が運転してもいいのね」と奈美子ははしゃいだ声でいった。「やっと私の腕を信用する気になったのね」

「やむを得ず……だ……」彼はよろめきながら、キイをとり出して奈美子にわたした。

「腕は信用してるけど……君と来たら、無類の方向音痴だから……」

車の助手席にころがりこみ、シートをたおす前に、それでも朦朧とした頭を必死にふりしぼりながら注意をあたえた。帝釈峡から、もと来た道をひきかえし、雨連という所で、T字路を右にとる。そのまま山中をまっすぐ行くと、再び国道一八三号線へ出る。右へまがって、西城町の町並みをぬけ、別所という所で、左へ川ぞいにはいって行く道をつめて行くと、熊野という所に出るから……。そこまで、もつれもつれ言った時、どうにもならない睡魔がどっとおそいかかって来て、彼は泥のような眠りに沈んだ。——眠りこむ寸前、地図をよく見ろ。わからなくなったらおこすんだ、と、言ったつもりだったが、本当に言ったかどうかあやしかった。

結局奈美子は、彼を一度も起さず、地道の動揺でひとりでに眼がさめた。——眼をこすって、まわりの景色を見ると、車は川沿いに走っている。日ざしは傾き、山々は濃い影をおとしはじめていた。

「どのくらい眠った?」

彼はあくびをしながらきいた。

「さあ——二時間半か、三時間ぐらいかしら……」とハンドルをにぎりながら奈美子はこたえた。

「そんなに?」

彼はおどろいて、一ぺんに眼がさめた。——同時に、何となく不吉な感じにおそわれた。

「じゃ、もうそろそろつくころだが……」

道はいつの間にか川をわたっており、今まで左手に見えていた川筋が、右手にかわった。——前方に山の尾根がせまってきて、けわしいのぼりにさしかかりかけている。——だが、奇妙な事に、正面に見えてこなければならない、比婆山塊最高峰の立烏帽子山らしいものが見えてこない。それらしいものは、ややガスがかかり出した空の右手にそびえている。

「いまどこらへんだ？」と、彼はややけわしい声できいた。

「さあ——峠を一つこえて、さっき、たしか比和町って所を通りすぎたけど……」

「比和町だって？」彼は呆然とした。「冗談じゃない。君はやっぱりまがる所をまちがえたんだ。——このまま行ったって、熊野なんかに出やしない。とんでもない所へ出てしまう」

「あら、だって、たしかにあなたのいった通り、一八三号線へ出て、西城の町から左へまがったのよ」と奈美子は口をとがらせた。

「そうじゃない。西城の町を通りすぎて、別所という所で左へ曲れといったんだ」

「でもあなた、よっぱらってむにゃむにゃいって、よくきこえなかったんだもの」

「なぜ地図を見なかった？」

「途中でダッシュボードをさがしたけど、なかったの」

折りたたまれたロードマップは、寝こんでいた彼の体の下にあった。

車はもう王居峠のヘアピンカーブにかかっていた。——時刻はすでに三時をまわっている。今さら西城まで、二十キロ以上の山道を、あらためてひきかえして、比婆山麓へむかっても、途中で日が暮れてしまう。熊野信仰にこりかたまった伯母には、何とかいいわけをする事にして、運転をかわった彼は、そのまま車をすすめ、峠をこえた。——その晩の泊りの予定は、算盤で有名な出雲横田だった。熊野神社から国道へひきかえし、備後落合で国道三一四号へはいって、比婆山の東、三井野で尾根をこえるつもりだったが、比婆山塊の西側にも、尾根をこえる山道があって、自動車通行可能になっている。尾根をこえさえすれば、どうとっても、横田町か仁多町へ出られる。

「ごめんなさい……」と奈美子は、ぶすっとした顔でハンドルをにぎっている彼に、小さい声でいった。「またやっちゃったわ」

「いいんだ」彼は表情をやわらげていった。「できた事はしかたがない」

奈美子はそっと彼の肩に頭をもたせかけた。——その小さな頭を、彼は左腕で抱いてやった。

「ねえ……」と奈美子はふと思い出したようにいった。「さっき通りすぎた比和って町ね——今朝あった学生さんたち、あの町の北で、二、三日前〝雪男〟にあったって言っていなかった？」

「ばかな事考えるんじゃない」と彼はいった。「こわいんだろう」

王居峠をこえた上湯川から道を右にとり、車は高野山川の上流を、北の島根との県境にむかってつめていた。西の一二六八メートルの猿政山と、その連峰毛無山が渓流ぞいの道にどっぷり淡い影をおとし、東の空には比婆山塊の一峰吾妻山が、傾いた日にあかあかと

照らされ、民家一軒ない、対向車の一台もやってこない、わびしい山道だった。——山間に深くはいりこみ、日も傾いて、気温が急速にさがりはじめているのが、ヒーターを入れた車の中からもわかった。——赤い日に照らされる東の峰々の、島根県側だけが、うすく雪が刷かれているのが見える。

俵原という小集落をすぎて、いよいよ県境をこえようとする時、奈美子が急にまっさおになって腹痛を訴えはじめた。

「乾し柿をあんなに食べるからだ」と彼はいった。「それに、午食にそばなんか食べたろう。冷えるものばかりじゃないか」

「おねがい。とめて……」奈美子は顔に脂汗をうかべて、体を二つに折った。「ちょっと……出しちまえば、大丈夫と思うわ。でも、このままじゃ我慢できない……」

彼は車をとめた。——外は凍てつくような寒さだったが、幸い風はない。まわりを見まわして、右手にあるややゆるやかな斜面へ、道からほんの十数メートル、苦しむ奈美子の腕をささえて連れこんだ。中国山脈特有の、樹木のほとんどない低いつづじか何からしい灌木と短い草にまばらにおおわれた斜面で、所々に大きな黒っぽい岩塊がころがっている。

「いいわ——あの岩の陰でしてくる……」

奈美子は、汗を流しながらいった。

「いや！　ついてこないで……。もっとはなれててよ。はずかしいから……。道の方、見はってて」

「誰もきやしないよ。こんな山の中で……」

雪男が出てくるといけないから、ついていてやる、といおうとして、ふと口をつぐんだ。——奈美子をこわがらせるといけない、というだけでなく、なんとなく、その事をいうのが不吉に感じられたからである。

奈美子がまわりこんだ岩かげから、四、五メートル道の方へもどった所で、彼は待った。——妻とはいえ、やはり女だから、下痢の音などきかれたくないだろうと思って、彼は岩に背をむけて立った。

一人になると、こわいほどの寒気と静寂がまわりからひしひしと身をしめつけた。——風はないのに、山全体が、耳にきりとれないような音をたてて鳴っているようだった。空には黄金色にかがやく絹雲が幾筋か刷かれ、眼前にたちふさがる高峰の、濃藍色の影と、背後に夕陽を赤く浴びてそびえたつ比婆の山々が、東と西から、赤光と暗影でもって、彼をはさみうちにしてのしかかってくるような気がした。

身をしめつける山気に対抗するように、彼は手をこすりあわせ、足踏みをし、低く口笛を吹いた。背後の岩陰から、奈美子のたてる物音は何もきこえなかった。——そのまま、三分たち、五分たった。

少しおそいな、と思いながら、彼は岩の方をふりかえった。——この寒気に、あまり長いこと肌をさらしていると、かえって悪くなるかも知れない。我慢できるようになったら、とにかく人家のある所まで行って……。

かすかな女の悲鳴を、きいたように思ったのは、その時だった。

3

最初彼は、それを空耳かと思った。——悲鳴は、山のたてるざわめきならぬざわめきにうち消されるほどかすかだったし、奈美子のしゃがんでいるはずの岩陰より、ずっと遠くできこえたような気がしたからだ。

はっと耳をそばだてて、反射的に彼女の名をよぼうとして、一瞬ためらい、ちょっと唇をしめらせて、小さくよんでみた。

「奈美子……」

声はかすれていた。で、咳払いを一つすると、もう一度、やや大きくよんだ。

「奈美子……まだかい?」

足は自然と、二歩、三歩、岩の方へうつっていた。

「いい加減で我慢しないと、今度は本当に冷えこんでしまうぞ」と、彼は岩にちかよりながらいった。「おい、奈美子……」

岩の後ろをのぞきこむのは、やっぱりためらわれた。——彼は岩の傍により、もう一度咳払いをして、眼をそむけながら、よびかけた。

「どうだい、奈美子——もう大丈夫かい?」

返事はなかった。

ふと、ある種の不安におそわれて、彼はもう一度、よびかけながら、岩のむこうをのぞきこんだ。

「奈美……!」

のどの奥が、一瞬ひゅっとふさがり、声は途中でとまった。

奈美子はその岩陰にいなかった。さっき、その岩からはなれる時、眼の隅に、体を二つに折り、スラックスをゆるめながらしゃがみこもうとする姿を、たしかにちらと見たにもかかわらず、その岩陰に彼女の姿はなく、排泄のあともなかった。

携帯用のピンクのティッシュペーパーの包みが、そこにおちているだけだった。

「奈美子!」

思わず彼は、眼前にひろがる、スロープにむかってさけんだ。

声は、たちまち大気に吸われて散ると見えたが、すぐ谷々にこだまして、いくつもの遠い嘲るような叫びとなってかえってきた。——奈美子……奈美子……奈美子……。

こだまが消えて行くと、あとはまた蕭々たる山の音があたりをみたすばかりだった。

彼は、そこから一番近くに見えるもう一つの岩へむかって走り、その岩陰をのぞきこみ、そこにも彼女の姿がない事を見てとると、さらにもう一つの岩陰へむかって走った。

岩陰から岩陰へとさがしながら、時々立ちどまって、口に両手をあて、二度、三度と声をかぎりに妻の名をよんだ。

返事はない。

いつの間にか、彼はずくずくに汗にまみれ、涙さえ流しかけていた。

わずか、三、四分の間に、五メートルとはなれていない岩陰から、妻はどこへ消え失せてしまったのだ?——しかも、あのはげしい腹痛をこらえながら、排泄のあともなく……。

呼ばい、斜面を闇雲に走りまわるうちに、ふと彼は、枯れた灌木の一つの上に、何か白いものがふわりとひっかかっているのを見つけた。そこは最初の岩から、五、六十メートルもはなれた所にあるつつじの木の一むらだった。赤と黄の縁取りに、ひと目で奈美子のものと見てとった彼は、夢中で手をのばそうとした。

その時、名状しがたい戦慄が、体の芯からぞうっと湧き上り、全身の汗が、一瞬にしてひくのが感じられた。

なにかが、彼を見ていた。

その気配を、ふと右の首筋あたりに感じたとたん、彼の全身は凍りついたように動かなくなってしまった。

石のようにこわばった首筋をむりにまわして、じりじりと視線を右にむけて行くと、斜め上方十メートルほどはなれた岩陰から、じっとこちらを見つめているそいつの眼と、正面からむきあった。

視線があったとたん、そいつは身をひるがえして岩の向うにかくれた。——しかし、黒っぽい、毛におおわれたのか裸の皮膚なのかわからぬ、人とも獣ともつかぬその異形の姿と、ぎらぎら輝く、何ともいえぬ邪悪で凶暴な光をたたえた大きな双眼は、ほんのまばたきするほどの間に、彼の眼底にやきついた。

がん! と脳天から脊椎をまっすぐ下へ、たたきのめすような衝撃が、体の中を走った。

比婆山の雪男!

ふだんなら、そう思ったとたんに、恐怖に体がひきつり、悲鳴をあげて道までころげおりただろうが、その時は、逆上していたためだろう。逆に、そいつの消えた方角へむかって、まっしぐらに突進していた。——あいつが奈美子をさらったにちがいない、という、理屈の通らない激情にかりたてられながら……。

その岩陰に、そいつの姿は、もちろんなかった。——しかし、息をあらげて走る彼の眼の隅に、もう一度、二度、そいつの黒い背中が、ひょい、ひょいと岩陰から岩陰をつたわって走るのがうつり、そのあとをおって、彼も岩陰から岩陰へ、灌木の茂みから茂みへと闇雲におった。最後にそいつの姿を見かけたあたりまで来て、彼はさすがに息が切れて、岩の一つにもたれて、呼吸をととのえねばならなかった。

そいつの姿を見失ってしまった事はたしかだった。——もう、岩陰から彼をうかがう視線の気配はなかった。

しかし、気息がととのってくると、そいつがまだ、ちかくにいる、という感じが強くした。冷えた空気の底に、かすかに異臭がただよっていた。その異臭が、さっきそれがかくれていた岩陰にのこっていたものと同じものだ、と気づいた時、彼は眼をぎらつかせてあたりを見まわした。

砂地の上に、一点、赤いものを見つけたのはその時だった。

奈美子の血だ、と、咄嗟に故なく抱いた確信は、ほんの数秒あとに裏づけられた。

——数メートルの間隔をおいて、点々とつづいている血痕の一つの傍に、奈美子のパンプスが片方、おちていた。

やつが——いや、ひょっとしたらやつらが、奈美子を殺した……と、瞬間的に彼は思って、骨が鳴るような思いを味わった。いや——、まだ殺してはいないかも知れない。傷つけ、さらって行っただけかも知れない。

「奈美子！」

と彼はもう一度叫んだ。

「どこにいる？　おれだ！」

叫びながら、彼はおちていたパンプスをひろってにぎりしめ、所々草の中に消える血のあとを追って走った。

最後の血のあとを見つけてかけよった時、そのむこうに、黒々と口をあける洞穴があるのに気がついた。——山腹に露出する岩と岩との間に、斜め下方へむかってゆるい傾斜でうがたれた洞窟で、その前に、高さ一メートル半ほどの岩と、灌木のしげみがあって、入口はちょっと見にはわかりにくい。こちらの山腹に長い影をおとす猿政山の尾根からはずれた西日が、洞穴の中にかなり深くさしこみ、その赤い光に照らされた入口の土の上に、もう片方のパンプスがころがっているのが見えた。赤っぽい粘土の上には、なにかをひきずったあともついていた。

奈美子が、その洞窟にひきずりこまれたのは、まちがいなかった。

正面からさしこむ夕日をたよりに、彼は洞窟の中にふみこんだ。——獣臭いというか、硫黄くさいというか、一種腐臭に似た、いやなにおいが、奥の方からかすかにただよってくる。

「奈美子！」

と、彼は奥へむかってよんだ。

かなり深いらしく、反響はほとんどかえってこない。西日のさしこむはずれに最後の血のあとを見つけ、彼はいつの間にか右手ににぎりしめていた、太い、手ごろな長さの木の枝で足もとをさぐりながら、岩肌に照りかえす西日の明りをたよりに、奥へ奥へと進んだ。足もとはしめった粘土らしく、すべりやすく、途中から岩肌に水がしたたりはじめた。

洞窟はほとんどまがらず、斜め下方にどこまでも奥深くのびていた。もう入口からの光もとどかず、彼はライターの火をつけて明りのかわりにした。が——奇妙な事に、どこかから吹く風に、炎がふき消されても、まわりの岩肌や足もとは、ぼんやり見える。光り苔でも繁殖しているのだろうと思って、彼はガスの節約のためにライターを消し、さらに奥へ進んだ。洞窟は、地の底までつづくかと思われるほど果てしなく深く、進むにつれて、湿って冷たい空気の底に、いやな、腐臭に似た臭いはいよいよ強くただよいはじめた。

靴が、ポチャリと氷のように冷たい水にふみこんだ時、さすがに彼もぬれた岩肌に手を

ついて一息入れた。斜面を走りまわって、体は綿のごとくつかれ、のどがからからだった。肩で荒い息をつきながら、ライターをつけて足もとを照らして見ると、そこに黄色くにごった水が四、五メートルにわたってたまっていた。

粘土か何かをとけこませたらしい黄色い水は、ただたまっているだけでなく、ゆっくり動いていた。洞窟のどこかから湧き出して、どこかへ流れこんでいるらしい。泉のむこうに、また地面らしいものがのぞいているが、はっきりは見えない。

ちょろちょろと岩壁をつたう水音に、明りをさし上げると、水たまりをこえたあたりの岩肌の突出部から、澄んだ清水が、きらりと糸をひいたようにしたたりおちているのが見えた。——水たまりをわたってあの水で、からからになったのどをうるおそうと、黄色い泉の中に、杖がわりの枝をさしこんだとたん、

「だめ！」

と、低い、しかしきびしい声がした。

「その水を飲んじゃだめよ。——その水たまりをわたるのもいけないわ」

「奈美子！」

彼は思わず眼を宙にすえて叫んだ。

さらさらと湧き出し流れて行く地下の泉のむこうの暗がりに、奈美子の姿が朦朧と立っていた。

——ライターの炎以外の、なにか得体の知れないかすかな青白い光に照らされて、奈美子の姿は幻のように闇にぼんやりとうかんでいる。

「どうしたんだ？——無事だったのか？　あの怪物は……」

「なにもきかないで……」

奈美子は、青白い、さびしそうな顔でいった。——黒い髪が、ぬれたように土気色の頬に粘りつき、唇の色は失せ……そして、かぎ裂きだらけのスラックスの股間は、したたりおちる血でべっとりとぬれているのに気がついた時、彼はぎょっとした。

「奈美子！——お前、血が……」

「ええ……でも、もういいの……」奈美子の声は低く、洞窟にこだまして、冥府の底からきこえてくるようだった。「こうなってしまったのは、しかたがない事だったのよ。——私、もうあなたと一緒に行けないわ……」

「なにをばかな！」彼は、奈美子の口調に、体がかたかた胴震いしはじめるのを感じながら、戦慄を吹きはらおうとするようにどなった。「早く町へ出て、医者に見せなけりゃ……」

「もうおそいわ……」奈美子はわびしそうに顔を伏せていった。「あなた、ここからかえって……。そして、私の事を忘れて……。私はずっとここにいなければならないの」

「なぜだ？　なぜ、そんなばかな事をしなけりゃならないんだ？」彼は悲鳴をあげるように叫んだ。「やつらが……何かしたのか？　ここでやつらといっしょにいるのか？」

奈美子が顔を伏せたままうなずいた時、彼の怒りが爆発した。

「そんな事させるもんか！」彼は洞窟にわんわん反響するような大声で、喉一ぱいにわめいた。

「やつらがなんだというんだ！　君は俺の大事な妻だぞ。やつらが行かせないというなら、腕ずくでも君をつれて行くぞ！　君は――これからぼくたちの子供をうむ体だ」

泉の中に、ざぶりと一足ふみこんだ時、奈美子が、

「待って！」

と声をかけた。低い、陰気な声だったが、その声をきいたとたん、彼の体は電気にかかったようにしびれて動かなくなった。

「私だって、あなたと一緒に行きたいわ。――いいわ、私、もう一度、あの連中と話しあってみる。だから、ここで待っていて。絶対に……ここを動いちゃだめ。この泉をわたって、ここから奥をのぞいちゃだめよ」

奈美子の姿は、ふっ、と闇の奥に消えた。――とたんに彼の体の金縛りは解け、彼はべたりと黄色い泉の傍の、ぬれた粘土の上に尻餅をついた。

そのまま、どのくらい待ったかわからなかった。――奈美子の姿は奥の暗がりへ消えたままあらわれず、黄色く濁った泉は、ぼんやりとあたりを照らす、青白い光の中に音もなく湧きつづけ、岩肌よりおちる清水は、ちょろちょろと澄んだ音をたてつづけた。ライターの焔で時計を見ると、もう奈美子が消えてから、三十分以上たっていた。

しびれを切らした彼は、奈美子がとめた事も忘れて、岩壁の出っぱりを足がかりに、泉

の中に杖をつきながら、地底の水たまりをこえ、奈美子の消えた奥の暗がりへと進んだ。泉のあたりをぼんやり照らしていた明りは、ものの二十メートルもすすむと、まったく消え失せ、鼻をつままれてもわからない闇があたりをおしつつんだ。岩壁を手さぐりしながら、なおも十四、五メートルもすすむと、さっきからただよいつづけていた腐臭が、たえがたいほど強くなり、吐き気がしそうなほどになってきた。

その腐臭にみちみちた闇の底に、なにかおぞましいものが蠢き、またかすかにうめきをあげる気配があった。

息をひそめて岩肌にへばりついていた彼は、とうとう我慢しきれなくなって、ライターを高くかかげ、石をすった。

ライターの小さな炎が、闇になれた眼には、何百燭光もの光となって、あたりを照らした。――その光の中にうき上った光景は、何ともいいようのないおぞましいものだった。

そこは、洞窟がにわかに広くなり、高くなった広間のような所で、その中央に、奈美子の細く、白い裸身が、一糸まとわぬ姿で横たわっていた。その裸身のまわりに、あのおぞましい、醜怪な姿のやつらが、何頭も蠢いていた。一頭の、ひときわ大きいやつは奈美子の頭の所にうずくまり、一頭は淡雪のような胸の乳房をもてあそび、一頭はなめらかな下腹をなめ、さらにもっとも凶暴そうな一頭は、無惨におしひろげられた奈美子の下肢の間にいて、血まみれの胯間をおかしていた。

しかも、奈美子は、単に無抵抗にやつらにもてあそばれているのではなかった。左右に

ひろげられた彼女の腕の先には、それぞれ一頭の醜怪なものがいて、彼女の繊手は、その醜怪なやつらの、胯間のものをにぎりしめ、愛撫していたのだ。おしひろげられた下肢の先にも、一頭ずつがいて、彼女の足指をなめずっていた。身をぬめぬめともだえさせ、快感のうめきをあげつつのけぞった彼女は、そのやさしい唇に、のけぞった頭の所にいる、一きわ大きく一きわ醜怪なものの胯間の一物を、のどの奥にまでくわえこんでいる。

彼が気がちがったような叫びを上げるまでもなく、ライターの光をあびて、その醜怪なものたちは、一せいにぎらぎら光る眼をこちらにむけた。——黒く、また赤っぽく、あるいは青光りするやつらの姿、人とも野獣とも、またこの世のものでない妖怪とも見えるやつらの姿を、はっきりと見きわめる事はできなかった。全身剛毛におおわれているようにも見え、また全裸の皮膚が光るようにも見えた。口は大きく、一様に牙をむき出し、中には角があるやつもいるような気がした。はっきりと見てとる暇もないうち、やつらはいっせいに唸りをあげて彼にむかっておそいかかってきた。猛烈な異臭と、凶暴な息吹きが、熱く臭い涎が、黒い渦を巻いておしよせてきた。——今まで、快感に身をよじっていた奈美子までが、怒りに鬼女のような面相になり、裸のままはね起きて彼にむかって突進してきた。

身も世もない恐怖にとりつかれて、彼はただ、闇雲に逃げた。ライターの炎を最大にして後へ投げつけ、時折立ちどまって木の枝をふりまわし、泉の中をわたり、坂道にすべり、ひたすら洞窟を出口に向って逃げつづけた。やっと出口にとび出すと、そこにあった一メートル半ほどの岩を、必死の馬鹿力でもって斜面におしころがして洞窟の口をふさぎ、中からおしよせてくる、おそろしい叫びを出すまいとするように肩でおさえつづけた……。

4

「どうもよくわからんが……」

供述書をとりかけていた、Y町警察の初老の警官は、彼の話の終りの方にくると、妙な顔をして、罫紙から顔をあげた。

「あんた、それほんとの事言ってなさるんか?——つくり話なんかしてもろうちゃ困るよ」

「本当です。絶対に本当です!」彼はヒステリックに叫んだ。「あいつらが……あの怪物どもが……ぼくの妻を、あの洞窟に連れこんで……」

「しかしのう……」警官はうたがわしそうな目つきで、罫紙の前のページをめくった。「なんぼなんでも、この土地でこんな話とくると、誰でも、こりゃつくり話じゃとすぐ思うわな」

「どうしてですか?」彼は腰をうかしていった。「比婆山の雪男は……ぼくだけが見たわけじゃないでしょう? 広島側の、何とかいう町では、町ぐるみ観光資源にまでして……」

「さあ、それじゃから、あんたの話をきいて、われわれもああやって、山狩りまでもして

しらべとるんじゃが——肝心のあんたの話がこれではな……とても信用でけんがな」

「なぜです？」彼はあつくなって、テーブルをたたかんばかりに言った。「なぜ、つくり話だなんて思うんです？」

「あんた、いくつかな？」途中からはいってきて、彼の供述をきいていた、中年すぎの刑事が、腕を組んでたずねた。「名前は何といったっけ」

「伊豆渚……二十六歳……」と彼は答えた。

「伊豆渚それ本名か？」

「ええ、もちろん……」

「伊豆渚それで奥さんの名が伊豆奈美子か……」刑事は眉根にしわをよせた。「妙な……因縁かも知れんな。あんた、古事記をよんだ事ないのか？」

「ええ……話の一部は知ってますけど……中学か高校の時、国語の時間に少し習ったような気がしますが、国語はあまり好きじゃなかったので……」

「戦後の若いもんは、そんなもんかも知れんな……」

そういいすてて刑事はつかつかと部屋を出ていった。

「古事記がどうかしたんですか？」と、彼は不安げに警官にきいた。

「さあ、それやがな……」警官は妙なものを見るように彼の顔を見た。「あんたが、古事記をろくに読んどらん、嘘もいっとらんとすると……いやいや、それはどうも話がうまくできすぎとる。あんた——伊弉諾、伊弉冉尊の事を知っとるか？」

「イザナギ、イザナミ？」彼は不意に胸をつかれたような気持におそわれた。「え……ええ、名前は知っています。神話で、国産みをしたという神さまでしょう」

「そうじゃ——その二柱の神様のうち、妻神さまの伊弉冉尊がなくなられた時、この比婆山にほうむられたという伝説がある事は？」

「え？」彼はぎょっとして、警官の顔を見た。「知りません。——ほんとですか？」

「ほれ、これ読んでみ……」再びはいってきた刑事が、手ずれのした古典文学大系の一冊を彼の前に投げ出した。「近所で借りてきたった。——はじめの方や、紙をはさんである」

彼はふるえる手で、その本をひらいた。仮名がふってあるので、文章は読めた。

〃……故、伊邪那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。……〃

「もうちょっと先や、ほれ、ここの所を読んでみ……」

刑事の太い指がさすくだりを、彼はふるえながら読んだ。

〃……故、其の神避りし伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りき。……〃

「な、比婆山ちゅうのは、何もスキー場や、雪男の話ばかりやないんで……」刑事の声は、遠くできこえるようにひびいた。「こうやって、古事記にもちゃんとのってる、古い伝説がある所でな。隣の仁多町の山の中には、伊弉冉ちゅう集落までちゃんとあるしな……。ここで伊弉諾尊が、黄泉の国に、伊弉冉尊を訪ねて行かれた時の伝説と、同じような事が起ったいうていわれても、そらあんた、な……」

刑事の言葉も耳にはいらないように、彼はなおも先を読みすすんだ。

〝……爾に伊邪那美命客へ白ししく、「悔しきかも、速く来ずて。吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我が那勢の命、入り来坐せる事恐し。故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。」とまをしき。如此白して其の殿の内に還り入りし間、甚久しくて待ち難たまひき。故、左の御美豆良に刺せる湯津津間櫛の男柱一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまひし時、宇士多加礼許呂呂岐弖、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り……〟

彼の手から、本がばたりと床におちた。――それでは……あれは……あの〝彼の見た事〟はいったい……。

戸口から、若い警官がはいってきて、供述をとっていた警官と刑事にあわただしく耳打ちした。二人は、まっさおになってふるえている彼の方をふりかえり、警官の方がゆっくりちかづいてきて、彼の肩に手をおいた。

「あんたの奥さんの死体が見つかったそうや……」と警官はいった。「あんたのいうとった、最初の岩の所から、ちょっとはなれた灌木の中で――。死因は、今の所、切迫流産による出血多量という事らしい。さあ、一つ、本当の事をきかしてくれんか？　あんたがなんで、あんな寒い山の中に、奥さんの死体を――いや、ひょっとしたらまだ生きとったかも知れん奥さんを、ほったらかしにしてきたか……」

逃ける

1

「旦那……」

小路の暗がりで、かすれた陰気な声をかけられた。

「もし、旦那……。ちょっとお話があるんですが……」

郊外線駅前の盛り場——と言っても、御多分に洩れず、でかい団地や造成宅地が二つ三つでき、公害問題のやかましい都心部からうつってきた大工場の社宅も完成して、このごろではめっきりネオンの数も、小粋な女たちの姿もふえ、ネタ日照りの大衆週刊誌に、「最近の新興アナ場」などと紹介されるようになっている。

が、一歩にぎやかな表通りをはずれて、裏道へはいれば、つい六、七年前まで、田圃の中のさびれ切った旧宿場、と言った、昔ながらの町筋が、赤茶けてうっとうしい常夜灯や、ほこりまみれの医院、質屋、などの看板を照らす明りのむこうに、暗く、ひっそり閑とうずくまっていて、破れかけた古い板塀の間から、八つ手や無花果の葉がわっさりはみ出していたり、思いがけない住宅の間に、もとは農具か何かを入れたらしい半つぶれの藁小屋が、すえた臭いをたてていたりする。

そんな裏通りを、これは公団ではない、民営のアパートへの近道だというので、おそくなるといつもぬけるのだが、明りを消して寝しずまった古い屋並みの間を、もうちょっとでぬけ、これは最近やっと蛍光灯につけかえたばかりの街灯の照らす、小さな土橋のほと

りに出ようとするわずか手前で、いきなり道傍の暗がりから、陰にこもった声をかけられた。

正直言って、のこっていた酔いがさめかけるほど、ぎょっとした。——しない方がどうかしている。

十一時すぎてまだにぎやかな盛り場からはもう一、二丁はなれているし、こんな人気の無い所で声をかけられるのは、うすっ気味悪いので、聞き流して通りすぎようとすると、

「旦那……」

ひたひた足音をしのばせるように追いすがって来た。

「ね、旦那……そんなにつれなくなさらず、……ちょっと話だけ聞いておくんなさいよ」

土橋をこえて、やや広い地道に出た所で彼はふりかえった。——青白い常夜灯の光の下で、相手の様子を見て、追っぱらってやろうと思ったのである。

「女かい？　女だろ……」ごく軽く言った。「けっこうだよ。——ソープでばかにもてちゃって、げっぷも出ないや。家に帰りゃ、雌猫が、雌の仔猫三匹うんで待ってるんだ。悪かったな。またにするよ。さいなら……」

「でも、旦那……」

よれよれの格子縞のシャツに、今どき珍しいほどくたびれ、すり切れた上衣、膝の所のとび出しただぶだぶのズボンをはいた貧相な小男は、追いすがるように腕に手をかけて来た。

「ちょっと見るだけ見てくださいよ。——そんじょそこらに、ころがってるような……」

「！……」

男のせりふの途中で、彼はおどろいたように眼を見はった。

「徳さん……」今度は彼の方から、小柄な老人の腕をつかんだ。「徳さんじゃないか！」

へ？——と言うように体をひくのに、常夜灯の明りの中に顔をつき出して、

「ほら、おれだよ。——垂水だよ」

指さしてやると、

——あ、いけね……、

とつぶやいて、あたふたしかけるのを、ぐいと腕をひいた。

「逃げなくっていいよ、徳さん……。ずいぶんひさしぶりだなあ。このごろはこんな辺ぴなとこまで出張ってんのかい？」

「い、いや、勘弁……」

通称ふけ徳は顔の前で手をふった。……そんな動作が、めっきり年齢をとったように見えた。まだあれから二年ちょっとしかたっていないのに……。

「いやあ、このごろめっきり眼が悪くなって、ついどじふんじゃったい。——面目ねえ、今夜の所は、ひきさがりまさ。御当地口あけだてえのに、よりによって垂水さんの袖をひくとは、天網恢々というか、焼きがまわったというか……」

「何を世迷い言いってんだい。徳さんらしくもない」垂水は明りの下で呵々大笑した。

「あの事かい？——忘れちまったよ。二年も前の事だしさ……。それに、徳さんにふけられる前は、ちゃんと面白い目をさせてもらったんだし……」

2

最初に会ったのは亀戸——会社の下請工場があって、ちょくちょくたずねて、帰りによく露地裏の赤提灯で一ぱいやった。そんな飲屋の一軒で、くろずんだカウンターの角々にすわりあわせた。一本の銚子を、塩辛か何かの小鉢で、ずいぶん長い事もたせていたが、どうも最初っからこちらに眼をつけてきたような節がある。女将がちょっと奥へはいり、連れがかっくりカウンターにつっぷしたわずかの隙をとらえて、

「旦那——ここいら辺のお方じゃありませんね」

ふっ、と持ちかけて来たのが、実にいい間で——その上、声の低め方、眼のおとし方、わずかに肩を開いてよせるやり方で、一ぺんで「女」の話と感じさせた。年季のはいった、それも岡場所で磨いたポン引きのあたりは、ありゃあ幇間にだってちょいとできない「芸」だ、と、妙な事に感心していた年寄りの粋人がいたが、その時のふけ徳の持ちかけようは、なるほど、これか……、と思わせるほどの鮮やかさだった。

二言三言——実際はいくらなんでも、もう少ししゃべったろうが、印象としてはそんな感じだった。とんとん、と話が進んで、気がついた時はもう、こちらの懐に、すっとはいりこまれていて、女将が奥から出てきた時は、

「ごちそうさん、またくらあ」

立ち上る時、こちらの肩にかるうく手をあてていただけだが、その手に眼に見えないあやつりの糸でもくっついているような感じで、こちらも連られて立ち上った。ちょっとけげんそうな顔をしている女将に、つっぷして鼾さえかき出した下請会社の男の方を拇指でさし——どうせその店は、寝てる男の馴染みで、彼の方は例によって、おごられる立場にあった——暖簾のむこうに見えている小柄なオーバー姿のあとを追って店を出た。

ちょいとあぶねえかな——と、酔った頭のすみでかすかに思った。が、競馬で勝って、懐はあたたかかったし、その上、相手の話術、間のよさに、半分酔ったようになり、乗って悪くても、もともと言う気になっていた。

が、連れて行かれた表しもた屋風、中は洋風のラブホテルで、女がくるまで一緒に待ってくれて、来た女を見て、かえって度肝をぬかれた。若く、愛くるしく、ほっそりとしてプロポーションも抜群で、——じゃ、あたしに片手、この娘にゃ大二枚やってください。泊って行かせるなら、適当に色をつけてやっておくんなさい。ま、とても朝まで持ちますまいが……。と軽く笑ってあっさり消えた。

消え方が、いかにも粋だった上、口上に偽りはなかった。二十三——くらいかな、と言っていたが、聞けば二十二歳とかで……ポン引きの売りこみより、真物の方が年が若かった、というのも珍しいが、その若さで、例の「花電車」の訓練を、お座敷に出せるほどにつんでいる、というのが本当だった事も驚嘆すべき事だった。おまけに娘は、彼が聞かさ

れていなかった別の特技を持っていた。見事なアクロバットダンスもできたのである。

その後、下請への用事とは別に、二度三度、徳さんとの会合をあてこんで、亀戸へ足をはこんだのだが、やっとあえたのは、三週間ほどたってからだった。——今度も小さなバーのとまり木で水割りをすすっていると、むこうから、やあこないだは、と軽く肩をたたいて来た。

首尾はどうでした?——と笑って聞くので、あの娘をぜひもう一度、と体をのり出すようにしてせがむと、

「いや、残念だが、あの娘はもういねえ。——香港へ行っちゃいましたよ」と首をふった。「あっちなら、日本どころじゃねえ、とんでもねえ金をとれる娘だ。そのために特別に訓練をうけてたんです。その仕上りちょっと前で……あたしの方で、あの娘の死んだ親父に貸しがなけりゃ、とてもふつうじゃ来てくれるような玉じゃありません」

じゃ、今夜は何か別の、変ったのはないか、とかさねて聞くと、ちょっと首をかしげ、カウンターの端の電話に手をのばした。「金髪の絶世の美女ってのはどうです?」どこか低い声で、一、二分話したあと、徳さんは言った。「髪を染めた天プラ外人じゃありませんん。正真正銘青い眼の……といって、これだけじゃ最近珍しくもないが、実は、ある意味で大変珍しい。ここじゃないんです。ちょいと白山下まで足をのばしてもらわなきゃならないが……」

値段は——ときくと、しばらく考えていたが、やがてニヤリと笑って、足、旅館代別であたしの手数料こみで二枚でいいです、と言う。

今度も、二枚にしては頬をつねりたくなるような上物が来た。——濃厚な香水の匂いをまきちらす、深い菫色の瞳をした、ロッサナ・ポデスタばりの美女で、胸のもり上りだけでも圧倒されそうなのが、豪勢なシャークウイン・ドレスをきらめかせながら、婉然とホテルのドアの外に立っているのを見た時、何だかハリウッド映画の一齣にはまりこんだような気分になった。おまけにそのサービスの念の入り方とはげしさと来たら……。

しぼりとられたようになって、ベッドで息をつきながら、シャワーの音をきいていると、枕もとの電話が鳴った。——反射的にとると、

「いかがです?」と笑いをふくんだ徳さんの声がきこえた。「気がつきましたかい?」

なにが?——と息もたえだえにききかえすと、

「あ、わからなかった?——じゃ、割りびきするんじゃあなかったな」電話口の向うで、くっ、くっ、と笑った。「ありゃ、男——いえ、もと男ってやつですぜ。あたしゃ性転換をうけた直後を知ってるんで、途中でばれるかな、と思ったが……」

そう言われても、まだ夢心地だった。——彼も欧米で二、三、飾り窓や、街をぶらつくのを買ったが、そんな連中より、はるかにすばらしい〝女〟だった。

そして、三度目——それから一週間ほどたって、新宿の行きつけのスナックバーで、社の同僚二人と飲んでいる時、今度は店内を、誰かさがすように見まわしながらはいってくる所を、こちらから声をかけた。

あ、垂水さん……と、軽く手をあげ、何か用あり気に、奥の方へ行って、長々とどこかへ電話をかけていた。——その間に、彼は同僚に、前二回の興奮に値する体験を語り、きいた二人も、次第に舌なめずりし、体をのり出して来た。

そこへまた、徳さんが、屈託顔で通りかかった。——よびとめて、二人を紹介し、また何か——とねだると、そうですね、また面白い出ものがあったら、と、気のない愛想笑いをうかべていたが、三人の顔を見まわして、ふと、何か思いついたように言いかけ、また首をふった。

そこへカウンターから、電話がかかった、と徳さんをよびに来た。——また奥へ行って、四、五分、考え考えかえってくると、ものかげから垂水に合図した。

「今夜——その気がありますかい。垂水さん……」徳さんは眉間をもむようにして口ごもりながらいった。「今夜のは——そりゃもう、前の二回なんか、お子さま番組でしかねえってほどすげえのがある事はあるんだが……実は今夜はつないどいた客が四人連れで、〝二四六〟で事故をやらかしちゃった。四人とも病院で、穴があいちまって……」

「というと——おれたち三人でそのかわりに乗っても、一人足らないってわけかい？」垂水は、こちらをじっと見つめている同僚二人の方をちらっとふりかえった。「遠いの？」

「いや、このすぐ近く……。あたしの商売のやり方、知ってるでしょ。中身は、そこいら辺にざらにころがってるもんじゃない事は保証するが、……何分、今夜のは、一切合切、腕によりかけた特別仕込みなんで、ちと値がはるんだ。だから、たって、とは勧めねえ。それからまあ、中途で帰ったってわりもどしはねえから、徹夜泊りこみのつもりの方が得だが……めいめいにモーニングサービス、てえのがつくからね」

「いくらだい？」と彼は声をひそめた。

「一人七万、出せますかい？　いや——しこみ値で六万から六万五千でいいや。垂水さんにはこの先また何かで入れあわせしてもらうとして……相模原からくるはずだった四人にゃ、一人当り、売り十万なんだが」

同僚二人との話し合いに、それでも、四、五分かかった。——何となく彼がさそい、彼が「値打ち」を保証する恰好になった。垂水は臨時ボーナスの残りと、麻雀の上りで十万ちょっと持っていた。同僚が四万と五万を出した。

徳さんは、もう二度、電話をかけ、それから四人でタクシーにのって十分ばかり……代々木へんの、何やら鬱蒼とした森のあるそばの、小暗い、森とした豪勢なマンションの前で、タクシーをとめると、

「エレベーターで四階……四〇二号でさ……」おりた三人に、車の中から徳さんは指さした。

「あたしゃあ、さっき連絡がついたもう一人をむかえに行ってくるから。……ブザーを短く二度、長く一度、それでわかるけど、もし中から、どなた、って聞かれたら、徳からです、って言っておくんなさい。じゃ、どうぞ——体に気をつけて……」

「徳さん……」垂水は車にちかよって窓からのぞきこんだ。「金は？　いつ誰にはらうん

だ?——あんたのコミッションは?」

「あ、そうか……」徳さんは、ちょっと考えるように顔をなぜた。「今度の場合は、中でわたすのはまずいんだっけ……。何しろ、部屋の持ち主は、歴とした店を持ってる堅気だし、女のしこみは、あたしともう二人でやってるんだが、中で女の子にはらったりすると、部屋の持ち主や客がしらけるし、いやがるからって言ってたな……。もう一人連れて来るから、その時でもいいけど……」

「今わたしとくよ……」と垂水は同僚たちからあつめた金に、自分の札をかさねてさし出した。

「十九万……一万は徳さんの分だ」

「じゃ、今いただいとくか——。部屋にはいったらいきなり裸にされるかも知れないからね。そうなったら、また財布をとりに行くのも何でやしょう」徳さんは笑って札束をうけとり数えもせずに内ポケットにしまった。「じゃ……十分ほどしたらまたもう一人連れてかえってきやすから、そう言っといておくんなさい。——二十六、七で、岸恵子にちょっと似た、眼の大きい、小股の切れ上ったのが女主人ですから……。大ていうす水色のすけすけのローブを着てるからすぐわかりまさ」

あとで考えると、岸恵子だの、すけすけのうす水色のローブだの、よくそんな口から出まかせが言えたものだ、と唖然とさせられた。——大の男が三人、期待に鼻をふくらませ、固唾をのみながら、エレベーターで四階にあがり……四〇二号室はなるほどあったが、言われた通りにブザーを短く二度、長く一度おしても、すぐには返事がなく、もうはじまっているのか、と、若干いらいらして、もう一度おすと、やっと、だれ? と眠そうな声がインターフォンからきこえた。徳さんから、と言うと、どなたです、徳さんって……とぶつぶついいながら、それでもドア・チェーンをかけたままで鍵をあけて、うさん臭そうに顔を半分のぞかせた。それを見た時、すぐ、やられた! と思った。——髪の毛にカーラーを一ぱいくっつけた四十五、六のくたびれた女が、地味なガウンをはおり、化粧をおとした鉛色の顔にはれぼったい眼をどろんと澱ませて、こちらを見ていた。のどに白い繃帯をまいて咳をしており、寝ぐさいような熱の臭いがプン、とした。二言三言、話はしたが、もとより「パーティ」などやっているわけはなく、鼻先でがしゃんとドアをしめられ、それでも何かのまちがいかと、その階や上下の階をうろついて、部屋の中の気配をきこうとしたり、マンションの外で、小一時間も待ってみたが、結局それけりなり……。

ふけられたのかい?——とあとから「事情通」に笑いとばされた。——もともと浅草、両国あたりが根城だが、このごろあそこらのしまじゃ、やばくなって、河岸をかえたな。「花電車」の娘? 何が香港なもんか。ありゃふけ徳の遠縁で……というより、ふけ徳が昔組んでた花電車の女の遠縁の娘で、あれでもう二十六、七じゃないかな。組んでるんだよ。あの娘が撒き餌で……。

見事にやられた、と、ちっとばかり苦すぎる笑いがうかんだ。考えてみると、三度目は、いかにもそれらしい思わせぶりな雰囲気だったが、「女」を世話するからとか、「乱交パー

ティ」とか一言も言っていない。勝手にこちらからのりかけ、こちらで妄想を抱いただけで、……こういう場合は「詐欺」にもなりにくいそうだ。——鮮やかすぎて、腹はそれほどたたなかったが、同僚二人への弁済が痛かった。もっともあとでまた麻雀でいくぶんはとりかえしたが、それでも自分の十万は行きっぱなしの勘定だった……。

3

「怒ってやしないさ。——あの時だって、あまり鮮やかにやられたんで、怒る気にもなれなかった……」煙草をすすめながら垂水はくりかえした。「でも、まさか徳さんとこんな所でねえ……」

それにしても、わずか二年でめっきり老けちまったね……という言葉はさすがに口に出さなかったが、言外につたわったのか、

「へッ、ざまあねえや……」薄くなった肩をすぼめて、彼のさし出すライターに顔をよせた。「昔とちがって、せこい世の中だと百も承知のつもりでいて——やっぱ、年だね、とちっちゃってちょっと町中に居づらくなってね……」

さっきから気がついていたが、右手を全然つかわない。——くたびれた上衣の袖の中で、右腕がぶらぶらになっていたが、見て見ぬふりをした。

「ところで徳さん……」自分も煙草を吸いつけながら、ニヤリとウインクしてみせた。「今夜紹介してくれるのは、どういうの？——」

「ぶッ！」と煙にむせて、左手をやけに顔の前でふりまわした。「よしとくれ。そいつぁもう言いっこなし。垂水さんとわかったら、とても……」

「どうして？　ふけさえしなきゃ、徳さんの紹介してくれるのは、いつもすごくごきげんだったぜ。——ああ、そういえば、あの最初に紹介してくれた若い娘……」

「知らねえや。どこかへ行っちゃったよ……」吐きすてるように言った。「こっちの知らねえうちに、これもんの悪い男がついてよ。——西の方で、美人局でもやってるんだろう」

そいつに……というように、ぶらぶらの右袖をちょいとふって見せた。

「そいつぁ……」災難だったが、まあいいじゃないか、と肩をたたいて、垂水は相手の顔をのぞきこんだ。「でも、また——引いてるんだろ？　紹介しとくれよ」

「いや、だめだ。——昔の知り合いにまわせるような……」首を強くふったが、ふと気がついたように、「垂水さん……あんた、ここに住んでるんだろ？——奥さんは？」

「一年ちょっと前に……」垂水は足もとにぽとりと煙草をおとした。「急性膵臓炎で、あっという間だった。——まあ、子供がなかったからよかったが……」

じゃ、一周忌は……すんでるのかい？——とつぶやいたが、

「いや——やっぱりやめとこう。……やめといた方がいいよ」

「そんなひどい玉かい？——あれほど名の通ってたあんたにしちゃ、めずらしいじゃないか……」

「ひどい……ってえもんじゃないが——まあ、あたしのあつかった中でも、あんなげてはじめてだ……」自嘲するように、ちょっと肩をゆすって顎をしゃくった。「ふけ徳もおちたもんさ……」

何となく、背後に気配を感じたような気がしてふりかえった。——蛾だの羽虫だのが舞いくるう常夜灯の青白い光のはずれの暗がりに、白い影がひっそりうかんでいた。眼をこらすと、長い髪の毛を後にひっつめて背にたらした女だった。白い半袖のブラウスに、ジーンズのひきずるような長いスカート……肩からジーンズのショルダーバッグをかけている。

うつむいているので、顔は見えない。——が、若い。二十一、二と言うところか……。

「やあ……」思わず声をかけ、二、三歩ちかよった。「今晩は……」

娘は、ふとこちらを見た。——さびしげな、青白い顔だった。

だが、美人だ。——四肢はすらりとしてよくのび、胸も、シンプルな白のブラウスをはち切れんばかりに押しあげている。

「かわいい人じゃないか、徳さん……」垂水は、またはずかしげに顔をうつむかせた娘のまるい肩に手をおきながら言った。「気の毒だぜ、こんな若くてきれいな女性をげてだなんて言っちゃ……」

「垂水さんよ……」徳さんが咳ばらいしながら言った。「あんただから、教えちまうが——その娘のスカートの裾をめくってごらんよ」

え?——と、垂水は徳さんと娘を七三に見た。

そう言われると、娘は、はずかしそうに両手で顔をおおい、くるりと背をむけてしまった。

「いいからさ——めくってみなよ……」徳さんは、やけっぱちのように言った。「めくって、その娘の——足をごらんよ」

象皮病などという言葉が、ちら、と頭をかすめた。——もし、そんな、この年ごろにしては因果な事になっているのだとしたら、見たりしちゃかわいそうだ……。せっかくこんな長いスカートをはいて、かくしてるのに……。

眼の前に、娘の白いブラウスと、その背にさがる長い髪がふるえていた。——ウエストが小気味よくしまり、そのすぐ下に、色あせたジーンズのスカートにつつまれた、よく張ったまるいヒップがもり上り、スカートの裾は、その張りきったまるみから下へむかってゆるやかなカーブを描きながら地面すれすれにまでたれさがっていた。

かすかにゆれる、その色あせた青い布を見ながらためらっていると、徳さんが、いらだたしそうにちかよって来て、スカートの膝下あたりをつかんで、ぐい、とひきあげた。

「さあ……」徳さんは、顎をしゃくって、怒ったような声で言った。「ようく見てやってくれ。この娘の足を……」

最初はよくわからなかった。——で、眼をこすって、もう一度まくり上げられたロングスカートの裾をのぞきこんだ。

ひゅっ、と、悲鳴が出るより先に、のどが笛のようになって息がとまった。——全身が総毛だち、眼玉がとび出るのが自分でもわかった。

——と、徳さん……こりゃあ……

と、口先だけは動いたが、声は出なかった。「まだわからねえかい？」徳さんは、スカートの裾をつかんだ左手を、さらに高くあげた。——白い、むっちりした太腿が二本、常夜灯の照りかえしをうけて、象牙のような、にぶい輝きをはなった。「ほら、もっとよく見なよ……」

4

「どういうわけで……」

かすれた声で言いかけて、頭がぐらりと泳いだ。——手も泳いで、舟べりにとっつかまるように、一升壜の首をにぎっていた。

ほら、ほら、こぼすぜ——と、徳さんがささえにかかるのを、うっちゃっといてくれ、と、反対の手の甲で押しのけて、テーブルの上にじゃぶじゃぶとつぎこぼしながら、湯呑みに冷や酒をついだ。そいつをぐい、と飲みほして、ぶるるっ、と唇の雫をとばしてから、がくがくと顎をしゃくった。

「いや、驚いた……。それにしても、どういうわけで……徳さん、あ、あんな……」

「話せば長い事になる……」徳さんは彼の手から酒壜をもぎとり、自分のコップに、一滴もこぼさないように慎重についだ。「まあ……まだ一月半……やがて二月前の事だが……」

「酒……」たらりとたらした指先を、かきまわすようにふりながら、垂水はうめいた。「もう一本……あそこの、流しの下にある。徳さん、はばかりながら、とって来てくれ……」

「いいのかい？」徳さんは、空になった壜をもって立ち上りながら、心配そうに言った。「これ一本、あらかた一人であけちまったんだぜ……」

「いいよ、ほっといてくれ！」と垂水はわめいた。「飲まずにいられるかい。——ぞくぞく寒気がして、とまらねえんだ……」

言ってしまってから、あらためて襟元がぞくっ、として部屋の中を見まわした。——男やもめの六畳間、アパートは民営だが、一応鉄筋でがっちりしているから、深夜少々わめいても、近所からねじこまれるような事はないのだが……それにしても、一本消えてる天井の蛍光灯が、今夜はいやにくらぁく感じられる。

「あん時ゃあ、あたしもすっかり参っててね……。前に組んでた女のひもにいためつけられたあとが、せいぜい長びいちゃって、右腕は使いもんにならなくなるわ、貯えは女に持ってかれちまうわ、もうほんとにお先まっ暗、いっそ、死のうか、なんて思って、とぼとぼ歩いてた……」

徳さんは、新しい酒壜の栓を、むしりとっている彼を見ながらつぶやいた。

「歩いてたって……どこを？」

「二四六……夜中の二時ごろかな。金策にでかけて、待たされてはずれて……懐中はおけら、タクシーもひろえねえ。つかれはてたし、走ってくるトラックにでもとびこもうか、と、半分本気で思いつめて……で、下作延へんのカーブの所、知ってるかい？」

「今はバイパスができてたんじゃないかな」

「そうだっけ——とにかくそのあたりまで来た時、ふと道ばたを見ると、小暗い所に、顔をうつむけて、ぼんやりと……」

「すぐわかったのかい？」口開けの一升壜をかたむけた手が、思わずとまった。「だけど……いったいどうやって……」

「やさしくしてやったのさ……」徳さんはにんまり笑った。「そりゃあんた……こましだってこれで三十四、五年——ねらってはずれた事はまずねえし、あとでうらまれた事も、最後のどじをのぞけばほとんどねえ……。口幅ったいが、〝芸〟てえもんだ」

「しかしねえ……」今度は少し注意してつぎながら、思わず嘆息が出た。「いくら徳さんでも……」

「実をいうとね、最初はこっちも気づかなかった。——声をかけたなあ、職業的反射、てえやつかね……。が、途中ではっと気がついて、ぞくぞくっと……」

「そん時、よく逃げ出さなかったね」

「それが妙なんでね。——くどきにかかってると、中途でとまれねえ。将棋の中盤で、網をしぼりにかかってるようなもんでね……。腹ン中あ、氷のように冷たくなって、ちりけもとがそうっとおったちながら、ちっとも手順をはずさず、そろそろたぐりよせて……そのうち、しくしく泣き出してね……」

「へえ——」垂水はさすがに息をのんだ。「あれがかい？」

「ああ——で、これもいつものくせで、鳥肌だってはいたが、肩をだきよせて、なだめてやってる所へ——トラックが来た。で——手をふった……」

そりゃまた、どう言うつもりだったんだ、と、徳さんの話にひきずりこまれ、湯呑みを口にあてがったまま、つぶやいた。

「ま、——これも反射的に、だね。こっちは疲れてたし、といって、みすぼらしいじじいじゃ、トラックもとまってくれまい。が、若い娘といっしょなら——と咄嗟に思ったんだ」

「で、首尾よく……？」

「ああ、——運ちゃんは四十ぐらいのひげ面で、一人だった。この娘が気分が悪くなって、とか何とか持ちかけると、親切に乗せてくれた。あたしがまん中、あれが端だ。——運ちゃん、少しひでりと見えて、何となくあれの方をちらちら見るんで——商売ってのは因果なもんだね。それを見ると、もうどうにもならない……」

「引いたのかい？」垂水の声はつい大きくなった。「まさか……だってあんた、もうその時は、わかってたんだろ？」

「わかっちゃいるけどやめられない、ってやつさ……」徳さんは、ずいぶん古い歌の文句

をつぶやいて笑った。「そりゃ内心びくびくよ——たちまち乗っては来たものの、さて、これがばれたら……と思うと、腹の底は一層冷たくなって……。だから、街道からそれたモーテルの前で、これは例の手——仲介料片手もらって、あとは娘に一枚ってんで、おくりこんだ……ものの、実をいうと、このあとどうなるか、胸がどきどきして、ものかげにかくれて、入口を見てた。ところが——すぐ、泡食ってとび出してくるかと思った運ちゃんが、三十分たっても四十分たっても出てこねえ。五十分ちかくたって、さっぱりした顔で、口笛吹き吹き出て来たんで、こっちもつい、どうでした、って声をかけちゃった。そしたら……」

「そしたら……」

「部屋の蛍光灯がはいったとたんに切れちゃって、よく見なかったが、やっぱり若い娘はすばらしい、一枚じゃやすいって大ニコニコさ……。だけど、すんだらいつの間にかいなくなっちゃった。いまどき珍しいおとなしい娘だ。——またたのむぜ、と来た。トラックが行っちまうと、あれは、いつの間にかあたしの後に……」

「だ、だけど——向うは気がつかなかったのかい?」彼は舌をもつらせて聞いた。「暗がりだって……その……」

「ちょいちょい女の足をなめたがる野郎がいるが、そういうのがひっかかったら、眼をまわすだろうがね——。それをのぞけば、お道具はばっちり……あたしもそのあとちゃんと見たよ。あんたで五人目だが、これまでばれた事はねえ。——ただし、朝になったら消えちまうがね……」

「しかしねえ、徳さん……」酔いざめへ、かさねてガブ飲みした冷酒が、ぐるぐるとまわってくるのを感じながら、一升壜を杖について、垂水は頭をふった。「いくら商売の因果かも知れないが……あんたもまあ……よりによって……」

「そいつは言いっこなし。おたがい因果だ、業ってのは、それぞれにしょってるんだ。——聞けば、功徳てえものかも知れねえ。無口なんでなかなかしゃべらなかったが、なだめすかしてやっと聞き出すとね——家は東京じゃねえ。家庭の事情が複雑で、とび出して来て、おさだまりの喫茶店づとめ、恋人ができて、あの方の味をおぼえて、夢中になった所へ、むこうがちょい秋風でね。恋人こみの何人かで遠出のドライヴへ行くってんで、〝二四六〟のあの場所で、夜、ひろってくれるのを待ってたんだが、車がひどくおくれて、おいてかれたか、と思って泣きそうになってたんだろう。道ばたによってきた、別の車を恋人の車かと思ってとび出して来た所を、追いこしをかけたトラックにはねられて……。まだ警察じゃ、身許不明のままだそうだ!」

「それで思いがのこってたのを——あんたの口車でこましちゃったのかい?」ぶるっ、とまた体をふるわせて、「だけどまあ——客をとらせるってのは……」

「どうだい、垂水さん——。ねたをばらしたのは、あんたがはじめてなんだ」と、徳さんはにわかにしゃんと坐りなおした。「実を言うとね、新宿の件じゃ、あたしもちょいと寝ざめが悪かった。——何ンしろ、あんたって、ひどく気質がよかったからね。二度目の時

だって、怒るやつもあるのに、かえって面白がってくれた。当節、のせられてかえって面白がってくれるような、粋で太ッ腹の客てなあすくなくなっちまったからね。三度目にゃ、相当な目にあわせちまったが、それだって怒っちゃいない、と言う。——正直、あたしゃ、じんと来ちゃったよ。今さらになって、あの時の入れあわせってわけにも行くめえが——抱いてみるかい？　五体、道具、それに感度は保証するぜ。客の話もきいたし、あたし自身も……」

「冗談じゃないよ！」垂水は酔眼をせいいっぱい見開いてわめいた。「だ、だって……いくら何だって……」

「ちぢみ上ってるかい？——大丈夫、あれが必ずちゃんと埒をあかしてくれるよ。いいかい、垂水さん。今まで知って抱いた奴ァねえ。寝てるうちにばれた事もねえ。こいつあ、あたしが客を化かしてるんだ。だけどね、そうと明かして、あんたにすすめるのは、こりゃあたしの良心こめたサービスだ。話ン種になるぜ……」

「だけど……あとが……精を吸いとられるんじゃ……」

「お露新三郎じゃあるまいし、おぼれこまなきゃ大丈夫さ、注意してるがその方のたりやなんか、あるようには見えねえ。あれもよろこんでるみたいだし、かえって功徳になるんじゃねえかね。——ただし、二度とはすすめねえ。あとにも先にもこれっきりだ。——二年前の入れあわせで、このふけ徳が、誠心誠意すすめるんだ。損な目はさせないぜ……」

だけど……だけど……と、頭を垂れた前で、手をふりまわしていて、そのうちふと気がつくと、部屋の電気が消えていた。眼をこすって窓のうす明りをふりかえると、——いつの間にしのびこんだのか、窓際にもたれた、わびしげな娘の姿が……。また、あらためて、ひえっとのどが鳴り、背筋にぞくっと、戦慄が走ったとたん、部屋の闇のどこかから、徳さんの、沈んだ声がきこえた。

「今夜は、だからサービスさ。あたしの分はいいから……何なら、娘に一枚でも一枚半でもやっとくれ。——功徳になるぜ……」

5

都心で顔なじみの、風俗事犯専門のベテラン刑事が、彼のアパートをたずねて来たのはそれから四、五日たった日曜日の午前中だった。

「何だ、野田さんか……」宿酔いの眼をしばたたいて、垂水はしゃがれ声でつぶやいた。

「また何で——拙宅などに……」

「予定がなかったら、ちょいと御出頭ねがいたいんだがね」と刑事は苦笑しながら言った。

「別にどうって事もないんだ。——昨夜、駅前一帯で一せいをやってね……」

「へえ——相変らず不粋なこってすね」

「しかたがないじゃないか。これが役目さ」

「で、ぼくに何です？——ぶちこまれるなら、歯ブラシもってくけど……」

「馬鹿いっちゃこまる。参考人――ってほどの事もないんだ。ただ、ちょいと首実検と、それからごく簡単な協力をおねがいしたくてね……」

「いいですよ――。市民の義務だ」

上衣は着ずに、スポーツシャツにつっかけという散歩姿で、垂水は刑事について行った。

「このごろは、この辺りもずいぶん開けたな……」ぶらぶら地元署へむかって歩きながら野田刑事はあたりを見まわしてつぶやいた。「開けすぎて、ちと開放的になりすぎたって言うんでね。――何しろ、ついこの間まで、田圃と団地ばかりだったんで、地元署が内偵なんかになれてなくってね。三週間ほど前から、応援をおおせつかって……」

「せっかくここらへんもにぎやかに面白くなって来たのに、――旦那方にかきまわされちゃ、また萎縮しちまいますよ」

「そう言いたもうな――。御多分にもれず、都心でしめつけられた組関係が、そろそろ手をのばしかけてるって情報がはいったんでね。出鼻をくじくってわけさ……」

旅館で賭博現行犯一件、おタッチバーで風俗営業取締法違反二件、あとは深夜スナックでの猥チン容疑一件、暴れた酔っぱらいの軽犯罪一件、売防法違反二件――賭博をのぞいて、あとは微罪説諭か始末書ですむ程度だったが、中で一件、素人娘の売春現行犯があり、手びきしたものがあった形跡があるので、一応部屋をかした旅館もしらべ、娘も一晩「保護」した、という。何しろ、事がすんで、双方裸のまま、金のやりとりしている現場をおさえられたというから、事は面倒だ……。

「で――それがぼくに何の関係があるんです?」警察の入口をはいりながら、まだ宿酔いで膜のかかっている頭で、ぼんやり考えながら言った。「ゆうべぼくは、ここで女なんか買いませんよ。――昨夜は都心で飲みすぎて電車がなくなっちまって、タクシーで御帰館だ。取り締りの事だって知りません。帰ったのは午前三時ぐらい……」

「別に昨夜がどうこうってわけじゃないよ」と刑事は笑った。「ただその娘が――まあ、未成年じゃないらしいが、どうも少し変ってて、最初頭が弱いのか、と思ったが、どうやら記憶喪失らしい。――ここ一、二カ月以前の事は何もおぼえていないっていうんだ。今日、医者にしらべてもらうが……。裏通りで客をとり出したのも、ここ一カ月ちょっとらしい。素直な娘で、相手をした客の事をみんなすらすら言った。その中で、あんたの事もでてきてね。四日ほど前……」

四日前――ときいて、まさか!――と、むくんだような宿酔いの脳髄に、ずきん、と氷の剣のようなものがつきささるのを感じた。

――まさか!

と、口をパクパクさせ、眼をむき出して、説明しようとしたが、声が出ず、相手に事情をのみこませる自信もなかった。

――たしかに四日前……だが……あの娘は幽霊だ。スカートをまくって見せられた時、たしかに足がなかった。太腿から膝の下までで、あとはすうっと闇に消えていた。

幽霊に、どうやって手錠をかけ、どうやって留置場へ入れるんだ?

「野田さん……」窓の外の日ざしを見ながら、垂水はかすれた声で言った。「説明しにくいが……その娘は、もう留置場にいないはずだ……。消えちまってるはずだ。見て来てごらんなさい……」

「ああ、たしかに留置場にゃいない……」と刑事は変な顔でうなずいた。「だが、消えたりはしないぜ。——ほら、あそこでまた、取りしらべをうけてる」

あまり広くもない署の中のむこうの隅で、別の刑事の前にひっそりとすわっている若い娘の横顔を見た時、垂水は、警察署の中がぐうっとかしいだような気がした。

「あの娘が、とった客の中で、あんたの事を特によくおぼえてたのは——ああ、商売には、あんたのアパートへ行ったそうだな。その部屋の番号をおぼえてたんで、私がすぐわかって、おむかえにあがったわけだが——何でも、ポン引きのじいさんと一緒に、前の晩、おりてくるあんたを見つけて、あとをつけたんだそうだ。そして、次の晩、そのじいさんに、妙な事を言われたんだそうだ。——両足の先から膝の下あたりまで、鍋墨か靴クリームみたいなものでまっ黒にぬりつぶして、はだしで、土橋の先に立っていろって……。絶対に明りの所へ出てくるなって……客をとるのにそんな妙な事を言われたのは、はじめてだったので、それでその時の客があんたの事を……」

——やりやがったな！

と髪の毛のさかだつ思いで、彼は部屋のむこう端の娘の横顔をにらみつけていた。

——畜生！　ふけ徳のやつ……また一ぱい食わせやがった。——何が二四六の幽霊だ。

何が「二年前の入れあわせ」の、誠心誠意、良心的サービスだ……。帰ってくるのは大てい酔っぱらって夜おそく、その上こちらの視力がややよくない事もやつは前から知っている。……明りのはずれの暗がりで、長いスカートをはいて立っていて、いきなりスカートをひき上げて見せた時、——白い脛から下が、艶のない黒にぬりつぶされていたら……。

「問題はそのじいさんなんだがね……」と野田刑事は鼻をほじくりながらつづけた。「あの娘は、一ヵ月ちょっと前、国道二四六のどこかでじいさんに会って、その手引きで客をとりはじめたらしい。——とすると、単純売春じゃなくて、そのじじいがぶちこめる。ところが、昨夜尾行した刑事は、そのじじいの姿を見なかったというし、ふみこんだ時もいなかった。気配を察してずらかったらしいんだが……それにしても、記憶喪失の気の毒な娘をたらしこんで、売春させるなんて、憎いじじいだ。何としてでもとっつかまえたいし、そうしたら、娘の身もともわかるかも知れん。そう思って、娘からとった客のうちおぼえているのを聞き出して、あたりはじめているんだが……」

「ちくしょう……」彼は刑事の話に上の空でうめいた。「ふけ徳のやつ……」

「なに？」刑事は聞きとがめた。「ふけ徳がどうした？」

「そのじじいがですよ」彼は刑事の腕をつかんでわめいた。「ぼくは二年前に一ぱい食って、四日前、また一ぱい食った。——何とまあ、手のこんだ事をしやがる。……あの娘に客をとらせ、ポン引きをやってたのは、ふけ徳なんですよ。あんただってよく……」

「ふけ徳って……あのポン引き詐欺常習の、深井徳造か？」今度は刑事の方が、ポカンと

口をあけ眼をむいた。「知ってるよ。だけど——おい、しっかりしてくれよ。ふけ徳は、組んでた女に逃げられた上、女のひもにいためつけられ、あげ句尾羽うち枯らして、一カ月半ほど前、二四六でトラックにはねられて死んだよ。うそじゃない。おれはこの眼で死に顔を見に行ってやったよ。長年の馴染みだもの……」

今度こそ、背中一面に氷のぶっかきをぶちまけられたような気分におそわれた。わずかにかしいでいた部屋の天井が、ぐうっとまわりながら大きくかたむきはじめ、こりゃあ、しばらく寝こむな、と、床に横ざまにたおれて行きながら、彼はぼんやり考えていた。——ちくしょう……ふけ徳のやつ……「商売の因果」とはよく言った……。だが、そうしてみると……あれは本当に、「新宿の件」に対する入れあわせのつもりだったのだろうか？……死んでなお、心のこりをはらすため、「良心的サービス」として、見事にいっぱいかついで見せ……そしてまたもや、まんまとふけおおせた。今度は二度と、とっつかまえようのない所へ……。

かしいで行く天井のずっと彼方から、大笑いしているふけ徳の声がひびいてくるような気がした。——彼にしてみれば初めて聞くふけ徳の「哄笑」だった。

蟻の園

団地の風景には、どこかまったく新しい——奇妙なところがある。

つい最近まで、そこが年ふりたなだらかな丘であり、木々のたたずまいにも太古の自然のおもかげが残っていたのに、その上に突如として、はげしい力でもって変異がまきおこされる。——木が切りたおされ、丘が削りとられ、赤土の上にうねうねと舗装道路がとぐろをまき、灰色の建築物の大群落が出現する。何千戸、何万戸とたちならぶアパート群を、背後の山の頂きからながめると、まるで集会を開いている、意識ある生物のようだ。——まったく同じ姿かたちの建物が、中央広場の高級アパート群を中心に、整然とならんでいる所は、たった今この丘の上におりたった宇宙人の大部隊が、侵略か探険に出発するにあたって、整列して訓示をうけているみたいだ。

深夜——あなたは、冷たい水銀灯の明りに照らされて、人気（ひとけ）のないペーヴメントにコツ、コッとひびく自分の足音にききいりながら、ひとりでこの沈黙の石像の間を帰ってくる。飲みすぎの足をふみしめ、明朝の頭痛に対するいささか早すぎる悔恨にさいなまされながら……。

と——その時、あなたは、ふいに誰かに背後上方から見られているような気分におそわれる。暗黒の宙天一ぱいにひろがる巨大な眼が、ちょこちょこと〝巣〟へかえって行くちっぽけな生物を、おもしろそうに、無邪気な好奇心にみちて見おろしているような気がす

るのだ。

あなたはギクッとして、背後の夜空をふりかえる！

——するとそこには、榛型をした、猫の目のような、二十日の月がかかっているのだ。

*

——高橋警部にとっても、紺野刑事にとっても、日々はごく平穏に流れていった。二人とも朝から晩まであいもかわらぬ事件の連続においまくられていた。

あいもかわらぬ——そのことにふと気がつくと、警部は妙な気分におそわれるのだった。何だか毎日同じことのくりかえしみたいだ。毎日であう事件がどれもこれも、いつかどこかで出くわしたみたいな気がする。群衆、犯罪、かったりまけたりのプロ野球、物価高、つかまえ所のなく汚ならしい政治——だが、現実ってこんなものだろう、と警部は思う。ずっと前から、こんな具合だったんだ。生活というものは、しょせん単調なくりかえしにすぎん。

「何だか最近妙な具合ですな」紺野刑事は、高橋警部と顔をあわすと、ポツリという。

「何だか、世の中があまり単調すぎますよ」

「つかれてるんだな」警部は顔をこすりながらいう。「同じような事件がつづきすぎるんだ」

「あまり同じすぎます。——変らなさすぎますね」

「変るわけはないよ」警部は新聞をひろげていう。「与党は十何年間政権をにぎりっぱなしだ。景気と不景気は変りばんこにやってくる。それで失業者や犯罪はいつまでたってもなくならない。ソ連とアメリカは、いつまでたっても軍縮のかけ声ばっかりかけあっている。俺たちはしょっちゅうかけずりまわって、しょっちゅうピイピイしている」

「ですが、もうちょっと新しいことがあってもよさそうなもんですがね」

「新しいと思うことも、よく見てみればみんな前にもあったことさ。世の中なんて、変れば変るほどおんなじだ。——軍歌も服装も、世の中の気風も、何もかもリバイバル時代だ」

だが、警部自身も、この現実の奇妙さを感じていた。——日々の出来事も、毎日顔つきあわせる人物たちも、何だか悪夢に似た単調さでいろどられている。ただ、紺野刑事だけがちがう。顔をあわせると、二人とも何となく自分の夢想をあばかれるような、妙な気はずかしさにおそわれるのだ。

「今年は妙な気候ですな」と、刑事は照れかくしみたいにいう。

「いい気候じゃないか」と警部はこたえる。「いつまでもおだやかで」

「妙なことがあるんです」刑事はいった。「最近は、蚊やはえや、油虫が一匹もいませんよ」

「お役所がやっと撲滅運動に成功したんだろう」そういって、ふと床を見た警部は笑い出

した。「言っている口の下から出てきたぜ」

油虫が二匹ばかり、ぞろぞろはい出して来て、机の後にもぐりこんだ。はえが一匹ひょいと書類の上にとまって手をすりあわせ、蚊が耳もとでぶうんとうなった。

「ねずみも見ませんね」

長押のところを、肥ったねずみが、これ見よがしに尻をふって、ちょろちょろと通りすぎた。

「みんな、ちゃんといるさ」警部はあくびしながらつぶやいた。

「なにもかも、ちっとも変っちゃいないさ。——お役所仕事が、そんなに簡単に成果をあげるもんか。世の中なんて、そう簡単に変らんさ」

だが——休みの日になると、二人はめいめい、同じ場所へ出かけていくのだった。丘の上のK1団地——なぜだか知らないが、二人には、この団地のことが、妙に気にかかったのだ。なぜか——

偶然休みがかさなったある日、二人は、K団地のRブロックのはずれで、顔をあわせた。——紺野刑事はさんさんと春の日のふりそそぐブロックのはずれにたって、十三号館と十四号館をぼんやり見上げていた。

「君もちょいちょいここに来るのか?」

警部はさぐるようにいった。

「ええ、——何だか、ここの夢をよく見るもんで……」

「どんな夢だ?」警部はこわばった声できいた。

「それがよくおぼえてないんです」刑事は頭をかいた。「何だか、妙な夢で——この十四号館がなかったことだけはっきりしてるんですが……、あとは何だかわからないんです」

「俺と同じだな」と警部はつぶやいた。「すると俺たちいっしょにここへ来たことがあるのかな?」

「そう、子供のことで……」

子供という言葉で、二人ははっと顔を見あわせた。——子供——子供がどこかで泣いていた。どこで?——この団地の建物のどこかで……「十三号館……」と警部はつぶやいた。なぜだか知らないがふいに悪寒が全身を走った。

「そう、十三号館でした」刑事はいった。

「子供が泣いていました。十三号館のどこかでです」

「いやちがう——」と警部はいった。「十三号館にはいなかったんだ」

「そのかわり、もうひとり仲間がいました」刑事は夢の記憶をまさぐるようにいった。

「誰でしたっけ? おぼえていませんか?」

その時、少しはなれたところで、二人の方をじっと見ていた若い男が、近づいて来た。

「あなたたち——」とその男はいって、二人の顔を穴のあくほどジロジロみた。「あなたたち、この十三号館に、何か関係があるんですか?」

「そうかも知れませんな」警部はいった。「二人ともここのところを夢に見るんです」
「じゃ来てください！」男はすごく興奮した声でいった。「あなたたちこそ、僕のさがしていた人です。――そういえば、僕はあなたたちを全然知らない。とするとあなたたちはまやかしじゃないんだ。あなたたちに、あの時何が起ったかきいたら、事件の全貌がつかめるかも知れない」
「事件って何です？」警部はいった。「何か――十三号館で起ったんでしょうか？　われわれは警察の者です」
「あの時の警察の方でしょう。やっと見つかったわけだ。協力してください。催眠術で記憶をひき出すんです」
「キ印ですかな？」刑事はささやいた。
「まあいいや、行ってみよう」警部はいった。

十三号館の五階、五〇六号の男の部屋で、二人はテープレコーダーを前にして、レシーバーをかけさせられた。
「眼をつぶって、レシーバーの声にききいってくれれば、催眠状態にはいります」男はそわそわしながらいった。「それから僕の問いに答えることは、このテープにはいります。もうこの十三号館の人たちの話はみんなとったんです。あなた方の話とつなぎあわせて、あとで再構成して何がおこったか、おきかせします。――びっくりしちゃいけませんよ」

「たまには外に出てあそんでいらっしゃい」
母親は食器を洗いながら、小さな子供にいう。
「うん……」
子供はなま返事をして、まだ手製の箱庭に見いっている。
「子供はおてんとさまにあたらなきゃだめよ」
「うん……」
「蟻ばっかり見て――おかしな子ね」
五十センチに三十センチ、深さ十センチばかりの手製の箱庭だ。子供はそこに砂と土をしきつめて、マッチの空き箱をたくさん、規則的にたてならべた。――それが蟻のアパートなのだそうだ。無数の蟻が、箱から外へ出てしまわないように、箱の周囲には、ビニール布をくぼませて作った堀がめぐらされ、水がたたえてある。この工夫は子に甘い父がしてやった。
「これ海だよ」と子供はいう。「蟻はチェがないでしょう。だから舟が作れないでしょう、だから海がわたれないの」
箱庭の世界には、丘があり、谷がある。子供はビニール布をつかって、池だの川だのを作った。障害物によって、蟻たちが勝手に歩きまわるのを防ぎ、その行動に規制をあたえるためだ。――マッチ箱が規則的にならんでいる所は、本当に団地のように見える。むろ

ん蟻たちは、必ずしもマッチ箱のなかにすむとはかぎらない。ある集団はとんでもない所に穴をほって巣をつくった。子供はその巣をこわして、何とか〝団地〟にすまわせようと努力した。——だが、だめとわかると、あきらめた。

「蟻ってバカだねえ」子供はつくづくいう。「いくら教えてやっても、わからないんだよ。餌をちょっとうごかしてやると、もうわからなくなるんだ。巣をつぶしてやると、困ってうろうろしてるよ」

蟻に何度も無理なことを教えこもうとして果さず、いらだって箱庭のなかみをダストシュートにぶちまけてしまったことがあった。

「バカ！」子供は癇をたてて、〝巣〟もろともおちて行く蟻たちに叫んだ。「そんなにおぼえの悪い奴はどこかへ行っちまえ！」

父親の口まねかしら、と母親はその口ぶりをきいておもいついた。——しかし、幼い忍耐と努力が、突如としていらだちと残忍な衝動に変るのを見た時、ふと舌のつけ根にかすかな戦慄が走るのを感じるのだった。

子供はふたたび蟻をみつめ、今度は訓練するのをあきらめて、ただ眺めていた。

「あそびに行かないんだったら、お使いにいってちょうだい」

母親はぬれた手を前かけでぬぐいながら、蟇口から百円玉をとり出す。

「これ、一階の竹本さんのおばさんにわたしてきて——わたせばいいわ」

子供はノロノロと、箱庭の前から立ちあがって、母親のスカートに鼻先をこすりつける。

「何かちょうだい」

「行って来たらあげるわ」

子供はしぶしぶ玄関の方へ行く。——父親の下駄をつっかける音がする。

「たかちゃん！」母親はテレビの前に坐って、新聞をとりあげながら声をかける。「下駄だめよ。階段でころんだらどうするの！」

だが、小さい足音は、すでに玄関のコンクリートの上をずるずるひきずりながら、外へ出て行った。両手で閉めるドアが、とてつもない音をたてる。

「しょうのない子……」

母親はつぶやきながら、プログラムの上に料理番組をさがして、テレビのスイッチをいれる。機械がブウンとかすかにうなって、ブラウン管の底から、画面が湧き上ってくるまでの、ほんのわずかの間、母親は階段の空洞に、カッコン……カッコン……と間をおいてひびく下駄の音をきいた。ブラウン管には、割烹着をつけた肥った婦人と、針金みたいにやせた女性アナの像がうかび上った。

その時——ポッン、ポッン、と遠ざかって行く、かたい足音が、突然はげしくもつれた。階段を転落する物音が、短い悲鳴とからみあったかと思うと、フッと消えた。母親はテレビの前から反射的にとび上ると、ドアにむかって突進した。

「たかちゃん！」

声は階段の上下にワーンと反響し、たった今起った物音の残響とまじりあった。——子

供の姿はなかった。

「たかちゃん！　大丈夫？」

五階と四階の間の踊り場に、おとなものの下駄が一足、ひっそりところがっている。踊り場の窓から、午ちかいうららかな春の日ざしがさしこんでいる。——母親は階段をかけおりて、踊り場から四階の方をのぞいた。

子供の姿はそこにもない——四〇五号、四〇六号のドアはしまっている。「たかちゃん！　どこ？」

母親は悲鳴にちかい声でさけぶ。四〇五号室のドアがあいて、中年の婦人が顔を出した。

「どうかなさって？」

「子供が——」母親の声が上ずっていた。「今おっこったらしいんですの、どこにいるかごぞんじありません？」

「いいえ——私も今物音をきいて出てきたんですけど……」

母親はぞっとするような思いにかられて、反射的に、手すりから下をのぞく、まさかこの高いコンクリートの手すりをこえて……だが、ずっと下の、一階の床にも子供の姿はない。——その時母親は、一瞬、どこか遠い所でかすかに泣いている子供の声をきいたような気がした。

「御主人は？」高橋警部はきいた。

「出張中ですの……」母親は涙にむせびながらいった。——叫びまわって声もかれ、ヒステリーの発作も一通りおさまったところだ。「あの人に、なんて知らせたらいいか……」

警部は顎をなでた。——失踪としても妙な事件だ。子供が階段の途中からおち、おちたとたんに消えてなくなった。消えた瞬間を母親は見ていない。誰も見ていない。

「くりかえしてききますがね、奥さん、お子さんは外へ出て行かれたんじゃないですか？」

「そうじゃありません。絶対にそうじゃありません」母親も何度もくりかえした返事をまたくりかえす。「あの子は、あの建物から外へ出ていないんです。下におられたみなさんもそういっています」

子供が、五階の部屋を出た時、この十三号館四系統の階段の上り口には、三人の婦人が立ち話をしていた。彼女らは、子供がおりてこなかった事を証言している。前田喬夫という五歳の子供の消えた時刻は、偶然にも正確に立証することができた。

喬夫の家は、ある視聴率調査会社のサンプル家庭にえらばれオーディオメーターというテレビ視聴率自動記録装置を、テレビにセットしていた。これにはいつテレビのスイッチをいれ、何チャンネルを何分見ていたかが、記録紙に正確に記録されるようになっている。喬夫の母の見ていた料理番組と、四階の四〇五号室の婦人の見ていた番組が偶然同じで、見ていた場面をつきあわせると、喬夫は部屋を出てから、三十秒ないし三十五秒の間に消えてしまったことになる。この時間なら、おとなの下駄をはいた五歳の子供の脚で、四階

と五階の間の踊り場から、四階への階段をおりかけたぐらいのところまでしか行けない。

——母親は悲鳴と物音をきいて、すぐとび出した。四〇五号室の婦人もすぐに顔を出した。この間、多く見つもって四十五秒ないし五十秒……。

「だめですね」附近をまわって来た野村という若い刑事は、首をかしげながらいった。

「誰も子供の姿を見かけた人間はおらんそうです」

「坊やは、外にいるはずがありませんわ」母親はヒステリックに叫んだ。「あの建物の中です。十三号館のどこかに、必ずいるはずです。——わたし、わたし四階へおりる階段の途中で坊やの泣き声をきいたんですもの」

階段をおちた子供を、どこかへかくす可能性は、常識で考えればたったひとつだ。四階の四〇五号室、四〇六号室、どちらかの部屋にかくされているとしか考えられない。——だが、どちらの部屋も、すでに徹底的にしらべたあとだった。もちろん両室の住人は大むくれだったが。……いや、この二つの部屋だけでなく、この階段の両脇にならぶ、五系統、六系統の部屋は、一階から五階まで、しらみつぶしにしらべた。ダストシュートの中もしらべてみた。——だが子供の姿はなかった。

「神かくしだな」警部はわけのわからない顔をして頭をかいた。「まさかと思うが、ほかの部屋もしらべてみよう。十三号館は、一応全部しらべてみるんだ」

「ひょっとして、誰も知らない秘密のどんでんがえしがあるんじゃないですか?」

「公団アパートに、そんなからくりがあるなんて考えられんな」

「屋上はどうでしょう?」紺野刑事はいった。「下へおりたと思われていたのが、実は上へ上った……」

「そいつもアイデアだな。——ひとつ探して見るか」

団地の屋上には、ふつうは上れないことになっている。紺野刑事が管理人から鍵をかりて来て、屋上へ通じるドアをあけてみた。——屋上には何の変りもなかった。テレビ・アンテナが林立し、のどかな春の日ざしがうらうらとあたっているばかりだ。

「何にもありませんな」刑事は大きなあくびをしながらいった。「第一屋上のドアの鍵がかかっていちゃ、どうにもならんはずだ」

警部は屋上のはずれにたって、じっとまむかいの建物——十二号館を見つめていた。

「どうしたんです? もうおりましょうや」

刑事は昇降口へ足をむけながら声をかけた。

「ちょっと……」警部は、変にひからびた声で、肩ごしにいった。「ちょっと、こっちへ来て見てくれ」

「何です?」刑事は近よった。「何かありましたか?」

「この向いの建物を見てみろ」

警部はこわばった声でいった。

「何か変ったことでも?」

「向うの建物の高さと、こっちの高さと、どっちが高い?」

「同じですね」刑事は身をかがめて、屋上の線をすかしてみながらいった。「同じなのが、当り前でしょう。団地の建物は、ブロックごとに全く同じ規格でつくられるんだから」

「じゃあ、建物の階段を数えてみろ」警部は信じられないといった声色でいった。「窓の数を見るんだ」

刑事はそういわれてはっと気がついた。

「四ツ——四階ですね」

「その隣りも、その次もそうだ。この建物の隣りもそうだ。——みんな四階だてだ」

「じゃ、この建物だけがちがうんですか？」

「そういうことになるな」警部はゆっくりいった。「消えた子供は五階の住人だった。——ところで建物の高さは向うとこっちは、まったく同じだ。——四階だてと五階だてが同じ高さというのはどういうわけだ？」

「こりゃ、何かからくりがありそうですな」刑事はのろのろした口調でいった。

「お前、向いの建物へ行って、天井の高さをはからしてもらえ。できれば床の厚みも、何とかしてはかってこい。それがすんだら、こっちの部屋の高さもはかるんだ」

刑事は階段をかけおりた。

警部は頭のなかが次第にこんがらがってくるのを感じながら、一だんずつ階段をおりていった。と——五階と四階の階段の間で、ふと、子供の泣き声がきこえたように思えた。警部はきっと立ちどまって、あたりを見まわした。どこからか——人気のない、コンクリートの階段のどこからか、かすかに子供の泣き声がきこえる。たしかにきこえてくる。

警部は壁をたたいてみた。コンクリートの壁はびくともしない。壁に耳をつけてみても何もきこえない。泣き声は、今ふんでいる階段の下からきこえてくるようだった。

「いたいよ……母あちゃん……たすけて」警部は階段の途中にしゃがみこんだ。——たしかに下だ。この階段の裏側だ。——警部は一気に階段をかけおり、今度は四階と三階をつなぐ階段から頭上を見上げた。そこには五階四階間の階段の裏側が、逆段々になって頭上にかかっている。骨組にコンクリートをかぶせただけの、薄い階段だ。そして——今度はその泣き声は、上からきこえてくるのだった。警部はちょっと考えて、もう一度ききいった。だが、もうその声はきこえなかった。——どこかに隠し部屋があるにちがいない、と警部は考えた。だが、どこだ？　階段の裏側か？

上り口へ出てみると、さっきの向いの十二号館へしらべにいった紺野刑事が、ぼんやりした顔でかえって来た。

「ねえ、警部、あなたは算術は強いですか？」

と刑事は頭をごしごしかきながらいった。

「あたしゃァてんで不得手でね——狐につままれたみたいなんです」

「どうしたんだ？」

「いいですか？　この十三号館の一階の高さは、床の厚みをいれて、ざっと三メートル五十センチあります」刑事はかみしめるようにいった。「向いの十二号館でも、やっぱり同

じ、三メートル五十センチです。ところで、むこうは四階、こっちは五階だ。そして向うの建物の高さは十四メートル、こっちも十四メートルです。計算でやれば、こっちの高さは三メートル五十×五で、十七メートル五十センチなけりゃならない。残りの三メートル五十センチは、いったいどこへ消えちまったんでしょう?」

警部は物もいえずにつったっていた——十四メートルの長さの中に、十七メートル五十センチの長さがすっぽりはいるはずがない。これは、どこかがくるっているにちがいない。

「それともうひとつ——建物の横幅に気がつきましたか?」刑事は頭をふりながらいった。「私は、それに気がついてついでにはかってみたんです。——というのは、ほかの建物は、みんな入り口が二つしかないのに、こっちの建物だけ、三つあるからです」

警部は大急ぎで背後をふりかえってみた。——たしかにそうだ。十三号館だけ入り口が三つある。

「部屋の造りは、全部同じです。2DKというやつで、十三号館も、ほかの全部の建物も、部屋単位の横幅は同じなんです。そして——建物自体の横幅は、十三号館も十二号館も、まったく同じです。この意味がわかりますか?」

「ああ……」警部はかすれた声でいった。「四つの部屋と同じ長さの間に、同じ大きさの部屋が七つはいっちまったわけだ」

「何だか狐にばかされたみたいですがね——こういう具合に行けば、住宅問題なんか簡単に解決しますね。十六の部屋と同じ容積に、三十の部屋がはいっちまうんだから」

「笑いごとじゃない」警部はいった。「それは重要なことだぞ。子供が消えうせた空間と、そのことは重大な関係をもってくる」

その時、外をまわっていた野村刑事が、まっさおな顔で近づいて来た。

「どうした?」と警部は声をかけた。「気分でも悪いか?」

「警部、私はふつかよいか、頭がどうかしちまったかです」若い刑事はいった。

「何が起ったんだ?」

「実は妙なことに気がついたもんで……」刑事は額にじっとりにじんだ冷や汗をふきながらいった。「このブロックの外側をまわっていたんです。そのうち、この十三号館というのが、いやに半ばな数だな、とひょいと気がついたんです」

「それで?」

「このブロックは、道をはさんで南に六棟、北に七棟あります」刑事はぶるっとふるえた。「南から見ると、北と南の各棟はきっちり前後にかさなりあって、六棟しか見えない。一号と二号、三号と四号という風に、きちんと向いあわせに建っているのに、この十三号館だけが、どうしても、見えないんです。ところが北から見ると、ちゃんと七つある。建物の幅と間隔は、北も南とまったく同じです」

若い刑事はまた体をふるわせた。

「お化け煙突って現象がありますね。——最初はあれかと思ったが、よく見ると全然ちがうんです。ねえ警部、六つと七つが同じ数だなんてことがあり得ますか?」

「警部さん、来てください！」階段の上から、母親が金切り声で叫んだ。「坊やが……坊やの声がきこえます」

「おい、野村！」警部は若い刑事にいった。「お前ひとっぱしり管理事務所へいって、この十三号館の登録がどうなっているか、きいてこい」

そういうと警部は、もう一人の刑事をつれて階段をかけあがった。

母親は、五階の途中にしゃがみこんで、半狂乱のていでさけんでいた。

「坊やが――坊やが泣いています。苦しんでいます」

警部も、それから階段の附近にむれた人々も、今ははっきり遠くかすかな子供の泣き声をきいた。

「いたいよ……足がいたいよ……お母あちゃん……たすけて！」

「お前は下へまわれ！」警部はいった。「裏側にまわって、声がどこからきこえるのかきいてみろ」

刑事は四階と三階の踊り場にかけおりて、椅子や箱をつみかさねて、その上にのった。

「きこえるか？」警部は手すりごしにどなった。

「きこえます！　丁度階段の裏側です」

「だいたいでいいから、一番よくきこえるところを裏側からたたいて見ろ」

「このへんですね」

刑事は箒の柄か何かで、どんどん裏側からつついた。警部はその附近の階段に耳をあててみた。――どこかずっと遠くの、野原で泣いているような子供の泣き声が、かぼそく、いたいたしくきこえてくる。声は波をうって、遠くなったり、近くなったりする。

「坊や！　たかちゃん！」母親は階段にすがりついて絶叫した。「お母さんの声がきこえる？　返事をして！」

突然彼女は、はげしく身ぶるいしてすすり泣きはじめた。ヒステリーの発作が起り出したのだ。警部は眼顔で合図して、まわりの人たちに母親を部屋につれて行かせた。

「階段をぶちこわしてみよう」警部は上って来た刑事にいった。

「管理人の許可がいるでしょう。公団なんてうるさいですよ」

「許可なんかとったら、いつになるかわからん、修繕だったら、俺がやってやる」

「できるんですか？」

「俺は工兵上りだぜ――タガネとハンマーを探そう……」

「電気ドリルがありますけど」

横からどこかの主婦が口をはさんだ。

「ドリルで穴があくかな」警部は顔をしかめた。「ニューマティックハンマーがほしいところだな」

「ドリルといっても日曜大工用じゃありません。主人の採鉱テスト用のもので、三叉錐の先にダイヤモンドがついています」

「それはうまい。そいつを貸してくれませんか?」

電灯線で動く、小型だがおそろしくがっちりした採鉱技師用のドリルが、もってこられた。警部は三脚スタンドをひらいて、モーターを固定させるとドリルを下にむけてつきたてた。

「ちょっと待っててください」刑事は警部の腕をおさえた。

「あの——こんなことして、大丈夫でしょうか? 子供にけがをさせるような事になりませんか?」

「わからん」警部はいった。「だが、声のぐあいじゃ、子供はこの階段のずっと下の方にかくされているようだ」

「ずっと下って、いったいどこです?」刑事は上ずった声でいった。「この階段の厚みは、二十センチしかありませんぜ」

「十四メートルの高さの中に、十七メートル五十センチの高さがかくされていたんだ」

警部はスイッチに指をかけながらいった。

「その二十センチの間に高さ三メートル五十センチの空間がかくされているかも知れん」

警部はハンドルをぐっと脇の下にあてがうと、唇をぎゅっとかんで、トリガー式になったスイッチをひきしぼった。ギュンと反動が起って、四分の一馬力のモーターが回転しはじめた。片手でスイッチをしぼりながら、もう一方の手で警部は上下動ハンドルをしずかにまわした。——ダイヤモンドをうめこんだ、鋭い錐先は、石鹸水をしたたらせながら、階段のコンクリートの上に、徐々におりていった。

野村刑事は団地の管理事務所へはいっていって、中年の管理人にRブロックの十三号館について、たずねてみた。

「Rブロックの十三号?」チョビひげをはやした管理人は首をかしげた。「おかしいな、ブロックにはたしか……」

そういう管理人は棚から台帳のようなものをとり上げて、ペラペラとめくった。

「Rブロックには十三号館というのはありませんね」

「ない?!」刑事は眼をむき出した。「そんなはずがあるもんか、たった今俺はその十三号館からでて来たんだ」

「でも、ないものはないんです。この通り台帳には十二号館までしかのってません」

「じゃあ、今十三号館に住んでいる人は、どんな具合にしてはいったんだ? それに家賃はいったいどうなっていたんだ?」

刑事は台帳の最後のページを見ながらつぶやいた。刑事はそこが何だか一枚だけ、切りとられているような気がした。——だがよく見ると、そんな痕跡は何もなかった。

「家賃や入居手続きと申しましても、ないものにどうやってはいるんで?」管理人はうすきみ悪そうにいった。「その——Rブロックで、何か起ったんですか?」

刑事はハッと顔をあげた。——何か胸のうちで軽いショックを感じたのだ。

「そのだ、Rブロックの十三号館で……」

そういいかけて刑事は絶句した。彼には何が起ったか思い出せなかった。——いや、何も事件はなかったのだ、と思いこみかけていた。

「そう——つまり、Rブロックで、何かが……起った……」

「ちょっと失礼します」管理人は電話のベルの方へ立っていった。野村刑事は呆然と、その場につったっていた。——いったい何があったんだ？　俺はいったい全体、こんな団地の管理事務所なんかで何をしてるんだ？

「刑事さん」管理人は電話の方から声をかけて来た。「あなたの方の仕事かも知れませんぜ、救急車をよんでくれませんか？」

「どうした？」

「今Rブロックの方から、十二号館のはずれの芝生の上で、子供が一人、けがをして泣いてるって知らせてきました、どこの子かわからないそうです。——何だか脚を折ったらしいとかで……」

刑事は事務所をとび出していっさんにかけ出した。——そうだ、子供！　俺は何か子供に関係のある事件でここに来ていたはずだ！

鋭い三叉錐の先が、ぐるぐるまわりながら階段のコンクリートに、妙に柔らかい音をたててかみこんだ時、高橋警部は、コンクリートの表面に、何かさざ波のような細かい震動がさっと走ったような気がした。その震動が、感染したように、警部はぶるっと全身に身ぶるいが起るのを感じた。反射的に手をゆるめようとして、警部は逆に上下送りのハンドルをぐっと下に押してしまった。——一瞬、めまいとも嘔き気ともつかぬようなショックが、のどもとをひっぱたいた。建物全体がぐらぐらとゆれたかと思えた。いや——建物全体が、コンクリート壁を痙攣させて、ゲラゲラッと笑ったような気がしたのだ。ピシッとモーターのヒューズがとんだ。ほんの一瞬のめまいから回復したとき、警部は回転のとまったドリルのスタンドによりかかって、よろめきながら立っていた。

「警部……」かたわらにぼんやりつったった紺野刑事がいった。

「いったい何をしているんです？」

「そうだな……」警部もよりかかったドリルを見まわしながら、不審げにつぶやいた。

「おかしいな——いったい何のつもりで、階段にこんな道具をすえてるんだろう？」

「階段に穴をあけるつもりだったんですかな」刑事はあきれ顔でいった。「何のために？」

「まてよ……」警部は額をたたいた。「たしか、えーと、階段から子供の声がするとかいうことで……」

「バカバカしい！」刑事はいった。「何もきこえないじゃないですか。——きこえるはずがないでしょう」

「じゃ俺たちは、なぜこんなところにいるんだい？」

「子供……」刑事はこめかみをもみながら、遠い記憶をよびさまそうとするように眉をひ

そめた。「ええっと——そうです、たしか、このアパートの中で子供がいなくなったとかいうことでしらべに来たんじゃなかったかな」

「そうだったような気がするな」と警部も頭をふりながらいった。「五階の——住人だったんじゃないか?」

「みっともないけどたしかめましょうか?」

二人は階段をあがって、五〇五号のドアをノックした。扉があいて、なかから母親が顔を出して、不審そうに二人を見た。

「何か御用?」

「そうだ! たしか——あなたのような気がする!」警部は叫んだ。「あなたでしたね」

「何がですの?」

「お子さんが行方不明になられたというのは、あなたでしょう?」

「いいえ——」女の顔にふとぼんやりした表情がかすめた。

「うちには子供はおりませんわ」

二人は口をつぐんで、そこに立っていた。ちょっと奥の方をのぞいた刑事は、口ごもりながらいった。

「でも、あの、お部屋に子供の絵本や玩具がありますね」

「ええ、——そうですね」女は妙な顔つきをした。「ほんとね、なぜあんなものがあるのかしら?——きっと主人の気まぐれでしょうと思いますわ」

「御主人は?」

「出張中ですわ」

少し正気が恢復してくると、二人は急にきまりが悪くなった。二人は別れをつげて、ドアをしめた。しめる時にふと見ると、母親は小さな箱庭をじっと見ていた。

「このドリルはいったいどこからもって来たんでしょうね」刑事は、階段の途中にのさばりかえるドリルを見てつぶやいた。

「あら、そのドリル、たくのですわ」

階段をのぼって来た婦人が、声をあげた。

「まちがいございません。主人の仕事用のものですわ——どうしてこんなところに来てるのかしら? これ、とっても高価なものですのよ」

二人は婦人の部屋までドリルをはこびこんでやって、わけのわからないままに外へ出た。

「いったい、われわれは何のために、こんなところへ来たんでしょうかね」刑事がまばゆい春の日ざしを見上げながらつぶやいた。

「団地なんかに、何の用があったんでしょう? 何か起ったんですかな?」

「さっき、思い出しかけてたじゃないか」警部は相手の顔を見ながらいった。「ほら、あの——何だっけ?」

二人は顔を見あわせたが、もう思い出せなかった。お互いに妙なうす笑いをうかべて頭をかいた。

しかし、むかいの建物を見ると警部はまた奇妙な顔つきになった。反射的に走り出してむかいの棟の横手に行き、壁に描かれた十四というナンバーを、わざわざたしかめて、首をかしげながらもどって来た。

「警部どうしたんです?」刑事はいった。「十四号館がどうかしましたか?」

「ああ……」警部は、向いの棟の窓を見上げながらつぶやいた。「このブロックの建物は、みんな五階かい?」

「そうじゃなかったですか?」刑事は自信なさそうにいった。「はじめから、みんな五階だったでしょう」

「帰ろうか」と警部はいった。「頭がいたい――」

「われわれはいったいここへ何をしに来たんでしょうか?」紺野刑事はいった。「ええっと――もう一人だれか一しょに来たような気がするが……」

「そうだな」警部も妙な顔をした。「だがやっぱり二人だけだよ」

五〇五号――むかいの部屋の婦人の話からはじまる一連のテープをききおわった時、二人は妙な表情で、顔を見あわせてにがわらいした。

「夢なんてものは、ずいぶん荒唐無稽なもんですな」と警部はいった。「自分がどんなにバカバカしい恐怖観念をもっているかわかりましたよ。わからせてもらったおかげで、もう悪い夢を見ずにすみそうです。精神分析料をおはらいしなくちゃいけませんな」

「夢じゃありません! これは実際に起ったことの、りっぱな記憶なんです!」

「冗談じゃない」警部は笑い出した。「こんなあほらしい体験を実際してたら、とっくの昔に病院いりです」

「でも、単なる夢じゃない証拠に、何人もの人たち、――あの時十三号館内にいた人たちの記憶が、ちゃんと脈絡をもっているじゃないですか」

「だが、それが事実として、いったい何が起ったんです?」

「われわれは、つれてこられちまったんですよ」

「どこへ?」刑事はいった。「誰につれてこられたんです?」

「ここへです」男は青くなって手をふるわせながらいった。

「どこだか知らないが、地球でない、別の世界へです。全然われわれの常識を超越した世界へ……」

「どうしてここが地球じゃないんです?」警部は窓の外を見やった。「いい天気で、のんびりした世の中じゃありませんか。どこが変ってるんです?」

「それは、世界とはこんなものだというわれわれの意識によって、この世界が再構成されているからです。――あなたがた、この世界に、何だかおかしな所があるのに気がつきませんか? 現実というよりも、むしろ記憶の方に似ている。現実特有の、常に一切の体験や記憶を超越している、常に新しいところがちっともない……」

「世のなかってのはだいたいそんなもんですな」刑事はいった。「天が下には新しきもの

なし、といいますからな」

「しっかりしてください！」男は泣きそうになっていた。「大変なことが起っているのに、あなたたちはわからないんですか？」

「しかし、われわれの生活にはちっとも変ったところはないし……」

「夢の中の生活だからです」男はいった。「見ようと思ったものしか見ないからです」

「証拠がありますか？」警部はいった。「ここがその――別世界という……」

「証拠といっては、みなさんのこの記憶だけです」男はテープの山を指さした。「でも、あの時、起ったこと、そしてそれを突然みんなが忘れてしまったことを考えあわせると、どうしてもそうとしか考えられない。――いいですか」男はぐっと顔をちかよせた。「僕はこのブロックのたくさんの人に、催眠術をかけてみたんです――それでわかったことは、本当の人間は、この十三号館の住人、それもあの時十三号館の中にいた人物だけだということです」

「あとの人間は全然想像の産物だというんですか」

「そうです、僕の場合は、僕自身の意識の産物です」

刑事は警部の顔を見て肩をすくめた。

「まあ、それはいいとして……」警部はうんざりしたようにいった。「われわれはどうやって、ここに来たんですかな？」

「そんなことはわかりません、まるっきりわれわれの常識をこえた力で、つれてこられたんです。――おそらくわれわれの常識をこえた宇宙生命によって……」

「その宇宙生命とやらは、何のためにわれわれをこんな目にあわせるんです」

「そんな超越的な生物の意図なんてわかるもんですか！」男は叫んだ。「でも、ヒントはあるんです。蟻の話です」

「蟻？」

「ええ――五〇五号室の婦人の、いなくなった子供が蟻を飼って面白がっていたという話をしてたでしょう」男は身ぶるいをした。「我らは――団地という蟻の巣にすむ、蟻だったんです。それを上の方から、面白がってのぞきこんでいた超次元的な生物がいた」

「十三号館の異変は、そいつのいたずらだったんですか？」

「いたずらか何か――ああいった超論理的な現象を見せつけて気まぐれに、われわれにとって、とうてい理解不可能なことを、われわれに教えこもうとしたんじゃないでしょうか？　子供か蟻にやったみたいに……」

男は冷汗をかいていた。刑事はやれやれというように首をふった。

「あなたがたの話を総合してみると、どうも十三号館自体が、その生物だったような気がしますね」男はいった。

「今もそうですかね」

「僕にはわかりません」男は汗をぬぐった。「でも、その時はたしかに生物自体か、生物の一部だったんです。あなたがたは、あのドリルで、つまり――その生物の一部を刺した

んですよ」

「それで腹をたてて、ひょいと蟻をつまんで、よそへうつした……」警部は笑った。「あなた童話を書くといいな。日本のアンデルセンになるかも知れん」

「童話どころか、気がくるいそうですよ」男は金切り声をたてた。「我々がいったいどんな生物――生物とはいえないかも知れないが――どんな意志のとりこになってるかわからないんですか？　奴は、われわれの記憶を消すこともできた。おそらく地球の方だって、われわれがいたという証拠は消滅させられているでしょう。その上この世界をわれわれの意識によってつくることができる。そんな連中の〝箱庭〟の中にとじこめられてるんですよ」

「どっち道われわれの日常生活はあまり変りませんな」警部は腰をあげた。「何もかも今まで通りですよ。やってることもいつもと同じです。この世界が地球じゃないにしても、生活が変らないかぎり、われわれには別に大したことじゃないです。第一、われわれは地球に住んでいるにしても地球なんて、見たこともありませんからな。われわれにゃ、地面さえありゃ充分ですよ」

「さあ、蟻は蟻の生活にかえるとしましょうか」刑事も帽子をかぶった。「まったくわれわれときたら、蟻同然に鼻先ばかりみてあくせく働きまわらにゃなりませんのでね。――原爆のふってくる瞬間でも、コソ泥をおっかけまわしているでしょう」

「待ってください！」若い男は叫んだ。「あなたがた――信じないんですか？」

「信じたところで、どうってことはないでしょう」刑事はいった。「ここがその異次元世界とやらでも、それを知ってわれわれに何ができるというんです？」

「あなた方、この現実を何とも思わないのか？」男は手をふりまわして、ヒステリックにどなった。「蟻みたいに――驚きの心をなくしたのか？　異変が起っても、ちょっとまごつくだけで、すぐそれを当り前のこととしてうけいれちまうのか？　それとも、異次元生物の力で、人間らしい驚きや、恐れの心をなくしてしまったのか？」

そういうと男は台所の方へ走っていった。

「さあ、見せてやる！　ここがどんなとんでもない世界だか、はっきり見るがいい！」

男はダストシュートのふたに手をかけるとそれをぐいとひきあけた。

「さあ見ろ！　この中に、何が見えるのか……」

「まさしくキ印だな」刑事は、男の狂ったようなありさまを見ながら、あきれてつぶやいた。

「ほっといて帰ろう」警部は靴をはきながらいった。「変な野郎だ」

警部は五〇六号室のドアをあけると、捜査課の部屋にはいっていって、自分の椅子にすわって大きくのびをした。

「まったく妙な野郎ですね」刑事もニヤニヤ笑いながら、ドアをくぐって、帽子かけに帽子をなげた。「ダストシュートの中に星空が見えたからって、それがいったい何だというんでしょう」

骨

井戸を掘ろうと思った。

いま住んでいる、もと百姓家だったらしい藁屋には、裏の崖から湧く水を、筧で流し場におとしてあるが、どうも心もとない感じである。

流し場の三和土の所に、木でかこった水道栓がたっているが、真鍮の水栓は、青く緑青をふいて、把手をひねってみても、音もたてない。——何年も前に、蛇口からしたたっていたであろう水の鉄分が、内側に赤黒い錆となってこびりつき、地面からつったったパイプをささえる木柱の根もとはぼろぼろにくさって、全体が地面からうき上っているように見えた。風が少しつよく吹くだけで、木柱はぶるぶるふるえ、今にも乾いた音をたててたおれそうだった。実際、まもなくそのくさった水栓は、根もとの所からぽっきり折れてしまった。その時のぞいてみると、木柱の中を通してある鉄のパイプは、形もわからぬぐらいくさっており、朱と青のまざった蕈のような錆が一面にもり上っていた。

筧の水は、流れがすくなくなったり、時々とまった。雨のあとなどは、大きな、一尺ほどもあるみみずが流されてきたり、小さな蛇の死骸が、白い腹を見せて、筧の口からぶら下ったりした。

で——どこか近い所に井戸を掘ろうと思った。

奇妙な事に、井戸を掘ろうと思いつくと、間もなく井戸掘りの職人がやってきた。

禿頭に鉢巻をして、胸から膝まである黒い前かけをつけ、地下足袋に脚絆という恰好でやってきて、

「井戸を掘りますか？」

という。

たのむ、というと、もう翌日には、四、五人でやってきて、裏庭に背の高い櫓と、木を組んでつくった、直径二メートルぐらいの車をくみたてはじめた。——車のまわりには、煙突掃除につかうような、しなやかな割り竹を細長くつないだものが巻きつけてある。

「上総掘り」という仕かけで、もういまどきめずらしいものだそうである。

「むかしゃあこれで、掘抜き井戸から、石油まで掘ったもんです」

と禿頭の職人は、自慢そうにいった。

「石油掘りの時なんざあ、これで千尺（三百メートル）も掘るんですがね。——なに、ここで井戸を掘る分にゃ、そんなに掘らなくったって、あっしのかんじゃあ、十五尺から二十尺……三十尺掘らないうちに、水が出まさあ」

だから仕かけも、小ぶりなのを持ってきたのだ、という。——それでも櫓の高さは、三、四メートルもあったろうか。てっぺんに滑車がついている。その横に、太い竹を井桁にくみあわせて、四つ目垣のような足場をつくり、それに長くつないだ割り竹をまきつけた木の車、——「へね車」というのをとりつけた。

へね車の上には、孟宗竹を二、三本たばねたのが横にしっかりととりつけられる。——根元の方がしっかり固定され、よくしなう梢の方は、櫓の中心部にもぐりこんでいる。梢の先にくくりつけられた麻縄が、へね車に巻きつけられた割り竹の先にむすびつけられ、割り竹の先端部には、長さ三メートルあまりの太く、重そうな鉄管がとりつけられた。鉄管の先には、蝶つがいの蓋のついた、ふちのぎざぎざになった、これも重そうな金具がついている。

「これをかぶらっていいやす」と禿頭の職人は説明した。「これで、地面をうちかいて行くんです。——細工はりゅうりゅう、仕上げをごろうじろ、って所でさあ……」

職人は、一人で自慢し、一人ではりきって、いろいろ指図した。

翌日から、こつり、こつりという音が裏庭の方ではじまった。——のぞいてみると、あの職人と、もう一人、弟子だか臨時やといだか知らない、若い、力はありそうだが頭の鈍そうな若者と、二人きりで仕かけを動かしていた。

孟宗をたばねて、横にとりつけた「弓竹」の先は、割り竹の先と、麻縄でむすばれ、割り竹の先に垂直についている鉄管を、宙にぶらさげた恰好になっている。麻縄でつながれた割り竹を、孟宗の弾力にさからって、ぐい、と下方にひっぱると、鉄管の先の刃物が、ごつんと地面にあたり、次いで弓竹の弾性で上にはね上る。掘った土は、かぶらの中にとりつけられた、上下に動く弁によって、次第に鉄管の中にたまって行く。——まことに原始的なものだ。こんな仕かけで、百メートル以上も穴を掘りぬいたとは思えない。

朝からはじまった音は、一時間半ぐらいでやんだ。どうしたのかと思っていると、もう

一時間ほどして地下足袋姿の職人が表庭の方へまわってきた。

どうした?——もう水が出たのか? ときくと、禿頭にしめた鉢巻をつるりとはずし、それで顔の汗をぬぐって、

「いけませんや、旦那。——悪いものが出やした」

という。

「悪いものって、何だ?」

ときかえすと、眉をしかめ、首をふって、

「へえ、それが——骨でやす」

といって、後ろをむいて唾をはいた。

雪駄をつっかけて、裏庭へまわってみると、割り竹の先の鉄管はひき上げられ、朝がた、直径十二、三センチの細い穴がうがたれていた櫓のま下に、シャベルでさしわたし三メートルぐらいの穴がほられている。穴の深さはまだ一メートルにも達していまい。しめった表土層を、やっとのけたくらいで、その下の青っぽい粘土層が、ほんの五、六センチあらわれた所である。

その粘土層一面に、灰色がかった骨がたくさん露出している。

「こんな浅い所に、こんなに人骨がうまっているなんて、——どういうんでしょうね」と、職人は、口を歪めてぼやいた。「穴の両側の地面の下にも、まだずうっと横につづいてるようですし——下の方も、まだまだありそうですぜ」

掘り上げられた土の間からのぞいている、尺骨らしい骨をとり上げてみると、土中で枯れた骨の重みではない。ずっしりと重く、完全に化石になっている。

「これは——」と私はつぶやいた。「相当に古い骨だ」

「へえ、そりゃそうでやしょう」と職人は相槌をうった。「きっとこの丘は、昔、墓場かなんかで……」

「そんななまやさしいものじゃない」

私は、土の山の中から、石片をひろい上げた。

「その隅——そう穴の角の所だ。大きな骨がのぞいてるだろう。そいつを掘り出してごらん」

鈍そうな若い衆が、ちょっと白目を見せて、私と職人をながめ、額の汗を手の甲でぬぐうと、ぺっと手につばをはいて、穴の中にとびおりた。——えらい馬力でシャベルをふるいはじめたので、乱暴にやるな、といおうと思ったが、声をかけるひまもないうちに、巨大な頭蓋骨を掘り出してしまった。

「こりゃあ、でっけえや」と若い衆は、土のついた頬に流れる汗をぬぐって、ふうっと息をついた。「とっつぁん、こりゃ何の骨だ? 馬けえ?」

「馬よりゃもっとでっけえな……」と職人はいった。「それに、この頭の恰好は、馬じゃねえ」

「じゃ、なんだよう?」

「象だな――」と私はいった。「形から見て、昔――二、三万年ぐらい前まで、日本にたくさんいた、パレオロクソドン・ナウマディクスという種類の象らしいな。いわゆるナウマン象といってな。南方の、あたたかい地方から日本へわたってきて、氷河期の末ごろまでにほろんでしまった象だ」

「へーえ、象ねえ……こんなのが、昔、ここらへんにもいたんですかね」と若い衆は爪先で、巨大な頭骨をつついて、感心したようにいった。「象なんて、動物園だけにいるのかと思ったら……」

「そうすると、ここに一緒にうまってる人間の骨は、この象が日本にすんでたころのものですかい？」と職人はきいた。「二万年前となると、おそろしく古いね。この連中、こんな象を狩ってたのかね？」

「そうにちげえねえ。みなよ、とっつぁん……」若い衆は、地下足袋の先で巨大な象の頭骨の、額の所をさした。「こんな所に、石のかけらが食いこんでらあ」

ナウマン象の頭蓋骨の前額部に、くだけた石片がつきささったまま化石になっている。――のみならず、この前額から顱頂部へかけて、骨がぐしゃぐしゃに砕けてまるくへこんでいる。明らかに、大きな岩塊か何かをぶつけられて、砕けたあとだ。

牙は、一本が脱落し、のこる一本は、根元から三分の一ほどの所で折れていた。――折れた先の部分らしいものが、ほんの一メートルほどはなれた所に、半分掘り出されていた。のみならず、その折れた牙は、これも半分露出した人骨の肋骨の部分に、ぐさりとつきささっている。埋没してから、骨と骨とが動いてそういう形になったのではない事は、牙が肋骨を何本もへしおってつきささっており、折れた骨片のいくつかが、牙にくいこんだまま化石になっているのを見てもわかった。

私は土からひろい上げた石片をもてあそびながら、ぼんやりと穴の中を見つめた。――平べったい、洋梨形をしたその石片は、ひと目でそれとわかる、旧石器時代の握斧だった。とすると、これと同じ地層から出ているたくさんの人骨は、一万年以上前、世界中が氷河におおわれていた洪積世時代のものという事になる。しかし、日本でも洪積世の人骨はぽつぽつ見つかっているという話はきいていたが、こんなに一箇所でたくさん、完全にちかい形のものが出てきた、という話はきいた事がなかった。

それに、ナウマン象の骨と一緒に出てきた例など、きいた事もない。――まして、そのナウマン象と、闘った形跡をはっきりのこしたまま出土した、などという例は……。

これは、一度、学者にしらべてもらわなければならない、――そう思って私は穴の傍からはなれた。

井戸掘り職人二人の姿は、いつの間にか穴の周囲から消え、組み上げた櫓だけが、野面をわたってくる風にあたってひょうひょうと音を立てていた。

こちらから知らせもしないのに、まもなく学者らしい人物が、四、五人の、学生とも人夫ともつかぬ連中をつれてやってきた。――裏庭の方で、人声がするのでまわってみると、

櫓がわきにかたづけられ、先日の穴は、もう長さ十二、三メートルに四メートルぐらいの四角い濠にほりひろげられ、深さ一メートルあまりにはがれた表土の下から、灰白色の石をしきつめたように、人骨がびっしりあらわれていた。

まわりにもり上げられた土の上に、見ようによってはただの石片にすぎないような、原始的な石器が、頭蓋骨や、骨片といっしょにならべられていた。

私の姿を見ると、ちょびひげをはやした、風采のあがらない、学者らしい初老の男が、気弱そうな微笑をうかべて、

「ずいぶん古いものですよ」

といった。

「どのくらい前のものでしょう」

ときくと、手にもった頭蓋骨をながめて、

「さあ、よくしらべてみないとわかりませんが、ひょっとすると、四、五万年……どう見ても二、三万年はくだらないでしょう。——私は握斧（ハンドアックス）の形式から見て、岩宿の前、〝権現山第1〟よりもっと古いものと思うんですがねえ」

と小さな声でいった。——妙に自信のなさそうな口ぶりだった。

「それにしても、こんなに一箇所からたくさん、旧石器時代の人骨が出た事がありますか？」

「いいえ、ありません。——旧石器だけなら、だいぶあちこちから出ていますが、いままで、日本で旧石器時代の人骨が出た例は、栃木県葛生（くずう）石灰洞から出た葛生原人、中部地方の豊橋で出た牛川原人、静岡県の三ヶ日（みっび）原人、そのほか明石（あかし）の西八木層から出た明石原人などがありますが、いずれも部分でね。——五体そろった骨が、こんなにたくさん、それも石器や氷河時代の動物の骨といっしょに出た例はありません……」

「とすれば、大発見ですね」と、私は濠の底いっぱいに露出している化石骨をながめてつぶやいた。「いったい、どのくらいの人数の骨がうまっているんでしょう？」

「さあ——見当もつきませんな。いま出ているだけでも、五、六十体分ありますが、まだまだ横にもひろがっているし、下にもつみかさなっているし……それに時代も何代にもわたっているようで、何百体あるか何千体あるかわかりません」

何千体……という言葉をきいて、異様な感じがこみあげてきた。

「氷河時代の人骨が、こんなにかたまって出土した例は、ほかにありますか？——日本だけじゃなくて、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどで……」

「ありません。これまでに例がないでしょう……」

「いったいどうして、こんなに沢山の人骨が一箇所にあつまったんでしょうね？」私は体の中を、うそ寒いものがふきぬけて行くのを感じながら、むこうへ行きかける学者の背に追いすがるように声をかけた。「ここは——古代の墓場か、ごみすて場だったんでしょうか？」

「さあ——どうですかね。ひょっとすると、大洪水か何かで、いろんな死骸が流されてき

て一箇所にたまったのかも知れない。象だけじゃなく、オオツノジカやクマなど、いろんな動物の骨が一しょに埋まっていますからね……」学者は、なお濠をほりひろげている男たちの方にちかづきながら、口の中でぼそぼそいった。「この層の下の方も、まだずっとうまっていますよ。——全部を掘り出すのには、だいぶかかりそうです」

下にも——といわれてふと気がつくと、四メートル幅に掘られた濠の底に一箇所、二メートル四方ぐらいの大きさで、さらに深く掘りさげられ、その穴の底でも、人が動いていた。穴から出た人骨が、まわりにつみあげられている。

横にまわってのぞいてみると、掘りさげられた穴の側面に、累々と白く骨がおりかさなっているのが見えた。

腰をのばしてみると、見わたすかぎり、すさまじい白骨の堆積だった。——濠はまだ幅も延長も掘りすすめられていたが、古代人骨の層は、まだどのくらいつづいているかわからない。その厚みもどのくらいあるか見当もつかない。

二万年——三万年——いや、五万年前に、この地上に生きていた人々の骨である。文明もなく、記録もなく、野に狩り、山に木の実や草の根を集め、水辺に漁りし、貝をひろい、石をうちかいて道具をつくり、土器のつくり方も知らず、化石象や古代鹿や、熊、狐、いたち、猿などとまじりあって生きていた人たち……その人たちがいま、累々たる白骨の層となって、荒れ果てた土地の下に横たわっている……。

学者が何か声をかけると、作業をしている連中は、濠からぞろぞろ上ってきて道具をかたづけ出した。——それから、濠の傍につったっている私に声もかけずに、ひき上げて行った。

学者が人数をそろえて、もう一度本格的にしらべにくるかと思ったが、その後一向にあらわれる気配もなく、日がたって行った。——私は時折裏庭へ出て、ろくにかこいもない庭先から、ずっとのびている濠の傍にしゃがみこんで、何時間も濠底につみかさなった古代人骨をながめ、時おり腰をのばして、茫々とひろがる枯野の彼方から、誰かがやってこないかと眼をこらした。

だが、黄色い枯草と、黒っぽい枯木におおわれた野の彼方から、近づいてくるものの気配はなかった。

荒野が一面に灰色の雲に閉ざされ、びしょびしょと冷たい霖雨が降りしきる時、私は足駄をつっかけ、蛇の目をさして、濠の底ににぶく光りながら雨にうたれている骨を、いたましい思いで見つめた。——長い間見ていると、骨の一つ一つに生の物語がきざまれているのが見てとれるのだった。ある骨は、明らかに若い青年のものだった。骨格はまだ細く、みずみずしいのに、彼の腕骨は、上膊の所からぽっきり折れていた。骨になってから折れたのではない事は、その折れ口を見ればわかった。

ある骨は、骨組みもがっしりした壮者のものだったが、彼の肋骨は、脊椎骨とともにめちゃめちゃに砕かれていた。その砕かれた肋骨の下に、最初に見つかったあのナウマン象

のもののらしい、巨大な動物の脚の骨が、癒着したようにくっついている所を見ると、彼はあの古代象と勇敢に闘って、その巨大な脚の下に胸をふみにじられたのだろうか？——彼は、あのナウマン象の頭骨を砕いた、大きな岩を投げつけた勇者だったのだろうか？　彼の仲間とともに象を追いつめ、そのうちの一人が牙にかけられ、彼は仲間の仇と、塒で食物を待つ女子供たちを思って、おどろくべき勇気をふるって、怒り狂う巨大な獣に、正面から挑んだのだろうか？——あおむけになって、両腕を上方にのばし、首をおりまげたその男の頭蓋骨の、がっくりはずれた下顎骨の間から、巨大な脚で胸をふみくだかれた瞬間の絶叫が、数万年後の灰色の空にむかって、なおひびきわたっているようだった。

ある骨は、明らかに関節も何もちぢかんでしまった老人のものだった。またある骨は、明らかに佝僂病か何か、骨の病気におかされて、脊椎も脚の骨もねじくれまがっていた。——またある骨は、女のものだった。あおむけにたおれて、のばした腕骨の中に、小さくかぼそい、まだ歯もはえていない嬰児の骨を、かばうように抱いていた。

調査の連中がなかなかこないので、とうとう私は自分で少し掘ってみる気になった。学術的な発掘は、慎重にやらなければならないだろうが、これだけたくさんあるなら、少々しろうとがいじってもかまうまい、と思ったのである。——井戸掘り職人がおいて行ったシャベルと、裏にあった手箒を持って、私は濠の底の片隅に掘られた、もっと深い穴を掘りひろげ、底を掘りさげはじめた。

二メートル四方の穴は、すでに一メートルあまり掘りさげられていた。その底を少し掘ると、今度は小さい石のナイフらしいものや、もっと小さい槍の穂先のようなものがたくさん出はじめた。——ひろいあげてみると、上層部から出てきた石器より、ずっと細工がこまかく、精巧になっている。人骨はそのあたりから少しとだえ、シカやウマ、イノシシなどの骨が出はじめた。

私はその小型になった石器をしげしげとながめた。——硬い石を細長くわって両端をとがらせ、その片側を、こまかく剝いで、するどい刃がついている。明らかに、上層から出た、あのどすんとした感じの握斧より、精巧な石のナイフだ。さらにほりすすむと、もっとこまかい、石のやじりや錐のようなものがたくさん出はじめた。——石器類の中でも、後期に出てくる細石器というやつだ。

私は不思議な感じにとらわれて、その精巧な石器類をながめた。——尖頭石槍……石刃……尖頭ナイフ……細石刃……どれも剝片石器で、まだ磨いていない所を見ると、旧石器から中石器時代へかけてのものだろう。しかし、黒曜石、サヌカイトといった石を、こまかく剝いで、美しく形をととのえ、尖端と両縁に刃をつけてある細工は、すでに「工芸」の域にまで達していて、ちょっと見には、自然石と見まがうような、上層の握斧の細工より、はるかに進んだものである。

濠底の穴の深さは、すでに一メートル半をこえ、一人で作業するのが困難になってきた。——誰か手助けしてくれないか、と思っていると、穴の上に人影がさした。見上げると、あの禿頭の井戸掘り職人が、頭の鈍そうな若者をつれて、濠の縁にたっていた。

「井戸はどうしやす」と職人はきいた。「別の所で掘りやすか？」

「井戸はいいから、この穴をもっとひろげて、もっと深く掘ってくれ」私は着物についた土をはらいながらいった。「慎重にやってくれ」

職人は、ようがす、といって濠底にとびおり、穴の底から私を押し上げると、ぼんやりしている若者に、おう、仕事だ、ていねいにやれ、と声をかけた。

穴掘りを、二人の専門職にまかして、私は掘り出した細石器を持って、屋内へかえった。——なにか今までとかわったものが出てきたら、すぐ知らせろ、といいつけてあった。

奥の間にすわって、筧におちる水音をききながら、その石刃や、石槍の穂先や、小さく精巧な石のやじりをながめていると、「技術の進歩」というものがつくづく感じられた。あの不細工な握斧から、ちゃんともどりまでついた、精巧な、形のととのったやじりまで、いったい何千年かかったか何万年かかったか知らない。どちらも、剝片にしやすい石を割り、へりを剝いで刃をつける、という基本技術では同じなのにもかかわらず、その間には、明らかに「技巧」の進歩というものが見られる。その形状には、年代を経てより鋭く追究されて行く「実用性」の上に、「美意識」までがつけ加わり出す。——私は、大ぶりな、切り出し形の石ナイフをとり上げて見た。その刃の上には、血流しのような彫刻さえ見られた。

そういったものをながめていると、人間という動物にとって、「進歩」というものは宿命であり、業のようなものだ、という事が、身にしみて感じられるのだった。文明もない、

文字もない、すぐれた学問の体系も、進歩をドライヴする事によって、そこから利益をひき出そうとする軍事・経済・産業というものもない。しかし、人間というものは、ほうっておいても、その技術を進歩させてしまうものだ、という事がよくわかった。技術の進歩は、必ずしも経済的利益にはむすびついていない。——美しく形をととのえる、とか、装飾をほどこす、とかいった非実用的な方向にでも、いくらでも進歩するのだから……。技術の進歩が、経済的あるいは軍事的利益とむすびあわされ、巨大な渦巻きを起すのは、文明が発生してさらにもっとずっとあとの事であろう……。

そんな事を考えている所へ、あのにぶそうな若者がなにか細長いものを持ってやってきて、だまって縁先へおいた。——土まみれの、長い、動物の骨のようなものだった。骨角器かと思ったが、とりあげてみて、私はおどろきの声をあげた。

小さな動物の脛骨か何からしい長い骨に、一列に穴があけられている。——その穴のいくつかには、二、三センチの、うすく鋭い、細石刃（マイクロブレイド）がうめられたままになっている。鋸（のこぎり）か何かにつかわれたらしい、細石器でも一番後期の方に出てくる組立道具（コンポジット・トウール）というやつだ。写真では何度か見たが、実物ははじめて見た。

そこへ若者のあとを追うように、禿頭の職人がやってきて、土まみれの何かをさし出した。

「旦那……」と、職人は禿頭をつるりと手ぬぐいでぬぐっていった。「……土器が出はじめやした」

洪積世人骨と旧石器の堆積層の下から、細石器が出はじめた時から、なんとなく予感していたが、はたしてその予感はあたった。——濠の所にかけつけてみると、濠底にもう一つほり下げた穴は、幅が四メートルと、最初の濠一ぱいに掘りひろげられ、長さ六メートルちかくになり、上手に段をつけて、二メートル以上も掘りさげられていた。

その底に、白い、小さなものが一ぱいちらばっている。——ひと目でそれとわかる、貝塚だった。

貝塚の中には、人骨も埋もれていた。——上層の洪積世人骨のように、ただ、おりかさなって死んでいる、というわけではなく、手脚を折りたたみ、うつぶせになった胸の所に平たい石をおいてある所を見ると、明らかに埋葬されたものだ。縄文時代の早い時期に見られる「屈葬」の一種であり、「抱石葬」とよばれている形式だ。

骨はまだその貝塚の露出部のあちこちに見えていた。その間にまじって、縄文早期のものらしい土器片も見える。——鳥の骨、獣の骨、それに何か知らないが、かなり大きな魚の骨も見えている。

「どんどん掘り進んでくれ」と、私はいった。「土器が出たら外へならべるんだ」

貝塚の堆積はかなりあつかった。——二人の職人は黙々と掘りすすみ、やがてりっぱな、大型の尖底土器を掘り出した。さらに掘りすすむうちに、土偶だの土版だの、骨角製の耳飾り、牙製の首飾り、貝を磨いた腕輪、骨製の銛や釣針といった骨角器類も出だした。そしてついに、縄文中期のものらしい、勝坂式と「火炎型」で有名な馬高式の中間を行くような、見事な大型土器が姿をあらわした。

その層の人骨は、どれも体格がりっぱだった。やや長頭型で、骨格が大きく、脚が長く、身長は一メートル六五、六はありそうだった。それに成人男子と思われるものは、大てい前歯を人工的にぬいたり、削って三叉状にとがらせたりしていた。——肋骨の上におりたたまれた腕骨、上腕骨には、貝製、骨製、あるいは土製の腕輪、鎖骨や胸骨の所には、滑石や、玉と思われる石でつくった胸かざりがからんでいた。中の一体は、明らかに鋭いとがったもので、頭蓋骨の前頭部を、まるく砕かれていた。あるものは腕が折れ、あるものは片脚が切りとられていた。

私は燃え上るようなはげしい装飾線をもった、火炎式にちかい土器を穴の縁において、つくづくながめていた。——不思議な思いが胸を去来した。その土器は、一メートルの濠の底、さらに三メートルちかく掘り下げた地層から出てきた。

なぜだろう?

ふと気がつくと、この前来た、あのちょびひげの学者が、濠の縁にたって、ぼんやりとした目つきで私の足もとの土器を見ていた。

「先生——」どうよんでいいのかわからないので、私はそう声をかけた。「濠の下を掘ったら、最初細石器、その下からこれがでてきました」

「ええ……」と学者は気よわそうな微笑をうかべてうなずいた。「みごとなものですね」

「でも、ふしぎですね。これはどういうわけでしょう?」

「なにがですか？」

「何万年も前の、洪積世人骨が出た層の下から、ずっと新しい、数千年前の、縄文時代の遺跡が出てきた事ですよ」私は手をはらうと、濠壁にきざまれた段を上って、学者の傍に近よった。

「旧石器もそうです。上の層が一番古くて、下へ行くほど新しくなっている。——なんだかおかしいと思っていたら、今度は縄文貝塚です。ふつうは、上の方に新しいものが埋まっていて、だんだん下へ行くほど古いものが埋まっているはずですね。——この土地だけ、どうして地層の年代が逆転してしまっているのでしょう？」

「さあ……」学者は、自信なさそうに眼を伏せて口ごもった。

「時々、はげしい倒褶曲（とうしゅうきょく）や何かで、地層が逆転してしまう現象があるそうですが——ここもそうでしょうか？」

「そうですね……そういう事もないではないが……」

「あまり調査にいらっしゃらないので、素人（しろうと）が勝手に少し掘ってしまいましたが——どうもまことに奇妙な具合です。やっぱり専門家に大々的に調査していただかないと……今度はいつ、調査を再開されますか？」

「いえ——私はもう、調査にはまいりません」と、学者は悲しそうに、わきをむいていった。

「そりゃまたどういうわけです？」私はおどろいて、つい大声を出した。「あなたは専門の考古学者で——大学の教授か何かでしょう？」

「前はそうでした……」学者は、肩をおとして、とぼとぼと濠からはなれて行きながら、自分にいいきかせるようにいった。「この間まで、自分でもそう思っていました。——しかし、いまはもう、学者でも大学教授でもありません……自分の知らない間に、そうじゃなくなっていたんです……」

なにか事件があったんだな、と、遠ざかって行く学者の、さびしそうな、影の薄い後ろ姿を見ながら、私は思った。なにか——スキャンダルか何かがあって、大学や学会を追われたんだ。そのごたごたがあったから、長い間調査にこられなかったんだ……。学者は、だいぶ行ってから、なお未練気に、ちらりとこちらをふりかえり、それから丘をおりて消えて行った。

あの学者はこなくても、報告は行っているはずだから、調査団はいつかはくるだろう、と思った。——しかし、この奇妙な遺跡を前にして、じっとしていられないような気分にかりたてられ、調査団到着まで、なるたけ全部を荒さないように、自分で掘る事にした。

徹底的に掘り下げるとなると、今までのような、蛸壺（たこつぼ）式の掘り方ではだめだという事は明らかだった。——私は二人の職人に相談した。

「井戸は掘らねえんですかい？」禿頭の職人は不満そうな顔をした。「あっしらア井戸掘り職人で、墓掘り人夫じゃねえんだ」

そういうのをなんとかなだめすかして、もし水が湧き出したら、それを井戸にする約束

で、大がかりに掘ってもらう事にした。——これまで掘られていた濠の一端、ちょうど今、深い穴の掘られているあたりをふくんで、濠の長軸と直角に、幅六メートル、長さ十メートルほどで掘りさげて行く、という計画がたてられた。——二人じゃ手がたりねえ、といって、よんでくるわけにも行かねえし、というので、私も下着姿で手つだう事にした。

縄文貝塚の中から、次第に新しい型の土器が出はじめた。——後期、晩期のものの中には、形もびっくりするほど洗練され、表面に美しく磨きをかけ、漆をおいたものまであらわれた。細口土器や、土で弦をつくった口付土瓶など、そのまま現代の店先に出しても通用しそうな洗練された形だった、装身具もずいぶん洗練されてきた。また、貝塚の中からたくさんの河豚の骨が見つかった。——こんな毒のつよい魚を、縄文人は明らかに多量に食べたらしいのだが、いったいどうやって毒にあたらない食べ方を知ったのだろう？　きっとたくさん中毒で死んだにちがいない。

晩期の層に、明らかに闘いで死んだらしい、たくさんの人骨が見つかった。頭蓋骨に石槍の穂先がくいこみ、肋骨や脊椎をくだかれ、また四肢を切りおとされ……そして、そこらあたりから弥生式の土器が出はじめた。どういうわけかほとんど口を下にふせた恰好で出土してきた。炭化した木器——鋤や鍬や、灌漑水路用の木製矢板なども出土した。そして、長身の弥生人骨が出現し、この層は、犬や鶏の骨、それに大量の土器をふくんで、かなりつづいた。やがてその土器が、須恵器にかわるころ、また大量の、横死した人骨が出はじめた。骨のあちこちに、無数の石や青銅のやじりがまじり、あるいは額から頬骨へかけて、鋭く重い刃物でざっくり削られ、中にはぼろぼろに腐蝕した青銅製の、鉾とも剣ともつかぬ金属片で肋骨から背中をさしつらぬかれたまま埋まっている人骨もあった。——どういう理由からか、両手首の骨を鋭利な刃物ですっぱり切りとられている女の骸骨もあった。

弥生期——平和でゆたかな稲作民の時代にも、闘いがあったのだ。

その下から、急に須恵器、土師器が多く出はじめた。——埴輪の筒や、武人像も出はじめた。そのあたりから、何となく地層の様相が混乱しはじめた。巨大な石棺らしいものが出るかと思うと、日本では出土しない木と金属でできた戦車らしいものがあらわれ、馬具をつけた馬の骨や、鉄器がたくさん出はじめた。

穴のもっとも深い部分の深さはもう七メートルをこえていた。新しく掘った濠の一方は、長さ十数メートルの垂直の土の壁になり、反対側は幅六メートルの開口部から、幅一メートルたらずの階段状に底の方にかけて何段にも掘り下げ、垂直の壁は、そのまま洪積世から縄文、弥生、古墳時代と、上から下へかさなる年代層の断面となっていた。——どの層にも、無数の骨がうずまっていた。その人骨は、どういうわけか、あからさまな病死、変死、横死のものが多かった。変死、横死した人々の骸骨は、どの時代のものも、くやしげに歯をくいしばり、あるいはがっくりと下顎骨を開き、うつろな眼窩をかっと見開いて、声のない叫びをあげ、呪詛と怨恨の言葉を投げつづけているように見えた。

日毎、しめった日の当らない土の底で掘りつづけた私たちの顔は、青白くむくみ、ひげ

はぼうぼうのびて、眼にどろんと膜がかかったようになり、私たち自身が、まるで幽鬼のような姿になってしまった。——それでも人骨の層は、なお下へ下へとつづき、私たちは憑かれたようになって掘りつづけた。

八メートルまで掘りすすんだ時、異様な層につきあたった。くだけた石盤がいくつも出現し、それは巨大な墳墓の天井石らしかったが、それをどけると、その下から戦車と馬具をつけた馬の骨と、ぼろぼろの甲冑らしい金属片をつけた戦士らしい骸骨が多量に出た。——異様な事に、その大量の馬の骨も、戦士の骨も、ことごとく首がなかった！

馬と人の頭蓋骨は、そこからだいぶはなれた所によせあつめられているのが見つかったが、私は事の意外さに呆然とさせられた。……戦車……首のない馬の骨……首のない人骨……こういった例は、中国に紀元前十六世紀から前十一世紀までさかえた殷王朝の王墓から発見された事はきくが、それから二十世紀ちかくたった紀元四、五世紀の、日本の大王たちの大古墳時代には見られないものである。第一、日本では馬が貴重品であったはずだ。——しかしながら、殉葬者らしい首なし骸骨の数はおそろしく多く、その数はちょっと見ただけで、何十体とあった。墳墓断面の大きさから見れば、その数は百をくだるまい。殷王墓から発見された首なし骸骨の数は、実に三百体から五百体におよぶという。——一人の王が死ねば、これほどまでの人間が、首を刎ねられねばならなかったのだろうか？

その奇怪な骸骨に遭遇したあたりから、二人の職人は、掘るのをいやがりはじめた。——

——それを叱咤し、なだめながら、私はなおも作業を進めた。さいわいに墳墓の石はこまかく砕けていたので、それをのけてなお掘りすすむと、寺院とも宮殿とも思える建物が焼けおちたあとらしい、焼けこげた太い柱と、大量の瓦が出はじめ、その間にまじって、焼け焦げた人骨が出はじめた。人骨のいくつかには、焼ける前に殺されたと思われる刀創があった。宮廷の、あるいは家族同士の、大きな権力争いがあったのであろう。その下から、手足にさびた鉄鎖をまといつけた骨も出た。

さらに掘りさげた時、槍でつきさされたままの髑髏や、鋭利な刃物ですっぱりきりとられた頭蓋骨が、ごろごろ出はじめた。——かつて鎌倉の古戦場を発掘した時、刀剣でうちおとされた無数の頭蓋骨が出た事があり、新田義貞が稲村ヶ崎から鎌倉を攻めた時のものだろうと推定されたというが、ここも、武家争乱期の古戦場が埋まっていたのだろうか？——とにかく五体満足な骨は、ほとんどなかった。

その下に掘り進んだ時、あまりにもすさまじい層にぶつかって、さすがの私も息をのんだ。とにかく、最下層の溝の端から端まで、そして下の厚みはどれだけか知らず、ぎっしりとつまった何千という髑髏の堆積にぶちあたったのである。——髑髏には、男も女もあり、子供、嬰児、老人もあった。また犬、猫、小鳥、馬、牛まであった。だが、そのいずれも自然にはなれたものでなく、ことごとく刃物で切りおとされたものだった。大量にやったため、後頭部の骨が砕かれたり、斜めにそがれたりしているものもあった。——気がつくと、私たちは、大地の中を、前後左右、そして下層へむかってどこまでつづくか知れ

ない頭蓋骨の大平原の上に立っているのだった。

若い男が嘔吐した。——年をとった方も、顔色を失って、何かぶつぶつとなえながら濠から上ってしまった。私も蒼惶として濠の底からはい出した。

どうしてこんなすさまじい髑髏の山が、地下に埋まっているのかわからなかった。——十三世紀、ジンギス汗のひきいるモンゴル軍が、燎原の火の如く中央アジアから西方の諸都市をおそった時、サマルカンドでは約三万人の工人をのこして、数十万の住民のことごとくを殺しつくしたという。さらに西にむかい、バーミアン、バルフ、ニシャブールでも、数万から数十万の住民を一人のこらず、女子供、老人も容赦なく殺しつくした。とりわけニシャブールでは、前にせめた都市の住民をみな殺しにした時、死体にかくれて助かったものがいるというので、三十万の住民のことごとく、女子供、老人不具者、犬猫小鳥にいたるまで、生きとし生けるものことごとく首を刎ねてピラミッド形につみ上げた。アッバース朝のバグダードでは、実に八十万の住民が殺されたという。寡兵のモンゴル軍にとって、「後方の憂い」をたつため、とはいえ、まことにすさまじいことである。

いま私たちが遭遇した、あのすさまじい髑髏の堆積は、歴史のどこからまぎれこんできた、遊牧騎馬民族の大殺りくのあとであろうか？

その夜はさすがに、あの無数の髑髏の、黒いうつろな眼でにらまれつづけるような気がして、まんじりともせず、裏庭の見える奥の間に、明りもつけずにすわりつづけた。——夜半、暗い空から蕭々と雨が降り、うす闇の中にぽっかり大地に口をあける濠のあたりには点々と燐火が燃え、風が雨とともにひょうひょうと庭前の枯木の枝をならし、それがあの何千何万という髑髏の慟哭とも、怨み言ともきこえて、まことに鬼哭啾々たる有様であった。さすがに不信心の私も、三更にいたって、思わず仏の名を口ずさんでいた。

夜が白々とあけると、野面をおおって乳のように流れる朝もやの底から、大小二つの黒い影が朦朧とうかび上り、こちらへ近づいてきた。——家の傍までくると、僧体の二人連れだった。一人は年齢はいくつかわからぬが、無髯童顔の、慈悲にあふれた顔つきの僧侶で、鼠色の衣を着て錫杖をつき、もう一人は弟子でもあろうか、托鉢用の鉢の子をささげた、あどけない顔つきの童僧であった。私は庭前まで二人をむかえ、なにがしかの喜捨をして屋内に招じた。

庭前の濠をさして、手短かに事情を話し、地下に横たわる無数の骨の菩提をとむらい、妄執をはらすべく、どうか私を得度してほしいとたのんだ。——でなければ、夜毎にせまる鬼気に、とてもこれ以上掘り進めないから……。

「そのために坊主になりたいといわれるか……」僧はしずかに、憐れみに似た笑いをうかべて言った。「しかし——妄執をはらさねばならぬのは、あなたの方ではないかな？　第一あなたは、なぜ、ここにおられるのか？　ここで何をしておられるか？」

「よくわかりません……」と私は答えた。「どうも、私は記憶喪失症らしいのです。そのために、ここに療養に来たらしいのですが……」

僧侶は瞑目して首をふると、後ろの童僧をふりかえって、剃刀を、といった。

僧が経文を唱えながら私の髪をおろしている間、ふと気がつくと、昨夜は逃げ去った二人がいつの間にか私の横手にすわり、自分たちも剃髪してもらうつもりらしい、神妙な顔をしていた。

私はもう百姓家の中にすまず、濠の底に横穴を掘ってそこを庵に見たて、灯明を上げ、僧からゆずりうけた経文を誦しながら、発掘をつづけた。——髑髏の層はまもなくつきぬけたが、なおその下に人骨の層はつづいていた。地層は深まり、時代は下っても、横死、変死、そして刑死の人骨はたえず、またある時代では、明らかに梅毒で骨をおかされた頭蓋骨がたくさんでた。も早地上の光もほの暗くさすだけになった深い地底で、鬼気はいよいよ濃く、たえず経文を誦しながら道具をふるわなければ、たえられないほどになった。

——歴史は人間の巨大な怨みに似ている——と、ずっと昔、ある文人はいった。まことに、生きとし生けるものの間で、人間ほど残忍酷薄な、同種大量殺りくを、飽きもせず、相互にくりかえしてきたものはないのではあるまいか？ ——そしてまた、人間ほど、生きている間に仇な妄執にとりつかれ、さまざまな幻影を描き、死にのぞんでなお怨恨をのこして死んで行くものはないのではないか？ ——鳥獣虫魚にぬきんでるとほこる人間の精神も、理性も、あやな五感も、魂も、一転すればそれはそのまま、生命四十億年、地球四十五億年、宇宙百五十億年の「業」の、もっとも深い、もっともむすぼれた形ではあるまいか？

また、たまに晴朗の地上に這い出て、蕭々たる枯野一面に陽があたり、風がわたって行

くのをながめる時、この鳥一つとばぬ、平穏の野の下に、あつくひろく、何層にも、果て知れぬほどの骨がうずまっている事を思って、何やらからからとした気持になった。人類生誕以来、この地上に、いったいどれだけの人間がうまれ、死んで行ったか？ 東アフリカ、オルドヴァイ峡谷に石と化した骨をさらす地球最初の「石器人」オーストラロピテクスから数えれば二百万年とも五百万年ともいう。それから猿人段階を通り、原人段階を通り、五万年前の氷河期に、現世人類がうまれ、狩りをし、地をたがやし、獣を飼いならし、言葉をつくり、歌をつくり、掟をつくり、文字をつくり、文明をきずき上げ、絢爛たる都市をきずき、大量殺りくの方法を次から次へと発展させ、——やがて地に満ち、魚にあらずして海を往き、鳥にあらずして空をとび、神にあらずして雷を駆使し、星にあらずして、あの暗黒の宇宙の虚無をわたるようになる。——その間、一体何百億の「人の類い」がこの地上に生れ、死んで行ったか？——いかに文明を高くきずき上げようとも、高まり、持続するのは、文明の方であって、人はすべて「骨」にかえり、土に埋もれ、その上を蔽うのは、この蕭々たる枯野である。いや——ここには、人間の骨だけではなく、人間とともに生き、あるいは人間よりはるか以前からこの地上に生れ、あるいは人間が出現するはるか以前にほろび去った何億という生物の「種」の骨も、ともにうまっている。——山となってそびえる石灰岩は、かつて海底に生きた無数の紡錘虫の「骨」の堆積したものであり、海底より四千メートルそびえる珊瑚礁と、その周辺にふりつむ白砂は、微細な珊瑚虫の「骨」だ。かつてこの地上を、王者の如く闊歩した巨大爬虫類の「骨」も、最大の哺乳類

といわれるメガテリウムの「骨」も——ことごとくこのうすい地殻の下に埋まっている。生物も人も、結局は土と石と大気と水からおのれの体をつくり上げ、またそれをとり出した地殻へかえして行く。そのいとなみが地殻に対してなし得た事といえば、結局土中に分散したカルシウムを集め、それを凝集させた形でかえす事しかないではないか？

岩石から水にとけこみ大地に分散するカルシウムを、営々と集め、凝縮し、さまざまな形にくみたてて「骨」としてまた地にかえすこと——それが「生」だ！

暗がりの地底で、灯明の明りをたよりに、発掘はなおつづけられた。骨は相かわらず下へ下へとかさなっていた。やがて出土品の中に、安もののガラスや、金属製品がふえてきた事で、時代が「近代」にはいった事が知れた。所々に大火災や大震災の「層」をはさみつつ、骨格は次第に大きくなって行ったが、ある時また、細く、ちぢまり出した。明らかに、栄養不良の兆候が出てきた。やがて広範な、焦土層が出現した。それもただならぬ高熱にやかれ、頭蓋骨はちぢまり、四肢骨はぼろぼろに砕け、場所によっては、骨全体が炭化してしまっているものさえ出た。頭蓋をつらぬいたまがまがしい航空機用の二〇ミリ機関砲弾、ぼろぼろになった鉄兜、六角形の焼夷弾の殻などが出てきて、大空襲のあとと知れた。——だが、頭蓋骨がちぢまってしまうほどの高熱とは……ひょっとしたら、広島、長崎の「原爆」の跡ではないか、と思われた。——また、明らかに猛毒物で殺害されたと思われる、異様な斑点のういた、はなはだしい栄養障害をおこした成人、幼児の骨がおそろしく大量に出た。——六百万のユダヤ人をチクロンガスで殺害したという、ナチスの殺人工場のあとが、こんな所にまぎれこんでいるはずはなかったから、それは戦時中にあったという、毒ガス工場の犠牲者だったろうか？

そのあとはしばらく、栄養失調、あるいは刃物、小型銃器によって殺害された人骨が出た。それから人骨の出方は、比較的おだやかになり、若い死者の骨格は眼に見えて大きくのびはじめた。——だが、それからしばらく掘りすすむと、また変死者がふえはじめた。今度はぐしゃぐしゃにつぶれた巨大な金属塊にはりついたような形で出てくるものが多かった。その金属塊をよく見ると、つぶれた自動車だった。

そしてまた、毒物にやられたらしい骨が出はじめた。四肢骨が萎え、ねじ曲り、あるいははげしい炎症で関節がふくれ上り……骨にうすく出ている斑点は、なにか骨をおかす金属化合物らしかった。ある頭蓋骨の歯齦部には、明らかに水銀とわかる細かい金属粒が、キラキラ光っていた。

そして——その下から突如として、またもすさまじい、横死、変死した骸骨の堆積層が、瓦礫の山とともに出現した。

もうだいぶ前から、二人の職人は、私の傍から姿を消していた。——その金属、コンクリート、人骨の、砕かれ、やけただれた層を、一人で掘りぬく自信がなかったので、私は土の階段を何十メートルも上って、二人を探しに行った。もう地上の明りがほのかにさすあたり、三番目の、ちょうど明治ごろの年代層につくった横穴の庵の中で、燃えつきた灯

明を前に、二人は二体の僧衣をまとった白骨と化していた。

あれから何日間、掘りつづけたかまるでおぼえていないが、それにしてもあまりにも早い白骨化だった。とにかく南無、と手をあわせ、私はまたはるか地下の瓦礫と骨の堆積の所までおりて行った。

勇猛心というよりは、執念をふるい起さなければ、その瓦礫層は一人で掘りぬけなかった。——私は憑かれたように経文を誦しながら、鶴嘴をふるい、シャベルをつきたて、もっこをひきずった。その瓦礫層は、前にいったように、鉄筋のはいったコンクリート塊、アルミや鉄の板、ガラス、何やら知らぬが、機械、パイプ、電線といったものがごちゃごちゃになり、所々高熱にやけ焦げてつまっていた。その間に、無数の骨が、もがきまわるように手をのばし、あえぐようにがっくり、顎をひらいて押しつぶされていた。焼けただれた自動車の残骸もあり、飴のようにとけてかたまったガラスやプラスチックもあった。またある骸骨の頭部には、するどい刃物のようなガラス片がざっくりつきささっていた。

——もう私にも、何がこの層で起ったかわかった。すさまじい大震災が、この下に埋まっている大都会をおそったのだ。建物は倒壊し、火災が四方に発生し、人々はあっというまにくずれてきた建物におしつぶされ、発生した火災の有毒ガスにまかれ、次々に追突して燃え上る車の焔にやかれて死んで行ったのだ。私は、その死と破壊の堆積層からひびいてくる阿鼻叫喚の幻影にうちまかされまいと、経文を声高にとなえ、狂ったように鶴嘴をふるった。

突然、鶴嘴の先がやわらかくなり、私は地震の堆積層をほりぬいていた。——その下は、しめった泥土があつくつみかさなっていた。——地震のあと、地盤沈下のため海底へしずんだか、それとも堤防決壊のため洪水に見まわれたか、とにかくしばらくは泥土の層がつづき、鶴嘴をシャベルにかえたが、何も出てこなかった。

そのうち、今度は赤土が、つづいて黒土が出はじめた所で、ふたたびシャベルの先に、コツリと何かがあたった。——私は一息いれて、まわりの泥や土を充分はこび上げ、それからまた土を掘りはじめた。

シャベルにあたったのは、二尺四方ぐらいの四角い石塊だった。中はうつろになっているらしく、たたくとにぶい反響がきこえる。周辺を掘りすすもうとすると、隣にもならんで、同じように石か、コンクリート製らしい箱が埋まっているのが見つかった。

私は、何かの予感にとりつかれて、次から次へと横の方に掘りひろげた。——石の箱は、合計五つ、等間隔で露出した。まだその両脇に埋もれている様子だったが、私はもう関心をはらわなかった。

私の眼は、最初に掘りあてた、方二尺ほどの石の箱に吸いつけられていた。——その箱には、私の意識……というよりは妄執を吸いつける、強烈な何かがあった。灰色の、何の変哲もない石の箱だった。私は、何かの終着点にたどりついたような気分で、その箱を見つめていた。それを掘り出すのは、なぜかこわかった。いままで自分が自分でも理由がわからず抱きつづけて来た執念の秘密が、一気に暴露されてしまいそうで……。

ふるえる手で、私はシャベルをとりあげた。——それからまわりの土を慎重にかきわけて行った。とうとう底が見えて来た。その底に、一枚の石の板があたっているのを見て、私の予感はさらに高まった。底板と、上の箱との間に鶴嘴の先をさしこみ、一気にぐいと箱をひき上げると、中はがらんどうだった。蜘蛛の巣の一ぱいはりつめた箱の中をのぞいて見ても、なにもはいっていない。

ふと気がつくと、石の底板の上に、ころんと小さな素焼きの壺がころがっていた。胴に、何やら梵字が書かれてある。

骨壺だった。

ふるえる手でとり上げ、ふってみると、何の音もしない。——蓋をとってみると、からっぽだった。

私の体はどうしようもなくふるえ出した。今こそ何かがわかりかけていた。——私が、灰色の霧の中に失っていた「記憶」が、もうちょっとでよみがえろうとしていた。だが、その霧を完全にふきはらうには、さらに次の行動が必要だという事もわかっていた。

私は石の底板——いや、今ははっきり、石の蓋といった方がいいか知れない——を持ち上げてほうり出し、さらにその下にうまっている細長い石を、狂ったようになって掘り出した。半分ほどその石があらわれた時、私はとうとう我慢しきれなくなって、自分でも信じられないぐらいの馬鹿力をふるって、その石をひっぱり上げた。ずるずると四分の三ほどひっぱり出すと、あとはずぼっとぬけた。まわりから砂がさらさらとぬけたあとにおちこんだ。

私は、その石に夢中になって灯明の光をさしつけた。——粗末な石柱の、表には何やら戒名が書いてあったが、そんなものは関係なかった。私は急いで裏の俗名を見た。

私の名前だった！

私は自分の墓が、何十メートルという地底に、さかさに埋まっていたのを、掘りあてたのだ。——いや、さかさに埋まっていたのではない。私は、地底から地上にむかって、掘りあてたのだった。

一挙に、何も彼もが理解され、すべての記憶がもどってきた。——なぜ、地層が古いものから新しいものへ、逆転していたのか……なぜ、弥生式はじめ、いろんな土器が、尻を上にして、さかさに埋まっていたか……。あの一軒屋であった僧侶が誰であったか……今は一切が理解でき、できると同時に妄執もはれていった。

失われた死の直前の記憶ももどってきた。——私は、あの震災のあとの大洪水におしながされ、泥土の中におぼれ死に、そして、死体も見つからぬまま、家族はそれと知らずに……。墓石を掘り出したあとの穴から、ふっと風がふきこんできて灯明をふきけした。——まっ暗やみになった中で、穴の奥からかすかな明りがさしこみ、潮の香をふくんだ風がふいて来た。

娑婆の風だった。

その風にあたると、墓石をかかえた私の腕が、みるみる白骨になって行くのがわかった。

保護鳥

1

「ジャパン？」

フロントの、頭に毛の一本もない、灰色の頬ひげをはやした老人が、宿帳のサインを見て、おどろいたように声をはりあげた。

「日本から来られたんですか？」

「ジャパン」という言葉が、せまいロビーにひびきわたったとたんに、そこに居あわせたいくつかの顔が、いっせいにこちらをむいた。——古ぼけた椅子にすわって、雑談しながら地酒をのんでいた、村人たちだった。

日本？——日本から——というささやきが、さざなみのように人々の間をわたって行き、彼はやや狼狽して、あいまいな微笑をうかべた。

古びた木の椅子をぎしぎし鳴らしながら、天井につかえそうな巨漢が立ち上り、ゆっくり近づいてくると、カイゼル髭に縁なし眼鏡をかけた顔をほころばせ、毛むくじゃらの大きな手を、ぐっとつき出した。

「日本からようこそ！」

巨漢は満面に笑みをうかべて、吼えるようにいった。——ひどい訛りのある、それだけに日本人にはききとりやすい英語だった。

「村長のヴィクトルです。——遠い日本から、よくこの村へお出でくださった。ニッポン

はいかがですかな?」

「ええ、まあ……あいかわらずです」思いもかけぬ大仰な歓迎の身ぶりにとまどって、彼は手をさし出すのも忘れて微笑した。「私、中橋といいます」

「ワシリーです」と村長の横から、小さな顔がつき出されていった。

「ユロです……」

「ジョルジオです」

次から次へと顔がつき出され、手がさし出され、彼はざらざらしたのや、しめっぽいのや、冷たいのや、あついのや、さまざまの感触を掌に感じ、指の骨にするどい痛みを感じた。——彼のまわりをとりかこんだいくつもの顔は、一様に好意のあふれる笑いをうかべ、そして熱心な調子で口々に同じ問いをくりかえした。

「ニッポンはどうです?——ニッポンはどうなってますか?」

こんな外国の寒村で——それもこの土地にくるまでは名も知らなかった村で、これほど故国の事に関心をもたれているとは想像もしていなかったので、どう応対していいのか咄嗟には測りかね、まあまあです、とか、ええ、なんとかやってます、とか、あたりさわりのない事を、あたりさわりのない表現でくりかえしているうちに、額にじっとり汗がにじんできた。

「そういえば……」と、ワシリーと名のった小柄な人物は、心配そうな口調で体をのり出した。

「この間、何かで読んだら、最近あなたのお国は、公害がひどいそうですが……ニッポンは大丈夫ですか?」

「ええ——まだ……大丈夫です」彼は「公害日本」の名が、こんな異国の僻村にまでひびいているのか、と思って苦笑した。

「で——どうなんでしょう? 数はへっていませんか?」

「何の数ですか?」

「もちろん、ニッポンの……」

彼は少し面くらったが、口ごもりながらこたえた。

「ええ、別に……公害で減るところまでは行っていません。ふえ方はとまったようですが……」

おお!——というような嘆声が、彼をとりかこんだ人々の間からもれた。ワシリーはますます熱心に、その浅黒い、ひからびたような顔をつき出した。

「で……今、どのくらいいます、ニッポンは……」

「そうですね……」なんとなく、話の調子がおかしい事を感じながら、彼は外国語の数詞の位取りを急いで頭の中で反芻しつつつぶやいた。「一億……をちょっとこえたぐらいでしょうか?」

ワシリーのうすい茶色の眼が大きく見ひらかれ、ついで寄り目をつくるようにせばめられた。それから助けを求めるように、仲間の方を困惑した表情で見かえった。

たちまち彼にわからない土地言葉で、はげしい、せわしないやりとりがはじまった。手をふりまわし、肩をすくめ、眉をしかめて首をふり——要するに、信じられない、という事と、何かのまちがいだ、という事と、ワシリーのきき方が悪い、という意味の言葉が、くりかえし話され、確認されているらしかった。

そして、そのうち、村長と名のる男が何か決定的な事を、断定的な口調でいい、男たちは、ああなるほど、とか、そうだそうだ、とかいった表情で首をふった。

「ノー、日本の方、わしたちのおたずねしているのは、人口（ポピレーション）ではありません」と村長のヴィクトルは、彼の方をふりむいていった。「わしたちがおききしたいのは——ニッポンの数です」

「ニッポンの数？」

彼は、村長が〝ナンバー・オブ・ニッポンズ〟と、複数をつかったのに気がついたものの、まだ質問の意味をつかみかねて、首をひねっていた。「あなた、日本の方なんでしょう？」ユロという老人は、たまりかねたように彼の鼻先に指をつき出した。「本当に日本の方なんですかな？——それだったら、ニッポンの事を……」

まあまあ、というように村長はユロの体を押しもどした。

「わしたちは、鳥のニッポンの事をおたずねしているのです」と、村長は辛抱づよい調子でいった。「タキ鳥（バード）の事です」

タキ鳥？——彼はますますめんくらった。七面鳥（ターキー）の事か？

「日本にしかいない鳥……日本の国の名が、正式の学名になっている鳥——ほら、あれです。ニッポニア・ニッポン……」

村長がフロントの後ろを指さした。

——あ、と彼は思った。

キーボックスの横手に、大きなカラー写真が額にいれてかけてあった。青空を背景に、白い、奇妙な鳥が松の枝にとまっていた。一瞥（べつ）すると鷺（さぎ）のように見えるが、長い嘴（くちばし）がゆるく曲っており、眼から口へかけて、鮮やかな朱色に染まっている。

「朱鷺（とき）ですね」と、彼はやっと合点がいってつぶやいた。

「そう、そのトキ鳥（バード）です！」ジョルジオという肥った男が、うれしそうに叫んだ。「ニッポン鷺（ヘロン）です。私たち、とてもあの鳥に関心もっています。とりわけ、日本の人々が、あの絶滅しかけた美しい鳥を、まもっているやり方に興味をもっています。何しろ、国際保護鳥ですからね。そのニッポンは……トキは、今何羽いますか？」

「さあ……最近はどのくらいになっているでしょう？」

腋（わき）の下に冷や汗がにじむのを感じながら、彼は口ごもった。

「私たちの所にはいっている最新情報では、現在、佐渡島に野生のものが九羽、フライングケージに二羽が飼育されているそうです」とユロがいった。「で——どうなんでしょう？　人工飼育の二羽は、雌雄らしいという事ですが……受精卵をうんだでしょうか？」

「野生の九羽は、その後数がへりませんか？——雛（ひな）がうまれた形跡はありませんか？」と

ワシリー。

「さあさあ、みんな質問はあとにして、——客人は、疲れてるから、一度お部屋へお通ししなきゃ……」と、フロントの老人が見かねたように口をはさんだ。

「これは失礼しました」と村長のヴィクトルが、羽根飾りのついたチロリアンハットをとって、頭をさげた。「わしたちは、日本のトキ鳥（バード）とその保護に、特別に関心をもっているので……というのも、実はこの村でも、アルプ鳥という、絶滅しかけている種類を、村ぐるみ保護しているからです。日本のトキの保護は、わしたちに非常に参考になります……」

2

部屋にはいると、あらためて汗がどっとふき出して、全身がぐっしょりぬれた。

日本の事を、日本人より外国人の方がよく知っているケースは、時々ある。が——人口千にみたぬ、こんな山間の僻村で、日本の絶滅しかかっている渉禽（しょうきん）の一種が、これほどよく知られ、これほど強く関心をもたれているとは、予想もしなかった。

朱鷺が珍鳥である事ぐらいは、さすがに知っていた。——が、それも時たま、新聞で見流す程度の知識であって、この鳥に、「ニッポン」という正式学名がついている事など、全然知らなかった。特別天然記念物である事は、うろおぼえにおぼえたが、「国際保護鳥」に指定されている事など、まるで知らなかった。まして、それがどこに住んでいて、現在

何羽のこっているかという事など——ふつうの日本人なぞ、知りもしないだろう。日本文化の特質は「自然との親和」にある、といわれながら、およそ現代日本人ほど、「自然鑑賞」や「自然保護」について関心のうすい先進国民はすくない。自国の山野にすむ動植物のうち、珍しいもの、保護指定や天然記念物指定をうけているものを、きちんと知っている人間が、果して一億国民の中にどれくらいいるか。いや「文化人」といわれる人の中にどのくらいいるか。「都市」という、自然と断絶された人工沙漠にすむ現代日本人は、そんなものの存在に関心さえ持たなくなりつつある……。

そういった事を、異国の寒村で、中橋はつくづく思い知らされた。日本からやって来ながら、その日本に住む世界的珍鳥について——しかも、その保護が、国際的に注目されている「特別天然記念物」について、彼はほとんど知る事がなかったのだ。いや、この寒村へたまたまやってくるまで、そういった自国内の世界的に貴重な存在について、関心をもった事さえなかった。にもかかわらず、日本を数万キロはなれた異国の、それも山間僻地の住民が、日本人よりよほど強い関心をもち、日本人よりよほどくわしく現状を知っている——。

その事を思うと、また体が火照（ほて）ってきて、独り居の照れかくしのように、ベッドサイドの本に手がのびた。——表紙などは簡素な、パンフレット程度のもので、どうやら私製と思われたが、題は「世界の珍鳥、珍獣」とでも訳すのだろうか。内容は英語で、各国文献の複写や、タイプライターでうたれたものを、そのまま写真版にしたようなのもある。朱

鷺の項をさがすと、中ほどに写真や図版もいれてかなりの分量を占めていた。

Nipponia Nippon（ニッポニア・ニッポン）——鶴鷺目（かんろ）トキ科、一属一種。ウスリー、中国東北、朝鮮、中国北部、日本に分布し、日本には江戸時代各地に分布していたが、明治維新以後、幕府大名の御狩場の解禁と、猟銃の普及とともに急速に数を減じ、昭和九年に天然記念物に指定されたが密猟があとをたたず、特に第二次大戦後は、松林の伐採、食糧不足による捕食、さらに農薬使用による水田小動物類の汚染、死滅により激減、昭和二十七年「特別天然記念物」に指定され、昭和三十五年に「国際保護鳥」に指定されたが、そのころは石川県能登（のと）において滅亡寸前に達し、佐渡もわずか四羽になってしまった。その後、昭和四十二年、本州のトキはついに絶滅（最後の一羽はとらえられ、佐渡へうつされた）、佐渡ではその後何とか数がふえ、二羽が人工飼育、九羽が両津市の黒滝国有林を中心に棲息している……。

日本のトキは、こんなに貴重な鳥だったのか——彼はパンフレットをふせ、天井を見つめながら思った。——その貴重な鳥が、こんなに数がすくなくなってしまったのか……たった十一羽とは！

それにしても、どうしてこんな事を、日本人である自分が今まで知らなかったのだろう？——日本人が、自国のこんな大切な事を、外国の辺境で、外国人から教えられるなんて、いい恥さらしだ。ずっと昔、映画で見たトキの美しい姿を思い出そうとして、彼は眼をつぶった。——だが、もともとあまり関心のなかった事でもあるし、ほとんど記憶にのこっていなかった。ただ、ひろげた羽の、美しい淡紅色と、その色が「とき色」という言葉の語源になっている、という解説だけが思い出された。眼をもう一度ひらくと、足の方向の壁に、写真入りの額がさがっているのが眼についた。夕暮れらしく、ひどく光線の状態が悪い上に、ひどい機械でとった素人（しろうと）写真らしく、雲やら山やら森やらわからない黒々としたものが画面の下半分を占め、そこから何か大きな、鳥らしい形のものがとび立とうとしているのだが、ぶれてもいるし、逆光でもあり、ディテイルなどまるでわからなかった。かろうじて、それが鳥らしいという事がわかったのは、下に英語とドイツ語とフランス語で、大きな文字がはいっていたからだった。

アルプ鳥を守ろう！

彼はベッドの上に起き上り、眼をこらしてその写真をもう一度見た。——よくみると、鋭い、まがった嘴（くちばし）のようなものも見え、丸い、頭らしいものも見えた。だが、そう思って見るから、そう見えるだけで、近づいてみると、いよいよバックの黒い雲と見わけがつかなくなってしまう。

ひどい写真だな——と、彼は額の前に立って、鼻の頭にしわを寄せた。引き伸ばし技術もめちゃくちゃで、粒子荒れもひどい。

それにしても、アルプ鳥って、きいた事がないが、いったいどんな鳥なんだろう、と思って、ベッドの上からもう一度パンフレットをひろい上げ、ページをめくってみたが、その鳥についての記載はのっていなかった。

3

翌日眼がさめると、陽はすでに高くのぼっていた。——そろそろ旅疲れが出てきたのか、全身が妙に倦怠るい。時刻は十時をすぎているのに、ひどい寝不足のように、目蓋がはれぼったく、頭に膜がかかっているみたいだった。

ベッドの上に上半身を起し、ぼんやりしていると、昨夜、妙に寝苦しく、夜中にうとうとしては何回も眼がさめた事が思い出された。旅慣れてはいるし、部屋がかわったぐらいで寝つかれないという事はない。

夕食の時、村人に顔をあわすのは、すこし照れくさいと思っていたが、台所のような食堂へおりて行ってみると、村人はみんなかえってしまい、泊り客も彼以外一人もなく、フロントにいた主と、全々口をきかない初老の女性の、たった三人だった。主は食事をすませたのか、小さなテーブルのむこうの隅にすわってパイプをふかすばかりで、しわだらけの、口もとの凹んだ頑丈一点ばりの女性——どう見ても、細君ではなかった——は、口をへの字にむすんだまま、だまって皿とフォークとナイフをおき、台所からごった煮の鍋をはこんできて、油じみたスプーンで二すくいほど皿につぎ、黒パンの塊をすりきれたテーブルクロスの上にじかにおき、ラベルのはってない、ワインの壜をおき、そのあとぷいと台所へすっこんだまま、最後まで出てこなかった。——彼はだまって食い、だまって飲み、宿の主もだまったまま、パイプをふかしつづけた。食物をかむのをやめると、老人が、すぱりと音をたてて煙を吸いこむ音と、火皿がじいじい鳴る音がきこえた。そして、まっくらな外では、夜の底をごうごうと風がわたって行くのがきこえた。風が強いというのでもない、半開きの小窓のわきの吊りランプの火も、まるでまたたかないのだが、耳をすますと、空のずっと上の方で、ごうごうと風が鳴っており、森の梢がたえ間なくざわざわと音をたてつづけているのだった。どこかで谷川でも鳴っているのか、と、食事の手を休め、じっとききいれてみたが、やはり鳴っているのは空だった。

みばが悪いのに、ごった煮はすてきにうまかったが、そのおかえしのように、赤葡萄酒が滅法ひどかった。重くて、ドロドロで、ケチャップでものんでいるみたいだったが、それでも彼はとうとう一壜あけてしまった。——その葡萄酒がよくなかったのかも知れない。酔いが重苦しく、顔がはれたみたいで、のみおわるころにはこめかみがびんびんいたんだ。彼がよろよろと立ち上ると、主人はかすれた声で、

「おやすみ」

といった。dをいやにはっきり発音し、あとでわかったのだが、主人は十五年前に流れてきて、土地言葉はいまだに不自由で、村人ともほとんど英語で話す事が多いのだった。

部屋にかえると、いたむ頭をおさえて、すぐベッドにひっくりかえったが、重苦しい眠りがすぐ頭の鉢をしめつけてきたのに、すぐ眼がさめ、枕もとのエビアン水をのみ、また横になり、意識がうすれ、また眼がさめた。酔いはすぐおさまって行ったのに、ごうごう鳴る風の音、森のざわめきが耳についていて、眠りは浅かった。——夜半、突然寒気を感じて、

ぶるっとふるえながら起き上り、やっとズボンをぬいで毛布をひっかぶったが、今度は変に眼が冴えた。

何の気なしに首筋へ手をやると、なぜか鳥肌だっていた。

毛布をしっかり体にまといつけ、蝦のように体をまるめたが、全身をおそう戦慄はやまなかった。——風邪をひいたか、という考えがふと頭をかすめたが、そのあとすぐ、ふるえが体内の熱のせいでもなく、室内の寒気のせいでもない事に気がついた。

ごうごうと夜空をゆする風音の底に、何かの叫びがまじっていた。

きき耳をたてると、かえって消えてしまう。——だが眼を閉じ、眠ろうとすると、またきこえてくる。怪鳥の叫びとも、野獣の遠吠えとも、また気の狂った女の叫びともとれるような、かんだかい、笛のような声が吹きあれる風の音にまじって、かすかに、とぎれとぎれにわたってくる。どこかずっと遠くから……。森と丘の彼方から……。思わず身をかたくすると、その声は、この世のものでない怒りに狂い、何かを呪い、のど笛を吹きさらんばかりに風に叫びたてている声だ、という事が、はっきりわかるような気がした。

たまりかねて、彼はとび起き、窓にかけよった。外へむかって押しあけると、一つまみほどの風が吹きこんで、小さくしたランプの火をふっと吹き消した。早い速度で動いて行く雲が、月の姿をかくし、またあらわした。空は風音にみち、眼下ではまっ黒な森が狂ったように梢をふりみだしながら、どうどうと鳴っていたが、宿のあたりは不思議におだやかで、空気もほとんど動かず、寒くもなかった。そしてあの声はもういくら耳をすましてもきこえなかった。

階段をおりて行こうとすると、ロビーの方から英語の話し声がきこえた。——その中に、「あの日本人」という言葉がはさまるのをきいて、一段目にかけた足が思わずとまった。

「……おかしいじゃないか……」とワシリーの声がいった。「あれほどの世界的珍鳥を……自分の国の名が、属名と種名両方についている鳥の事を知らない日本人がいるなんて——。日本という国は、国民にそういう教育をしないんだろうか？　政府はどういうつもりだろう？」「知らせない、というのが、かえって保護に役にたつのかも知れん」と、宿の主がつぶやくようにいった。

「考えてごらん、ワシリー、どんなものでも——それが珍しければ珍しいほど——人間に知られたらおしまいだ。そっとしておかないとほろびる、といっても、物見高い観光客はおしかける。テレビや新聞がいれかわりたちかわり取材にくる……。マスコミの連中なんて、本当に何かをまもろうという気のある人間なんて、数えるほどしかいないんだからな。とにかく、がなりたてて、名を売ればいいんだから……。〝ほろび行く名鳥！〟なんて記事の写真をとるために、生物をおびやかす。〝何とかをまもれ！〟とわめきたてて、〝世論〟とやらを捲き起して、かえって無責任な弥次馬を動員する。そして、あげくの果て、ほろんでしまったら、〝政府が悪い、社会が悪い〟さ。——自分たちの、慎重さを欠いたキャンペーンが、かえって事態を悪化させた事については何の反省もない。連中は常に正義の味方で、そのわめきは常に正しい。これをこういう具合に報道したらどうなるか、と

いう事に対する反省や責任感はまるでないんだから……」

「カルロスの新聞ぎらいは少し病的だよ」とユロの声がした。「そりゃ、お前さんが前にひどい目にあった事はわかるよ。しかしだね……」

「だが、そっとしておいて、あまりひろく知らせない、というのは、いい考えかも知れない……」とジョルジオの、訛りの強い英語がわりこんだ。「世界的に珍しいという事が、パッとひろまったら、かならず大勢の客がおしかける。物見高い弥次馬に、本当の値打ちがわかっているわけはない。それに大勢こられると、とても取締りきれるものじゃない。珍しくて、絶滅しかかっている、とわかれば、その稀少価値目当てに、こっそりつかまえようとする奴が出てくる……」

彼は階段の二段目に足をおろした。ロビーの顔がいっせいにふり仰いだ。

「お早う、日本の方……」ワシリーが愛想よく声をかけた。「よく眠れましたか?」

「風の音が耳について……」彼はあいさつしながら、すみのテーブルに腰をおろした。

「それに——夜中に森の方で、何か不思議な声がしたような気がして……」

「あちらの森ですかな?」と主人は戸口の方をさした。「それじゃ——それがアルプですよ」

「わしもきいたよ」とユロがいった。

「アルプは、風の吹く晩には、よく夜鳴きするんです。それに繁殖期だから……」とジョルジオがいった。「なんだか気味の悪い声でしょう?」

昨夜の口をきかない女が、台所からあらわれて、だまってコーヒーとパンをおいていった。

「狼の遠吠えか、人の叫びみたいにきこえました」彼はコーヒーにたっぷりクリームをつぎながらうなずいた。「あまりいい気持じゃなかった」

「昔は、悪魔の叫びだと思われたそうです」

ジョルジオは不意に声をおとしていった。

「それで……昔の連中は、あの鳥を眼の仇のように殺して——鉄砲をつかうようになってから、それこそみるみるうちに……」

「ジョルジオ!」とワシリーが口をはさんだ。「その話はよせ!」

「アルプ鳥は、あんな声で鳴くんですか?」彼はクロワッサンをコーヒーにひたしながらきいた。「いったい、どんな鳥ですか?」

村人たちが、すばやくお互いに視線をかわしたのを、彼は雰囲気で感じとっていた。——宿の主人は、だまってキーボックスの横手を指した。

朱鷺の写真と反対側の壁に、黒ずんだ写真がかかっていた。黒い、森らしいものが一面にひろがっている中に、変にもやもやした、鳥らしいものの姿が二つ見えた。

「よくわかりませんね」彼は眉をしかめた。「部屋にもそれらしい写真がありましたけど——あれもはっきりうつっていなかった」

「朱鷺と同じで、ひどく人間をこわがるんです……」とワシリーは弁解するようにいった。

「とくに、カメラをいやがります。シャッターの音なんて、百メートルも先からききつけて……」

「本当に、一昔前までは、やたらに殺したんです。——害鳥だと思われて……」ジョルジオはテーブルを見つめて、低くつぶやいた。

「本当は——大した害じゃなかったのです。こちらから、挑発をしたり、彼らのすみかへ近づかなければ、人間にだって害をくわえなかった。それを……誰いうとなく、害鳥だといい出して……」

突然、ジョルジオはすすり泣きはじめた。——中橋は、おどろいて食事の手をとめた。まるまっちい手で、顔をおおってしゃくり上げるジョルジオを、村人たちは、いたましげな、深刻な目つきでながめていた。

「人間というものは、残忍な、罪深いものです……」とユロは首をふりながらつぶやいた。「自分たちが絶対強いという優越感をもつと、その優越感を確認するためという理由だけで、弱い生き物を殺し、何かの理由で相手に恐怖や嫌悪を抱くと、自分で自分の憎しみをかきたてて殺し……」

「その鳥は、今、何羽ぐらいのこっているんですか?」と中橋はきいた。

「二番だが……」と宿の主は、仲間の方を妙に気にしながらいった。「雛がうまれればいいんだがね」

「見られますか?」

「そうだね……」ワシリーも他の連中を気にするようにまわりを見まわした。「棲息地へ行ってみなさるかね?」

4

景色がすばらしくいい、ときいて来たのだが、低い丘陵と、森がつづいているだけの、陰鬱な地方にすぎなかった。旅籠はこのあたりで一番高い丘の頂にあったので、見はらしはよかった。——だが、そこから眺める景色は、赤茶けた丘と、黝ずんだ森が、灰色の地平まで、はてしなく起伏しながらつづいているだけだった。

その起伏の間に、一塊り、二塊りと人家がかたまり、その壁の白と瓦の赤が、かろうじて暗鬱な光景に彩りをそえていた。——村は灰色の重苦しい雲の下にしずまりかえり、子供の声や家畜の鳴き声もきこえない。おさえつけるような陰気な空の下には、鳥一羽とばず、ながめていると、おのずと眉がひそみ、頭痛でも催してきそうなうっとうしい風景だった。

丘をおりて行くと、谷風が耳もとで鳴りはじめた。肌寒い湿気がそこここの窪地からたちこめ、植物はいじけて地にしがみつくか、うそうそしく傲岸に、人間を拒否するようにそびえたつか、その二つの種類だけで中間がない。丘をおり、また別の丘を上り、谷間の道をうねうねとたどり、冷たく、まっ暗な森をぬけると、平たい丘の頂に出た。——そこから先は、同じぐらいの高さで起伏がつづき、その果てに森を背景にして窪地が見えた。

窪地には丈高い葦がはえ、沼がにぶく水銀色に光っていた。

丘の下に小さい川がながれ、灌木と草むらが流れにそってのび、柵と、粗末な木の入口があらわれた。入口の脇に、「立入禁止、鳥獣保護特別地域」の看板が立ち、別の板に「アルプ鳥棲息地域」と書かれてあった。

柵のむこうの灌木の陰から、毛皮の胴衣をつけた鬚だらけの巨漢が音もたてずにあらわれた。肩に猟銃をつるしていた。

「やあ、ヨハンネス……」とワシリーは声をかけた。

二人は中橋にわからない土地の言葉で話しはじめた。話しながら、二人は度々ずっとむこうの窪地の方をふりかえった。——やがて巨漢はまた音もなく灌木のむこうへ消えた。

「今日は、一番しか見かけんそうです」とワシリーは、柵にもたれて小手をかざした。

「もう一組が、巣についているといいのだが……。どこかへ行ってしまうような事はないと思うが……」

「あのあたりが棲息地ですか?」彼は二キロ以上はなれている窪地の方に瞳をこらした。

「あの近くまで行けますか?」

「いや、だめです。今繁殖期ですから……」ワシリーは強く首をふった。「あの沼の後ろの森が営巣地になっています。アルプはとても神経質ですから……。日本のトキと同じで、おびえさすと、すぐ巣を放棄してしまいます」

「国が保護しているんですか?」

「国?」ワシリーは唇を歪めた。「国は関係ありません。——これは私たちの仕事です」

「じゃ、この村が?」彼は少しおどろいて、ワシリーの顔を見た。「村の予算でやっているんですか?」

「アルプを絶滅においこんだのは、私たちの祖父や父、そしてかつての私たちですから……」ワシリーは、腰の革ケースから大きな双眼鏡をとり出しながらいった。「アルプを保護するのは私たちの負い目です……。あなたたちの国のトキと同じで、アルプはもうおそらく、世界中でここだけにしかのこっていません。昔はあちこちにいたらしいですが……今、この村からアルプが消えたら、全世界からアルプは消えてしまうのです」

「見えますか?」中橋は双眼鏡をのぞいているワシリーにきいた。「アルプはいますか?」

ワシリーは答えず、双眼鏡をじっと窪地へむけていた。——その態度には、「聖なるもの」を仰ぎ見るような敬虔さがあった。

「アルプは……貴重な存在です」ワシリーは双眼鏡を眼におしあてたまま、一種恍惚とした口調で溜息をつくようにつぶやいた。「もうここにしかいない。アルプは、この村のほこりであり、——良心の呵責です。あの鳥を保護し、ふやす事は、私たちの〝希望〟でもあり、〝祈り〟でもあります。ほんとに……今度こそうまくふえてくれたら……」

「アルプは繁殖力が弱いんですか?」

「繁殖期には、特別の餌がいるんです。それがこのごろめっきりすくなくなって……」

「アルプって……どんな鳥なんですか?」

ワシリーの体が、ふとこわばった。

「大きな鳥です……」ワシリーの声は妙にかすれた。「大きくて……黒くて……実に不思議な……」

「私は博物学は全然知らないんですが——鶴や鷺の類ですか？　それとも……」

「私もよく知らないのです——」ワシリーはかすかに震える声でいった。「私も……実は、近くで見た事はないのです。村の連中でも、実物を見たものはほとんどいません……ヨハンネスは、一度近くで見たといいますが……」

それほど珍しい鳥なのか、と彼はあらためて、アルプの餌場らしい沼の方に眼をこらした。——右手は反射的にジャンパーのポケットから、いつももち歩いているハーフサイズのカメラをとり出していた。

おし殺したような鋭い叫びと、遊底（スライド）がガチャリと鳴る音がまぢかでしたのは、ファインダーをのぞくのと同時だった。ワシリーの、痩せた、冷たい手が手首をおさえていた。

「撮影はいけません」とワシリーは強い調子でいった。

「そんな……」いつの間にかかえってきて眼の前にライフルをつきつけているヨハンネスを見ながら、彼は呆れたようにつぶやいた。「別にアルプをとるわけじゃありません。まわりの景色をとるだけです。それに……第一、こんなカメラで、ここからじゃ……」

「だめです」ワシリーは冷やかにいった。「繁殖期間中は、一切の撮影は禁止です。たとえこのまわりでも……」

5

三日目の午後、彼はさりげない顔つきで、ナップザックを肩に、アルプ保護区域とははずれた方向へむかって歩いて行った。——二日の間に、大体見当をつけておいた丘にのぼると、はたしてあの保護区域の沼地が遠くに見おろせた。距離にして、四キロ以上はなれているから、監視も気がつくまい、と彼は思った。あえて禁止をおかす気はなかったのだが、風景撮影と自分にいいきかせながら、やはり、あわよくば、という気持だった。ナップザックから三脚をとり出してくみたて、一眼レフをすえると、一応まわりを見まわして五百ミリ望遠レンズをとりつけ、沼の方をのぞいた。

陰気な草と、立ち枯れの木の白骨のような幹と、背後の黒い森、にぶく光る水以外、何も見えなかった。しかし、辛抱強くのぞいていると、草むらの一角がはげしく動いているのが眼についた。彼は緊張して、レリーズボタンに拇指（おや）の腹をあてた。——何かが草をわけて動いていた。黒い頭が見えかくれした。アルプだ！　と彼は心の中で叫んだ。いや……ひょっとすると、ヨハンネスという監視人かも知れない。しかし、いかに慣れていても、警戒心がつよいというアルプの餌場の、あんな近くまで近よるだろうか？

そのうち、草の間から、大きな翼のようなものがちらと見えた。彼は夢中でシャッターを押しつづけた。そのうちとび上るかも知れない、という期待を抱きながら……。

やがてフィルムが切れた。装塡（そうてん）しなおそうと、裏蓋をはずした時、ふと傍の草むらの中

からつき出ている、小さな顔と、光る眼に気がついた。——どきっとして、ほほえみかけると、子供の顔はすぐ草むらの中に消えた。

すぐ片づけた方がいいかと思ったが、ファインダーをのぞいてみると、まだ黒いものが動いているので、思いきって度胸をすえた。あいかわらずの、泣き出しそうな天気へもってきて、陽がかたむきかけたので、彼はトライXをさがして装塡した。——まったくこの村の連中はかわっている、と再びレンズをのぞきこみながら彼は思った。彼のあうかぎりの村民は、誰も彼も、アルプという鳥の事に夢中だった。夢中といっても、「熱狂的」というわけではない。ちょっと見ただけではわからないが、それは外部の連中には理解できない、この村の内部だけの、特別な「信仰」の対象になっているようだった。その「信仰」には、どこか秘密めかした、ほの暗いところがあって、「よそ者」の視線は、どうしてもその暗がりまでとどかない。きいていると、村民たちの会話の中で、アルプ鳥の事は、あきずくりかえされる重要なテーマになっており、彼が旅行者だとわかると、誰も彼もがアルプというこの村だけにいる鳥の事を知っているかとたずねる。にもかかわらず、その鳥の写真は碌なものはないし、資料もない、その鳥がどんな鳥か、という事については、一切外部の人間に知らせたがらない。——この村には、世界に類例のない、こんな珍しい鳥がいるぞ、という事をほこりに思い外部の人間にむかって誇示したがりながら、その鳥の「実態」については、外部の者にはなんだかんだといって教えない。それは村の「内面性」を形づくる、この村だけの「秘密」なのだった。

アルプは、この村「だけ」のものであり、その珍奇さ、すばらしさは、この村の人間だけが知っておいて胸に秘め、ひそかに讃嘆すべきものであり、その保護を熱くなってお互いの胸にちかいあうものなのだった。この、まったく「何もない」——あきれるほどに単調で何の特徴もない村に、「アルプがいる」という事のすばらしさの核心に、外部の人間を立ち入らせてはならないのだ。「アルプがいる」事のすばらしさは誇示し、喧伝しなければならないが、アルプそのものに近づく権利は、よそ者にあたえてはならない。それはこの村の人間だけが、——アルプと歴史的にからみあい、今、全村あげてその保護を誓った村民だけが、保有している「特権」なのだ……。「アルプ」——この名をきいた事もない、正体不明の鳥は、すでにこの村の「聖物」だった。アルプの名を、口にする時、そして、アルプの「具合」を声をひそめて語りあう時に、彼らの顔にあらわれる敬虔さ、あんなすばらしい鳥、珍しい鳥は、世界のどこをさがしたっているもんか！　と熱くなって語る時の熱烈さ、そしてその熱心な、讃美の言葉をきいている人々の眼差しにあらわれる恍惚の表情……アルプが、あのままほろびてしまったらどうしよう、と語りあう時の、はげしい不安の表情……そういったものは、アルプという奇妙な鳥が、この村の人々にとって、いかに重大な存在か、という事を如実にものがたっていた。

ただ、その会話が、まるで具体性を欠いているのが、外部の人間には何とも奇妙な感じだった。きいていると「鳥」の話をしているのではなくて、何か「超越的存在」についてあきず信仰告白をくりかえしているようにきこえるのだった。——よそ者の彼が、その鳥

は、どんな姿で、どんな特徴をもっているか、とか、どんな餌を食べるか、とか、即物的な事をきくと、きまってはぐらかされるか、冷たい回答拒否に出あうのだった。そのくりかえされる抽象的な讃美の下に、何かしらおかしなものがかくされているようだった。——奇妙といえば、これほどアルプの事に夢中になっていながら、実際にその姿を見た連中が、ほとんどいないという事も妙な話だった……。

そんな事を考えながら、ファインダーをのぞいているうちに、彼の背後には、いつの間にか、足音をしのばせて宿屋の常連がそろっていた。声をかけられるまで気がつかなかった彼は、文字通りとび上った。

「ナカハシさん……」村長のヴィクトルは、重苦しい声でいった。「この間、ワシリーが申し上げたでしょう。保護地の撮影は禁止になっています……」

「しかし……ここは保護地から、四キロ以上はなれているんですよ」彼はしどろもどろになって弁解した。「いくらアルプが敏感だからといって——ここから撮るぶんには……」

「何キロはなれていようと同じです。それをいいだせば、ここまでなら大丈夫だろう、こうすれば大丈夫だろう、という事になります。その上あの鳥は——のぞかれているという事を何キロも先から感づくのです。本当にアルプを大事にする気があるなら、——あの鳥の存在の貴重さを、本当に敬虔な気持で認めるなら、そっと遠くから見守るだけで満足するはずです。あなたは、トキを守っている国の方だから、と思って大目に見ていましたが、あなたもやっぱり、野卑な、尚いものが本当にわかっていない、俗な弥次馬にすぎなかったのは残念です……」

「しかし……私は……」

「景色をとっていたといわれるのですか？　五百ミリ望遠で？——日本のカメラとレンズは優秀ですね。レンズは沼をむいています。フィルムは全部没収します。それがこの村の規則ですから……」

「悪いが、あの部屋を今夜あけてくれませんかね？」と宿の主人が、空を見ながらいった。「今夜から満員になっちまうんでね」

「そんな——契約は明日までのはずだ」

「でも、今夜から大事な会合で、全部つかうんだ」と主人は空をむいたままいった。

ジョルジオ、ユロ、ワシリー——みんな最初あった時とはうってかわった冷やかな顔つきで彼を見つめていた。よそ者、出て行け、とその顔はいっているようだった。

友人から借りたボロ車で宿を出る時は、もう日が暮れかかっていた。宿へかえるまで、敵意にみちた村人にぞろぞろつきまとわれ、宿へかえりつくと、もう荷物は全部車にほうりこまれている、という手まわしのよさだった。——その理不尽さに腹もたったが、まわりの視線にいたたまれなくなって、彼はそのまま部屋にもどらず、車を発進させ、白い、冷やかな視線の中を夢中で車を走らせた。一番近い街まで四十キロの夜道をとばすのには、もう少し慎重であるべきだったのだが……。

村を出はずれて、谷川をわたる橋の所に柵が立ち「工事中、迂回」の標示が出ていた。矢印の方向に迂回路をとると、道は森の中にはいりこんだ。その時はもう、日はとっぷりくれていた。——十五キロも走った所で、どういうわけか、ガソリンがきれた。まだタンクに半分以上のこっているはずだったのに……。

しばらく途方にくれていたが、すぐ近くにあった道標を見て、懐中電灯をたよりに村へひきかえす事にした。森の中はまっ暗で、夜にはいるといつも吹き出す風が、梢をざわざわと鳴らしはじめた。——次の曲り角の道標をあやうく見すごすところだったので、彼は懐中電灯を注意して照らした。

それにしても、どうしてあんなに神経質なのだろう——と、彼は歩きながら考えた。——少し異常すぎはしないか？　規則はわかるが、四キロもはなれた所からの撮影が、鳥をおびやかすとも思えない。それに、規則を破ったぐらいで、実害はないのに、どうして急にむりやり村を追い出さなくてはならないんだ？　何かあの村には——あのアルプというきいた事もない鳥については、腑におちないところがある。ひょっとしたら……彼は、ふとその事に気がついて愕然とした。ひょっとしたら……もうあのアルプという鳥は、絶滅してしまったのではないか？　自分たちの乱獲で、絶滅させてしまってから、「良心の呵責」にたえかねて、まるでまだ鳥が残存している如く、一切の「儀式」をつくり上げ、消滅した鳥を「神格化」しているのではないか？　だから外部の者は絶対あの保護区域内に近づけず、写真をとられるのを極度に警戒しているのではないか？

それは、ある部分にはぴたりとはまる考え方だった。——彼はその考えに興奮しながら歩きつづけたが、しかし、考えているうちにそれだけでは腑におちないところもある事に気がつきはじめた。その考えがまちがっている、という事を決定的にさとらされたのは、ごくまぢかに、あの叫びを——この村にとまった三日間、夜毎空に鳴る風の音にまじってはこばれてきた、あのものすごい叫びをきいた時だった。

彼はぎょっとして、思わず懐中電灯をとりおとしかけた。——ふと気がつくと、眼前ににぶく沼の水面が光っていた。地形から見て、彼はあの保護区域の真中、アルプのすむ窪地の中央に立っている事は明らかだった。まわりに丈余の葦がおいしげり、正面に黒々と森がそびえていた。

恐ろしい叫びは、前よりもっとまぢかに、長々とひびいた。——それは鳥の声というよりも、この世に存在しない、地獄の野獣の、あるいは、この世のものでない恐ろしい呪詛によって妖鬼に変ってしまった女の、気もくるわんばかりの怒りの叫びのようだった。その声をきくと、足がすくんで、膝ががくがくふるえた。そして——その時になって、突然、何も彼もが一ぺんにむすびついた。橋の工事、「迂回路」、切れるはずがないのになくなったガソリン、おあつらえむきのようにあった道標の、奇妙な新しさ……。

なぜ、自分をわざわざ、こんなやり方で、「立入禁止」区域の中心部へさそいこんだのか、という疑問に対して、すぐおそろしい記憶がはねかえってきた。……アルプは、住みかに近づかなければ害はくわえない、とジョルジオはいった。という事は——「繁殖期に

は、特殊な餌がいる」とユロはいった。「その餌が、このごろへったので、繁殖しない」とも……。

まさか！——そんなひどい事が！……彼は全身が縮み上るような思いを味わいながら、心の中で叫んだ。——思いすごしだ。そうにきまってる……とにかくここを出なきゃ……。

もときた道をひきかえそうと懐中電灯をふった時、彼は又もや、心臓の凍るようなショックをうけた。すぐ背後の闇の中に、光芒が一瞬、白い女の顔をうかび上らせた。顔だけで、あとは闇の中にとけこんでいた。そして次の瞬間、バサッ、とはげしい羽音がして、懐中電灯は手からはねとばされ、沼の方に水音がして、あたりは完全な闇になった。そのたった一瞬の間に、女の顔は、彼の眼底に灼きついた。朱をさしたように血走った眼、鉛色の皮膚、両端が反り上った紫色の唇から、ニュッとむき出した鋭い二本の犬歯……気が狂ったような笑いをうかべて、女の顔は彼のすぐ背後、ほんの二、三メートルの所にうかび、すぐ消えた。

どうしてこんな所に、女が——ひょっとすると狂人か……そう思って立ちすくんでいると、またあの叫びがきこえた。顔に吹きつけるほどの近さ、たった今、女の顔のういていたあたりから、なまぐさい、血と唾と腸の一部がとびちるような、恐ろしい叫びが……。相かわらず、狂ったような呪詛の調子はこめられていたものの、今度はそこに、毒々しい歓喜の色がこめられていた。なにか、いいものを見つけた、という歓喜が……そして牙がガチガチふれあうような、あからさまな飢餓が……。つづいて彼の背後から、もう一つ別

の叫びがあがり、前面の叫びとよびあった。バサッ、バサッ、という大きな羽ばたきの音と、草をかきわける、ガサリ、ガサリ、という音が近づいてきた。

今度こそ、彼は何も彼も理解できた。——それこそ信じられない事だが、アルプという鳥の存在を信じないわけにはいかなかった。魂が宙にとぶ恐怖の中で、ずっと昔よんだ、西欧の伝説の事が思い出され、それが今、前後からせまりつつある恐ろしい存在とむすびついた。アルプ……アルピ……ハアピ……まさか！　こんなものが、実際に存在するなんて……信じられない！

だが、バサッ、バサッ、という羽音と、ガサリ、ガサリと草をふむ音は、もうすぐ彼の背後にせまり、眼前の闇にいるそれは、またもやあの不吉な、狂ったような叫びを上げ、それにこたえるように、もう二つの叫びが、今度は森の奥からひびいてきた。

霧が晴れた時

連休だったが、その前に仕事がつまりすぎて疲れていたので、泊りがけの旅行はしない事にした。どうせ大勢の人たちが出かけるし、どこへ行っても満員なのは眼に見えている。

そのかわり、夏には、つみたてをしておいて、家族ぐるみどこか安く行ける地域へ、海外旅行へつれて行ってやる、という事で、子供たちは納得した。

といって、折角の青葉の季節を、家でごろごろしてばかりいるのも芸がないので、日がえりで近郊の山へハイキングに行く事にした。ここなら連休でも人がおしかけるようなこともあるまい、と見当をつけられるような穴場を知っていたのである。——そして、出かけてみると、果して私の予想はあたっていた。郊外電車で都心からはなれ、途中駅で支線にのりかえると、電車はがらあきで、最近のやたらに大型化したレジャーに殺到する人々は、こんなささやかなハイキングコースには、眼もくれないようだった。

電車はやがて、新緑に包まれた山峡へはいりこみ、そのまま乗りつづければ、終点の、あまりパッとしない温泉街につくはずだった。古くからの近郷の保養地だが、都会からあまり近すぎてかえってとりのこされてしまっている。最近では熱泉も出なくなってしまい、いよいよさびれて、秋の紅葉と、冬の猪鍋ぐらいがようやく客をひきつけている。その街へつく、二つ手前の駅でおりて、私たちは駅のすぐ前にそびえ立つ山肌を見上げた。

「峠をこえて十五キロだね」

と、中学二年になる息子が、地図を見ながらいった。

「いい空気だこと！」と、妻は若やいだ声でいって胸をふくらませた。「若葉のにおいがするわ」

「道はけわしいの？」と小学校六年の娘がきいた。「やっぱり古い靴にすればよかったな。靴ずれができたらやだな」

「でも、あっちの運動靴は底が破れかかってたわよ」と妻。

「ゆっくり行くさ」私はいった。「鳥の声でもききながらね」

女子供をまじえて、五時間半から六時間と私はふんでいた。私自身、山歩きはひさしぶりだったから、のぼりは時間をかけるつもりだった。峠まで、小休止をふくめて二時間ちょっと、できれば峠をこえて尾根に出た所で昼食にしたい。尾根づたいに少し行った鞍部に、気持のいい草原の斜面があったはずだ。あそこで休めば、見晴らしもいい。兎や山鳥の姿も見られるだろう。

休日のせいか、それでも駅前はわりと人通りがあった。晴着を着た、このあたりの若い男女や家族連れが、これは私たちと違い、電車にのって都市へ出かけて行くのだ。山へはいって行くのは、この駅の手前の方から、キャンプでもするのか、本格的な山支度の若者が二、三人、山歩きになれた足どりでやってきて、私たちをさっさと追いこして行った。だが、私たちはのんびりと、立ちどまって道端の草花をつんだり、お互いの姿を写真にとったりしながら、山道をたどって行った。

駅前からしばらく小さな渓流沿いにたどり、そこからつづら折れの急坂になった。稲妻形に急斜面をのぼって行く山道の曲り角ごとに、下方に見はらしがひらけてきた。

「しずかね」と、妻はあたりを見まわしながらいった。「空気がおいしいわ」

途中、ちょっと天気がくずれるかな、と思わせるような雲行きになった。杉木立が急に深まるあたりで、空が暗くなり、坂の上の方からうすく霧が吐き出されてきた。

「やっぱり冷えるわね」妻は肱にかけていたカーディガンを肩に羽おりながらつぶやいた。

「今日一日、いい天気だって、予報で言っていたのに」

その週は変な天気がつづいた。日中やたらに暑くなったかと思うと、朝晩、霜でも降りそうなほど冷えこみ、一日晴れたかと思うと、翌日一日中どしゃ降りになったりした。北の方では、雪さえ降った、という事だった。

中腹にまでのぼる間、小型トラックが一台おりてくるのに出あっただけで、誰にもすれちがわなかった。曲り角に、手ごろな岩が二つ三つころがっている所で、私たちを追いこして行った若者たちが一服していたが、私たちの姿を見かけると、勢いよく腰をあげて、また歩き出した。そのころはもう、谷と斜面から吐き出される霧は、彼らの姿をたちまちかくしてしまうほど濃くなっていた。

「少し休もう」と、私は岩の所でいった。「晴れていれば、ここからの見晴らしはとてもいいんだけどね」

「靖子、竜彦、これを着なさい」妻はボストンの中からスウェーターをとり出して子供た

ちにわたした。「降り出さないかしら。いやね」

霧はもう岩をうっすらとぬらすほど濃くなっており、谷底からさらに濃い、一寸先も見えないほどの灰色の巨大な塊がゆっくりせり上りつつあった。眼前を、こまかい水滴がくるくる舞いながら、層をつくって流れて行く。

「あと一キロちょっとで峠だよ」と、竜彦はハイキング地図を見ながらいった。「茶屋があるって書いてあるよ」

「行きましょうよ」と妻はいった。「こんな所で、濡れたりしたらいやだわ」

「まあお待ち」私は煙草を吸いながらいった。「せめて一服吸わせてくれ。急には降り出しゃしないさ」

降りはしなかったが、再び歩き出した時は、霧の水滴は眼鏡をくもらすほど大きくなり、朦朧と立ちならぶ杉木立の幹はくろぐろとぬれ、葉先には水滴がたまってしたたるほどになっていた。——この低い山で、こんな濃い霧に出あったのは、はじめての事だった。学生時分から何度ものぼり、ほとんどあらゆる季節を知っているつもりだったが。

ぬれた岩角をふみしめて、三十分ほどのぼると、前方の霧の底から、ぼんやりと人家の軒の形があらわれた。近づくにつれ、古風な「お休み処」の旗が、軒先からぐっしょりぬれて、たれさがっているのが見えた。茶屋は私の学生時分のままだった。もちろん代はかわったろうが、草葺きの屋根や、横手の崖から清水を導く筧の有様など、昔のままだった。氷の小旗はまだ出ていなかったが、かわりに色あせたラムネ、サイダーの小旗が軒下にさがり、カタン糸や焼酎の琺瑯びきの小看板など、もう二十年以上そのままだった。

「やれやれ……」妻は肩で息をしながら茶屋の軒先へたたずんだ。「降らなかったけど、服がぐしょぐしょだわ」

「なにか飲みたい」と靖子がはしゃいだ声でいった。「ここでお弁当?」

「霧が晴れたら、この先に景色のいい所がある」と私は時計を見ながらいった。「様子を見て、そちらへ行ってみよう。まだ早いから」

思ったより早くついて、まだ正午すこし前だった。——私たちは、軒下の縁台に荷物をおき、あけっぱなしのガラス戸から奥をのぞきこんだ。

「ごめんください」と妻は声をかけた。「こんにちは」

「かまどがあるぞ」と竜彦は叫んで奥へとびこんで行った。「あったまろう」

「これ、竜彦」と私はいった。「ごめんください」

「留守みたいね」と妻はいった。

「どこか近所へ出かけて行ったんだろう」と私はこたえた。「すぐかえってくるさ」

はいった所の土間に、粗末な椅子とテーブルが三組ばかりならび、奥は台所を経て裏へつきぬけていた。昔とちがった所は、テーブルをおいた場所の一隅に、白木のカウンターらしきものができ、キャラメルやガムのほかに、おでんの鍋がおかれ、ぐつぐつ湯気をたてている所だった。昔はほんとうに、お茶と飲み物ぐらいしかなかったのだ。

「おでん、おいしそうね」と妻は鼻をひくつかせた。「一ついただこうかしら?」

「店の人がかえってくるまでお待ち」と私はいった。「どこへ行ったのかな」

土間のつづきが上り框になって、障子があきっぱなしになっており、奥の間が見わたせた。囲炉裏が切ってあって自在鉤に鉄瓶がさがり、火が燃えている。煤けた繭玉や藁苞に入れたむかごらしいものが、まっ黒な天井からさがり、古ぼけた八角時計が、かったり、かったりと時を刻んでいる。囲炉裏端には、色さめた座布団がおかれ、盆の上に漬物と箸、大ぶりのひびだらけの湯呑みから、ゆっくり湯気が上っている。主はついほんの四、五分前、囲炉裏端を立ったらしい。

「ママ、こっちへ来て服をかわかさない?」

と靖子はいった。

「あら!」と妻は、鼻をひくつかせた。「何だか焦げくさい」

何かが吹きこぼれる音がするのと、子供たちが叫びを上げるのと同時だった。妻は、女の反射でかまどの所にとんで行き、かかっていた煮豆の鍋の蓋を切った。子供たちはとびちった灰にまみれて、ペッペッと唾をはいていた。

「雑巾雑巾!」と妻は叫んだ。「鍋をおろさなくっちゃ……」

大さわぎして鍋を火からはずしているうちに、今度は囲炉裏の鉄瓶がふきこぼれた。妻は靴をはいたまま、膝でにじって座敷に上りこみ、鉄瓶の蓋をずらせた。

「ほんとに田舎の人ってのんきね」妻は汗のにじんだ顔を手の甲でぬぐって息をついた。

「煮物を火にかけたまま、どこへ行っちまったのかしら」

私たちは、それからテーブルの所へかえって来て腰をおろし、なおしばらく休んだ。二十分ちかくも休んだろうか。——しかし、店の人はかえってこなかった。

「変ねえ」と妻は、ぐつぐつ煮えるおでんを横目で見ながらいった。「ずいぶん長い事お店をほったらかしたまま、るすにするのね」

「〝マリー・セレスト〟みたいだね」と竜彦はいった。「ねえ、パパ」

「なに、それ?」と妻は頬杖をついたままきき返した。「女優の名前?」

「ちがうよ」私は苦笑した。「有名な、海洋事件に出てくる船の名さ」

「どんな事件?」と靖子はきいた。「怪談?」

「似たようなものだな。——マリー・セレスト号は、一八七二年、ポルトガル沖で、帆をまき上げたまま漂流しているのを発見された。見つけた船の船員がのりこんでみると、積荷にも異常ないし、乱闘のあともないのに、船長と、その妻と、小さな娘と、七人の乗組員の姿が船内から消えうせていた。航海日誌もそのまま、子供用ベッドはつい今まで子供がねかされていたようであり、士官室では、食事の支度ができていて、コーヒー茶碗からまだ湯気がたちのぼっていた。——船長はじめ乗組員は、たった今、大急ぎで、何も彼もやりかけのまま、船を立ち去ったように見えた」

「それで?」と靖子はきいた。「その人たち見つかったの?」

「見つからなかった。——なぜそんなにあわただしく船を退去したか、その理由もとうとうわからないままだった。百年たった今でも、未だに謎とされている」

「気持悪い話……」妻は眉をしかめて、店の中を見わたした。「その話、本当？」

「ああ、本当だ、似たような話は、まだいくらでもある。〝シーバード号事件〟とか〝ジェームス・チェスター号事件〟とか……一九三〇年には、カナダのエスキモー集落の住民三十人が、墓の下の先祖の遺体もろとも、理由もなしに消え失せた事がある……」

「霧が晴れかかってきたよ」と竜彦がいった。「出かける？」

「あたし、やっぱりおでんが欲しいわ」と妻は鍋の方に首をのばした。「お店の人がいなくても、お金をおいとけばいいでしょう」

「私も食べる」と靖子はいった。

「食いしん坊め」私は立ち上りながら笑った。「先へ行って、いい場所を見つけてくる。ほら、霧の切れ目にスロープが見えるだろう。——あの中の岩のある所で、弁当にしよう」

妻はつんであった皿をとりあげて、おでんの鍋へむかった。私と竜彦は先に店を出た。出しなに私は、土間の隅、上り框の横に、ナップザックが二つおかれているのを見つけた。明らかに、さっき、一足先にのぼっていった学生たちのものだった。すると、学生たちは私たちより先にその茶屋に立ちより、荷物をおろし、そのまま恐らく店の主と一しょにどこかへ行ってしまったのだ。しかし、私はその事を妻子にいわなかった。なぜいわなかったのか、自分でも理由はわからない。

茶屋の眼と鼻の先にひろがっているスロープに足をふみ入れたとたん、霧は急速に晴れわたった。まったくあっという間に、ぬぐったように消え失せ、青空がひろがり、日がうららと当り、鳥が鳴き出した。

「よかった！」と竜彦ははずんだ声でいった。「うそみたいだね」

「そこの岩の所にしよう」と私はいった。

私は息子と岩に腰をおろし、山腹をかけのぼってくるさわやかな空気を吸い、水筒の茶をのんだ。空は、わずかな白雲をのこして、すばらしい快晴になった。

「いい気持だ。こうこなくっちゃ」と私はいった。「腹がへったな。母さんたちをよんでおいで。おでんはいいかげんにしろって」

竜彦は草原を茶屋の方にかけのぼって行った。霧が晴れると、茶屋はほんの四、五百メートルの所に見えていた。息子の姿が茶屋の方に小さくなって行くのを横目で見ながら、私はゆっくり煙草を吸った。

丁度一本吸いおわったころ、茶屋から人影が出てくるのが見えた。竜彦一人だった。彼は切迫した様子でかけよってくると、青い顔をして、息を切らせて私の前にたった。

「いない」と竜彦はかすれた声でいった。「母さんも靖子も……いなくなっちまっている」

「なに？」

そんな馬鹿な！　という言葉をのみこんで、私も茶屋にとってかえした。茶屋から岩の所へ来て、まだ十分そこそこしかたっていない。その間、霧が晴れたので、茶屋はずっと眼の隅に見えていた。茶屋から誰か出てくれば、かならず視野にはいるはずだ。

だが、茶屋の中には、竜彦のいった通り、妻と娘の姿はなかった。鉄瓶はたぎり、おでんはぐつぐつたぎっていたが、しんとして人の気配はない。テーブルの上におでんの皿が二つ、一つには大根が、もう一つには竹輪とかじりかけの卵がのこっている。靖子の赤い登山帽と妻のカーディガン、それに弁当を入れたボストンバッグが、私たちが出た時の位置のままおかれてある。

「おーい！」私はよんだ。「啓子！　靖子！　どこにいるんだ？」

返事はなかった。裏へぬけて見ると、すぐ崖だった。しかしふみすべらせたあともない。

「どうする？」竜彦が青い顔できいた。「どこへ行っちまったんだろう？」

「少し待とう」と私はいった。「トイレかも知れない」

十分待ち、二十分待ち、三十分待った。——まわりをうろうろ歩いてみた。しかし、誰もあらわれなかった。妻も娘も、学生も、店の主も……。

「警察にたのもう」とうとう私はいった。

奥の間に古ぼけた手まわし式の電話があった。ハンドルをやけにまわし、待ちつづけたが、誰も出なかった。古ぼけた柱時計はかったり、かったり時をきざみ、長針は茶屋についてからもう一まわりしていた。

「どうする？」と竜彦はまたきいた。

私たちは山道をかけおりた。二時間かかった道を四、五十分でくだったろう。途中、民家があったので、電話がないかとたちよったが、からっぽだった。来しなにたしかに餌をついばんでいた鶏の姿もない。

麓（ふもと）の駅前町へおりるころから、またうすく霧がたちこめはじめた。霧の中からあらわれた街並みは、ひっそりとして、全然人の気配がなかった。休日でみんなどこかへ……あるいは近所へ、出かけてしまったのだ、と私は思いこみたかった。店や民家に首をつっこみ、大声をかけたが誰も出てこなかった。電話のダイヤルをまわしても発信音をくりかえすばかりで返事はなく、駐在所にとびこんで、警察電話をガチャガチャやっても本署が出ない。

駅の前に、ライトバンが一台とまって、エンジンがかけっぱなし、ウインカーがつきっぱなしになっていた。私はその傍にたって、腹の底から冷えきって行くのを感じながら、途方にくれてあたりを見まわした。

「父さん……」別の方へ走って行った竜彦がまっさおな顔でかえってきた。「この先の線路の途中に、電車がとまっている。駅でもないのに……鉄橋へ半分かかったままとまってるんだ。ドアがあいて、中には誰もいない。運転手も、車掌も、お客も……」

「街には誰もいないか？」

「誰も……」竜彦は額の冷汗をぐいとぬぐって唇をふるわせた。「犬も猫も牛も……鶏小屋さえからっぽなんだよ。二、三軒はいってみたんだけど、テレビがつけっぱなしだった。——何もうつってないんだ」

「車にのれ」私はライトバンのドアをあけながらいった。「とにかく、街へ出てみるんだ」

「ねえ、父さん……」竜彦は思いつめたようにいった。「ぼく思うんだけど……」

私はあわただしくドアをしめると、ギアをガリガリいわせながら車を発進させた。——あわてて、ハンドブレーキをかけたまま走らせてしまい、セカンドにいれるとエンストした。免許証は半年前切れたまま更新しておらず、ハンドルはもう一年以上にぎった事がなかった。

「ねえ、父さん……」竜彦は、車を走らせている私の顔をのぞきこむようにしていった。

「ひょっとしたら……ぼく、考えるんだけど……」

「何を考えてるんだ？」私は突慳貪（つっけんどん）にききかえした。

「うん、あのね……突飛な考えかも知れないけど……ひょっとしたら……ぼくらをのこして、街全体が、マリー・セレストになったんじゃないかな……。マリー・セレストは、乗っていたわずかな人間が消えただけでしょう。だけど、ああいう事が小人数でも起るんなら、うんと大勢の人間に対しても起る可能性があるわけでしょう？」

「馬鹿をいうな！」私はどなった。「お前は、SFだの、変な読み物だのの読みすぎだ」

だが、私の中に、恐ろしい想像が——まったく突拍子もない想像が、ゆっくり頭をもたげはじめるのは、どうしようもない事だった。もし——そんな馬鹿な話はありっこないにせよ、もし……私たち親子をのこして、地球全体が、マリー・セレスト号のようになってしまったとしたら……。

車をやみ雲に走らせながら、私はカー・ラジオのボタンをおした。波のような雑音だけで、ダイヤルをいくらまわしても、音楽もニュースもはいってこなかった。霧はまた濃くなりはじめ、その中から、対向車の姿があらわれてこないか、と、眼を皿のようにしながら、私は車を走らせつづけた。この霧が晴れたら……と私は思った。……もう少しあたりの様子がはっきりするだろう。しかし、私にとって、霧が晴れるのが恐ろしかった。霧が晴れわたって、眼前に遠く、街の姿がうかび上る時が、どうしようもなく、たとえようもなく恐ろしかった。霧は果てしなくたちこめ、私は汗にまみれながら、アクセルをふみこみつづけた。

さ、と、る、の化物

「妙なやつだ、と思っているんでしょう?」

突然その青年はいった。私は横をふりむいた。——カウンターにいるのは、色の白い若い男だった。上から下まで、隙のない服装をしている。私はその男の横顔をちらと見て、わざと吹き出した。

「何がおかしいんです?」青年はほほえみながらいった。「あててみましょうか?」

「あててみたまえ」

「さとるの化物のことでしょ、——またの名は山父(やまちち)……」

口にはこびかけていたグラスが、ひとりでに宙でとまった。——私は横目で青年の顔を見なおした。胸がとつぜんドキドキした。

「よく知ってるね。その名前……」

「僕、北陸の生まれなんです……」

「それじゃ同郷ってわけだ」と私は陽気にいった。「乾杯しようか?」

「ええ……」といって、青年はグラスをあげた。——もうだいぶのんでいるようすだった。

「だけど、よくさとるの化物のことを考えてるとわかったね。年若きホームズどのの推理を、このおいぼれワトスンにときあかしてくれないか……」

「推理じゃないんです。つまりその——カンなんです」青年は、はにかみながらいった。

「ぼく、とても勘がいいんです。のんでると特に……」
「競馬につきあってくれるかい？」
「そんなんじゃないんです。人の心を読むのがうまいっていうか——ふっと、読めちゃうことがあるんです」
女性的な所のある——というより非常に女性的な感じの青年だった。色が白く、肌理がこまかい。女性的な人間は、人の心をすばやくつかむ。自己の繊細さに対する一種の防禦本能だ。
「テレパシイ——みたいなもんでしょうか」そういって青年は私の顔をのぞきこんだ。
「でも、あなた、こんなこと信じますか？」
正確にいえば、信じてはいない。——だが、私はそれがどんなものか、知っている。しかし、今は知っているということを知られたくない。
「だけど、僕、前から、このさとるの化物ってものに興味をもっていたんです。ずっとむかし、祖母にきいただけだけど、今ふっと思い出してみると、とてもこわい話だと思ったんです」青年はちょっといたずらっぽく笑う。「あなたの心が読めたんで、それでこんなこと思い出したんですよ」
バーテンはカウンターの向うのはしで、タンブラーをみがいている。バーの中はこの青年と私、ボックスでぼんやりしている中年男の三人だけだ。
「さとるの化物ってのは、越中へんの呼び名だけど——こういう化物の話はあちこちにありますね。ほら、山男とか、問答して、こちらが答えがわからないと、殺されるという化物なんて、この変形じゃないでしょうか？」
「バーテン！」私は青年の話をふりはらうようにどなる。「白ハイおかわり——こちらにも一つ……」
もっと飲まなくちゃ……と私は思う、もっともっと飲んで。
「でもあの話は短いけど、こわいですね。ぞっとしますね」
そうなんだ——私はグラスをぐいとあげた——
「あの話ってのは、土地によって少しずつ変化しているけど、大体こうでしたね。——むかし、夜の山の中で、きこりが一人で焚火にあたっていると、突然その化物が焚火のむこうがわで、火にあたっているのに気がつくんです。化物はじっと黙っている。きこりも黙ったまま——きこりが、妙な奴が来たな、と思うと、ふいに化物がいう。『おい、きこり、お前は妙な奴が来たな、と思っているな……』」
山の中、ずっと昔のことだ。あたりは黒々とした深い森、人の気配のまったくない暗闇の中に、赤い炎がメラメラゆらぎ、パチパチと生木がはぜる。かすかに森が鳴っている——どうどうと——暗い空が鳴っているような気がする。火がパッともえ上ると、むこうがわに化物がだまって笑っているのが、赤く照らし出される。暗い森の中で——化物とただ二人……。
「ほんとうにあの化物の正体は何なのでしょうね」青年はつぶやく。「——きこりは、お

や、こいつ俺の思てることをあてるぞ、と思う。すると化物は『おい、きこり、お前は、おや、こいつは俺の思ていることをあてるぞ、と思ているな』という。——きこりは、これは大変だ、こいつはさとるの化物にちがいない、と思う。すると化物は『おい、きこり、お前は、これは大変だ、こいつはさとるの化物にちがいない、と思ているな』というんですね……」

そうだ——私はグラスをギュッとにぎりしめた——きこりは、こわくてこわくて、たまらなくなるのだ……。

「きこりは、こわくてこわくて、たまらなくなるのです……」青年はゆっくり、となえるようにいった。「するとその時、突然焚火の中で栃の実がバチンとはじけて、化物の眼にあたる。化物はびっくりして、人間というものは、まるきり自分で考えてもいないことをする、おっかないもんだと思って、逃げて行くんです」

私は思わずホッと溜息をついて、グラスをもっていった。——やれやれ、やっとここまで来てくれた……。

「これは、ずいぶんふしぎな形式の話です——よその国にあまり例のない話ですね、現代のわれわれがきいても、なんだかゾッとするところのある話です。——なぜこんなにこわいんでしょう？　この恐怖はどこからくるんでしょう？」

そのことだ——と思いながら、私は酒をごくごくのみほした。一応理くつは考えてある。だが、俺には俺の——特別な解釈がある。

「いろんな解釈ができます。太古、山の中でたった一人でいる時の恐怖感——それまでは、あれこれのことにかかわっていた意識が、さてひと休みして息をいれると、急にあたりに気づくんです。山、谷、森は黒々とうずくまり、暗い空には音もない。沈黙——大自然は沈黙している。それは物体であって、それ自身充足している。それなのに、彼だけが——人間の意識だけが、この沈黙の充実のまっただ中で、充実以外のもの、たった一つのよけいものなんです」

お喋りめ！　私は思った、おしゃべりの若僧め！

「意識だけが、空疎なお喋りをしている。ピイチク、パアチク……かぼそい声で……自然はおしゃべりしない。そのおそろしい沈黙の中で、意識のおしゃべりだけが異質のものだ——自分はうみの親である自然から追放されている。完全に！——これを直感的にさとった時の孤独と恐怖——それが大自然の中にさまざまな幻想を描き出す……」

そう、それが俺の考えていたことだ……と私は思った。——そのとおりなんだ。

「さとるの化物は、おびえた意識のやまびこなのだ、と考えられます。いや、——一歩進んで、これは意識の構造と運動自体の、民話的な反映なのだ、と。あなたも知っているでしょう？　あの意識の悪循環の苦しさを——。俺はこう思ってるな、と思う。次の瞬間には、俺はこう思ってると思ってるな、と思う。するとまた、もうこんなことを思うのはやめなければいけない、なんて思うことはやめなければいけない、と思う。——無限循環のおそろしさは、あなたもよく知っているはずだ。不眠の悩み、鏡の遊戯——太古の人たち

は、哲学ももたないままに、こういった化物の形で表現したのではないでしょうか?」

青年はじっと眼をすえてしゃべっていた。声は、なんだかその口から出るのではなく、どこかほかの所、部屋のすみから出てくるようにきこえた。——まるで、青年がしゃべっているのではないみたいだった……。

「あるいはもっと具体的、体験的なものでしょうか?」青年は憑かれたように、私の横顔をじっとみて、しゃべった。「——二人きりで笑って、黙って火を見つめている。すると突然、相手が自分のいおうと思っていること、あるいは自分の考えていることを、口にすることがよくあります。また、二人同時に突然口を開いて、同じことをいおうとすることがよくあります。——人間の考えることはよく似ているんだ。といえばそれまでだが、状況によっては、相手が自分のことを見ぬいたみたいで、きみわるくなる——このお化けは、こういった体験の反映でしょうか?」

私は、もう体を動かさなかった。——青年の視線が、うつろにひろがったまま、まるで私の胸の中を見つめているように、私の横顔につきささっていた。

まだある! と私は手に汗をにぎりしめた。まだ、もう一つあるんだ——さとるの化物の考え方が……。

「まだもう一つあります……」青年はいった。

「つまり、テレパシイの能力をもった人間が、本当にいて、さとるの化物は、そのデフォルメされた伝説だという考え方……」

私はカウンターのはしをギュッとにぎりしめ、体をかたくした。息があらぎ、鼓動の一つ一つが、ひびきわたるかと思われた。

「最後にもう一つ……」青年の声がうつろにひびいた。「もっとつっこんだ——それこそ本質にせまる考え方がある。それは、さとるの化物は実在したという考え方です……」

もうちょっとだ……と私は息をつめ、歯をくいしばって思った。——もう少し……

「僕が話したさとるの化物の伝説には、一ヵ所ぬけた所がありましたね。それは……」

青年はもう自分でしゃべっているようには見えなかった。まるで口だけがかってにパクパク動いているみたいで、眼はすわり、顔は青白かった。

「それは——さとるの化物は、人の思っていることをつぎからつぎへといいあてて、その人にもう思うことがなくなってしまうと、その人を食べてしまうというんでしたね——それにしても、あなたの頭の中は……」

いまだ! と私は思った。私の思念は、猛獣のように、若僧の意識にとびかかった。若僧の意識は悲鳴のようなものをあげた。——だが奴はこちらの投げた餌にまんまとつり出されて、無防備の態で、おまけに酔っていた。青年ががっくりカウンターにつっぷすと、私はバーテンに声をかけた。

「お坊っちゃん、つぶれたぜ」

「しゃべりすぎでしょう」とバーテンは不愛想にいった。私は勘定をはらって外へ出た。今夜——あの青年は、看板の時にバーテンにつまみ出され、明日の朝、完全な痴呆状態に

なっていることが発見されるだろう。私？　私は——さとるの化物だ。正確にいうと、大昔のさとるの化物から進化した生物だ。私は先祖のように人間をおどかしたり、へまなことをやったりはしない。私は、先祖も潜在的にもっていたもう一つの能力、思念伝達の力をつかう。——進歩したり、進化したりするのは何も人間ばかりではない。

それに私は美食家だ。こちらの伝説に敏感にひっかかってくるような、デリケートな意識がいい。私はバーに坐って、先祖の話を思いうかべる。すると、客の中の、酔うと敏感になる奴がいて、私の投げかけた餌にひっかかってくる。人間というのは妙な動物だ。昔、自分たちがこわがった通りに、他人をこわがらせてよろこぶらしい。餌にかかった男は、私の心にうかんだことをいいあてて、私を気味悪がらせようとする。いいあてるはずで、彼は私の伝えようとしたことをそのままいえばいいのだ——私のやり方は、トランプ手品に似ている。こちらの思った通りの札をひかせるのだ。相手はいい気持ちになって、こちらをおどかすつもりで、私の考えた通りの話をベラベラしゃべる。そのうち、自分が自分の言葉でない言葉をしゃべっていることに気がついてハッとする。——その時が、一番隙があり、とびかかりやすいのだ。

私は夜の街を歩いていって、次のバーのドアをおす。カウンターに腰をおろして、白ハイを注文し、また先祖の話を思いうかべる。——隣に坐った、肥って眼鏡をかけた男が、ふいに話しかけてくる。

「あなた、山父（やまちち）の話——知ってますか？」

あとがき

近代SFはそのスタートのときから、伝統的なホラーをモダンホラーに仕立て上げるというひとつの伝統を持っていました。その一番いいサンプルはH・G・ウエルズの『宇宙戦争』という作品に見られると思います。H・G・ウエルズはベルヌのちょっと後の作家ですが、ベルヌがまだ産業革命のいろいろな新しい技術的発明の可能性を追求して、それを冒険小説、あるいは探検小説に取り入れたのに対し、ウエルズはそのころヨーロッパ、とくにイギリスで初めて、はっきりと「人類」というものを文学の主人公に仕立てた人です。ですから彼は近代SFの元祖と私は呼んでいるわけなんですが。

その彼の『宇宙戦争』の導入部ですが、私は最初に読んだときに、なにか新聞記事みたいだなと思いながら読み進めていきました。そのうちにそういうドキュメンタリータッチの中に次第次第に状況がはっきりしてきて、ごく日常的なちょっとした異変が大きな恐怖の影をおびはじめるという、この手続きが非常に私にとって鮮明であったのを覚えています。

私自身は中学のときにこれを読んで、その後に大学生になってからも、あの火星人の乗

物に追いかけ回され、橋の下に隠れ見送るという夢を何回も見ました。それは私が戦争中の空襲の体験と、ウエルズの作品に示された一種のトータルな恐怖のイメージというものが重なったのだと思います。

またSFは近代の合理主義の中では消えていった昔のホラーの伝統、すなわち人類の非常に古い財産である恐怖、怪談というものに新しい科学的世界観、宇宙像の中に復活させました。このホラーの伝統は一方で最後に非常に合理的な解決に至るという、近代ミステリー、推理小説の中にも取り込まれていきます。これはポーの『モルグ街の殺人』などが非常にいい例といえますが、近代市民社会における探偵小説はどんなに不思議に見えても、コナン・ドイルの『バスカヴィル家の犬』のようにきちんと合理的な説明がついています。しかし合理的説明のつかないもの、あるいは近代市民社会の常識をこえたようなものも昔のホラーにはありました。すなわち合理的ではないものです。それらは人間の単なる妄想だと切り捨てられてきたのですが、SFはそういう大変古いホラーを受け継ぐ場を物理学や生物学の新しい知見や宇宙に見つけたわけです。

私のこの作品集の中で、比較的ウエルズのスタイルにちかいのは『影が重なる時』と『蟻の園』です。このホラー小説集のなかでは一番古い、一九六三年にハヤカワSFマガジンに書いたものです。そのころは私はまだ前述のようなウエルズ以来のSFホラーというものについて、その形式をマスターしようとしている最中でした。近代ミステリーの中では恐怖を合理的に説明するという手法が取り込まれていますが、その中で切り捨てられ

てしまった古い不思議な話というのを、私はSFの枠組みで取り込めるのではないかと思ったのです。

そうして見ると日本には、ラフカディオ・ハーンの怪談に見られるように、民衆の口碑伝説、すなわち民衆の口から口へ伝えられていくうちにできあがった非常に質と構成の高い怪談がいくつも残っているのがわかりました。

ハーンの怪談の中では『むじな』という題で載っている〝のっぺらぼう〟の話は非常に怖いような、しかしただ恐ろしいだけではなく何か滑稽味もあるというような印象を受けます。これは江戸時代に大変人口に膾炙（かいしゃ）して小ばなしにもなっているのですが、そういうものがたくさん残っているんです。

私は古いそのようなホラーを、現代的な視点を持ち込みながらミステリー的な合理的解決も含め、SF的なおちというものを考えてみようということでいくつかの作品をつくりました。

そこで完成したのが『まめつま』です。この話はハーンも取り上げていますが、実は私も母から本当にあったのよと聞いたことなのです。その母は祖母から聞いていたそうです。そういうふうに伝えられているものがある意味では非常に面白く、それはいわゆる昔話の怪談と、現代の知性ある生活のあいだでできた怪というものをSF的な世界へつなげるという試みでした。つまりこれは口碑伝説化してしまったものをこのように作品にしたわけです。『くだんのはは』もこの分野に入る作品です。『さとるの化物』は、古いお話を近

代化して、さらに化物の方の立場から書いてみたものです。

私が日本全国のルポのために各地の田舎を訪ねたとき、まだ新幹線は通っていませんでしたが、ちょっと奥に入り本当に峠ひとつ越えそこねるとバスも通らないし、あかりもない道に迷ってしまうのではないかという非常に寂しいところで民家やお寺を訪ねて泊まったことがあります。そういうつい一九五〇年代まであった日本の田舎には、その草深さ、夜の暗さ、それから夜になった時の風の音、鳥の鳴き声だのが何か自分を別の世界へ誘うような効果としての役割を持っていて、自分の社会的な常識だの教養だのがどんどん離れていって、得も知れぬ恐怖を感じたり、魂が底のところから剝き出しになるというような体験をしました。そういうのをややコミカルに書いてみたのが『すぐそこ』という作品です。

それからどんなことがいま怖いだろうかということをSFの仲間たちとも話し合ったり、私自身も自分でいまこういうことがおきたら何が一番怖いかと考えながら書いた作品も収録しました。『召集令状』『霧が晴れた時』『保護鳥』などが、それにあてはまります。また、その恐怖をコミカルに描いてみたのが『逃(ふ)ける』です。『黄色い泉』は古事記のように日本の風土とか歴史の中に根づいたものを書いてみようと思って作りました。

最後に、著者として、作品を執筆しながら自身でこわいなと感じたのは『骨』『保護鳥』『秘密（タブ）』でした。

ホラーのバリエーションというのは、まだまだあるのですが、本書に収録した作品を読む際に、そのホラーのタイプというものを考えながらお読みいただくのもまた別の楽しみになるかもしれません。

自選恐怖小説集
霧が晴れた時
小松左京

角川ホラー文庫　Hこ3-1　9063

平成5年7月24日　初版発行
平成21年5月20日　11版発行

発行者———井上伸一郎
発行所———株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8555
〒102-8078
発売元———株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所———旭印刷　製本所———千曲堂
装幀者———田島照久

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。

ISBN978-4-04-130863-9 C0193

初出一覧

すぐそこ　週刊朝日　69年9月5日
まめつま　小説新潮　70年4月
くだんのはは　話の特集　68年1月
秘密（タブ）　週刊小説　73年11月16日
影が重なる時　SFマガジン　63年10月
召集令状　別冊小説新潮　73年10月号
悪霊（あくりょう）　オール読物　65年9月
消された女　小説新潮　64年5月
黄色い泉　オール読物　73年4月
逃（に）ける　小説新潮　76年10月
蟻（あり）の園　SFマガジン　63年6月
骨　小説新潮　72年3月
保護鳥　小説新潮　71年6月
霧が晴れた時　別冊小説新潮　71年7月
さとるの化物　洋酒天国　61号　64年2月

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

着信アリ

秋元 康

「ワン・ミス・コール」原作

由美が気乗りしないまま参加した合コンの席で、陽子の携帯電話が聞き覚えのない着信音で鳴った。液晶には「着信アリ」の文字。確認すると、陽子の悲鳴のような叫び声が録音されていて、着信履歴には２日後の時刻と、発信元として陽子自身の携帯の番号が残されていた。そして、その２日後のその時刻。陽子はメッセージに残されたとおりの悲鳴をあげて不可解な死を遂げてしまう…。終わりのないチェーンホラーの誕生！

角川ホラー文庫

ISBN 978-4-04-174514-4

湘南人肉医

大石圭

あなたを食べてもいいですか？

湘南で美容外科医として働く小鳥田優児は、神の手と噂されるほどの名医だった。数々の難手術を成功させ、多くの女性を見違えるほどの美人に変貌させていた。しかし、彼は小さな頃から人肉に対して憧れを持っていた。そして、ある日、手術で吸引した女性の臀部の脂肪を食べてしまう。それは麻酔が施されていたため、苦かったが、人の肉を食べるという禁を破ったことに対して、優児は強いエクスタシーを感じた……。

角川ホラー文庫

ISBN 978-4-04-357206-9

処刑列車

大石圭

もはやこれは他人事ではない！

朝のラッシュアワーを過ぎた頃、東海道本線、小田原始発・東京行きの『快速アクティー』が、平塚・茅ヶ崎間の鉄橋で突如停止した。何者かによって乗っ取られたのだ。『この電車は彼らが占拠した』。自らを彼らと名乗る犯人グループは運転手と車掌を射殺し、すべての乗客を一部の車両に閉じこめた。そして、殺戮が始まった——。無差別な悪意が暴走する戦慄のホラー！

角川ホラー文庫

ISBN 978-4-04-357210-6

水霊

ミズチ

田中啓文

禍々(まがまが)しき伝奇ホラーの傑作！

《平成日本の百名水》神社の遺跡から湧き出た水を商品化する、過疎村の村興し事業の目玉企画だった。ところが、その水を飲んだ者が、人間離れした食欲をしめした後、痩せ衰えて死亡する怪事件が発生する。湧き水と事件の関連性を指摘する民俗学者・杜川己一郎は、遺跡の学術調査を進めるに従い、疑念を確証へと近づけていくのだった。——現代文明の危機に警鐘を鳴らすフォークロア。その想像を絶する驚天動地のホラー大作！

角川ホラー文庫　ISBN 978-4-04-346501-9

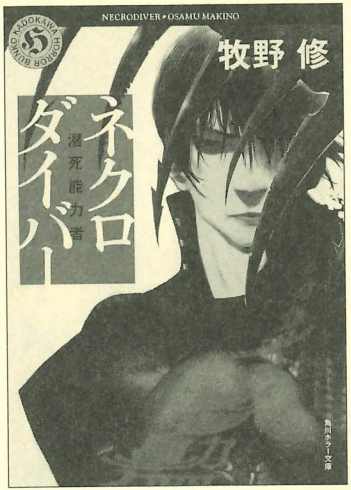
自由殺人

大石圭

人を殺す力を与えましょう

ある日、突然、殺人を選択する自由があなたに与えられたら、どうしますか？
謎の人物から送られてきた爆弾。それを手に入れた人物たちは、エゴと怨念を剝き出しにしていく。元マラソンランナーの朝香葉子もまた、爆弾を受け取った１人だった。しかし、彼女は何のためらいもなく爆弾を警察に届ける。犯人はそんな葉子に、あるゲームを持ち掛けてきた。人間の業を深く、そして鋭く描いたホラーの新境地‼

角川ホラー文庫　ISBN 978-4-04-357203-8



ネクロダイバー

潜死能力者

牧野 修

ソレは死に潜り、記録を消去する

物部聖が目覚めると、そこは出口のない手術室だった。そこで出会ったひとりの男に、聖はネクロダイバーの存在を教えられる。人の死に潜り、暴走した人の想いを消去する唯一無二の存在。聖はネクロダイバーとして、次々と理不尽な死と対面し、苦悩しながらも死の記録を消し去っていく。しかしそれを阻止する存在“死神”たちが聖の前に現れるのだった。「文庫読み放題」ほか携帯サイトに掲載された人気作品、待望の文庫化！

角川ホラー文庫

ISBN 978-4-04-352210-1

うしろ

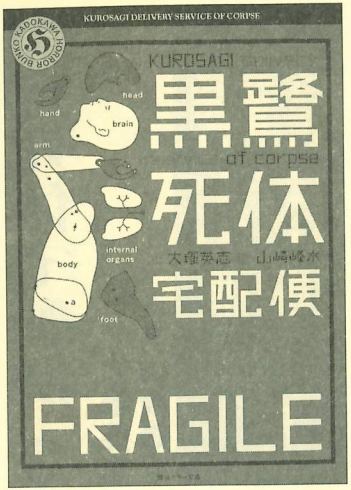
倉阪鬼一郎

あなたの、うしろの恐怖……

それは奇妙なマンションだった。女性専用で、セキュリティは万全、一見何の問題も無いように見える。だが、常に観察していれば気づくだろう、ここでは妙に人が入れ替わることに。そして、出て行く者の顔は必ず恐怖に歪んでいることに。音楽を学ぶために来日したイェニョンは、希望を胸に訪れた。そこには想像を絶する悪意が——。仕掛けられた呪いが発動するとき、それはうしろに立つ——。

角川ホラー文庫

ISBN 978-4-04-384301-5



黒鷺死体宅配便

原作　大塚英志
漫画　山崎峰水

お届け物は死体です。

死体の声を聞くイタコ、死体を探すダウジング、死体修復のエンバーミング、情報収集のハッキング、宇宙人と交信するチャネリング。それぞれ特技をもった仏教大学の学生５人が作ったのは、望まぬ形で死を迎えた依頼人の声を聞き、望み通りに埋葬する会社『黒鷺死体宅配便』。死体となった依頼人をどこにでも宅配します。
謎のルーツを明治に追う「松岡國男妖怪退治」収録！

角川ホラー文庫
ISBN 978-4-04-419121-4

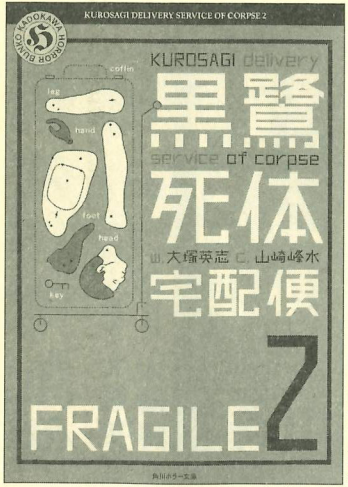
@ベイビーメール

山田悠介

開いたときから、恐怖が始まる……。

奇妙な女性の死体が立て続けに発見された。遺体のそばには、なぜかちぎられたへその緒だけが残されていた。彼女たちは皆、送信者不明のメールを受け取った１ヶ月後に殺され、しかも、していないはずの妊娠をしていたという。そして雅斗の恋人、朱美にも死のメールが届いてしまう。彼女の死まで残された時間は１ヶ月!!　メールにこめられた呪いは解けるのか。話題作、待望の文庫化！

角川ホラー文庫
ISBN 978-4-04-379201-6



黒鷺死体宅配便 2

原作 大塚英志
漫画 山崎峰水

死んだアナタの願いを叶えます。

死体の声を聞き、その依頼に応えて報酬を得る黒鷺死体宅配便。手違いから死刑囚の死体を手に入れた唐津。その死体の望みは、殺してしまった一家の、生き残った子供に会って謝ること——。そんなとき葬儀会社の経営者、楡からの電話が。死体は楡が引き取るはずのものだったのだ。社会奉仕として、裁かれ、罪を償った死刑受刑者の葬儀を行うのだという楡は、黒鷺死体宅配便との合併を提案する。その真の目的とは——。

角川ホラー文庫
ISBN 978-4-04-419123-8